
Worst HERO .

空々空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W o r s t H E R O .

【Nコード】

N 3 3 0 7 Z

【作者名】

空々空

【あらすじ】

彼は全人類が悪だと思った。だから殺すことにした。そのために握った力は“龍王の王冠”、この世で最強と謳われる存在の、瞳と肉体の結晶体を継いだ彼は、笑いながら殺す。主人公が相当におかしいです。世界観は、現代技術とドラクエみたいな世界設定が混ざっていると想像すると分かりやすいです。

攣する。

苦しい。辛い。

そして、無限にも思えるような、一分か十秒か十分が終った。時間間隔は一瞬で崩壊していた。

猿轡が外され、目を隠す布も取れる。

足を縛る紐と手首を縛っていた紐は解かれ、俺の体は自由になった。

目の前に、ニコニコと嬉しそうな笑みを浮かべた母さんがいた。涙で嗚咽の声を出しながら肩を震わせていると、

「大丈夫。きつと喜んでくれるから」

言葉だけが、なんの温もりも愛情も運ばずに、俺の心を撫でた。

俺は、俺の心は、何を感じているのかまったく解らず、ただ頷いた。

そして、俺の右の太ももに大量の消毒液が掛「いッ、ガッ！」けられ、その上に大きなガーゼが貼られ、そして包帯が巻かれた。

全身から熱を持った汗が噴き出し、その汗が傷に染みだ。太ももの一部に、酷い痛痒を感じた。

掻き篋りたい。

だけど、それはしたくなかった。

だって、だって、そこには。

そこにあるのは、

「ッ！」

目が一瞬で開き、精神が幻の痛みを右の太ももに与え、掻き毟りたい衝動に襲われる。

全身が嫌に粘つく汗で塗れ、息は荒れていた。

「……はッ、ハ、ッ。……夢、か……」

五秒間、周囲の風景を睨むように注視していたが、変化が無い事に気付くと、ようやく思考は冷静になった。

思わず長い安堵の息が出て、そして右手で頭を支えた。額にも汗があり、それが酷く不快だった。

「……久しぶり、か」

過去の夢を見るのは、本当に久しぶりだ。

腕が勝手に、自分の太ももを撫でた。

夢の痛みが幻痛といえど存在して、恐怖が心を掻き毟った。

思わず、首からぶら下がる十字架のあるシルバーネックレスを優しく握る。

最悪な過去の中で、唯一嬉しかった思い出に触れる。

触れられる。

近づける。

また、手をつなげるじゃないか。

そのための手が、いまここにあるんだ。

だから、大丈夫。

不思議と心は安心感で一杯になり、息も落ち着いた。

「大丈夫……」

もう大丈夫だから。

だから、立ち上げれる。

痛みも悲しみも苦しみも、嘆きも絶叫も、俺は、ちゃんと抱えて、立ち上げれる。

百回腕をもがれても、百一回腕を再生させて地面を掴む。
足を二百回折られても、二百一回再生させて地面を踏む。

そうして、立ち上げれる。

痛いからと、泣かずに。苦しいからと、泣かずに。あの時誓ったように、絶対に、必死に、立ち上げれる。

昔にそう、誓ったのだから。

全人類を抹殺するまで、決して立ち上がるのを止めない

と。

そう決めたのだから、俺は立ち上げれる。

“金或いは虐殺。もとい蹂躪”

ただひたすらに純粹で？

いい天気だ。

四月の半ば。晴天。

非常に心地よく、暖かい。

そして春らしく、視界に広がる光景は中々のものだ。

四方を山々に囲まれ、秘境の村といった風情がある。というか実際に秘境の村に近いほど、四方は山で囲まれ、外界から遮断されているようだ。

視界に絶対見える山々の、緑の葉と桜の花びら。緑とピンクが世界を彩り、心に刺激をもたらす。そして手前に見えるのは村のあぜ道と、その両脇に広がる畑。あぜ道に転がり、畑でうつ伏せになり、家々の壁に寄りかかる、肉体の一部を損失したり頭を砕かれたり血を垂れ流しにする死体が赤い色彩を目に与え、バランスの取れた調和ある彩りになる。

今は緑の、何かしらの穀物が実るだろう葉が生い茂り、質素ながらしっかりと作りの家々が『のどか』とでも言えбайいだろう風景となつて心に安寧をもたらす。鼻から吸い込んだ空気は血の濃い鉄錆の臭いと火薬の充満する臭いに隠れるように、緑の葉の匂いと土の少し乾燥した匂いがする。

落ち着く、と思う。そして、いいねえ、とも思った。

こういう緑の濃い、恵まれた土地は、いいねえ。思わず焼き払いなくなつちやうぜ。

聞くところによると、ここら辺の土地は土が肥えていて、穀物は毎年豊作だとか。

それらを、きよろきよろと眼球を動かして見ながら、欠伸を一つ。

「ん……ふあああ……、んう。……ここら辺は緑多いねえ。そう思わない？」

太陽の光が眠気を誘発させ、俺はむにやむにやと口を動かしながら右の人差し指を動かした。

トリガーに指先を添える。あー、眠^{ねみ}。

右手にあるのは、ツインバレル式ソードオフ・ショットガン。装填数は一度に二発。今は一発撃ち終えた。

その銃口の先には、顔を鼻水と涙と汗と涎でグシャグシャにし、右腕を根元から失っている男がいる。

狙いは眉間^{ストライクゾーン}。その顔の表皮と銃口との距離は、一センチあるだろうか。

「いや俺さー、サブマシンガンとかアサルトライフルとかマシンピストルってどうも苦手であ。ほら、ここに刀あるじゃん？ これ見たら解るだろうけど、俺どっちかって言うくと零^ろ距離戦闘が主なんだよね。まあ、じゃなきゃソードオフ・ショットガンなんて近距離主体の武装を持つちやいんだけどねー？」

どうせ反応なんて寄越さないだろうが、一応喋る。
気分だ気分。

男の震えた、血の気を失った唇が動く。

「たすっ」

「サヨナラー」

けて、の一言が終る前に、その頭の顎から上が全て吹き飛ぶ。
轟音が炸裂。

ハンマーでスイカを砕くように、頭蓋が爆砕。ショットガンの銃弾を受けた頭蓋の中身もろとも、その衝撃によって後方へ。

肉片と脳漿が飛び散り、ピンク色の液体状の物質がどろっとした

光が、土のキャンバスにぬめりあるピンクを付け足した。頭部は下あごだけの男は、ショットガンの銃弾を至近距離で受け、地面を転がった。五回ほど回転してようやく停止。無論死亡。

火を噴いたのは自分の右手に持っている銃。撃ったのは自分。死んだのは名前も知らないオッサン。

「風景の一部になって春の色彩にでも刺激を与えてくださいねー」

ショットガンをスナップを利かせた手で上に動かす。トリガー上部で折れた銃身を地面に向け、薬莢を重力落下させる。銃身を下に向けた時点で、ポーチから二発の銃弾を指先で挟みながら取り出し、流れる動作で薬莢の納まっていた場所に込めて、またスナップを利かせて銃身を戻し、再装填完了。^{リロード}

その全てが神業的速度で、まるで連動するように繋がる。再装填^{リロード}に掛かった時間は、要した動作数に見合わず僅か一・五秒。だが彼は、それでも不満があるのか、僅かに首を傾げた。だがすぐに首の角度を戻し、視線を前に向ける。

安全装置を戻す。

そして後ろ腰の専用のホルスターに仕舞う。

「ん……これでー、終わり、かぁ」

周りをキョロキョロ見ても、そこに居るのは死人ばかり。

心臓を貫かれた者、首から上を切断された者、上半身と下半身が別々の場所にある者、頭蓋の半分を失った者、頭が右と左で二つに裂けている物。様々な形で死んでいる。その死体の傍には、ハンドガン、サブマシンガン、使われなかった手榴弾にグレネードランチャー、アサルトライフルもある。

ただ、共通点があるとすれば、刃物か銃弾で殺された、だ。また、この名前も知らない村の住人、というのもあるかもしれない。

死体の数は二十から三十。いやもつとか。最初の十人までは数えていたけど、次からは面倒臭くなつて数えない事にした。

（あー……、うん。死体つて臭いよな）

まだハエは集っていないが、それでも死臭というより、噴出す血の濃厚な臭いが鼻を刺激する。

くせ、と呟いてから歩き出した。

あぜ道を歩きつつ、そこら辺に散らばっている死体の破片を避けつつ、欠伸を一つ。

まだ日中だ。お日様は地上に転がる死体にも生きている俺にも平等に光を与える。

その光が暖かみを持って肌を焼き、目を少し熱くさせ、体を暖める。

眠い。ひんじょーに眠い。いつその事この場で寝たい。いや寝ようか。ああもう寝たい。

が、今は歩かねば。

「にしても……、つくああ……ふあむ。……暇な仕事だねえ……」

そう、仕事。今は仕事のお時間だ。

俺は何でも屋と言うよりは汚い仕事をやって生活している。汚い仕事とはつまり、非道な殺人とかそこら辺。

今日請け負ったのは、異端者“村の住人の殺害”と“村長宅の地下にいるであろう、紫の瞳の少女の救出”だ。

その村長宅は村の最奥。

そこへ行く途中で、撃ち殺した人間を漁って、銃弾ねえかなー、と呟きつつ、自分の持っている銃、半自動式セミオートマチックのハンドガンとツインバレルのソードオフ・ショットガンに使える弾

丸を集めておく。消費した三分の二は手に入れられた。ラッキー。
あつという間に着き、扉を開けて、閉める。
靴を脱がずに入り込み、「地下、地下」と呟きながら散策した。

「どこかな……」

歩き回る。出来るだけ、ブーツの踵で床の音を探るように。
じゅっ、じゅっ。じゅっ、じゅっ。じゅっ、じゅっ。じゅっ、じゅっ。じゅっ、じゅっ。
コン。

音が軽くなつた場所を発見。

ここか、と床の一部を思いつき踵で踏みつける。
黒いブーツの厚底と板がぶつかり、どん！と音を立てて、木製の板が外れた。

「へえ」

意外にも、手の込んだ石造りの階段だった。両脇の壁には何かしらの絵。

その絵と、この奥にいるらしい人間。
すぐに何のための地下か、想像が出来た。

祭壇か。

嫌な光景だと思った。

人を供物にしても、神様なんて喜びもしないのに。
神様は、不幸を与えてほくそ笑むだけだ。

「気持ち悪い」

右腰のベルトに付属するポーチから、小型の懐中電灯を引っ張り出し、スイッチをオン。

暗かった階段とその奥は照らされ、足場を安定させる。

一段一段、歩きつつ考えた。

この下にいる人間は、何を考えているんだろ。

絶望でもしているのだろうか。

それとも、心はとうに壊れているのだろうか。

どうでもいいか。

階段は、二十段ほどで終った。

扉は無く、すぐに広い空間へと繋がっている。

広さで言うなら一辺が二十メートルほどの正方形の空間。天井は

高く、そして奥行きも中々。

俺のいる場所からすぐ真っ直ぐには鉄製の檻があつて、その奥には二つの影があつた。

ヒュウ、と口笛を吹いた。

そこにいたのは、図体が五メートルはあるうかという巨大な猪と、
今にも喰われそうな、手と足を縛られた全裸の少女だった。

その少女は、目を布で隠され、口にも包帯が巻かれていて顔が見えなかった。

だが、その丸みを帯びた肩のラインや、ほっそりとした四肢に僅かにくびれのあるウエスト、しっかりと膨らみのある乳房やら、他にも色々と性別が女であると認めるのは容易な体だった。

猪は、鼻息を荒げて、その少女へと飛び掛らんとしている。

目を軽く動かす。見るのは猪。

これが、神様、ね。

笑わせるなあ。

異物を神と崇めた村、か。

ベルトにあるストラップから銃を^{ハンドガン}パージ。
狙いを真っ直ぐ猪^{異物}へ。
当然のようにその頭を狙い、

「さよ、ならっ」

撃つ。銃声の一つ、地下空間に木霊する。遊底^{スライド}が自動で後退し、
薬莖が排出され、次弾が自動装填される。金属の円筒は、軽い金属
音とともに地に落ちた。

飛んだ銃弾は、真っ直ぐに飛び、檻と檻の間を潜り抜ける。音速
は出ていた。それが真っ直ぐ猪^{異物}の鼻辺りを直撃、
はしなかった。猪^{異物}がその長く太い牙で弾いたためだ。
ぶるうああああ！ 的な鳴き声が聞こえ、苛立ったように体を揺
さぶる猪。

舌打ちを一つ。

即座に敵戦力の計測。

反応は普通。知能は無さそう。獣レベルの異物か。

決定、^{ただの猪レベル}ザコ。

適当に判断しつつ、弾が無駄になったと内心ぼやく。

全裸の少女を、銃を構えながら見る。

音は聞こえるらしい。さっきの銃声で驚き、周りをキョロキョロ
と見回している。

動かないなら結構。

^{ハンドガン}銃をストラップに。どうせ鉄柵のせいで、狙うには少し不利だ。
だから、今度は刀。

左腰にぶら下がる三本の鞘の、一番短い、刃渡り五十センチ程度

の刀を左手で抜き出す。他の、刃渡り七十センチの刀と八十センチ^裁の刀は異物、もしくは龍殺しのための武装だ。対人用でもただの猪相手の武装でもない。対異物用といえば確かにそうだが、あれはそんな括りで縛っていいレベルの生き物じゃない。それに、対人用でも対異物用でもあんまり長いと小回りが利かなくて困る。

暗闇の空間、懐中電灯に僅かに照らされる世界の中、鞘から抜き出された刀はキラリと光り、鋭い剣先を見せた。

薄く黄色にそまる鋼の刀身。刃こぼれも錆も無い、美しい刀。握る柄はしつくりと手に馴染み、振るう腕はそれだけで歓喜によって動きやすくなる。

一步、二歩、三歩。鉄柵の前まで来る。猪はまだ警戒の目でこちらを見ていた。

すぐ、そっち行くから安心しろって。

「喰龍つってさ」

説明する相手などいないが、気分の問題だ。

鉄策の間に、刀の切っ先を入れ、手首を回し、

「これ、異物の覇者である龍の、それも世界最古にして最強の“龍王”の腹から出てきたんだぜ？　そんな刀が、ただの鉄に負けるわけないじゃん？」

横薙ぎに一閃。

それだけで、刃の範囲内の物質が全て切断された。まるで熱で鉄を溶かすかのように、物質が柔らかく切れていく。

鮮やかな切断面。

当然のように刃こぼれ一つ無い刃。

更に、返す動きでもう一回斜め下へと一閃。

鉄柵が鉄棒になって地面に落ちる。金属同士がぶつかる甲高い音

が何回かして、五月蠅いと思った。

三角の、入り口の完成だ。

よいしょっと、と、鉄策が突き出た地面を大またでまたぎ、奥へと入る。

猪は動かない。

しかし、

『……邪魔するな』

と口を動かし喋った。

俺は肩をすくめる。

なんだ、知能あるじゃん。

異物の中では普通だが、こんなところに閉じ込められている奴がそんなものを持ち合わせているとは思わなかった。

まあ、相手をしてくれるのなら俺も応じようか。

「んー、いやね？　邪魔なんてする気ないんだけどさ？　俺も仕事あるしい……」

『この娘は私の物だ！！』

「あらま、醜い独占欲ですことおー……。それとも、種族の垣根を越えて猥褻ってか？」

気持ち悪い、と呟く。猪は解りやすく憤慨した。鼻息を荒げ、こちらを睨む目は殺意がみなぎる。

うわあ、知能あっても馬鹿か。

『貴様ア……』

言いながら、右前足は地面を蹴る。蹴って、走る準備をしていた。

「おいおい、俺は平和主義」

者、と続くところで右腕が動く。

ストラップからパージ。照準は頭。ストライクゾーン 当たり前に発射。ショット

一瞬で構えられたハンドガン。猪の拳動がアクションを起こす前にトリガーを押す。雷管をハンマーが打ち、火薬が発火。

パン。

一瞬で音速にまで持っていていかれた銃弾は距離を縮め、ストライク 命中とはならない。

撃った時点で足は前へと歩き、猪との距離が縮まっていく。残り六メートル。

残り四メートル。予想通り、その銃弾は猪の牙に弾かれる。

残り三メートル。猪が地面を蹴った。

残り二メートル。俺の左手が突きの構えを取る。

残り一メートル。俺の強く踏み込んだ足が前方へと飛ぶように跳ねる。

残り、

「よっ」

ゼロ。

突進する猪の巨大な頭がすぐ目の前に。そして喰龍は、しっかり猪の肩間に。約三十センチ埋まっていた。

両者の動きが停止する。一秒、二秒。三秒目で、死亡を確認した

俺は、刀を抜いた。ぬめりある、湿っぽい音と共に抜き出すと、血が噴水のように溢れ出て、それが掛かる前に俺は横に さっきよりも確実に速い速度で 飛び退いた。

どさりと音を立てて倒れる物体。その姿形は猪で、目と目の間、眉間に一つの、縦長の穴が出来ていた。

刀を数回振るう。刃に付着した血や脳漿スライムは、しゅわしゅわと泡と音を立てながら、まるで刀に吸い込まれるように消えて言った。

便利だよなあ。何しろ、胃腸機能の凝縮体コンクリートだもんなあ……。

それを確認してから、よし、と頷き鞘に収める。すると、伸ばしていた背筋がだるそうに丸まった。

「弱エ……半端なく弱エ……」

思わず脱力するほど弱かった。これなら村の住人のほうがマシだったんじゃないのか？

猪だもんな。

と納得して、今も体を動かさない少女の方へと歩く。

足音に、その少女の肩は震えた。そして、僅かに、じりじりと下がる体。

「あー、安心して安心して。別に悪い奴じゃないし」

人を殺しても悪い奴じゃないと言えるほど、俺も人でなしレベルが上がったようだ。

その少女はそれでももそもぞ動く。

ため息を一つ吐いて、大腿で近づいた。少女の体全体が一度、大きく震える。

とりあえず全裸相手に話しかけられるほど いや別に仕事だし どうでもいいんだけど 俺は豪気じゃないので、自分の着ていた黒のコートを肩に掛けておく。まあ、大事な部分が隠れた事で、大

分マシになった。

そして、『？？』と首を右へ左へ曲げて肩に掛かった服の感触に疑問符を作っている少女の、目隠しと口周りの包帯を外す。へえ、と感嘆の声が出た。

僅かに日焼けした、薄い小麦色の、綺麗なハリのある艶肌。

髪の色は艶のある栗色。長く、背中をゆるりと流れている。

瞳は紫の宝玉。アメジスト

幼さ二割、大人っぽさ六割、その中間が二割といった感じの目鼻立ち。もつと言えは整った目鼻立ち。

髪型は耳上辺りの髪を後頭部で結う形。

ぶつちやけ可愛かった。この少女が、依頼で言われた救出すべき人間か。

そして、

「……ば、化け物っ」

助けた人の股間を思いつきり蹴るという失礼極まりない行動をする輩だった。

おのれえ。

と言った気もするが、とりあえずその場で絶叫する事にした。

「さよ、ならっ」

銃声が鳴り、体が思わず強張った。自分の身に何も無いと解った頃には、誰だろうか、と思った。

死ぬつもりなんだから、邪魔をしないで欲しいとも思った。神様に食べられて、それで死ぬつもりだったのに。

ぶるうああああ！ という神様の鳴き声が聞こえ、次に舌打ちも聞こえる。

すると、シャアアア、という、たぶん刃物を鞘などから取り出す時の音が聞こえた。

目隠しをされた視界の中では、何も見えない。

不安だけが募る。

「ガリユウつつてさ」

そんな軽薄そうな男の声が聞こえて、

「これ、異物の覇者である龍の、それも世界最古にして最強の“龍王”の腹から出てきたんだぜ？ そんな刀が、ただの鉄に負けるわけないじゃん？」

長々と説明するその声のすぐ後に、金属がばらばらと落ちぶつかる音が聞こえた。

神様の声と、さっきの声の主。

一つの銃声。走る足音と、蹄のような音。

最後に、肉を突き刺すようで湿っぽい、ドサ、という音と軽い金属音の重なり。

倒れる何か。

そして、優しげに聞こえる男の声と、肩に掛かったコートのようなもの。

意味が解らず いや、解りたくなくて 気を動転させていたら、目隠しが外れた。

外れた先には、にこにこ笑っている男がいた。

瞳は紅玉と呼んで差し支えないほどに鮮やかな紅色。とろりと光る目の表面は、潤っていて虹彩が光を多く取り入れているせいか、輝きを持っていた。

髪の色は明るすぎて白に近い白金色の金髪。何故か右こめかみを流れる部分のみ肘辺りまで伸びている。他は、男にしては長いと思える程度。

体は細く、黒いＴシャツに黒のパンツ。右腰にはベルトのストラップにぶら下がる銃。左腰には三本の刀。他にも右腰のベルトにあるポーチにはナイフが一本。首には古そうな、十字架のあるシルバーネックレス。後ろには、腰からはみ出たショットガンがホルスターに納まっている。

にこーっ、と笑うその顔は、ほんわかしていて、後ろで額から血を流して死んでいる神様とは不釣り合いだった。

思わず、その、神様を殺したというのに優しい、蕩けそうな笑みを浮かべていることに恐怖が走って、

「ば、化け物っ」

縛られている足で思いつきり股間を蹴った。

男は、笑みを眉を詰め、顔を青くしたものに変わると、

「おのびやあああ」

とか少し高い声で悲鳴をあげ、股間を押さえてその場で転がった。

“それはまるで悪夢のような”

夢だからと逃げるの？

「……」

「……」

背中に、一つのぬくもりがある。

さっきの少女だ。年は十五。名前はシルベ。シルベ・イルタリネ。

今は彼女の自宅だったらしい家。村長宅から服を引っ張り出して、来ている。薄手の、首元にレースの入った丈の短い黒のワンピース。こげ茶色の、フリルの付いたフレアスカート。薄いピンクと黒のストライプ柄のニーソックス。クリーム色のブーツに白のコートを着ている。

俺のコートは俺が今着ている。そして、村の入り口に置いておいたザックも、今は右手で握られている。

そして、少し遅い歩調で歩きつつ悩んだ。

（起きたらどうしようかね……）

確実に俺を恨むし憎むだろう。別に職業柄、そんなものは慣れている。問題は、依頼主のいる街までは歩きで三日と半日は掛かり、ここらへんは森と山で出来ていて車等の移動は不可能。仲が悪いままに移動していたらその内逃げられるんじゃないだろうか、と思っている。だからこそ、危惧しているのだ。関係が良好でなくとも、普通でいいのだからどうにかするべきだろう。まあ、手足縛って運べばそれでいいんだろうけど、耳元で騒がれるのも面倒だし。

そう思わず考えてしまうほどには、仲は悪くなっていると思う。というか確実に悪いだろ。

何しろ、俺が仕事で助けに来たと告げただけで、

『そんな事しなくて結構ですっ！ か、神様を殺してっ、……この、このっ、罰^{はちあ}当たりめ！』

と、顔を真っ赤にして怒られる。

『ははは。お嬢さん。いきなり男の股間を蹴っついておいて罰当たりとは……鬼ですなあ』

股間を押さえながら俺がにつこり笑って強引に連れ出したから良かったが。

だがまあ、当然のように外には死体がゴロゴロ転がっていて、そんなわけでシルベは絶叫一つ上げて気絶した。自分の住んでいた村の人々が、頭を吹っ飛ばされたりただの肉塊になっていたりしたら、そりゃ気絶もするか。俺が生まれた街だと日常の光景すぎるから、ただの風景として見れるのだけど。夏なんかはハエが集り蛆虫が沸き、冬は凍えて血も凍っていて、春はやっぱり虫が沸く。死体を見すぎて育ってるから『おお、春ですなあ』とか虫のわき具合を見て判断できる。自慢じゃないけど。

マ、マジで自慢じゃないんだからね！？

気絶してなかなか目覚めないもんだから、面倒だったが仕方なく今はおぶっている。体は細くて痩せているのに、やっぱり人間は重い。

四十……二、三程度だろうか。背丈は百六十五程度だし、普通か痩せているのどっちかだろう。肥満体型ではないのは、さっきの全裸で把握済みである。

今は村を出て、森を真っ直ぐ突っ切っている。名も無い、ただの森だ。

背中からおぶる体が落ちないように、僅かに体を前に倒しつつ、

眩く。

「にしても、珍しいよな……俺に人助けの、依頼なんてさ」

誰か反応してくれねえかな、とか思う。

実際、珍しかった。

依頼は街を数週間から二ヶ月ほどろつき、俺を知っている奴があつちから話しかけてくる。職業が殺しも厭われないようなものなので、自分から看板ぶら下げて宣伝するわけにもいかない。そして、そういうタイプが多く、今回もそうだった。

ただ、問題があるとすれば、それが街の市長だったことが。積まれた金は結構な量だったし、それに見合うだけの人数が殺せそうだった。請け負ったらあの市長、『君、ホントに子どもかい？』とか言いやがった。

ガキじゃねーっつの。

俺の今の年齢は、外見年齢だけで見たら十八程度。実際年齢は十七だが、若作りな顔という設定で二十歳にしている。そうしないとナメられるからだ。ちなみに名前はアルファ。アルファ・アリイ。^{人殺し}この仕事は十一歳からやっている。

やらなければ、死ぬだけの世界だったから、嫌でも銃の扱いくらいは覚えた。

「荒廃街、か……。あそこは、地獄だったなあ……」

俺の故郷のあだ名だ。

その名の通り、荒廃して、人の住める土地ではない場所。そんな土地を強引に開拓して、生きるには不適切な場所に街を作った、らしい。

この大陸を西に真っ直ぐ行って、その端にある、大きな石と乾いた土しかない土地にある街だった。

物資が少なく、人殺しばかりの街。崇めたのは太古の龍王。ドラゴンタイフ当然、異端者区分民。

最悪の思い出しかない。友人がいきなり裏切って俺にナイフを向けたり、幼馴染だと思っただ奴は俺を殺そうとしたり、ほんとにもう最悪の思い出ばかりだ。親父は母さんを俺の目の前で殺してヘラヘラ笑ったし、しかもその肉を喰った。

美味しい美味い。女の肉は柔らかくて美味い。ほれアルファ、お前も喰えよ。

ゾツとする程、狂った光を宿す目が俺を見て、母さんだった何かを俺に差し出した。その何かは、ぶよぶよとした赤黒い肉の塊で、表面には小麦色の母さんのものらしき肌が浮かび、筋肉の繊維、血の赤、脂肪のぬめつとしたものまで見えた。そして狂っているのだと思った。

この親父はもう駄目だ。昔から狂っていたけど、もう本当に駄目だ。そう思うとなんだか心が楽になって、そして俺は親父を撃ち殺した。初めての殺人だった。

昔は、いくら力ニバリズムで狂っていても、幸せそうに笑う親父だったのにさ。

自分も、腹が減っていたからと喰った時点で、終わっている。母さんだったものは、血の味しかなくて不味かった。親父だったものは血の味も薄くてゴムを噛んでるようで、もっと不味かった。

腹が減っていた。というのは、良い言い訳だろうか。

だが、喰わなければ飢餓で死んでいた。だから、食べた。不味くても胃に詰め込めば何も変わらないと、そう思い込む事にして。

責任転嫁になるが、全部、あの土地が悪いのだろう。枯れて痩せた、あの土地が。

それに比べたら、

「ここら辺は、いい感じに潤ってますね……。綺麗な川もあるし、木の実も多いし緑も濃い。あそこも、これくらいに潤ってたら、皆仲良く出来たのかね……」

ぶっ壊れちまえばいいのに、こんな縁。

皆殺しあつて、さつさと淘汰されればいいのに。

憎んでも、恨んでも、どうせ俺にはこうやって人を殺して、出来るだけ早く人の世界が終わるのを待っただけだ。

何にも出来ない。

十人殺しても、百人子供が生まれて。

百人殺しても、幸せそうに笑う家族が何十万といやがる。

全員、死んでしまえばいいのに。

どうせ、無理だろうけど。

そんな事をできる力が、無いのだから。

足りないのだ。まだまったく、足りない。大量虐殺なんか出来ないし、だからチマチマ刀を振るって引き金を引くしかない。

だから、まだ無理。

無理だと解っている自分が、一番腹が立った。

あー、もう！ イライラすんなあ！

内心苛立ちつつ、頭をガリガリと掻きたいのに両手はシルベの太ももを支えている。

思わず引き千切りたくなつたが、仕事だ。

仕事仕事……、と何回か呟くと、どうにか苛立ちや怒りや恨みといった負の感情は落ち着いた。

金がないと、生きていけないんだ。

死にたくはない。まだ、死ぬ気はない。

だから、生きるために、世界から人を撲滅するために殺さないといけない。

殺して殺して、殺してまた殺して……その内、人が全員いなくなったら、きっと俺は死んでもいいと思える、筈だ。

それまでは、まだ。

思考がいつものように暗くなって、太ももを握る手に力が籠ったとき、

「ん……」

と、小さな声とともに、背中におぶさる少女が声を上げた。

そして、

「んう……………?」

と可愛らしく小首でも傾げていそうな疑問の声が出て、すぐに、

「へ!?!」

と驚愕の声になった。

耳元で叫ばれた俺は顔を顰めつつ言う。

「起きた? はい、お目覚めついでに問題です。ここはどこでしょう?」

「え、あつ、え、え、えー……………森?」

戸惑いながらも律儀に言葉を返すシルベ。困惑しているからだろ

うか。

「正解です！……あ、そうそう。シルベさん、歩ける？」

無邪気にテンションを上げて受け答えし、尋ねる。シルベは割り
と律儀に、もしくは状況を受け止められないのか、「は、はあ……
まあ」と言った。

「そっか。 んじゃあまだこのままだね」

へ？ という少し間抜けな声が返ってきて、そしてすぐに暴れだ
した。主に髪を引っ掴まれたり首を叩かれたり背中を殴られたりす
る。髪が、ブチッ、と嫌に耳障りな音を立てて五本くらい抜けた気
がした。痛かった。他は大して痛くなかった。ははは可愛い女
の子の殴りじゃねえか頭痛いんだけどどうしてくれようか！？ と
か軽く笑みが生まれるくらいには可愛らしかった。ここは怒るべき
だろうか？ 怒るべきか。

よし、俺怒っちゃう。

「 やめんか馬鹿！ 一体俺の背中で何やってやがりますか！？
俺が貴様の太ももを握っていると言う事実は変わらないのが解ら
ないのかね！？」

語尾がおっさんになったり後輩になったり偉い人になったりしな
がら、テキトーにキレる。

すると、背中のおぶられる少女はビクッ、と体を震わせて、だが
すぐに、

「は、離してっ！ 離してくださいっ！ 何なんですか貴方は！！
か、勝手に神様を殺して……！ 私は死ぬつもりだったのに！」

威勢良く叫びだした。髪は抜かれたりもしないけど、耳元で叫ばれて五月蠅い事この上ない。

やれやれと思いつながら、口を開いた。

「いや、シルベさんに死なれると困る人がいるそうなんだよ。セルク街、知ってる？ その市長さんの依頼でね」

面倒そうに、背中では暴れる少女に、諭すようにゆっくり説明する。やはり降ろさなくて良かったな、と思った。降ろしたら今すぐ走って村へと戻りそうな勢いだ。逃げられると面倒。追いかける体力なんて使いたくないし、威嚇^{いかく}用に銃弾を使っなんて馬鹿らしい。面倒ごととは嫌いだ。

すると、さっきまでギヤーギヤーと五月蠅かった声色は、確実に弱々しく驚愕する声音に変わる。

「……セルク街の市長……！？ な、何であの人……」

「あー、なんか因縁つばいのもあんの？ いや、聞いたら面倒なことに首突っ込む事になるだろうから聞かないけど、ともかくこれ、依頼だからさ。うん、だからこのままでいいよね？ 俺、疲れないし」

「はあっ！？ いやです！ さっさと降ろしてください！」

「えー。いや、どうせ村に戻るでしょ？」

「当たり前です！」

「それじゃ俺、前金しか貰えないじゃんか……」

「そんなの知りません！」

「むう……じゃあ、飴玉上げるから、それじゃ駄目？ イチゴ味とレモン味のどっちがいい？ ハッ！ ま、まさか俺の大好きなグレープ味がいいだなんて言わないよね！？」

「馬鹿にしてるんですかつ！？」

「んー……じゃあ、お金？ 一応預金通帳はあるけどお……どうだろ？ 適当に預金はしてるけど、数えた事も無いしねえ」

「なっ、殴りますよ！？」

「じゃあ、何がいいのさ。お金と甘いものと服以外に女が好きなものなんてあるの？ それとも肉派？ LOVEとか言ったら鼻で笑うよ？」

「いいから降ろして！ 早く！ 皆、皆が！」

「だあーからあ ……その皆は死んだって。肉の塊か醜い芋虫みたいになってると思うけど」

「そ、そんなのは……ッ……、嘘、です！」

「マジマジ。俺がヤッちゃったし」

「んなっ……！ う、嘘！ 皆、死んでなんかいない！！ 生きているはずですよっ！」

適当に言葉のキャッチボールをしていたら、更に暴れだす。

うるせー、と思いながら無視していると、その手が首にぶら下がるシルバーネックレスに触れた。何故か一瞬つかみ、強く引っ張った。

軽く苛立つた。勝手に触るな。

大事なものなんだよ。

ああもう。

これだから人間は。

たかだか人の数十人が死んだ程度で騒ぎやがって。

死んでなんかいない？ 生きているはずだ？

無理無理。

ヘッドショット

クリティカルショット

ダルマ

頭部破損、クリティカルショット心臓破裂、四肢の切断、首なし頭部の胴体解脱。これで人が

生きてると思うのか？

馬鹿じゃねーの。

そんなもの、日和見主義者の現実からの逃避だつーの。

人は死ぬし、生きたくて何かを殺す。豚かもしれないし牛かもしれない鶏かもしれないし魚かもしれない。

でもな。

それに人だって該当するって、何故分らないんだ？

世の中には人の肉を食べるカニバリズムとかいう狂った輩もいるし、そもそもこの世界は格差社会だ。富あるものは人を見下せるだけの力を持ち、下に居座る人間はその場所で得られる幸福を得るしかない。資本主義とか言うシステムで世の中が動いている以上、金持ちは同類を“食い物”にしている。

それも解らないの？ 馬鹿？ それとも死ぬ？ 同じただの肉にでもなってみる？

無知で、それも解らないくらいには幸せな人間だということに苛立ちが募り、苛立ちは殺意に変貌する。

だが、仕事だ。

そう思っただけで殺すための腕が止まる自分に、また苛立ち。

力があれば、こんな事で戸惑いはしないのに。

力が、欲しい。だけど手に入らない。

渴望できるだけの権利も道具も既に持っているのに、何故。

手に入らないのが意味不明だ。

思考がぐるぐると同じ場所を回転し、答えの見つからない無限迷

路に迷い込む。

ああ。

本当に、色々と、面倒くさい。

「チッ」

太股を軽く掴んでいた手を離す。

俺から仰け反るようにして背を伸ばしていたシルベが、「わっ、

わ!？」と言いながら地面に腰から落ちた。ドサっ、と重いものが落ちる音が聞こえる。

同時に、俺も後ろを向く。

ストラップからパージ。照準は頭。ストライクゾーン。当たり前に発射。ショット。はしない。

別に撃ってもいいけど、これ仕事だしなあ。

そんな理由で人殺しを止める自分に、今度は怒りを通り越して呆れのため息が出る。出してから、銃口を向けた。

「あのさ、シルベさんや。ちょっと静かに聞いてくれると助かるん

だけどさ？」

「ひ……」

銃口を向けられて、完全に硬直するシルベ。瞳は大きく見開かれ、小さく震えている。目の前にある銃口から目を逸らそうとしているみたいだ。唇も同じように震えていた。

怖がっていると、はっきり分かった。

思わず目が細まる。視線は確実に軽蔑のそれに変わり、思ふ言葉は心の中でのみ反響させた。

死ぬつもりじゃ、無かったの？

君の覚悟なんてその程度か。

まあ、どうでもいいけど。

しりもちをついた姿勢のまま動かないシルベに、半歩近づき、腰を落とす。肩膝を立てた姿勢になった。銃口は、その眉間に押し付けた。

にっこり笑っておく。嗜虐的な笑みかもしれないし、聖母の愛情ある笑みかもしれない。

そんなもの、見るものによつては表裏一体なんだから。

「俺さ、九歳の頃からこんな事やってるんだけどさ？ うーん……想像付かないだろうけど、俺からすれば、人を殺すことなんてホント些細な事なの。ね？ 解らないよね？ 君、幸せそうだもん。幸せそうに死ねるんだから、割と羨ましかったりするんだけどさあ……」。

ああ。で、話を戻すけどね？ うん、こうやって俺がグリップ握

つてトリガー引けば、君、死ぬよ？」

「……あ、ああ」

意味不明なうめき声を上げるシルベ。完全に恐慌していた。

「トリガー引いて撃鉄が雷管^{ハンマー}打って火薬が発火して、音速で飛ぶ鉛弾が君の眉間を貫いて脳に風穴を開けるのはどれくらいの時間があるんだろっね？ 一秒は確実にいらなと思うよ？ まあそんな事すると俺、依頼失敗するけど」

でも正直さあ。

「依頼だからって人を助けるなんて、ちょっとイライラが募って駄目になっちゃいそうさあ。俺のスタンスが依頼で殺すべき人間の家族も殺す、とかそういう感じだからなんだけどもね？ ……まあ、そんなわけだから、俺、撃っちゃってもいいかなー、なーんて思うわけですよ。で、君、そうなると死ぬよ？ 死にたい？」

ねえ、どうなのさ。

聞くと、その小さな頭は、目尻に涙を溜めながらも、動かない。

ただ、小刻みに動く体が全てを物語っていた。

ため息を一つ。

「まあ、君も見たとおり、君の住んでいた村の住人は、男女^{おとこ}爺婆^{おやば}含めて俺が全部殺した。子供はいなかったね。でも子供がいたとしても撃つよ？ ……んー、何人くらいいたかな？ たぶん三十人以上はいたよね？ うん、全部殺したよ？ 依頼だったし。そもそも俺の願いでもあるし」

目が、更に見開かれる。アメジストの輝きは、涙で潤い光を増していた。

よくそんな開けられるねえ、と心の中で感心しつつ口を動かす。

「だからさー、別に、女子供家族友人恋人幼馴染その他全員、……自分の関係者だからって殺さないなんて馬鹿みたいな事は言わないの、俺。

殺すときがくれば殺す。誰でもね。俺が一番最初に殺したの、親父だし。その親父も、俺の目の前で母さんを撃ち殺したりしてるしね」

「……ッ！」

息を呑む音が聞こえた。

よくある、一般人の反応だ。たまに怒る輩もいるから困る。

「悪いけど、俺ちよつと頭の中狂っててさ、世間一般の常識じゃ『キチガイ』とか『病気』とか『殺人鬼』って呼ばれる部類の人間なんだよねえ。あ、サイコパスじゃないよ？ あそこまで狂ってないから。ロジックは持つてるし、一応自分の中の善悪論に基づいて行動しててさあ。別に自分が正義の味方だなんて思わないけど、ともかく全人類が悪だと思うから殺してるだけだし。」

……だから、さ？」

きつと傍から見たら、俺の顔はにこーっ、とした笑みがあるだろう。だから俺は“ナイトメア笑う蹂躪人形”とか呼ばれたりするのだ。

人を殺せば、世界を救う夢に一步近づくのだ。人類を抹殺する

こんなに嬉しい事、あるか？

「ちよつと黙って付いてきてくれないかな？」

銃を眉間から外し、安全装置を元に戻してストラップに付ける。
銃が腰辺りで揺れた。

視線を戻して、シルベの顔を見た。

すると、シルベは、俺をなみだ目で睨んでいた。

「……わ、私は」

声は震えて、顔全体も小さくプルプル震えている。

でも、眼力だけは強い。意志の光は鋭くなり、力を蓄えていく。

「私は、死ぬ覚悟、です……そんな、っ、の……知りませんっ。あ、
貴方がいくら人を殺そうと、私は、死ぬ覚悟でした」

「……」

俺が、無表情に無言でシルベを見ていると、シルベはそれを押し
黙ったと思ったらしい。唇を震わせて、一度下唇を噛んで、目を、
ぎゅっ、と閉じてまた開いて、眉を立てて言った。

覚悟かもしれない。

死ぬ覚悟かもしれない。

だけど。

くだらねえ。

異物に上げる命なんか、俺が全部撃ち殺すか切り殺してやるつか。

「貴方は、神様を……何だと、思っているんですか？ ……あれは、
神様は！ あの辺り周辺の地域の土に栄養を巡らせ、そして肥やし
てくれる、立派な神様でした……ッ！ なのに、貴方は……！ 貴
方みたいな人のせい」

「で？　それ……アンタはあんな異物に犯されて食われたかったって？　猪なんかと交わって何がしたいの？」

出た言葉は刃だった。

それがシルベの喋る口に、考える脳に、聞く耳に切り込み、動けなくなる。

人間一人の視野は狭い。

だから、事実のみを言われたら、主観で物を見る人間は、黙るしなくなる。

客観は時に正論で、時に残酷な刃になるのだから。

「言つとくけどね、これは俺の感想じゃない、客観的な事実だけだ。傍から見たら、あんなの、……はッ」鼻で笑う。そして、「ただの獣姦だ。そうとしか言い様が無い。そして、君を喰うつもりだった。……教えておくよ、シルベ」

シルベは無言。

自分の身に起きるべき事実が、他者の、しかも恨むべき存在に言われた事で、何も言えないようだった。

「神様なんて奴は、不幸しか与えない。じゃなきゃ、世界中に生態系の正当な進化から外れた異物が生まれるわけが無い。」

これは俺の自論だけだね。進化って言うのは、環境への適応の繰り返しだと思うんだよ。虫が、人の作り上げた殺虫スプレーに対抗できるようにになったり。人が、それぞれの土地の気候に合わせて肌の色や体格、内臓器官の効能の強弱を変えるように、ね。なのにかしいよねえ？　体長五メートルの猪なんて、聞いたことが無いよ俺」

知ってるか？

「龍なんてフザけた、空想上のファンタジーの産物までこの世には存在してるんだよ。体長は最低でも五メートル。デカイ奴は俺が見た中では最高五百メートル超。翼を持ったタイプに地を這うタイプ。口から吐かれる火は摂氏二百度以上がザラ。尻尾は一撃で山を砕いたりする。その咆哮で鼓膜が破れたり、衝撃で吹っ飛んで気がついたら肋骨の二、三本は折れてるさ」

またため息が出る。今日は、疲れそうな一日だ。
立ち上がる。

「まあ、どうせあと数日の仲だし、どうでもいいっちゃ、どうでもいいんだけどね」

ほれ、と手を差し出した。

「立てる？」

その目は、虚空を見ていた。
空ろな瞳は見開かれたまま、小刻みに振動しつつ、目尻から涙を流した。

パチパチと、薪が火で燃え、爆ぜた音を小さく鳴らす。目が僅かに、火の熱で熱く、このままだと乾燥した目が生理的な涙で潤わそ

うとしそうだった。

泣いているだなんて思われたくなくて、だから自然な動きで目を逸らし、周りの景色を見た。

右の方の森の木々は、黒に染まり、光を反射する活気ある緑から、闇に誘うような危険な雰囲気を出していた。

左では、緩やかに流れる川の清流がサラサラと音を立てつつ、焚き火の光を水面に映させる。

空は満点の星空が瞬き、いつものように綺麗な光の粒を視界に納め、歩きつかれた足を癒してくれた。

夜だった。

私は、あれから一言も口を聞けずに、俯きつつ、足を踏み外してこけそうになった所を必要も無いのに助けてもらったり、食料を分けてもらったり、ただ歩いていた。

気がついたら夜で、アルファさんは薪を集めていて、川の近くで火を起こしていた。

私は、その暗い夜闇の中で光る暖かさを、頬や体育座りの体の前面で感じつつ、ただぼうつと言葉を脳内で反芻していた。

『で？ それでアンタはあんな異物に犯されて食われたかったって？ 猪なんかと交わって何がしたいの？』

思わず、下唇を噛んだ。

悔しいが、事実だ。

そのつもりだったし、村ではそういうものだと、諦めの空気も漂っていた。

だけど。

それでも、あの土地は土が栄養豊富で、麦は健康に大きく育ったのだ。

それを、全部メチャクチャにされた。
たった一人の、まだ二十歳にもなっていないだろう人に。

「ほれ、食べな―」

いきなり、手が伸びてきた。男にしては白い肌、細い腕。アルファさんのものだ。その手には、焼いたらしい魚が串に刺さっている。

「……ありがとうございます。アルファさん」

受け取ると、

「これとこれとどーぞ」

切られたパンと、水筒を渡された。それも受け取る。

「どういたしまして」

お腹は空いていた。小さく動かした口で食んだ焼き魚の身は塩が振られていて、脂も乗っていて美味しかった。自然と、食べ物に感謝の感情と美味しいと思いで心が安らぎ、微笑みが生まれた。水筒の中身を飲むと、澄んだ冷たい水が入っていて、一日中歩いていた体に染み渡るようだった。パンは普通だった。

何故、さん付けするのかなんて知らない。生まれつき、周りは大人数だけだったからそうだというもある。

だけど、それ以外で自分でも解っている理由があるとしたら、認めたくなんか無いけど、

命を、助けて貰ったから。

死ぬつもりだった命を助けられて、それでも感謝している節があ

る自分に、悔しさで胸中が一杯になり、顔をうつむかせる。視界に、光に彩られた栗色の髪が移った。

と、

「美味しそうに食べるね、シルベさんは」

顔を上げると、微笑みつつこちらを見る、白金色の髪と紅玉のような瞳を持った青年が、こちらを見ていた。紅の瞳に炎の揺らめきが加算され、本当に燃えているようだ。

ジトツ、と上目遣いに睨み、言う。

「……さん付けとか、敬語とか、止めてください。……聞いてて、イライラします……」

「あ、そう？　じゃあシルベ、美味しい？」

コクン、と小さく顎を上下させた。実際、美味しかった。

クスクスと笑う声が聞こえる。薪が投げられて、火が一瞬強く揺れた。

「いいね、そういうの。うん、食べて美味しいって言って、美味しそうに微笑む人はきつといい人だよ」

食べ物には大事にしないとねー、と嬉しそうに目を弓にして笑う姿は、外見年齢よりも若く見え、無邪気な子供のようだった。

なんなんだろう、この人。

違和感を感じる。いや、もっと言えば意味が解らない。

日中、銃を眉間に押し付けた相手に対して、ここまでフレンドリーに話しかけられる理由が解らない。

頭おかしいんじゃないだろうか。

いや、きつとおかしい。

あれだけの人数を殺しても、ケラケラ笑っただけだ。自分より巨大な生物を、神様を見ても、にこーっ、と笑っただけだ。

おかしい。キチガイだ。殺しすぎて頭がパーになってるんだ。絶対そう、そうよ。というか、自分で言ってたし。

ぱく、ぱく、と口を動かして焼き魚を食べつつ、思った。あ、内臓食べちゃった。苦^{にが}あ……。だが、吐き出すとまた笑われそうで嫌だったから、眉を顰めながらも飲み込んだ。すぐに腹の部分を食べる。そして水を飲んで、パンを口に放り込んだ。やはりパンは普通の味だった。

そのまましばらく、魚を食べて、パンを食べて、水を飲んでを繰り返す。元々あまり食べないので、すぐにお腹は満足になった。余ったパンと水筒をアルファさんに返しておく。

ほう、と息を吐き出してから、夜空を見上げた。

「綺麗……」

自分の今の境遇や、村の皆の状況など考えずに、自然と言葉は漏れた。感嘆の声だった。

満天の星空だ。

光が断続的に瞬き、夜空の天井を白い光で埋め尽くそうとしている。この周囲一帯は工場等も無く、森と山が広がるだけなので、相対に空気が澄んでいる。そのおかげで、このように煌々と輝く美しい夜空を見られるのだ。ただ星座についての知識は無いので、綺麗と思うただけだ。

この星空も、夏になれば運河が出来る。

綺麗だったなあ。村の皆でお餅について、食べながら見てたつけ。いつもは早寝を厳命されているけど、あの日だけは許されていたんだよね。

……綺麗、だったなあ。

もう一度、皆と見たい。

微笑む顔。笑う顔。ガハハ、という豪快な笑顔。皆笑顔だった。思い出の中はモノクロで、僅かにぼやけて靄もやに包まれていた。

会いたいですよ。

だが、もう会えないのだ。

皆、死んでしまった。

怒りは、夜空を見て、過去を回想することで掻き消えた。今は、怒りたくなかった。

「だねえ」

前方から、同じような感嘆混じりの声が聞こえた。僅かに苛立ちと殺意を覚えたが、今は忘れる事にした。

しばらくはそうやって星空を見上げていたが、いい加減に首が痛くなってきたのと、隅々まで見てしまったことで飽きが回ってきて、視線を前に戻した。アルファさんはまだ夜空を眺めていた。両手を腰の後ろに付けて、上半身を斜めにした姿勢だ。

視界には、アルファさんの足が見え、その黒いブーツが見えた。

艶のあるエナメル質のブーツは、光で陰影を濃くし、ゆらゆらと輝く。

そのパンツは黒。Ｔシャツも黒。その上のロングコートも黒。

真っ黒だ。今は炎で照らされ、その白い頬や、その頬に灯る僅かな赤み、そして目の紅に白金の髪と一緒に服装も照らされているが、火が消えたら判別が付かないかもしれない。寝ているところを、襲われないようにしようと思わず考え。

「ん？　どうかした？」

じっと見つめていたらしく、アルファさんがこちらの視線に気付いてキョトン、と首を傾げている。その右の長い房が優しく揺れた。

「あつ、い、いえ……なんでも」

慌てて否定すると、おかしそうに笑うアルファさん。笑うところだろうか。というか、何故笑えるのだろうか。聞いてみたくなった。

疑問が興味を呼び、その顔をチラチラと伺い見る。

線の細い、中性的な顔だ。瞳は大きくも小さくも細くも無く、丁度良い。ただ、はつきりと自己主張する二重瞼で、意外にも睫毛が長かった。だから、紅の瞳の印象が濃くなる。

鼻筋も綺麗だし、肌は白磁の陶器のように滑らかで白い。頬肉はふっくらとしていて、流麗な顎のラインに乗っかって柔らかさそうだった。唇は血色良く、形も良くて、笑みを刻みやすそうに柔軟な動きがよく見える。

背丈は大体百八十程度だろうか？　足は背丈に見合って長く、腕もそれなり。体も細い。まるで、バランスを丁寧に整えながら肉体が成長したみたいだ。

四肢は細く、腕を見ても解るが筋肉などあまり無いように見える。正直、銃を撃つような体格には見えない。だが、確かに銃の腕前は日中の早撃ちで見ている。それに、今も帯刀している刀は、三本もある。腰には銃口の短いショットガン。腰のベルトからぶら下がるストラップには、銀細工の美しいハンドガン。それに小さいながら中身のぎっしり詰まったポーチ。色々入ってるらしいザックもある。ひよろそな体のどこにこれだけの物を持ち運ぶ力があるのだろうか。

でも、もしも、違う出会い方だったら惚れてただろうな、と思う

くらいには整った顔だ。特に紅玉の瞳は、見るものを圧倒させる。その白金色の髪も日焼けしていなさそうな肌を邪魔せず、目の紅を引き立てている。普通の出会いで初対面だったら、強烈すぎて絶対に忘れないだろうと思う。

出会いが最悪でそんなことどうでもいいが。それに、どうせ後数日の仲だ。すると、

「あー、俺の顔、なんか付いてる？」

再度、首が傾げられて、更に私の心臓が跳ねた。やってしまった！焦って思わず焼き魚の刺さる串を落としそうになって、慌てて空中でキャッチ。

私のキョドった行動を見たアルファさんは「あはは」と笑った。

悔しいが、今は笑うべきシーンだった。

そして、焼き魚の串をしっかりと持ちながら、炎越しのアルファさんを見た。

「……何で、いつも笑ってるんですか？」

アルファさんは、私の意を決した質問に、んー、と眉根を詰めて苦笑の表情を作る。また笑った。

笑って笑って笑って、笑ってばかり。怒ったり、憎んだりできるのだろうか。

「俺、別に笑いたくて笑ってるわけじゃないんだけどね」

「私……そんなにおかしいですか」

「あ。いやいや、そういうわけじゃないから。……俺の両親がさ、

笑ってばっかの人達だったから。俺も、自然と笑う表情が板に付いたんだよ」

それに、とその口は動く。

やはり笑みのまま。

「世の中全部、クソみたいに腐って見えると、呆れを通り越して笑えてくるんだよねー」

いきなり“クソ”などと言う、汚い言葉使いが混ざって、肩が小さく震えた。

そういえば、たまにこうやって黒い部分が見え隠れする性格だったと、日中の出来事を思い出す。

本当は、どっちが本心なのだろうか。黒い部分が、今みたいに笑う部分か。

「それが、笑う、理由ですか？」

「あー……どうなんだろうね」体育座りになって、炎を覗き込むように背を丸めると、「俺、正の感情の類は壊死してるから。小さい頃に、人の醜い部分を見すぎて、心が不感症になっちゃってね。でも、苛立ちとか怒りとかは結構感じるんだよねえ……」

「そんな訳……いや、というか中二病臭いですよ、その言葉」

ポツリと言った言葉に、私は思わず否定しかけた。

そんなの。

違う。この世に、心が死んでいる人間なんかいない。みんな笑って泣いて、怒って悲しんで、そうして心に傷を負っていつて、そしてたらそんな風に褪せたようになるだけだ。だから、誰も彼も、心が

死ぬわけが無い。

と、言いたかったが、気恥ずかしくて言えなかった。他人に言う
と確実に笑われると思う。特に、アルファさんに笑われるとなんだ
か無性に腹が立つ。

憎んでいるのだから、当然か。

憎い人間に、死ぬと思うのは当たり前なんだから。

思う眼前、アルファさんは「そうかもね」と悲しそうに笑った。

「……本当に笑ってばっかですね」

「まあ、笑わないと、頭の中狂いそうになるような体験しかしてな
いからね」

どんな？ とは、聞いてみたくもあった。

だが、聞く前に。

「俺のこと、憎い？」

笑みは、そんな言葉を吐いた。

そして、忘れようとしていた、皆の、脳漿のピンクや、血の赤、
肉のスライムのような物の一部を思い出してしまった。

肩も喉も目も口も全部震える。ガタガタと、ふるふると、ぶるぶ
ると、カチカチと、寒いとでも言うように。

実際、心は押し固めたように寒さを生み出し、火の暖かさを無視
するように過去の映像から目を背けていた。

喉は震えながらも、それでも押し殺したような言葉を出せた。

「……当たり前じゃないですか」

拳を握る。強く。強く。

皮膚に爪が食い込み、僅かな痛みを発生させた。

「だよねー。じゃあ、殺したい？」

いつものように、暖かみを持った、にこーとした笑みは平然と言う。絶対、狂ってる。

挑発してるのか？

そう思うと、歯軋りが自然と鳴った。

苛立ちや馬鹿にされたという事実、他にも様々な黒い感情が、叫ぶ。

殺したい。

皆を殺したように、苦しませて殺したい。

死ね！ 死ね！ 死ね！ お前なんか生きてるから！ お前みたいなのがいるから！！

だが、叫んだところで、無理だ。私は貧弱で、力もあまり無い。それに、さっきみたいに銃を押し付けられるのはもう嫌だった。

必死に叫びそうになる衝動を我慢し、体を硬直させて火を睨む。

それを見たアルファさんは、口端を、にいつ、と上に上げる。狐が人を化かす様な笑みだった。焚き火も、表情を際立たせる。

明らかな嗜虐の笑みだ。

「……じゃあさあー、ほれ、これで撃てば？」

焚き火の上を放物線を描いて、投げ渡されたのは、腰のストラップにぶら下がっていた、綺麗な銀細工の筋が起伏を生むハンドガン。高価なものだと解る。

慌てて、体で包み込むようにキャッチ。ずっしりとした重みと、鉄の冷たさが背筋を冷たくした。

重い。こんな、普通のサイズのハンドガンが、酷く重い。

この、銃の、トリガー。それを引けば、銃弾が吐き出され、それ

が飛べば、血が出る。

痛い。

怖い。

人殺しの道具が、自分の手に、ある。

すると、いつの間にか隣に立っているアルファさんが、銃の持ち方を教え始める。

ここはこう。

そこは、そうして。

ああ、そんな感じ。

そして、カチコチに硬直して動かない指先を、白い指がゆつくりと熱で解くようにして動かし、勝手に握らされる。

私は、気付くと、銃を握る両手を優しく、アルファさんの両手に包み込まれ、その銃口は彼の心臓を狙っていた。

腰が引けて、体が引いている私。いつまでも笑ってばかりの、銃口が押し付けられても笑っているアルファさん。

「……うん、こんな感じだね。さて、撃つ？」

口は、震えていた。

既に銃に触ることが、トラウマになっているのだと気付いた。

銃口を日中に、眉間に押し付けられた冷たさ。覚えてる。それ以前に、あの村にもあった。人殺しの道具。皆、守るためだと言った。何に？ 聞くと皆、君をだよ、と笑った。違う。嘘。嘘。そんなの嘘。だって、重い。これ、重い。凄く怖い。命が目の前にある。それが、トリガー、引くだけで死ぬ。血が溢れて、皆、アルシャさん、ヨクトさん、イスキュルさん、他にも、い、一杯、一杯、変な形の皆になる。何も守ってない。守らない。殺すだけ。殺して醜い人じゃない何かになるだけ。嫌。嫌。嫌！ 嫌、そんなの嫌！！ 殺したくない。死にたくない。私はまだ死にたくない。あんな死に方嫌。普通に死にたい。

普通？

私は、食べられて、犯されて死ぬんじゃないかったのか。供物として捧げられて、死ぬのではなかったのか。

それが普通なのか？

それは。

そんなのは。

違、

「あ……」

ああ。

ああああ！

違う！ 否定なんかしていない！

「……嫌あ……そんなの、違うよあ……」

認めてなんかいない。

「違うのお………そんなの、ッ、………違う………私は、覚悟、してたんだよあ………」

涙が零れ落ち、その温さが体の硬直を溶かした。

柔らかく、体のどこもかしこもおかしくなっていく。

涙がこぼれて、喉が震えて、肩は大きく上下して、しゃっくりも出て。唇が歪む。頬が歪む。眉が歪む。視界も歪む。

何もかもが歪む中、紅の滲んだ瞳は、何もせず淡々と無表情だっ

た。

憐れみでも、嘲りでも、馬鹿にするでもなく、ただただ無表情だ。その、私の手を包んでいた両手はゆっくりと解かれた。私はその機を逃さず、手からすべり落とすように離れた。握っていたくなかった。握っていたら、自分の弱い何かが丸見えになる気がして、嫌だった。

死も覚悟していたはずの自分がただのハリボテで、死にたくないと願うただの人間だったなんて、気付きたくなかった。

「……シルベは、弱いね。憎んでる相手一人、撃てやしない」

言葉は鋭利なピックとなって私の、何か大事な部分を貫く。耳を塞ぎたい。聞きたくない。

腕は、銃を構えた形から硬直し続けている。動かない。

弱くなんかない！ 私は、弱くなんかない！ 絶対！ 絶対そう！ 皆、強いって言ってたんだから！

必死に叫ぶ心は、意味を成さずにぼろぼろだった。痛い。心が痛くて、心臓の鼓動が鋭くて、息が重い。苦しい。そして、彼のその口は止まらない。

「弱いのは、きっと正しいことだと思うけどね」

だって、

「弱いから、人は武器を作ったし。弱いから、他者と手を繋げるんだから、さー」

言葉は抑揚も無く、ただ平淡に呟かれた。その手は無意識の行動なのか知らないが、安全装置を戻してストラップに繋がれた。そして、ポーチを漁る手は、一つのハンカチを取り出した。

涙で歪む私の顔にハンカチが近づく。

思わず、ひ、と小さな悲鳴が漏れて、逃げ出そうと顔を逸らす、片手で頭を掴まれた。驚くほどの力だった。どこにこんな握力があるのだろうか。

強引に拭かれる。

「……俺は、慣れっこだからさ。別に、恨まれても、憎まれても、平気だけどね。……だから、どうぞ殺したければ殺してくれて結構。俺は死なないように、生きるために逃げたりするから」

目元を拭かれ、目尻も拭かれ、鼻も涙の通った跡も全部拭かれる。

「それは、……慰めてる、つもりですか」

いつでも殺したければ殺せば？

俺、平気だから。だから、憎んでもいいよ？

そう言っているのだ。背中を、押しているのだ。

馬鹿に、するな。

憎む相手なんかに慰められる気なんか、無い。

すると、アルファさんは、まるで罪の全てを許すかのような優しい、慈しみを持った笑みで、

「そうなるね」

頷いた。

脳内で、何かが切れる音を聞いた気がする。

怒りが爆発した。理性も吹き飛んだ。

動かなかった腕が怒りで煮えたぎる思考に突き動かされる。

拳が握られ腕が動く。

「ふ。ざッ」

けるな！！

と続くはずの口は、拳が目の前の男の頬を打つ音で、動きを止めた。

あっさりと、その顔が後方へと飛び、体も付随して飛んでいく。それでも、怒りは収まらない。

小石の群れを蹴飛ばすように立ち上がり、走る。

その飛んだ肉体の腹にブーツの底で思いつき踏みつけた。

鳩尾に入ったブーツの踵は、踏まれた男の口からくぐもった短い悲鳴と、息を吐き出させた。

「ぎッ、」^{死ね}黙れ。

^{死ね}踏みつける。

^{死ね}踏みつける。

^{死ね}踏みつける。

^{死ね}踏みつける。

^{死ね}踏みつける。

^{死ね}踏みつける。

「皆を、何故、殺したッ！！！！」

肉を打つ音が断続的に響き、火で揺れる影は二つ。片方は殴られ、もう片方は殴る。

影絵の世界は無機質に踊り、痛みも苦しみも悲しみも憎悪も殺意も決して映さない。

気がつくとき、シルベは怒りで眉間に皺を寄せ、柳眉を逆立て、歯を剥く中、泣いていた。焚き火の炎は、その般若の形相に光と影で起伏を生み、ぬるい水には光を与えた。

火は平等だった。暗闇も、殴る腕も、血の滾り煮える視界も何もかもが平等だった。

平等に、残酷な現実しか与えなかった。

ぜー、はーっ！

荒く息を吐く音と、肩を上下する音。殴打は終わったらしい。だが、それでも少女は胸倉を掴まれた男を睨む。

その顔は、瞼は、頬は腫れて。紫色の内出血が白い肌に痛ましく浮かぶ。唇の端は切れ血を流し、口内も血まみれで赤く、こめかみや、左目からも血を流している。

腹部は黒のＴシャツで隠れて見えないが全体が内出血や腫れを起こしている。また、鳩尾辺りが異様に腫れているのは、肋骨の何本かが折れているからだ。

息は絶え絶え、体のどこもかしこもおかしくなっている。

だが。

生理的な痙攣をピクピクと起こしながらも、その顔は、笑顔に変わる。

驚愕で動けなくなったシルベに、アルファの口が動く。

息を吐きながら、噎れたようなのを、ゆっくり使用するかのようにつ。

「ま、」

「ん」

「ぞ、」

「く」

「……？」

「　　っ！」

一瞬で、怒りが消え失せた。

その事実、シルベの顔が恐怖で歪む。

おかしい。

こんな事をされても、笑うなんて、おかしい。

やっぱり、どうかしてる。

そう気付くと、恐怖で腰が引け、さっきまでの怒りが急激に萎む。

次に生まれた感情は“恐怖”だけだった。

「ヒッ……」

胸倉を掴む手が自然と解け、その場にしりもちを付きながら、後退り。

「あっ……あ、あ、あ……」

掴んでいた手が離れた事で、自動的にアルファの体は上体を少し起こしたもののから、完全な仰向けになる。
すると、

「………なんだ、殴れるじゃん」

その体が唐突に起き上がった。

そして、

「ああっ……………あ？」

その体中であつた傷が、すっかり無くなっている。

口端の切れも、こめかみの傷も、顔全体の腫れも、紫色の内出血も、全てが無い。

は？

とシルベの心の中の恐怖もさつきまであつた怒りも何もかもが吹き飛ぶ。

何、これ。

そう、口は動いていただろうか。

目の前の青年、いや、化け物は、立ち上がる。体の調子を確認するように各部を動かすと、にっこり笑った。

「いくら治癒できても、痛み自体は多少は残るんだよね。よく分からないけど、どうも俺が治しているのは肉体の傷のみみたいでさあ。いやー、一度右足を引き千切られた時があつたけど、あの時は歩くだけでもしんどかつたっけ」

笑う顔は、焚き火の光に照らされ、陰影が印象を強める。

“笑顔”というものを芸術品に昇華させたような笑みの美しさに、狂気と異常が混同し、爆発的に恐怖が心を侵食する。

笑みに恐怖を覚えたのは、初めてだった。

「んー、意味解らないって顔してるね」

化け物が言う。音色は優しげだ。
全身に鳥肌が立った。

簡単に説明するとね？ その首が僅かに右に傾いた。白金の髪は、火に照らされて光り輝いた。

「……俺の体はさ、ちよつと異物が入り込んでいるんだよ」

自身の紅の瞳を指差す。その瞳は、発光していた。今更のように気付いた。指摘されないと気付けないほど、心が恐慌していた。暗闇に紅の筋が二つ走る。

そして、その目は、瞳孔が猫のように、アーモンド型になっていた。

獣の瞳孔だ。

「こつやって、自身の危機……ま、怪我を負うと勝手に発光してね」

美麗な顔立ちに、血よりも濃い紅で輝く、獣の瞳。

自分とは決定的に何かが違うものに対する、純粹な恐怖と、その、目が潰されそうなほど美しい紅の輝きに、圧倒的なまでの神々しさを感じた。

知っている。

この、自分では太刀打ちできないと直感で感じる恐怖と、自分の弱さを実感するような敬いの感情が何に対するものか、私は知っている。

異物
神様だ。

「異物の目なんだよ、これ。……異物の中でも覇者たる存在、龍の瞳でさ。」

全てを見通し、全てを睥睨し、何もかもを視線で平伏させる、

龍王グズイ。アイツは、エンペラークラウン覇王の王冠って言ってたつけ。

……ちよつと昔に色々あってね、両目を潰しちゃってさ。そしたら、俺の住んでた地域にいた龍がくれたよ」

割といいやつだったねアイツ。頭良かったし。

そう、懐かしむ口調で呟く化け物。

だが、頭の中の知識に引かかるものがあつた。

「そ、そ、それって……クラウンチップ異物刻印……禁呪、じゃ」

異物。本来の生態系から外れ、異常なまでの身体能力、肉体構造、説明不可能の力を所有した生命体。辺境の村等では神として祭られたりし、そのために奉る人々を異端者区分民と呼び白い目で見られる。

そして異物の肉体細胞や内臓器官、果ては脳には、驚異的な力
例えば人の何百倍もの治癒能力　が備わっており、それらを人
体に植えつける事で、その異物の能力を得るという方法。それが異
クラウンチップ物刻印。

だが、副作用も強く、たかが肉片の一ミリをクラウンチップ異物刻印に使用した
だけの者でも、ほとんどが数年の間に死亡している。そして、大抵
の場合は植えつけた時点で拒絶反応が発生し、運が良くて半身不随。
最悪の場合肉体の内側から爆発して肉を周囲に撒き散らし死亡。死
ぬ確率は約九十五パーセント。だから、大陸中で禁呪として扱われ
ている。それでも、手を出す人間は多いらしいが。

だが、目の前の化け物は平然そうに、

「ああ、そうだよ？」

と頷いた。やはり、笑みのまま。

そして、少し恥ずかしそうにはにかみながら、頬を掻く。自分の

過去を晒すのを恥らうように。

その、真っ白で、傷一つ無い頬を。

「俺さ、十一歳でこの目に鞍替えしたんだけどもね？ 目が勝手に神経と繋がるんだよ。それまでは、しばらくの間盲目の生活を送っていたんだけどね。それで、ようやく見えるようになったら、たったの一夜でさ」

両腕を大きく広げる。

「この、まあ大体十八かそこら辺の図体にまで成長してね。たぶんこの目の副次的効果なんだろうけど……そりゃもう、生きる世界が変わったよ。何しろ視力は精密に測ったら片目で二十以上あるし。音速の限界まで余裕で目が追いつくし。傷はほとんど五秒程度で治るし。身体能力、まあ臂力^{りよりよく}ってやつも、ガタイのいいオッサンの十倍はある」

でも、とその姿勢のままに笑みは告げる。

僅かに眉を八の字にし、困ったと言うように。

「俺、どうも異物に適正がかなりあったみたいでさー。というか、それどころか異物が入り込もうが副作用らしいものも無くてさあ……。うはっ、俺スゲー！ ……なんて喜ぶ暇も無く、気付いちやったんだ。」

成長^{……}しないんだわ、この体。体毛、髪とか髭は伸びる。けど、十一から十七までの六年間、一度も肉体に変化が無かった。

肌は老いもしないし日焼けもしない。外見的な筋肉量の変化は無し。背丈は伸びない。傷は、ほとんど全部が再生する。……まあ、心臓と脳みそはまだ穴を開けられたことが無いから、解らないけどね」

つまりさ？

「俺、 ちよっとおかしくなっちゃってるんだよ」

揺れた首は、紅いラインを二つ揺らし、車のバックライトのよう
に夜闇に浮かんだ。

“それはまるで悪夢のような”

夢だからと逃げるの？（後書き）

話の前後で確実にズレていると思われる部分を修正。すみませんで
した。

2011/12/26

“断罪者を制裁できるのは咎人のみ”

どこに咎人がいらして？

気がつくと、朝だった。

すぐ近くで、化け物、ではなくアルファさんがいた。

無表情に何かをしている。肉を焼いていた。周りには、茶色い毛と、少量ながら血が散乱している。……その焼いている身の大きさから察するに、野兎だろうか？

私は、いつの間にか寝袋に入っていた。着ていたはずのコートは綺麗に畳まれ置いてある。いつの間に寝たのだろうか。

もぞりと、体を起こす。

全然寝た気がしない。眠い。というか、体が重い。凄くダルい。音を聞いたのか、ばけも……アルファさんがこちらを向いた。その美しい、色彩感覚が狂いそうになるほどの紅色は太陽の光を取り込み、意志の灯る光を宿し、微笑みで僅かに細まる。

「うつす。……ダルそうだねー」

ケラケラ笑った。笑みに怖気立った。

気持ち悪い。死んでしまえばいいのに。

だが、挨拶はしようとおもった。化け物でも一応、一応は！人間だ。

僅かに頭を下げ、

「……おはようございます。化け……あるふあさん」

しまった。思わず化け物と呼んでしまいそうになった。やってしまった。だが、もう割りとどうでも良かった。

人間じゃないのだ。異物刻印を施して、身体が人間を超えている、化け物。

昨日の、あれだけ殴ったはずなのに平気そうに口を動かして笑った時点で、この男は私にとっての化け物だ。

化け物は、たはは、とおかしそうに笑う。

「別に化け物でも良いけどね。そんな感じの呼ばれ方、いつもだし」

「……」

本当に平気そうだった。

一体、何人を殺して、何人に憎まれているのだろうか。分かりたくも無かった。ただ死ねばいいとおもった。

殺せるのなら、私が殺したい。

「……さて、と。肉を焼いているんだけど、食べる？ それともちよつと奥にある泉で水浴びでもする？ ボディソープとシャンプーとタオルはあるけど。ああ、綺麗な水だったよ。うん、あの水はたぶん飲めるんじゃないかな」

指が示すのは、緑の生い茂る森。その奥に泉があるらしい。

確かに、そういえば昨日は色々ありすぎて体を洗ったりなどしていない。

「あー……じゃあ化け物さん、池で体を洗ってきます。見たら殴るんで」

そして、今日からこの男を化け物さんと呼ぶことにした。

さん付けする理由なんか、知らない。

知りたくも無い。

少し歩くと、なるほど確かに綺麗な泉があった。

底がハッキリ見える。小さな砂利石や、水草、小魚の群れが見えた。

水が沸いているのかな。

そうになると、どこかへ出て行ってるはずだ。どこかは解らないが、小さな流れがあるのも見えた。

服を脱いで近くの木の下に掛ける。下着も脱いで、大きいタオルも同じようにする。

均整の取れた肉体が姿を現した。

畑仕事をしているせいで、全体的に柔らかさと弾力が備えてある肉体。足も腰も腹回りも腕もしっかりと肉が削げ落とされ、その裸体はバランスよく痩せていた。シルベは少女なので、そういうのは気を使っていたらしい。肌は若さと元々の質が混じった乾燥などしていない、柔らかくきめ細かい艶肌。足は身長に見合って長く、毎日外に出るせいかな、しなやかさと女性特有の丸みがあり、細い。無論腕も同じだ。胸もしっかりと大きさがあって、それが動くことに柔らかそうに揺れた。

同性に羨ましがられそうなスタイルだが、残念無念また来年、シルベの周りは大人だらけ。褒められても、それが同性同年代のような羨望交じりではなく、若さに対する執念じみたものだったので、引き攣った笑みと謝辞しか述べられない。そんなだからか、あまり自分の肢体にも 太らないようにと気をつける位の気持ちはあるが あまり興味が無いらしい。

耳を覆う部分の髪を縛っていた、簡素な髪縛りを外して、その服の上に置いておく。

栗色の髪が、朝日を浴びて艶やかに光った。首を二、三度回すとそれにつられて髪も踊る。しなやかに、一本一本は独立して他の髪を邪魔しないようにサラサラと。

誰が見ても綺麗だと認める栗色の髪だった。

しかしシルベはそれをいつも通り、大した興味も無く見つめ、いい加減少し長くなったなあ、とか思いながら泉に身を入れた。

「冷た……」

ひんやりとした冷水が足先から踝^{くるぶし}までを覆い、僅かに体が震える。だが、まだ四月だ。外は陽気で充満している。それが緩衝材となつたおかげで更に足を進めることが出来た。

冬に水浴びをするよりマシだし。

冬は、村の人が作った湯船に水を運んで、火で温めで入った。確かに暖まって良かったが、相当に面倒だった。

夏は暑いから、近くの清流の川が面白かった。

冬は湯船で、秋は少し我慢して川で水浴び。春はぽかぽかしながら水浴びだ。

そういうわけで、慣れた手つきで水に沈めた体を、手で撫でるように拭^{ぬぐ}っていく。

と、そこで疑問に至った。

「……？」

それは、手の中にあるタオルと、ボディークリームとシャンプーである。

どう使うのだろうか……。

村にタオルはあった。体を拭いたりもしたからまあいつも通り使えばいいのだろう。だが、この小さなビニール製のパックに入った液体状の何かはなんだ？

ボディースープ。ソープが解らない。ボディーはつまり体だ。…

…体？ 体をどうしろと。まったく意味が解らない。

シャンプー。もはや何がなんだか解らない。

……。

パックを裏返してみる。そこには何やら小さな文字がたくさん並び、読めるには読めるが、カタカナで書かれたよく解らない物質っぽい名前が、何ミリグラムだとか書いてある。残念ながら用途等は書いてなかった。

「ふむ」

化け物さんはこれをどう使うのだろうか。流れで受け取ったが、正直使い方がまったく解らない。仕方なく、体を洗う作業に戻る。泉に顔を鎮めて、髪をゆっくりと撫でて、頭皮も指の腹で、ツツ、と動かしていく。息が苦しくなったところで顔を上げ、再度息を吸い込みまた顔を鎮める。

それを数回繰り返して、次に体の細かいところを洗っていく。

「お？」

体を洗いつつ暇つぶしに弄くっていたら、どうやらビニールに切れ込みが入っていて、切れるようだった。

……切って大丈夫だろうか。

中に入っているのは間違いなく液体だ。

それがこの泉に入り込み、そして草や肉眼では見えない微生物に被害を与え、それを食べる魚たちが死ぬような事があったら……。そう思う。つまりこれはヤバい。危険物質ではないのかと危惧だが、

面白そうですね……。

生まれて十五年、未知の物質との接触である。宇宙人並みに珍しいと思える物質だった。いや、この場合液体だろうか。ともかく、その未知の存在に目が輝いているのは事実だ。ええい、どうすれば迷う。どうすればいいのだろうか。……。

「ええい、面倒ですね」

考え込む内に面倒くさくなったので、結局切ってみることにした。それはボディースープだった。

一応、泉から右手を出してからパックを切った瞬間、

「わっ、わ、わぁ……どろっとしてますね」

思わず驚きと嬉々混じる声が出た。

右手の中に、透明などろりとした粘性の液体が絡みついていた。ネバネバはしていないが、粘り気があって、水のようにサラサラしていない。匂いが、花の甘い匂いのみを抽出したような香りで、少し作り物っぽさがあった。ただ悪い臭いではなかったのだよしとする。

ほー、と興味深げに見ていたシルベだが、その動きが、ピタ、と止まった。

あれ？ これ本当にどう使うのだ？

つまりそこだ。どう使えばいいのだコレ。液体で遊べばいいのか？
どうやって。ボディーを使えばいいのだろうか。だからどうやって。

……。

液体が右腕を伝い、ゆつくりとひじ辺りまで来た。

「あー……」

邪魔だと思い、その液体を拭う。拭うと腕の表皮に張り付くように伸ばされた。しまった！液体が粘性のある物質であると完全に失念！

化学製品、という、何だか悪いイメージしかない言葉が脳裏を過ぎる。

慌てて液体の伸ばされた部分を擦った。いつの間にか泡に変化していた。げえっ！恐ろしきかな化学製品！

もっと擦った。更に泡が増える。げげっ！

そしていつの間にかボディースープは 右腕全体を覆っていた。更に激しく擦ったために、他の場所にも掛かっていた。そこを焦りの混じる軽いパニック状態で擦ると更に泡が侵食していく。

「！？」 「！！」

もはや声にならない悲鳴をあげ、躍起になって体を手で拭う。しかし泡は落ちない。しかも泉に落ちた泡は溶けていくではないか！最悪だ！！さ、魚が！生物がッ！！

悲鳴ももはや上がらず、顔を真っ青になったシルベ。その擦る手を、一瞬止める。そして、

面倒くさっ。

そう思い、泉に身を沈めた。

じゃぼん、と気泡が出来、体中の泡が落ちていく。水の流れに沿って泡が流れていくのを、シルベはもはや無感動無表情な瞳で見ている。

体を上げる。ふう、と一息付いて、液体の混じった水が髪にかかっているような気もしたので、もう一度髪を洗った。

そうして、ハプニングもあつた水浴びを終え、大きなバスタオルで体の水気を拭く。

これから、どうしようか。

髪を拭き、乾かし、考える。

「……逃げ、れますよね」

キョロキョロと周りを見る。

あの川原とは、距離で言えば大体百メートルほど。足音も聞こえない。

逃げれる。

だが、

逃げて、どうするんでしょうか。

相手は化け物だ。長く帰らなければ、怪しむ。そしてここへ来て、逃げたのだと悟るだろう。そうしたら、どうせ化け物さんの事だ。

自分では解らないような方法で逃げ道を特定し、追いかけてくるだろう。

いくら畑仕事で足腰には自身があっても、それは同年齢の少女同士であつたならば、だ。ガタイの良い男性の十倍の膂力を持っていると豪語する化け物さんには、絶対に走っても勝てないだろう。

無理。

気付くと同時、絶望が心を染めた。

無理、なのだろうか。

諦めの感情。これから自分の身に何が起こるのか解らない、不透明で濁りきった未来への漠然とした不安。押し固められた焦燥感。

迷う。逃げるべきか、逃げずに帰るべきか。

逃げてどうするのだ？ 私には帰るべき家も人ももう既にいない。皆死んだのは明白な事実だ。嫌だ、受け入れたくない。あんなの幻覚だ。だったら確認しに行けばいいじゃないか。でも、でももしも本当に皆死んでいたら。いいや、憶測じゃなく、死んでいた。あの血肉の酷い臭い。臭かった。臭いと思った自分が酷く情けない。でも、それもしかしたら幻なのかもしれない。皆、私を探しているかもしれない。私が帰るのを待っているかもしれない。本当にそう？ 私は、待っていてくれる人がいる？ いや、いる。化け物が私を、何をするか解らない男に引き渡すために、待っている。ニコニコニコニコ、にこーっ、と笑いながら、待っている。最悪だ。私は、あんなの嫌だ。死んでしまえ。死んで腐れ。腐って消えてしまえ。だけど、でも。

でも、今の私じゃ無理なのだ。

『力』が無い。足りないとかではなく、無い。クラウンチップ異物刻印は嫌だった。あんな化け物のようになるのは嫌だった。だから、足りないのではなく、無い。

じゃあ、どうすればいいのだ？

力も無く、だから逃げても捕まる。最悪、殺されるかもしれない。怖い。銃口の冷たさを、一日経った今でも忘れられない。怖い。怖いのは嫌だ。

逃げたい。だけど、捕まって銃口を押し付けられるのも嫌だ。

どっちも嫌だ。

だけど、でも、じゃあ、そうだ、でも……そんな言葉が低回し、ぐるぐるぐるぐる、現実も回る、思考も回る。

そして、いつの間にか髪も体も乾いていて、思わず、ブルリ、と体が身震いし、そのため服を着た。

服を着ると、暖かみが残った服が体に触れ、体の震えは納まった。しかし、戻るか逃げるかの二択も、更に選択を迫られたという事だった。

……。

僅かに、ため息を吐いた。

「無理、ですよ」

どうせ、逃げられない。いくら考えようと、アレは人じゃない。

思考回路はまるで人じゃなく、行動する肉体は肋骨が折れようが速攻で再生していく。足止めに罫を仕掛けようと悠々と無視してくるだろう。

だったら、諦めよう。

もう、知らない。

二日後、自分がどうなってるのかは考えず、絶望に近い心境で、川原への、帰路に足を向けた。

いい感じに絶望してるなアレ。

使い捨てのボディソープとシャンプーの詰まった、小さな液体パ
ック二つと大きなタオル一枚に小さなタオル一枚を渡して、それを
受け取ったシルベを見送ってから、歩いていった方向を見つめなが
ら思う。

まあ、誰だつて似たような反応は寄越す。そして、俺を恨んだ人
間は、いい感じに絶望する。

希望も怒りも、何もかもを、自分では太刀打ちできない存在に破
壊される。そうしたら、簡単に人間は絶望する。

勝手に憎ませて勝手にその憎悪を完膚なきまでに恐怖でぶっ壊せ
ばそれでハイ終了。特に異常なもので破壊すれば更に効果は上昇。

だが、人間の心は結構簡単に回復する。絶望しようと、結局その
絶望も過去の産物となっていき、やがて情報としてしか意味を成さ
なくなる。

風化だ。

その風化具合は、どれだけ重い事実^①に絶望しているか、に比例す
るのだろうけど、今回はあと二日保てばいい。

ちよろい仕事だ。

野兎の肉を串に差したのを焼きながら、呟く。

「……このまま、二日すぎてくれればいいんだけどね」

嫌な予感というより、仕事にハプニングは付き物なので、警戒は
怠ってはいけないだろう。同じ仕事をやっていた奴が突然裏切った
り、仕事途中に歩いていたらいきなり爆弾を投げつけられたりもし
たことがある。どちらも致命傷を五秒で治して笑顔で立ち上がった
が。

このまま、逃げるかね。

シルベのことだ。

もし戻ってきたら、それはもう抵抗する気も無いということだろ

う。それなら良しだ。

昨日わざわざ怒らせた甲斐があった、という事になる。

あのまま燻った憎悪の感情でいられても良かったのだが、そうなるという反逆されるか分かったもんじゃない。それなら、わざと自身の感情を明確化してもらって、そしてその憎悪をへし折ればいい。そういう意味で、俺の目は非常に役に立つ。

何しろ、龍王の瞳なのだから。

紅色なのも珍しいだろうけど、それが自立発光したり、獣の瞳孔になったりした日には、異物だろうよ。

それに意外と力はあるようで、肋骨が折れたりしたり、顔面中を腫れだらけにしてくれた。おかげで治癒の効果もてきめん靨面。

案外予想通りに事が運んで、拍子抜けする部分もあったけど。ただ、

「出来れば、このまま一時の殺意で終わってくれるといいんだけどねえ……」

そうならない、つまり俺に一生を使っても復讐するとかいう輩になってほしくは無い。

人生長いだろうに、俺だけに使うとか馬鹿にしか見えない。それに、そんな輩が増えて、仕事に支障を来すなんて怒りを通り越して呆れる。

まあ、殺せばいいだけだろうけど。

銃弾が当たろうが肉体は完治するし、内臓（脳と心臓以外は実証済み）を潰されても治る。血が足りないと勝手に作られるし、肉体の欠損はやっぱり五秒ほどで再生する。そんな俺が、どうやって死ぬんだろうか。

だけど、いくら体を切り刻まれても死なないのだとすると、

「俺は、いつ死ぬのかねー」

正直、自分では年齢をたまに忘れるほどだ。だから、というわけでもないが、二十歳という解りやすい年齢を使っている。それを言い訳に酒を飲んでいるのは個人の趣味だからいい筈だ。タバコは吸わないけど、でも酒くらいいいじゃないかー！　好きなんですよー！！

不老不死、なのだろうか？　まだ心臓を潰された事も脳に風穴が開いたことも無いから解らない。そもそも、肉体的な成長や老いが無いだけで寿命があるのかも解らない。

全ては、一度死んでみないと駄目だ。
でも、心臓を潰されたり、首が切断されても死ななかったらどうしよう？

簡単なことだ。

「そつの、ときは、ひつとをー、こつろしてこつろして……」
僅かに、目を細める。

少年。君は何もかもを憎んで、絶望の中で生きる。

その憎悪の感情と、絶望の希望的観測をしない心境は、
必ず少年を最強にする。

だから少年。君に託そう。

最強になるための力、エンペラークラウン覇王の王冠を。

そして辿り着け、神の玉座に。

龍王グズイはそう言った。

そして、自分で自分の腹を引き裂き、その中で奴の肉体の結晶体である、三本の刀を俺に渡した。目を自分で決り、俺に渡した。

胃腸機能結晶体
筋肉繊維結晶体

喰龍、全てを溶かし吸収し、力にする刀を。

律龍、刀に圧倒的な膂力を内蔵し、常に微振動していて、触れただけで人がグチャグチャになる刀を。

神経物質結晶体

裁龍、俺の腕と同化して、俺の身体能力に刀、つまり龍が持った神経伝達速度を併合し利用できる刀を。

そして、あの龍が持っている、視線のみで人の精神を破壊できた瞳。

全て一つ一つが霸王の王冠だと、グズイは言った。

アイツは、俺に何を託したかったのか。

エンペラークラウン

そもそも、霸王の王冠ってなんだ。グズイの野郎、まさか厨二病だったとかじゃねえよな？ 邪気眼じゃねえんだから。いや、瞳は

深紅なわけだが。つか関係ないか。まあ、最初は比喻だと思っていたが、どうなのだろうか。異物刻印の中には、その超上の力を段

クラウンチップ

階的に分けて使用できるタイプもあるとか聞く。もしそうなら、俺も！？ 俺もそんなカッコいいのが使えるの！？ じゃあ何か？

アレか！ 目からビームってか！？ それとも腕をクロスにしたらその交点からビームでちゃうの！？ スゲー！！ それともそれとも！？ 宇宙から隕石呼び寄せてズドン！ ってか！？ うはあ！ それもいいな！

そんなこと出来たら俺、もう真正の化け物だな、と一人鼻息荒げて頷いた。でもそういうの、嫌いじゃない。だってカッコいいじゃない。銃も刀も持つてる俺からすると、そういうお子ちゃまっぽい最終兵器は嫌いではないのだ。もうちょっと贅沢言えばやっぱり腕を飛ばして殴るとかもいいよね！ あとはほら！ 合体とか！？

それにそれにイ？ 変身とかも絶対良いよな！！ カッコい

！！

閑話休題。完全に話が逸れた気がする。

……ともかく、だ。グズイはそれを俺に渡して、何をしてほしかったのか。

解らない。

だけど、俺はアイツに背を押されなくとも、決めたのだ。

「……人類の末期を見るだけだよ」

銃が無くなったら、刀で挑む。それも無くなったら肉体だけでもいい。無論目からビームを出したっていいのだ。

俺は、人を殺して、人類を撲滅したいんだから。

充分に焼けた所で、串を別の場所に刺す。そして、火を消した。

「……ともかく、仕事だ仕事」

はあやれやれとため息を吐いた。その場に寝転ぶ。

空は雲がまばらに浮かぶ晴天。お日様が眩しく元気そうだ。

人の送迎ねえ。

ついでに殺人も。こっちが俺の本分な訳だが。

「……」

川の流れる静かな音。森の風に吹かれて鳴るざわめき。それくらいしか音がしない。

音はしない。

だが、

「……どーも、クサイんだよな」

おかしい。

何がと問われると、あの村の住人達だ。

あの村の住人。

アイツ等、何で銃なんか持ってたんだ？

普通の村に、サブマシンガンに、グレネードランチャーや手榴弾、アサルトライフルなんかあつてたまるか。

何かがおかしい。今まで見た村に、敵意をくれることはあっても、銃弾を寄越す奴らなんかいなかった。

銃は、決して安い代物じゃない。銃弾はクソ安いが、銃は手にする人間自体が少ないはずだ。まだ、世界はそこまで腐ってはいない。平和的解決を望もうと口上手になり饒舌になり、相手の揚げ足ばかりを取る事を考えて、最後の手段として暴力に訴えている世界だ。

そりゃ軍は銃器類は持っているし、警察も同じだ。だが、ただの平和な村人がそんなものを持ち運ぶなんて、聞いたことが無い

田畑を耕していた奴らが、一瞬で銃を持ち運びやがった。

あの村に、十歳以下の子供がいなかったのも怪しい。全員が三十歳越えの大人達ばかりだ。なるほど、道理でシルベが懇切丁寧な性格をしていると思った。年上相手に敬語を言うのは、これが理由か。何しろあれだけ蹴って殴った相手にも敬語を使うのだから。

あれだけキレるくらいには、シルベは村の住人を愛していた、という事になる。何しろ一回蹴ったり殴ったりするたびに『死ぬ』の一言だったのだから。

となると、村の住人は、シルベに対しては結構優しく接して、大事にしていたという事か。割と言葉遣いも綺麗で、教育も成されているようで、だから喋りに知性がある。人に素直に従うのも、ちゃんとしつけが成されているんだろう。

何がしたかったんだ？

猪は口ぶりから察するに結構昔からあの牢の中っぱいし、それならわざわざ、大事にしているらしいシルベを餌にする必要が無い。

そもそも、ああいう小さな村というのは子供を大事にする。ならば、やはりシルベが餌となる理由が思いつかない。

子供のいない村。銃器を所持する村人達。唯一子供だったのに、何故か供物となった娘。

どこにも当たり前の常識が無い。村のしきたりと言われればそれだけだが、だがやはり違和感は募る。

意味が解らない。

「なんだこの依頼……ワーストスリーに入る面倒くささだな」

だが、物的証拠は無い。

そもそも、俺が疑問に思っていることは俺の憶測が勝手に出した結論だ。

全て、可能性の話だ。

「可能性、ねえ……」

げんなりする。

そういう言葉は嫌いだ。そんなものは楽観的観測、希望的観測でしかない。

世の中絶望一色で、不幸も幸せも一瞬の紛い物だ。人生に刺激をもたらそうと、そんなものは風化する。

可能性、もしかしたら、もしも、……そんな言葉で、未来も過去も現在も変わるわけが無い。

もしもあの時、なんて悔やんでも世界は変わらないし、もしかしたら明日は、なんて言葉で自分を変えることは出来ない。

人間は、言葉一つで自分の本質を変えることなんて出来ない。生まれ持った本質なんて存在しないし、だから、変えられるのは、生み出せるのは、自分を育てた親だけだ。

人格形成にもっとも重要なのは、俺は、幼少期に受ける親からの

感情の全てだと思う。

あれが好きだ。好意 あれは駄目だ。嫌悪 あれは面白いぞ。嬉々 あれは良い。興奮 あれはウザイ。憎悪 あんな奴がいるから。怒り アイツのせいで。嫉妬

そんな、感情の唾棄がなければ、人の心の大本は作られない。

それが無けりや、アイデンティティこころなんぞ得られない。

それが無けりや、何もかもを捻じ曲げた視界で生きる事になる。

俺みたいに。

親父は、人肉嗜好家 カニバリズムだった。

母さんは、だから喰われた。人の肉が大好きな親父の何もかもが母さんは大好きだった。だから喜んで親父に撃たれたし、喜んで自分の腕を切り落としても見せた。それが俺の常識だった。愛し合う二人は、胃の中で溶け、腸で吸収され、血肉となるのが普通だと、七歳になって周りの世界を見れるようになるまで思っていた。

そして、俺の家庭に並ぶ肉は、全て人の肉だった。荒廃街で殺しは常識。だからこそ、親父はあそこを好んだ。

だから、俺は人の肉を喰う事に何も違和感なんて感じない。だって、それが親の常識。好きという感情だったのだから。

今では、それが異常だったことは解る。ただ、喰う事自体に忌避も嫌悪も感じない。慣れてしまっている。

不味い肉。だけど、喰えば命に変わった。人を喰らって人として生きる。それが素晴らしいと親父は言った。意味が解らなかったが取り合えず頷いて同じ肉を食った俺は、そういうものなんだと思った。

だから、俺はあの時も喰った。

母さんを、親父を。

死人の、血抜きも何もされていない無消毒の汚い肉をナイフで引

き裂き丁度良い大きさにした。

喰らった。

ぶよぶよした肉塊を大きく開いた口で噛み、滴り口の中に充滿する血の塩みたいな鉄みたいなく解らない味に吐き気を感じながらも顎を動かして咀嚼する事は止めず命を延ばすために嚥下し初めて食べた生肉がずると喉を滑り落ちる不慣れな感覚に吐き気で全身に鳥肌で立たせながらもその血を飲みその内蔵を噛み潰しその筋肉を引きちぎりその肉を舌上で転がし脂肪を舌で舐めとつ、

誰かの肉が、暴れた気がする。

ナゼ、タベタ。

「おつ、ええええ、ぐボオ、ア、ア。……ぎッ、が……あああ、あああああああああああ」

そんな、本当に人の出せるのかと言う程醜い音が聞こえたのは、体や頭を洗い終え、拭いて服を着て、戻ってきた時だ。

驚きながらも視界に入ってくるのは、アルファさん化け物が蹲って、吐瀉物を大量に喉から吐き出している光景だった。

胃の中の物が、消化されてしまつて無いのか、出てくるのは透明な胃液だ。

キラキラと、その液体は光を浴びて輝いた。汚いものは、太陽の下では美しい液体になった。

その表情は、初めて見る。苦渋の、苦虫を噛み潰すような表情。何も言えずに呆然としてしていると、化け物は、

「喰うしか、無かつたじゃんかよおお……どうしろって、言うんだよお………！」

ようやく吐瀉物を吐き出すのを止めて、崩した正座のような姿勢で空を仰ぎ見た。首は九十度に曲がり、空を一直線に目は見る。

その紅色は、涙で潤み、酷く人間味を帯びていた。

ちっぽけな、ただの子供が、そこにいた。

「親父い……母さん………俺、悪いのかあ………
？ 死にたくないからって、殺して、そして食べたのは、駄目なのか……？ なあ……なあ、どうなんだよ………」

さっきの汚い液体とは違う、純正の感情の物質が頬を滑り落ちる。やはり太陽は平等に光を与え、その液体を輝かした。

表情は、何も浮かんでいない。さっきの苦悶も、何も無い。ただ空を震える瞳で見つめ、口から懺悔のような言葉を言い続ける。

「俺は、化け物だよ………人の肉を食べて、生きてる、化け物だよ………。好きでもないのに食べて……俺は、本当に、どうしようも無く……怪物、だよ」

やめろ。

それ以上言うな。

心が、そう低く唸る。
聞きたくない。

「どうしろつつうんだ……俺は、もう生きるしかない。どうやって
も、死ねない……」

貴方は、私が、憎むべき対象、だろ？

「死にたくない俺は、生きるしかなくなった……なのに、さあ……
どうして殺すんだ？ 食べるわけでもないのに」

それが、何故泣く。
何故懺悔する。

「……なあ、グズイ。お前は、どうしてさ……俺に、目を、武器を、
与えたんだ……？」

ふざ、けるな。

「嫌なんだよ……」

やめろ。

「俺は、死にたくなんか、無いんだよ……」

“キレル”というスイッチが入った。

「ふざけないでくださいよ……！！」

足は速く、震えながらも動いた。

その声に、化け物がこちらを見た。最初は、え、と目を丸くして
呟いて、次に、ああ、と僅かに頷き、最後におかしそうに笑った。
目尻には涙が溜まり、笑みで細まった目尻のせいで、頬を滑り落
ちた。

美しいモノは、何をやっても美しい。

その頬が涙を流れようと芸術作品になるし、懺悔すら神聖なもの
になる。

うぜえ。

反吐が出る。

足を早歩きにさせ、化け物の前に立つ。

「……？」

小首をかしげ笑うその姿は、まるで親愛する人が死んで、それで
も泣かないようにしようと踏ん張る子供が、必死に笑っているよう
で、異常なまでに涙が似合っていた。
もう一度思う。

うぜえ。化け物が泣くな。

だから、感情に素直に従ってみた。

右足を上げる。スカートの中が見えるとかは気にせず、ただ、感
情のままに動こう。

そのまま、ブーツの厚底を、
思いっきり化け物の顔にぶつけ
た。

「　　っ　　いいー!？」

驚きの声が聞こえ、そして吹っ飛んでいく。
それを苛立ち募る目で睨んだ私は、広まった距離を歩いて縮める。
一步。

「馬鹿にしないでください」

二歩。

「化け物さん。貴方、怪物でしょう？ 人を殺すのに何もしがらみ
なんか持つちゃいない、怪物でしょう？」

三步。目の前にいる、よろよろと体を上げた怪物の腹を蹴る。

「だつたら！」

蹴る。腹を押さえ、下がった頭をまた蹴る。

「そのまま！」

後ろへと飛ぶ頭を見ながら、腹を踏む。くぐもった、かえるの鳴
き声のような悲鳴が聞こえた。

「化け物で、いてくださいよ……！！」

じゃないと。

「私のほうが、おかしくなるじゃないですか……ッ！」

怒れる足は風を切る音で吼える。

「人間なんかになるなア！」

右足が走り、その顎を的確に打ち据えた足は一瞬でその胸へと落ちる。

「ちっぽけな人間みたく、泣くなっ！」

その胸骨を踏みにじり、心臓すら潰す勢いで踏む。踏む。踏む！

「貴方、どれだけ自分が悪い事をして、それで恨まれてるかわからないんですか！？ 慣れっこ？！ だったら！ だったら！！」

蹴ったことで生まれた傷の全てが癒える。だが、蹴る。
繰り返す。

鈍い音は断続的に響き、そのたびに低い悲鳴が小さく漏れた。

「あなたは、私にとっての、永久に憎まれるべき対象であり続けるべきだ……！！ 刺される覚悟を持つべきだっ！」

膝立ちになり、呻くその顔を殴る。砂利にぶつかる体の、胸倉を掴んで寄せる。また殴る。

「それが貴方の義務だ」

拳は小さい。力も貧弱だ。

でも、殴る。痛ませたいとかそんなじゃなくて、殴らないといけない。

この男を、化け物にしないといけない！ 人間なんかにはいけない！

そうしないと、私が狂ってしまう。何を憎めばいいのか解らなく

なる。

だから殴る。

「人に憎まれる対象の、当然の義務だッ！」

その表情は、苦しいと告げる。目を強く閉じ、眉を歪めて歯を噛み合わせる。

いい気味だと思い、再度殴る。口から血が吐き出た。もっと苦しめ。苦しんで、村の皆の苦しみを味わえ。

「そして、憎む人間は、憎んだ対象に、復讐する権利が存在する……！！！」

化け物さんは、そうやって、人に恨まれてきたんでしょう？

だったら、もっと殴っていい筈だ。

怒っていい筈だ。

恨み憎みの代弁者になっても、いい筈だ。

「だからッ！」

そう！ 代弁者！

「貴方をッ」

自らの殺意を！！ この化け物を憎んだ人々の殺意を！

「私はア！！！」

全て、私が ……！！

「一生許さない　ッ！！！！！」

肉薄する。その目を穿らん勢いで、至近距離で睨む。

「許さず、いつまでも馬鹿にし！

卑下し！

蹴り！

殴り！

憎み！

必ず！　必ず！

必ず殺します！！」

そう、いつまでも。

いつまでも？

自分の言葉に気付いた瞬間、自分の心に、ストンと腑に落ちるような感触があった。

そうだ。

そうだ。そうすればいいじゃないか。そうですよ。どうせあと数日したらあの男のところへ行くんだし、そうするくらいなら。

何もかもを失った私の、生きがいが閃いてしまった。

一瞬で怒りの感情が吹き飛び、次に生まれたのは　やる気だ。

口が自然と、言葉を生んだ。

その口は、笑みを作っていた。

充実感と、自分に対する満足感で、笑みが出来たのだ。

「……決めました」

「……何を」

化け物さんが、口端から血を流しながら、傷の癒えた、いつもの秀麗な顔で、横目にこちらを見る。

その顔が美形なのが腹が立ったのでもう一発、笑顔で殴っておいて、胸倉を掴んだ手を放す。

どさっ、とその体が倒れ、殴られた頬を押さえながら上体を起こした。眉間に、痛みで歪んだ眉が皺を作っていた。

それを見て、うん、と頷く。

両手の拳を握り、言った。

「私、貴方に制裁を加える人間になります。だから、一生貴方に付いていきます」

“断罪者を制裁できるのは咎人のみ”

どこに咎人がいらして？（後書き）

誤字脱字を修正

2012/1/2

“誰も彼もが妄想癖”

望んだ願望は叶いますか？

あ？

「ええ、そうですよ！ 私、その権利がありますよね！」

あ？

ちよつと待て。

「何しろ？ 貴方に全部破壊されたわけですし？」

おいおいおいおい。

「つまりこれは正当な復讐です」

……。

「よし、少し整理しようか。うん。えっと？ 何？ お前、俺に付いてくるって？」

「はい」

「よしよし。んで？ 付いてきて、俺に制裁を加えると？」

「はい。まあ、暴行を加えるとかでしょうかね。まあ、私平和主義者なので、そこまで暴力に頼りたくはないのですが」

DSに何覚醒しちゃってんの？

「う、うん、そうか。へえ。……で？」

「はい？」

「いや、あのさ。俺、君を市長に預けたら金貰ってハイサヨナラなんだけど」

「はあ？ そんなの知りませんよ。ていうか、そんなことするつもりなら逃げますが」

ジト目で睨まれる意味が解らない。

「いや、無理だろ。俺は、仕事で君を市長のところまで連れて行くの。ね？ し・ご・と。綺麗に言えばお・し・ご・と。」

だから、引き渡したら、俺はどこか違う街に行くか、あの街で仕事を探す。君の処遇なんか知らん。そもそも、付いてくるってあのね、俺の仕事はどうなるのさ？ そこらへん、解ってる？」

聞くと、ふむ、と小さく呟き、その手を顎に添えた。

そして、少しの沈黙。

シルベは顎から手を外して、

「じゃあ、依頼放棄しちゃえばいいんじゃないですか？」

肩を竦めた。

「あー……」やべえ、コイツ譲るつもりゼロだ。

完全にその気になっている。俺の依頼ホントどうなるんだよ……。思わずこめかみを人差し指で強く揉む。鋭い痛みが走るが、そのおかげでどうにか思考をクリアに出来た。パチパチと何回か瞬きをして、頬を両手で叩いた。

よしっ、と気合を入れることにする。

目の前では、いつの間にか俺の焼いた野兎を喰っているドS女、もといシルベ。美味しそうに食べている。にこにこと、まあ、美味しそうに。俺の悩みや、自分があと二日後には市長に引き渡されるなど知らんぷりで。

きつとテンションがハイになって、色々と考える気が無いんだろ
う。

それを見て、言葉を投げかける。

「あのさあ……俺、街に着いたら殴つてでも君を市長のところに持
つていくつもりなんだけどさあ」

パクパクと食べていた口を止め、こちらを見るアメジストの輝き。
続ける。

「君さ、……マジなの？」

「ええ、そうですけど。何しろ、帰る場所も無いですし。あの男の
ところへ行くなんて、嫌なんで」

……なんだろう、この、言葉に言い表しがたい感情。というか、
否定の意。

確実にロジックを無視した、根拠も何も無い言い分に、言い表し
がたい違和感がヒシヒシと押し寄せる。

軽い眩暈を覚えて、眉間に手を添えてその場にしゃがんでいると、

「まあ、化け物さんが色々どうにかしてくれますよね？」

コノオンナ、オレニゼンブナゲダシヤガッタ。

「うう……うあああ」

眩暈が酷くなった気がして、その場で唸った。
考える。

シルベはマジだ。マジで俺についてくるつもりだ。アレだ、『本気』と書いて『マジ』と呼ぶ血気盛んな人間に部類できる、アレだ。勘弁してほしいと素直に思う。俺何？ あれか？ 毎日こいつに制裁とかの名目で殴られる旅をしないと駄目なのか？ ホントに勘弁してくれ……Mじゃねえんだよ俺。

しかも自分の境遇が二日後には市長に引き渡され、その後は俺の干渉しない、アイツ自身の問題になるというのに、それも俺にほっぽってきた。最悪だ。俺にどうしろと。

最悪の結果になった。こうならないようにと、出来るだけ一時の殺意で接してくれるように対応してきたはずなのに、ミスった。

やっちまった！！

「あー、あああー、あ　、あ　　」

声を出して、とにかくぐちゃぐちゃしている脳内をすっきりさせようと思う。

そして、いい加減面倒くさくなったので決めた。

無かったことにしちゃえ

うん。これが最も簡単な解決方法だよな。
そう思うと、安心感から自然と笑みが生まれた。よしよし、と頷いていると。

「化け物さん。食べないんですか？　じゃあ私貰っておきますね」

ハッ、と顔を上げると、いつの間にか俺の分の肉まで喰われている。既に半分喰われていた。

おのれえ、と軽く苛立つが、その美味しそうに食べる顔を見ていたら、一瞬いやな考えに囚われた。

いくら無視して無かった事にしようと、目の前には現実が待ち受けていたのであった。

その現実の、昨日とは少し違う態度に違和感が募った。

「あー……。あのさ」

「？　なんですか」

「いや……。なんつーか。昨日と態度っていうか、性格、違うかい？」

「はあ……。いや、まあ、元からこんなですけど」

キョトンと目を丸くして、シルベは続ける。

「色々、化け物さんを憎んだり恨んだりしてますけどね。まあ、その感情をいまは方向転換しているんです」

「何に？」

「義務に、ですよ。いつか化け物さんを殺す、義務です」

えっへん、とでも言わんばかりに誇らしげに胸を張るシルベ。胸を張るべきシーンではないと思う。殺人予告しておいてそんな風にされてもねえ。

へえ、と思わず笑った。いつもの笑みが灯る。

それを見たシルベが少し嫌そうに眉を歪めたが気にしない。

俺を殺すときたか。

くつくつと、笑い声上がる。

「それがどうして憎悪の感情から変化するのさ」

シルベが、俺の目を見る。覗き込むように、じつくりと、でも熱っぽくなく平淡に。

知っている目だった。

恨みや憎しみ、殺意が爆発し終わり、次のフェーズに移行している。

冷めた憎悪とでも言えいいのか。子供の癪癪が、大人になるにつれ、冷酷な刃物のような言葉となるような変化。

それが、いまシルベの瞳に感じられた。

子供の怒りまかせの言葉よりも、恐ろしい言葉を生み出す知性と理性と殺意を兼ね備えた思考。

そんなものが、シルベの中に生み出されているような気がした。

シルベが俺の目を覗き見、俺がその瞳を見て、そうして僅かな時間が経ってから、

「私は、貴方を恨み憎み殺したいと願った人々の代弁者になりたいんです。ええ、私も当事者ですからね。ですから、これは正当な権利でしょう？」

憎い相手を殺したいと願う。

嫌いな相手に死ねと思う。

ね？ 普通でしょ？ 私はそれに、素直になろうと思うだけです
よ」

言ってから、また肉を食む。

その顔には、食物に捧げる笑みがあつた。

にこにこにんまあーにこつ。笑みは嬉しそうに口元を綻ばせ、目を弓にする。

確かに、何もおかしくない。狂ってもいない。純粹な感情の羅列に従った結果が、俺を殺すという単純明快な願望になっただけだ。だけど。

素直すぎて、それが一巡して狂氣気違いになっている。

壊れたのか？ この女。

昨日あれほどキレ、朝はあれほど絶望し、そしてそれを忘れたかのようにけろつと俺に付いていくという。

楽しいと思えば笑う。怒ったなら睨む。殺したければ腕を動かして足を振るう。

それは、例えば小さな子供がカマキリやセミの足をもぎ、ジタバタともがき苦しむ虫を眺め、楽しそうに醜悪な笑顔を浮かべると同じだ。

今のシルベは、純粹無二の子供の精神だ。

退行、だろうか。いや、違う。もし退行ならばあの言葉の、もつともらしい殺意の言い訳はなんだ？ あんなものが子供の精神で言えるわけが無い。

子供にだって外聞があるし、だから隠し事をする。ならば、嫌いな相手に死ねと願うなんて、言えるわけが無い。子供だろうと大人だろうとそうだが、嫌な相手に『嫌い』だなんて言う奴はまずいな

い。そうやって言うことの素直さがもたらす不味さに気付いて、ね
ちねちと影で悪口を言うのが常道だ。

だがそれをしない。

そう　それをしない事が意味する事実　　気付いた瞬間、俺
の心には憐憫の感情が生まれた。

「……可哀想に……」

思わず、呟いた。シルベが反応し、こちらを見る。怪訝そうに眉
をひそめた表情は、年に似合わず大人っぽかった。

続けると促された気がするので、シルベに向かって言う。

「お前、可哀想だよ」

「は？　何がですか？　……もしかして、自分の行った事を棚に上
げて、そんなことを言っているんですか？　事の発端は、誰のせい
だと」

瞼を僅かに閉じ、すっ、と眼光が鋭くなる。やはり、冷たい殺意
だ。

いや違うよ、と俺は首を横に振った。

「俺なんかをさ、殺すだなんて決める奴は、ホント可哀想だよ」

どろりと、俺を見る瞳に濃密な殺意が溜まった。溢れそうになる
殺意は、言葉となって低い唸りを耳に伝える。

「……全部、貴方のせいじゃないですか……！　それを、棚に上げ
るつもりですか？　貴方は、神様にでもなったつもりですか？　自
分の過去の懺悔一つで、泣くような人間が」

的確な言葉。冷静に怒り、ゆつくりと殺意を全身に漲^{みなぎ}らせる睨みの表情。子供^{キッドフレイヤー}の大人、そんな言葉が思いついた。

薄い笑みを顔に張り付けながら、違う違う、と首を横に振る。背中を虚空に預けるように後ろへ傾け、両手を腰の後ろで地面に付ける。

僅かに見下ろすような視線で、

「……続けるけどさ。一時の感情で殺意を抱くのではなく、シルベみたいに大義名分を掲げ、それを心の支えに俺を殺すまで動くのを止めない、死のうと構わず殺すとか、そういうレベルの精神の構えをする生きた死者^{リビングデッド}みたいな奴は、本当に可哀想だよ」

解らないか？

「自分の一生、俺のためだけに酷使するって、そう言ってるんだよシルベは。可哀想に。君の人生、もうメチャクチャさ。可愛いのに樂をするための夫を作れず、日々を楽しくするための友も作らず、人が人らしくあるための最低限の幸せすら放棄して、俺を殺そうと一人必死に体を動かす。俺のせいで苦しみの中で生き、復讐が、願望がようやく叶っても、結局その後に残るのは崩壊して何にも無い人生だけ」

薄い笑みの口角が、ゆつくりと上がっていく。

嘲笑に近い表情は勝手に、でも本心を言った。

「バカな決意したねえ」

嘲笑う。

ケラケラケラケラ。

「……黙ってください。私の決意も願望も、私のものです。貴方な
んかには、蹂躪じゅうりゅうさせません」

手ごろな石を投げられる。首を振って避けた。頭に当たりそうな
ものは手で掴んだ。

行動は子供そのものだが、言う言葉ははっきりと芯を持って力を
秘めていた。

だが、俺の口はそれでも止まらない。

知らず知らずの内に俺は 面白がっていた。
これだ。

俺は、人の願いや幸福や不幸を自分の手でメチャクチャにする、
この時この瞬間が最高に楽しくて堪らない。

そして、この、他者の心を蹂躪する俺の狂樂趣味。それが俺のあ
だ名の所以だ。

他者の幸福を笑顔で破壊し、他者の不幸を笑顔で遊び、もてあそ他者の決
意も憎悪も何もかもを笑顔で蹂躪する、金さえあればいくらでも人
を殺すお人形。

“笑う蹂躪人形”ナイトメア”。

それは、悪夢に相応しい言葉と暴力の嵐だ。
人を憎み恨む俺は、全人類を殺したいと願うくらいには人が大嫌
いだ。

そして、嫌いな相手に死ねと思うのは当たり前前の精神機構。
心も肉体も殺して踏み潰して破壊して蹂躪してぐちゃぐちゃの挽ミ
肉ンチにしてやる。

待ってろよ全人類。

いつか必ず、人を広い定義で“殺す”俺が、きつと全滅してやるから。

「なあシルベ？　俺を殺して、その後の人生で幸福を掴めるだなんて思っ
なよ？」

シルベの顔が、僅かに震えた。
それを見て、更に笑みが深まって、口は更に饒舌になる。

「シルベの人生は、これからずっと暗闇さ。生きる価値を俺だけで消費する人生を歩む君が、俺を殺すこと以外で生きる価値を得られるだなんて、アホな希望は持っちゃいないよなあ？」

ある意味、俺と同じさ。

「全人類を殺すまで動きを止めない俺と、俺を殺すまで動きを止めないシルベ……俺も君も、同じさ。復讐や私怨、酷く凍えて押し固まった殺意に駆られ動き、絶望の中で人生を生きる」

「……違います。私と、貴方は、違う。私は確かに、復讐心を持っています。ですが、貴方は、ただの殺人鬼だ。快樂殺人者だ」

感情を押し殺し、拳を強く握って振るわせるシルベ。怒りを堪え、必死に言葉を喉から引き絞り、出している。

その必死さが見え見えな時点で、俺に負けている。

「シルベの居場所を奪ったのは俺だけどさ、それでも、君にはまだ幾らでも生きる方法だってあるんだぜ？　なんなら、コネを使って働き先と寝る場所くらい準備してやろうか？　まあ、依頼が達成されなかったら、になるけどな」

それでも？ それでも君は俺を殺したいの？

シルベは無言で、ただ俯く。下唇を僅かに噛み、俺の甘言を遮るように。

蹂躪の言葉は嵐となって、他者を傷つけるためだけの言葉を並び立てる。

ロジックも過去の自らの言葉すら無視して、ただの殺傷力を秘めた言葉に。

「人を殺すの、大変だぜ？ 俺の生まれは人殺しが常識の世界だったから当たり前に人を殺せるけどもね。それでも、俺は親父を殺すまでは殺人を犯せなかった。人間、一番大事だった人を殺すと、殺人なんてもうどうでもよくなるんだよな。吹っ切れてしまうのさ。だ、け、どお？ シルベ、お前の大事な人は俺が全て奪ってやったぜ？ 俺を殺すっていう意味で大事な人なら、まあ俺が残るけどさ。でも、俺を殺せるのか？ 銃を握っただけで震えた君が、俺を殺せるのか？」

だって君さあ。

「トラウマなんだろ？ 銃を握るの」

「ッ！」

シルベの表情が、目を大きく見開き驚愕のものになる。

その反応だけで充分な確証があるよねえ。

哄笑が生まれた。

「ははっ！ 武器もなしに人を殺すなんて、面白いことを言うねえシルベは。いやいや、それとも、俺の心を殺したいのかな？ 残念

「ただ、俺の心はシルベなんかじゃ殺せない。修羅も地獄も、少なくとも俺と似たレベルのを味わっていないシルベなんかには、絶対に殺せない」

「……皆を全員殺しておいて、まだ、言いますか……!!」

「ああ、言うよ？　だって、シルベはあれじゃん？　弱いじゃん？　弱者であれ強者であれ関係無く徹底的に叩き潰してこそその蹂躞だ。それに弱いんなら、手を繋げばいいのにな？　それもせずに俺を殺すだなんて、はッ、笑えるよホント」

「ッ!!　その繋げるはずの手を持った皆を殺したのは、どこのだれですか！」

「あー、悪い悪い。あんな些細な事、完全に忘れてた。殺人が常習化するのも考えもんだねー」

おかしそうに言ったら、シルベは唐突に立ち上がった。表情は怒りで染まって、拳は強く握られている。

「貴方って人はア……!!」

「そう怒るな怒るな。……まあ、確かに、人によつては俺の修羅も地獄も、その程度、って思つかもしれない。だけど、さあ。それをシルベは言えないよねえ？　だって、人の死体を見て気絶できちゃうんだもんねえ？　あそこで眉一つ動かさなかったら、そりゃ俺以^{イコパス}上の化け物さ。俺でも臭い程度には思うし顔を顰める。だけどシルベは、恥も外聞も無く悲鳴を上げて気絶しちゃったもんねえ？」

「……当たり前です。それが、普通の、反応、です」

「おいおい、俺の言った言葉、忘れたのか？ 俺を“殺す”つもりなら、俺と同レベルの修羅や地獄を味わってみろって」

「そんなの、貴方の価値観です。私は、私の価値観で、貴方を殺せる境地に立って見せます……！」

「……じゃあ、シルベの価値観に合わせて話すけどな？」

死体を見て気絶、もしくは悲鳴をあげるのが、シルベの言う“普通”だとして、だ。“普通”？ シルベさ、計る定規、間違えてるよ。俺が“普通”なわけが無い。“普通”だったら、死体を見て気絶するか悲鳴を上げるはずなのに、そんなもの上げない俺が、“普通”なわけが無いだろ？ 俺はシルベの価値観に於いて、異常なんだよ。以下でも以上でもなく、異常だ。それに、“普通”の価値観で挑むのかい？ 無理に決まってる。異常は、普通が通用しないから異常なんだよ。それが解ってない時点で、シルベは俺を殺せない。絶対にね」

「……っ」

言葉に詰まるシルベを見て、更に笑みが濃くなった。

だが、まだ止めない。

ねえ？ と口は動いた。

「シルベさ、人の肉を食べた事がある？ 同属を食べる不快感を知ってる？ その不快感すら薄れていく心の恐ろしさを知っている？」

解らないでしょ？

「人の肉を食べるのが大好きな親父を持った子供の精神が、どれだ

け狂ってしまうか解る？」

解らないでしょ？

「愛し合う二人は喰らい喰られることで愛情を確かめ合うんだんておかしい常識を持った子供の精神が解る？」

解らないでしょ？

「緑の濃い自然に豊かな森を見ると焼き払いたくなるこの嫉妬心が、あんな緑だらけの幸せそうな村で生きていたシルベに解る？」

解らないでしょ？

「友人にナイフの切っ先を向けられて、唾を吐きながら『お前なんか友達じゃない』なんて言われた時の気持ち、解る？」

解らないでしょ？

「幼馴染がにつこり笑いながら俺を殺そうと迫ってきたときの絶望感が解る？」

解らないでしょ？

「親父が狂っていると理解したときの悲しみが解る？」

解らないでしょ？

だって君、

「 幸せだったんだもんねえ？」

気がつくと、笑みの口調はナイフになっていた。切り刻み、人の心に土足で踏み入り荒らす、最悪悪夢の言葉の羅列。

あー、やべえ。

……
楽しくて涙が出てきた。

ケラケラ笑い、細まる目尻に涙を溜めながら、言う。

「もう一度言わせて貰うけどね」

くすくすくすくす。

「バカな決意を、本当にしたよねえ」

ケラケラケラケラ。

小さな笑い声は、川の清流によって流されていく。

“ 誰も彼もが妄想癖 ”

望んだ願望は叶いますか？（後書き）

カニバリズムやサイコパスなんかの当て字ですがアレ、割と間違っています。正確な日本語訳ではないので、ただそういった意味の言葉だと、そう捉えてください。
にしても主人公、鬼畜っすね……。

“折れようと、砕けようと、その先には”

鉄が鋼になるって事？

無言で、歩く足音が二つ。

私と、隣を歩く化け物さんのものだ。

私は僅かに俯き、視界に入る垂れる前髪と、隣の化け物さんの黒のブーツと、自分のブーツ。獣道とわずかだけ見える前方を見つめていた。

言い負かされた。

ついさっきの事だ。

悔しい、と思った。

あの後、結局何も言い返せずに、このままずると一緒に移動している。

どうにかしなければ、そんな焦燥感が生まれていた。

このままでは、ずるずると移動して、そしてあの男に引き渡される。それは嫌だった。あの男とは面識は無いが、村の中では相当な悪評価だった。あの男のせいで妻を失ったり、子供を殺されたりした人も多かったらしい。そんな人のところへ言ったら、何をされるかわかったもんじやない。

逃げるのが一番の手だ。

だが、誰から？

真っ先に、化け物さんの顔が思い浮かんで、慌てて消した。

この男から逃げてはいけないのだ。そう誓った。一生付いていつて、殺すつもりだと、言ったのだ。曲げるつもりはない。諦めるつもりも無い。

だから、逃げるべきはあの男から、だ。

けどどうやって？

化け物さんは、逃げ出したならば追いかけるだろう。依頼がある。それを破棄するつもりは無いらしい。金のためかもしれないし、別の理由かもしれない。だけど、破棄するつもりが無いのは明確な事実だ。

だとしたら、身体能力に圧倒的な差のある化け物さんと（私じゃ逃げることは不可能だ。

「どうすれば……」

思わず、呟いた。呟いてからしまったと思った。声が隣に聞こえてしまう。

「？ どした？」

化け物さんの、いつもの調子の声が聞こえる。さっきの完全に人を馬鹿にした口調ではなく、優しい響きを持った口調。

慌てて顔を上げると、隣でいつもの微笑みを見せる顔があった。歩く事で、その白金の髪の毛の、長いひと房が、一本一本が生きるように独立して揺れた。

笑みに、優しい労わるような口調。その切り替わりにぞっとする。やっぱりこの人、頭の中がどうにかなってるんだろう。

「い、いえ。なんでもありません」

早口に言って顔をうつむかせる。

一瞬、この男に頼んでみたらどうだ、とか考えたが、無理だと判断した。

お金を渡せばどうにかしてくれるだろうか。だが、あいにく金銭は持ち合わせていない。最悪この体で、とか考えたけど、それも興味無さそうだし、私からも願ひ下げだ。

完全に手詰まりだった。

どうしようもない。だけど諦めるわけにはいかない。私は、化け物さんを殺すと、そう決めたのだから。

そのためなら、なんだってする。

……なんだってするんです。

だけど、その『なんだってする』が思いつかない。

思考は真っ暗でぐるぐると同じところを回っているだけで、何も答えも結果も導かない。

無理、なんて結果は最初から頭に無い。

だとしたら、どうすれば。

最も簡単なのは、私の願いである“アルファ・アリの殺害”を今この場で叶えることだ。

今すぐ化け物さんの首を絞めればいいだろうか。だけど、そんなこと化け物さんがただ静観するわけが無い。

ちらと、横目で化け物さんの横顔を見た。今は無言で緋色の目を動かし、歩いている。

この人は、死ぬのが怖いのだ。

死にたくなくて、生きたいという願望に非常に素直に従っている。そのためなら、仇名す相手は問答無用で殺すだろう。自分が生きるために。彼の口からは、自分の家族をその手で殺したと言った。それが証拠だ。

だから、そんな化け物さんに猶予を与えるような殺し方では駄目だ。

武器がいる。でも、

武器は、怖い。

銃は絶対駄目だ。持ったらまた、弱い自分が目を開く。だったら剣や刃物は？ それも駄目！ だってそれも、人を、殺せるんだし。きっと、持とうという考えすら浮かばないだろう。

そうになると、残るのは自分の考え、口、言葉だけだ。でもそれすら、化け物さんには負けた。

人生で歩んできた経験が違う。

修羅も地獄も、私は何も経験していない。村の皆だったはずの何かだって、一瞬見ただけで気絶してしまった。

相手は、家族も親友も殺し、人を愚弄し蹂躪するのが大好きな頭のおかしい狂った化け物だ。

対し私は、それなりに幸せで、幸せのままに死ねたはずの人間だ。口論したって、絶対に揺るがない何かを持っている化け物さんが勝つに決まっている。

……認めたくないですが。

今の自分では、何もかもが負けている。

何かを得ないといけない。今の状況を打破できるだけの何かを。

だが、そんなものは簡単にはやってこない。それを待てるだけの時間的猶予も無い。

と。

「シルベさあ」

唐突に、化け物さんが前を向いたまま呟いた。

「な、なんですか」

「足、疲れてない？」

唐突に何だ。気持ち悪い。

確かに、足の裏に、歩きなれない森の獣道と言う事で、僅かな痛みというか疲労を感じているが、別に気にするほどではない。

「いーえ。別に普通です」

ふん、とそっぽを向いて答えると、クスクス笑う声が聞こえた。

「そお？ ならいいんだけどね。まだ歩くから、疲れたら言ってくれよ？ 休憩するから」

そこで、一度会話が途切れる。思わずその顔を凝視した。

何がしたかったんだこの男。マジでどうにかしているだろう。

そうして、木の根っこに気を付けつつ歩いているとき、

「あのさ、シルベ。ちょっと知的好奇心からくる質問をしてもいい？」

よっ、と太い根っこをまたぎつつ、そう聞いてきた。

「はあ」

と気の無い返事をして、私もそれをまたぐ。

隣に追いついて、その顔を見上げると、なぜか前髪を指で弄っていた。

うわあ、人間っぽい仕草してるキモイ。嫌悪でうげーとなった。

「……シルベ、さ。あの村でどんな扱いだった？」

顔はいきなりこつちを見て、笑みになる。

……。

まさかとは思うが、前のどうでもいい会話も、さっきの前髪を弄ったのも、聞きづらいとか思ってるからか？

馬鹿にしているのかこの化け物。自分で壊したくせに。

人に言われるならともかく、貴方に言われても、どうでもいいですよーだ。

「……………優しい、人たちでしたよ。よく笑って、楽しそうで」

事実、いい人達ばかりだった。

いっつも幸せそうなニコニコとした笑みが灯り、明るそうに喋り、仕事をして、小さいながら活発な村だったのだ。

「ふーん……。じゃあ、追加で聞くけど、シルベの生まれってあの村？」

化け物さんは、僅かに目を細め、前を向く。細めた両目だけでは、何を考えているか解らない。

「いえ、私はセルク街で生まれたとか。まあ、言伝ですけど」

「それは、誰から？」

「村の皆です。何でも、私は今の市長があ村に捨てていったんだとか……。村の皆は、あの男だけは信用できないって言っていました。私もそうだと思います。……。娘を捨てる親なんて、親じゃありません」

一瞬、化け物さんの右の眉がピクリ、と僅かに上がり、顔から笑顔が削げ落ちる。その緩く握られていた拳が強く握られた。何故か、歯も噛み締めている。

え、もしかして、怒って、る？

激情を押し留めようと必死になっている、とでも言えばいい表情と拳の握り具合だった。ハッキリ言って怖い。その辺の木くらい平気で叩き折りそうだし。

だがそれも一瞬だ。すぐに、眉をフラットにした、無表情に切り替わった。

「じゃあ、市長とは面識が無いの？」

「まあ、そうなりますね。ただ、村の皆は何度が会ったことがあるようで、凄く嫌っていました。だから、なのかもしれませんが、私もあまり会いたいとは思いません」

「ほーん……じゃあ、あの猪……あー、神様？ あれって、何年周期で供物を欲しがるの？」

「……二年に一度、ですけど」

何の意図があってこんな事を聞くんだ？

「ふんふん。じゃあ、その供物って人限定？ もしそうなら、年齢上限とか性別とかも教えてくれない？」

「あの」

「？」

「何が、狙いですか？ 根掘り葉掘り聞いて、何がしたいんですか？」

真剣に問う。正直、あまり聞かれるのも嫌だ。あの村を壊した張本人に、こんなに聞かれるなんて、苛立ちしか生まれない。
だが、

「だから、知的好奇心だって」

笑ってそう言い訳をする。

その嘘くさい笑みにイラッ、と来るが、怒ったところで仕方が無い。どうせ言及しても、はぐらかされる。だからため息で我慢。

「……基本、性別も年齢制限ありませんよ。まあ、人限定でしたけど」

「へえ。じゃあ、今回は何でシルベだったの？ おかしいよね？
だって、普通、ああいう小さい村は子供って大事にするでしょ？」

化け物さんの口調は、饒舌だ。まるで思考を練り上げて、それを口に出すようだった。

……？

よく解らない。だが、奇妙な違和感を抱いた。
首を傾げつつ、自分の経験則から言葉を発する。

「えっと、何か勘違いしているようですけど。私の村には、別に子供を大事にするなんて風習、ありませんよ？」

僅かな時間、化け物さんの口の動きが止まる。

「……………それ、本当？」

私をじつと見た。探りを入れるように、まるで何かを侵入させるように。

濃い赤色の光が、バツクの緑の森に、鮮烈に浮かび上がった。

その色調のキツさに僅かに、頭痛のようなものを感じながらも、頷く。

「私の村は、“平等”っていう絶対のルールがあつたんです。だから、子供だから大人だから老体だからって、そういう言い訳で仕事は休めませんでしたし」

「……………なるほど。“平等”、ねえ……。あ、んで、なんで今回はシルベ？」

「えっとー……………なんだか、神様が、『今年は何かヤバいのが来る』とか言つたそうで。それで、ごねたんです。若い肉を食べたいって……………だから、私が名乗り出ました。まだ、体も未発達だから力もたいて無いいし、そのせいで畑仕事も頑張らないといけなくて。だから肩身が狭かつたんです。だから、私が」

ふうん、と無感情な瞳は、さつきよりも忙しなく動き、歩く。僅かだが、歩くペースも速かった。何か、考え事に熱中、とでも言っているようだ。

ヤバいのって、この人の事だったんですかね。

日照りとか、そういった自然災害だと思っていたのだが、たぶん違つたのだろう。

「……………村の人は、反対した？」

「あー……まあ、猛反発でした。大事にされてるって嬉しかったけど、どうしても譲れなくて、だから私が頑固に反対してたら全員が諦めました」

「全員が？　どれくらいの時間が掛かった？　説得とか、そういう感じのは」

「えっとー……大体、二時間くらいです」

あれは長い口論だった。村の人VS私一人だったのだ。必死に同じことを延々と繰り返し返したら、結局全員が根負けして、諦めてくれた。最後まで残念そうで、だから心は少し疼いたが、必死に押し殺したのをよく覚えている。

過去に浸っていると、化け物さんが言う。

「じゃあ、最後の質問だけどさ。あの村に銃があつたのは、何で？」

え？　と思う。

なんだろう、その聞き方。

まるで、他の村には銃が無いみたいな言い方だ。

何故か不安が心に積もり、口からは何か、怯えるような声が出た。

「あ、あの、化け物、さん。えっと、他の村って、銃があるのが、普通、ですよ……？」

「。……ああ、そうだよ」

一瞬細まった瞼は、すぐにいつもの大きさに戻る。それ以外は、何も変化が無かった。

何か隠されたような気がするが、気にしないことにした。気にしたら、何かマズイ事に首を突っ込みそうだった。

ただ、安堵のため息が出た。

そして、息を吸って呼吸を整え、言う。

「皆、自衛のためだと。それと、私を守るためとか……。けど、基本外に出しませんよ？ 仕事やってましたし」

「そっか」

短くそう呟き、次の瞬間。

え？

今の、何？

そう思う眼前、化け物さんは柔らかく、無表情を笑みに変えた。まるでチョコが熱で溶け、柔らかく動くかのような流動的な、美しい笑みへの変化に、思わず目を見張る。

「……“私を守る”って、なんだ、凄い大事にされてたんじゃん。良かったな」

柔軟な笑みは、そう言って、私の頭を撫でた。いきなりの事で、首が竦み、体がこわばる。

優しい手つきだった。あまり大きくない、普通の大きさの手は、ゆっくりと、まるで悲しみを表現するように、撫でる。

なんだか、子供があやされているみたいで、頬に熱が溜まって、肌が熱で張ったように感じて、

「……ッ、や、やめてくださいっ」

その手を叩いた。^{はた}そもそも、貴方に言われる筋合いは無い！
憎々しげに睨んでも、手をぶらぶら振って笑う。

うぜえと思いつながら、隣を歩いた。
そして考えた。

あの時、笑みが灯る前の口は、確かに、しっかりと音を無くして
動いていた。

クソが。

フザけやがって。

と。

きつと、声に出していたなら、ゾツとするほど低だろう声だっ
たに違いないと、そう思った。

ただ、何故、そんな暴言を吐いたのかは、解らなかった。

……。なるほどね。
大体解った。

（クズの群れが）

そう、簡単な感想で締めくくる。そして、殺しておいて正解だったと思った。市長には感謝しないといけない。あんな村、きつと事情を知っていたら、俺は全員胴体と顔だけダルマにしていた。いや、何人かしたが、できるだけ生き永らえさせて苦しませて死なす、という意味で、ダルマにする所だったろう。

これは、正直重過ぎる。シルベは、知らない方がいいかもしれない。知ったら絶対、自殺する。

自分にとっての常識が嘘非常識になったときのショックは、俺は良く知っている。カニバリズムで、人の肉を食べる事が狂っていると知ったときは、相当にショックだった。

だがシルベは、俺の比じゃない。その一点のみで話せば、俺よりも重い。

村人全員が、シルベに対し嘘を付いている。しかも、最悪で下衆な嘘を。

まだ完全に全てを知りえたわけじゃない。
だが確信があった。

市長に会い、そして話を聞けば、それが真実だと解るだろう。
吐き気がこみ上げそうだった。

（クソが……嫌でも、首を突っ込みそうだ）

元々そんなつもりなど無かったが、真実に、その片鱗に触れた時

点で、俺も関係者だ。

違う。

これは義務とか関係者だからとかじゃない。

きつと、　　憐みだ。

可哀想に。

真剣に、そう思う。

そして俺は、それを告げる気は無い。

あの村の嘘も真実も破壊した俺から教えられたら、シルベが間違
いなく死ぬ。

そのレベルで酷い隠し事だ。

サイテーだ。

世の中嘘しあわせうんめいと真実と神様ふにうの嘲笑だらけだが、これはいくらなんでも
酷い。

……。

はあ。

慰めようとか思った自分は、馬鹿じゃないのか。そして頭を撫で
るなんて行動をした自分は、もっと馬鹿じゃないのか。

まだ、残ってたんだな。

人間っぽいところ。

同情心が起こす、慰めの言葉。そして行動。

何も嬉しくない。寧ろ、勘弁願いたい。

人を殺すのに、罪悪感も同情心も必要ない。

必要なのは、圧倒的な力そのもの。

それを渴望しようと、手に入らない。

欲しいと願う力はまだ、王冠でしかない。

足りない。

この程度じゃ、一時間で殺せる人間なんかたかが知れてる。もつと、もつと必要だ。

龍王そのものとなれるような、そんな力が、必要だ。だがどうやったら手に入る？ 解らない。

それに、

バレたらまた殴られるんじゃない……。

“何人間ぶってんですか気持ち悪い”とか言いながら足が飛んでくるのではないかと、危惧する。別に傷は完治するが、だからといって好きで蹴られたくない。完治しようと残留する痛みは、それはそれで厄介なのだから。

だから、ちらとシルベを見た。

目をキョロキョロ動かしながら、足元に注意しつつ歩いている。

その顔には、僅かだが疲れが滲んでいた。足を運ぶスピードも最初より確実に鈍っている。

嘘なんてつくから。

きつと、森の獣道なんて歩いた事が無いんだろう。一步も村を出たことが無いんだろう。それだけ大事に扱われたという事だ。

思わず笑みが漏れて、

「そろそろ、休憩する？」

尋ねてみる。

すると、むつ、と眉間に皺がよったシルベの顔は 可愛いので それでも可愛いままだが 俺を、身長差をごまかすように上目遣いに睨む。

「いいです。私、全然平気ですから」

強く言い切られる。ぷいつ、と顔がそっぽを向いた。

子供だと思った。

「別に無理しなくてもいいんじゃない？」

「しーてーまーせーんー！」

強く言い切られる。

ふむ。

頭を撫でられたのがよほど腹が立ったのだろうか。
隣を歩く姿は、どこかぎこちない。絶対に無理をしている。
まあいいか。

怪我をして子供は成長する的なあれだろ、たぶん。
そう思っ、視線を前に。
獣道は結構長い。

「……どれくらい、続くんですか？ この道」

「うん？ あー……、行く道を辿ってるだけだからー……」

横目でシルベの顔を見ると、普通の道で歩きたい、と顔に書いてある。というか、げんなりしていた。

「……まあ、大体いー……軽くー、二キロくらいじゃないかな」

「長っ！ そ、そんなにこの道歩くんですか!？」

いきなり、食いつくように叫んだ。思わず耳を手で塞ぐ。

顔は悲壮で染まり、こちらを見上げている。嘘？ 嘘？ と、目は淡い期待を抱いて僅かに輝いていた。

と、

「……ッ」

こちらばかりを見上げるせいで、足元を見ないふらふらの右足が出っ張った石に躓いた。

一瞬で顔が下がり、慌てる表情は焦った動きで左足を前に、擦れた角度で強く踏み込むが。

「んッ！」

その擦れた角度のせいか、ものの見事に足首の関節がおかしい感じに動いた。悲痛に染まる顔。ぎゅっと閉じた目の、目尻に涙を溜めている。

その痛みで左足が上がり、そのままバランスを崩し転倒、

「んよっ、と」

するまえに俺が、横から抱きとめた。左腕を肋骨辺りに、右腕で近くの方の二の腕を掴む姿勢だ。

ふう、と一息を吐いていると、腕の中でもぞりと動く物体が一つ。

「は……離してください」

カーっ、と頬が紅潮し、次に顔全体、最後に耳まで真っ赤になった。声は小さく振動している。目を上から覗き見ると、サッ、と目を逸らされる。どうやら恥ずかしいらしい。

驚くのも赤面するのも当然だよねえ、と思いつつ頷く。

「へいへーい。……ってちょっと待った」

腕の解きを外し、立たせた時点で気付いた。

思いつきり間接妙な動きしたから、

左足がぶるぶる震えている。

どっからどう見ても捻挫であつた。

「な、なんですか？ 何にもありませんけど？」

しかし、強気に“こつち見んな”とジト目で俺を睨むシルベ。

何にもないっていうか……、とその負けず嫌いさに苦笑が漏れつつも前置きをする。

「捻挫してるよね？ 歩き方、おかしいよ？」

「う……べ、別に？ 普通ですけど？」

「うん、じゃあ歩いてみてよ」

「……………」

顔が俯き、右足を僅かに前に出した、その時点で体が動いていなかった。

顔、正確には右の眉が浅く上下して、ヒクヒクと動いている。

しかし、目だけは、前を向いて“は？ こつち見んな”とでも言わんばかりに俺の視線を無視している。

「……………」

「……………」

両者に無言の時間が流れた。片方は頬に汗を一筋流し、片方はどう

すればいいんだろ？この子、と苦い笑みで口端を緩めるほか無い。しかし、その無言の空気を壊したのはアルファだった。

ニヤアアア、と茶目っ気と悪戯っぱさが三対七ほどの割合で混ざった笑みは、馬鹿にし腐った口調で告げる。

「おやおやあ？ どうしちゃったのかなあ？ あ、もしかして……、歩けないんでしゅかあ？ 十五ちゃいでしゅものね。まだまだあ？ 子供でしゅものね？」

子供、というワードにシルベのこめかみ辺りの血管が僅かに蠢いた。

「クッ……！ あ、歩けますしい！ 私別に捻挫なんかしてませんしいー！」

しかし、目線だけはしっかり前を向いて、でも額には汗の雫が浮かんでいる。

見事に足は動いていなかった。

「おやあ？ なんだか右足がまったく動いてませんけどあ？」

「クウ……！」

悔しそうな呻き声を聞いて、アルファの笑みがいつもの、優しそうな笑みに変わる。

「……………認める？」

「……………はい」

それは敗北の合図であつた。
しかし、

「んー……なんだか、嫌々言つてゐる感が、ねえ……？」

「すみません捻挫です。挫きました。ヤベエこれスゲエヤベエ、
つて感じです。死ぬ気でチョー痛いです。正直歩きたくないです」

シルベは自暴自棄に白旗を上げた。そしてそのストレートに痛い
と告げたことに満足したアルファは、うんうん、と頷きながら言う。

「よしよし。素直なのはいい事だよねー。……ほれ」

そうして、両膝を地面に付けた姿勢になると、背を丸める。

アルファの行動を見たシルベは、

「……、……なんのつもりですか？」

ほんの僅かに動きを止め、硬直。

数瞬あとに、ゆっくりと、驚きと意外という感情で上がった心拍
数を落ち着けるために、息を吐き出しながら喋った。

返答は、予想通りのものだった。

「いや、おぶつてあげようかと。しんどいでしょ？」

「結・構・です」

予想通りなのと、こちらを振り返つての笑みが苛立ちしか生まな
くて、歩くのも辛いのに、いーつ、と口をへの字に曲げて言った瞬
間、

「じゃあ頑張って歩いてねー」

アルファがスタスタ歩いていった。

あまりの素早い姿勢の変化に、一瞬呆気にとられ、そして慌てて声を掛ける。

「なっ！　ちょー！？　え、ええええー……………」

声を出しても、体は動かない。その事実と、痛いしどうしたらいいんだろっ、という気持ち、更には、いやでも絶対手なんか借りたくない！！　というイヤイヤをする心が混ざり合い、尾を引く言葉となってしまうた。

まるで、やっぱりおんぶしてほしいですう、とでも自分から言っているみたいで、悔しいとシルベは思った。

で、ですが。

さすがに、止まるだろう。これだけ長い“え”なのだ。というか仕事はどうするつもりだろう。よっし！　何に勝ったか解らないけどとりあえず私の勝ちですね！！

そんな淡い期待と、確信溢れる予想は、

「獣道は大変だよな。木の根っこかさあ、ごろごろとデカイ石が転がってたりさあ、他にも、しっかり足で歩かないとしんどい場面がいくらかもあるよねえ」

軽く三十メートルほど奥から聞こえる、憎き復讐対象の声で碎け散った。

「頼みますからおぶってくれませんかマジでお願いします」

そして一瞬で、シルベは再度白旗を上げた。

シルベに於いて、一に楽、二に睡眠、三に苦難は面倒ー、である。つまり、痛いのも駄目ー、ということだった。

すると、一瞬で帰ってくるアルファ。そこにはにやかな笑みが生まれ、徐々に近づくにつれ、にやあ、と嫌らしい笑みになる。完全に負けていた。

「うんうん、素直なのはいいよね」

ははは、と目の前で朗らかに笑われても、こちらは捻挫をして足首を痛めている身。どうしようもない。悔しさがストレスの発火元になって、髪が燃え消えそうだった。

拳を握り締め、必死に怒りを抑え続けていると、

「ちょっと座ってくれる？」

そう言われた。はて、と座る理由に最初思い至らなかったが、

「あ、ああ……捻挫ですか」

「そ。あんまり酷いようじゃ、さすがに笑い話でも無くなってくるからね」

頷きつつ、左足を出来るだけ動かさないようにその場に座る。土の冷たさと、少し硬質な感触。そして足を休められるという事実、ふくらはぎから力が抜けていくのが解る。

「ブーツ、脱げる？」

こくり、と頷いて、慎重に取った。

そのままソックスも脱ぎ、手で丸めて握っておく。
首を伸ばして見てみると、紫に腫れているとか、そういうわけでは無かった。だが、足首の中に痛みが蔓延っている。

「ちょっと御免ね」

細い指先が、僅かな冷たさを持って足首に触れた。
解りきっていた事だが、それでも体は僅かに震える。ひゃ、と小さい息と声が漏れた。

そのまま、僅かに右へ曲げ、

「……っ」

左へ曲げる。

歯を噛み締め、悲鳴だけは我慢したものの、視界は僅かに歪んだ。
生理的な涙が出ている。

悟られまいと、目尻を拭う。

目の前の化け物さんはそれを見ずに視線を下げたままで、そつと掴んだ私の足首を地面に置くと、

「たぶん軽い捻挫だねえ。ほっときゃ治ると思うけど……どうなんだろう？ 湿布とか貼る？」

こちらを見て首を傾げた。ポーチから湿布を取り出し、びよんびよんと延ばしている。

「いえ、あの……そういう知識無いんですか？」

普通あるだろ、と言葉に秘めて言つと、化け物さんは、首の角度を戻して湿布をびよんびよんとして言つ。

「いや俺、怪我自体は五秒で治るし。痛みはその内消えていくからね。だから怪我に対する知識とか、必要ないし」

理由が怪物だった。

思わず啞然とその紅色の目を見てみると、瞳孔の大きさが変わり、こちらを見て焦点を合わせた。

「……湿布、貼っとく？」

自分も別に捻挫に対する知識があつたとかでも無い。だが湿布は貼るべき怪我と貼ってはだめな怪我があると知っていたため、お断りした。

そして、おんぶされている。

化け物さんの足が前へと行くと共に、小さく緩やかな振動がこちらに伝わる。

太ももの裏辺りにある、他人の熱の感触がこしょぐつたい。

子供がそうされるみたいで。

なんだか、恥ずかしい。心臓の鼓動は、いつもよりペースを速めていた。

頬に熱が上がるのは、きっと気のせいじゃないだろう。

前方を向いていた顔は、少しこちらを振り向いて、横目に私を見た。

「乗り心地はどう？」

髪がサラサラとしていて、質が良い。間近で見る頬やうなじは白く、きめ細かい肌によって守られている。綺麗だな、と素直に思った。

一夜で肉体がここまで成長したと言う事だし、龍の目のおかげなのかもしれない。

その美しい肌や髪を見つつ、首を横に振る。

「悪くは、ないです……ただ」

「ただ？」

やはり間近で見る、その身体を、凝視する。

「本当に体、細いですね……どこに人一人運べる力があるんですか？」

「人一人つつうか、ショットガンとハンドガンとザックにポーチ、刀三本なんですけどね」

苦笑が帰ってきて、私は人じゃないものを見る目で呟く。

「総重量いくらですかそれ……」

「あー……んしょ」

軽く跳ね、私の位置を安定させる。

跳ねた瞬間、その長めの髪も身体の動きに従い、わ。

その髪から、甘い香が広がった。良い香だと思った。なんだろうかこれ。

そういえば、今日の朝に貰った粘性のある液体もこんな匂いがあった。

そんなもので洗って、体に悪くないんでしょうか……。
化学製品。それは恐ろしい響きだ。うん、今日の朝も思った事だが、やはりあの泡泡は恐ろしい。

鼻にふんわりと来る匂いを感じつつ、その匂いの発信源は声を出した。

「たぶん、君で四十二、三キロだね」

「えあ!？」

口から変な声が出た。なぜ解った。本当は四十一なわけだけど、僅差で当たっている。

「んで、ショットガンとハンドガンで大体……一・五キロ？ ザツクとポーチは合わせて銃とたぶん同じくらい。刀三本は、大体三十キロくらいかな。合計で、七十五辺りだと思う……って、何？ どうかした？」

私とその肩を掴んでわなわな震えていたためか、化け物さんが訝しげな横目をくれた。

慌てて首を横に振り、ジト目になって言う。

「い、いえ……というか、デリカシー無いですね化け物さん」

「は？ “でりかしー”？ 何それ。照り歌詞でりかしい？ でり菓子い？」

「え、つとお……すみませんが、」馬鹿？「1+1=？」

「2でしょ?」

うん、どうやらそこまで馬鹿じゃないようだ。

「じゃあ、 $(596 \times 26) / 2 + 29 = ?$ 」

「7777でしょ?」

適当に考えた計算式が、一瞬で答えを出された。
間に一秒も無かった。
思わず驚きで声を上げる。

「は、速っ! なんですかその計算能力! ……えーっと596 ×
26して、2で^わって、29……う、うわ! 合ってる……」

「計算できないと金勘定できないし、割と普通のスキルだと思うけど」

「暗算でそれだけ出来るのがおかしいんですってば……」

「そんなもんかなあ……。で?」

「あ、ああそうでした。えーっと、“猿も木から落ちる”、この意味、解りますか?」

「んー……………」

しばらく考え込むように唸る声。口はぼそぼそと「あれ、」「いやいや……」などと呟いている。

やはり……。

きつと十七歳なら答えられるだろうことわざだ。
それが言えないとなると……。

「あ……」

ピンと来た、とても言わんばかりの、暖かみを持った喜を表す音色が聞こえて、

「猿が木から落下し頭蓋陥没により死亡、っていう事でしょ」

「どう考えたらそうなるんですか！？ 貴方の頭の中は殺生以外無いんですか！？」

思わずツツコむ。

すると化け物さんは大きく見開かれた紅玉で、こちらの顔を呆然と見た。

「えー！？ 全身殴打による神経麻痺および全身不随のほうだった！？ ご、ゴメンね？ 俺学校とか行った事無いからまさかそっちだとは思わなくて！」

「ちょっと待て ！！ おかしいでしょ！ というか意味だし！ これ、ことわざなんですけどー！！」

「は？ “ことわざ”ってなに？」

ヒュウウウウ、とその白金の髪を、緩やかな春風が撫でた。

私は、その一言を聞いて、ふう、とため息を吐き、その肩をぽんぽんと叩いた。

「……あー、いや、何でもないです。バカってというのがよく解ったので、何でもないです」

「ば、バカって……いや、でも俺、本当に学校とか行った事ないし……」

「そうなんですか？ まあ、かく言う私も、村の人にちよくちよく教えてもらったただけですけど」

「荒廃街は、そんな善意で何かを教える場所なんて無かったしね。あそこを出て、旅を始めてようやくそんなシステムがあるなんて知ったよ」

いつも通りの口調で言われた言葉に、僅かに感じた罪悪感。

勘違いしちゃ、いけない。

別に、自分だけが悲劇を見ているわけじゃない。

幾ら、その悲劇を引き起こしたのがこの化け物でも、誰でも悲しい過去くらい持っているのだ。

だが、

ッ……。

認めたくない、とも思う。

憎むべき対象が、実は人間味溢れる、“私怨”や“復讐”だなんて言葉で人を殺し続けているなんて、考えたくない。

許す気はまったく無いが、それでも今の、軽いノリで言ってしまったことに、謝るべきか。
だが、

「……あ、謝りませんからね……？」

必死に考えあぐね、出した言葉は、自分の素直な部分に嘘を付く

事にした。

やはり、そんなのは認めたくなかった。

僅かに暗く沈む心。それに伴い、ほんの少し歪んだ眉。下を見て、僅かに閉じる瞳。誰が見ても、落胆しているか沈んでいると思う表情だ。そう、自分でも解る。

それを見ていないはずなのに、前を向いていた顔は、クス、と笑った。

「何を罪悪感なんか感じてるのさ」

「別に、そんなの……」

私のか細い声の出す否定も、化け物さんは聞き入れない。まるで心の中を見透かされているみたいで、気持ち悪かった。

「俺のことは一生許さないんだろ？ だったら、幾らでも恨みな。恨んで、俺に罪悪感なんか感じずに生きな。君には、それしかもう生きる道が無いんだろ？」

「……それは、嘘ですよね」

「何で？」

そこで、首が僅かに曲がり、こちらを横目が見た。その目尻は、笑っていた。

「だって、連れて行くんでしょう？ 私を、あの市長の所に」

違う、と言って欲しい。憎悪の対象であれ、それは自分の悲願が遠ざかる。

そんなのは嫌だ。

だから、目で、出した言葉で、聞いた。懇願とも言えるかもしれない。

横目の深紅は、その目尻を更に下げ、眉を立てると、

「当然さ。仕事だもん」

言い切り、首を戻した俺の耳に、息を呑む音が聞こえた。

「ッ……！　じゃあ、私の復讐はどうなるんですか……。あの男が、私に何をするのかも解らないのに」

「そ……んなの知らんさ。俺はそこに干渉しない。シルベ、それは君が君の手で片付けるべき問題だよ？　俺に勝手に押し付けなくてくれ」

「で、ですけど！　私は……」

「わたしは？　何？」

「……こんな所で、止まるわけにはいかないんです……。すぐにでも、貴方を殺せるだけの何かを得ないといけない。なのに、何をされるか解らない男のところに行くなんて……」

「……あのね、シルベ。迷惑だ。自分勝手な我俣に他者を巻き込むのはよせ」

「ち、違う！ 巻き込んでなんか……、そ、それにつ！ 貴方だつて！ 貴方だつて巻き込んでいるじゃないですか！！ 人を殺して、自分の勝手な願いのために人の不幸も幸福も運命も破壊して！！ そんな貴方がそれを言うんですか！！」

「ああ、言うつよ？ だつて、人間は悪だもの」

そもそも。

「何か勘違いしてない？ 俺は他者なんか巻き込んだじゃない。人間は“他者”なんて扱いを受けていいほど善良じゃない。そもそも、俺は人を同類として見ていない」

「……、じゃあどういう風に見ているんですか……！」

「肉」

更に息を呑む音が、酷くハッキリと聞こえる。

僅かに目を閉じ、すぐに開いてから息を整えるために一つ、ため息を吐く。

あんま、言いたくもないんだけどな。

そうは思つても、言ってしまったのだから仕方が無い。

どうせ怪物か何かと思われている。ならば、その怪物性を、化物性を極めてもいいだろう。

それでも僅かに沈む声は、言いたくないと心が叫ぶからだろうか。解らない。ただ、そのままに言った。

「……親父が、人の肉を食べる趣味があつてね。俺の家庭に出る肉は、全部人の肉だったんだよ。気持ち悪い話だろ？　そして、親父が台所で人をさばいているのを見続けていたら、人を肉としてしか見れなくなった。」

……できるだけ普通な生活を送っているつもりだけど、それでも俺は人を“肉”として見る癖が抜けなくてね。だから、俺は“肉”を巻き込んでいる。そういう考えで動いている。無意識にそう思うから、これっぽっちも罪悪感を感じなくていいんだけどね」

それにね、シルベ。

未だに、俺の肩を握り動かない少女に告げる。

「俺は人間を、クズみたいに醜くて、腐った臭いしかないドス黒い心を持っている、この世でもっとも穢れた不純物のみの混合物。そんな存在だとも思ってる。……猿のほうが断然マシだよ。生きるために、必死で食べて必死に子育てをする。ちゃんと生を全うしてる」

そのくせ人間はなんだ？

「下らない遊びで笑い、下らない事で怒り、下らない事で人殺しの武器を作った。最悪さ。生きることから大きく外れて娯楽に走ったクズの群れ。だから俺は、それを悪だと罵り殺す。そうして、全人類を殺すまで、俺は立ち上がるのをやめないつもり」

そこで口を閉じると、ようやくシルベが動き出した。強く、肩を握られる。そして押し殺したような声が、後ろから聞こえた。

「そんなの、無茶苦茶ですよ……！！ 貴方の言っている善悪論は、どうにかなっています。」

人は生きたいから、必死になって守るための武器を作った。人生に幸福を生むために遊んで笑った。自分の思いを叫ぶために怒った。それが、それがそんなに悪ですか！？ だったら……、だったらッ」

「……」

徐々にシルベの心が、怒りで焚きついていくのが声だけで解る。

だが、今は静観しようと思った。耳障りなのは違いないが、昨日ほど苛立ちも感じない。

反論をしてきている。それは、昨日には見受けられなかった部分だ。

「貴方も悪じゃないですか！！ 人を殺すために武器を振るいました！ 人を殺したのに笑いました！！ 自分の思いを叫ぶために、…… 怒りはしないけど、でも、静かに叫んで殺しているじゃないですか！！」

「うん、そうだけど？」

即答。

「俺も悪さ。酒が好きで、銃刀類を所持し、怒り、笑い、殺す。至極まっとうな悪だね。……で？ だからって、悪が悪を裁いてはいけないのか？ それこそ無茶苦茶だ。悪には悪なりのルールがある。悪は死すべき。それが、極悪の悪役だと自負できる、俺なりのルールだ」

「じゃあ……ッ。じゃあ…… 貴方なりの善人って、一体…… 誰なん

ですかッ……」

「この世に善の人間は存在しない。それが、俺なりの善悪論の結果だよ」

「酷い、じゃないですか……。それじゃあ、この世界で生きる人間は、全て悪なんですか？ 誰も彼も、毎日必死に、自分の好きな人や守るべき命ために働いて、子守をして、寝て食べて！ そうして、そうして、生きているだけなのに……。それを、それを貴方は、悪だと言うんですか……？」

怒る声は、しっかりと自身の考えを持っている。
凄いと素直に思う。

あれだけ、自身の憎しみも、怒りも、決心でさえも、叩き折り潰し疲弊させて絶望させた。

なのに、まだこの少女は自分を持ち続けている。

まだ怒れる。その火は燃え尽きていない。

幾ら揺さぶろうと崩れない。

面白い。

「……ああ、言ってやる。シルベも俺も、この世の全人類は悪だ。だから、殺さないといけない。それが俺の理想だ」

口元に笑みが生まれるのは、やはり、自分の心が昂ぶるからだろ
うか。

言えば反論が帰ってくる。

会話は、こういう部分が面白いと思う。

「意味解らない！ 全ッ然！ 意味解らない！！ 何がだからですか！？ どうしてだからって繋がるんですか！？ 悪だと、そう言

つたからと殺すだなんて絶対に、絶ッッッ対に！！ 間違っています！ 私には、そんなの狂った頭の思考回路だとは思えませんが！！！」

「だろうね。……でも、だからどうしたのさ。俺は、誓ったんだよ。リアって奴と、アズナって奴と、昔、自分たちの夢を語り合って、そして各々の道に進むと」

グズイは言ったさ。

「理想を抱けよ、少年。強く願う、自分だけの世界を未来に思い描け。そうしたら、君はその理想のために自分を動かせる。誇りを持ち、気高くその理想を誉れと謳い続けることで、少年は負けることも、屈する事もないだろうから」……。そんな事を言う龍がいたから、俺がいまここにいます」

「……そんなの、世迷言です。貴方の理想は、そんな、誰かに背を押されないと動けないへボなものなんですか？」

ヒュウ。

口笛を吹いた。

冷静に見える言葉は、その裏に怒りをちらつかせ、俺の発言から反論材料を取りだそうと必死になっているようだ。

そして、しっかり反論してきている。元々頭がいいのだろうか。思考が煮えたぎってもちゃんと芯がある。

「そうだろうねえ……。俺には、そんな事、大した問題じゃないからね。……理想が持てた。生きていくという事実を残すがために存在する、究極の理想を持てた。だから俺が今ここにいます。それ以上の何がある？」

「だからってエ……!!」

「シルベが怒る理由も解るさ。……この世に生きる人は、皆全てが美しい。だから、誰も彼も、決して殺してはいけない。

そんな理由だろ？」

そこでようやく首を後ろに向かせ、その表情を見る。

歯を剥き出しに、こちらをアメジストの輝きで睨む少女がいた。

だが、その少女はその憤怒の表情を引っ込めると、冷めた無表情で、呟く。

「……………ええ、そうですとも。私は、この世に純粹に真つ黒な人間なんかいないと思います。皆、毎日生きているだけです。生きて、少しでも楽しくしようと笑って、幸せになろうと誰かと一緒にいるだけです。貴方がこの世に悪人しかいないと言うなら、私は、この世には善人しかいないといいます。そして、私はだからこそ、決してあなたの吹聴なんか受け付けない……！」

そっか。

呟いて、顔を前に戻した。

戻した瞬間、

「……………うえ」

口からうんざりしたような声が漏れた。

そこは獣道の終わりだった。すぐそこに、平らな、人の足が踏み、そうやって整えられた細い平地の道がある。

そこに、一人の女がいる。

黒い修道女の服装。その服の上からでも解る抜群のスタイル。厚

底の、黒のブーツ。顔は常に笑い顔。髪は背中の半分までを覆っている。年齢は今年で二十だろうか。首から足首までを覆うシスター服でも、顔や指などの、その若々しさ溢れる肌は見える。

俺を見つけたのか、その女は笑みの顔を、ふっと息を吐いて和らげ、柔らかない微笑みにすると、口を開いた。

「あら、ようやく見つけました。……お久しぶりですね、アルファ様」

親しげと言わんばかりの言葉に、俺の顔が更に歪む。

とりあえず女の言葉は無視して、腰をその場に降ろした。

シルベを地面に座らせる。

「??? え、つと……?」

シルベを見ると、さっきとは打って変わって、困惑気味に目を瞬かせていた。

それに笑みで答える。

「シルベ。いいか? この討論については後回しだ。ひじょーに、ひつじょおおオオオオにいい、面倒なことになった」

「はい? あの、あの修道女シスターの格好をした人はいったい?」

そこで、俺の笑みが消えた。残ったのは半眼で肩を落とす、疲れきった表情だ。

表情のままに立ち上がり、その女の方を向く。ザックはいつの間にか手から滑り落ち、地面に落ちている。

その女は律儀に、俺とシルベを邪魔せず立っているだけだ。

「……俺を追う人間」

「……一番会いたくない奴に出会ったな」

低い声音は、その手を刀の柄に触れさせながら呟いた。

「シルベ」

「は、はい？」

「絶対にそこから動くな」

気迫と凄みを持った一言に、体が硬直する。

こんな声、出せるんだ。

いつものちゃらけた口調も、笑みも何も無い声。それが酷く恐ろしい。

「あら。私、別にそちらのお方に興味はありませんよ？ ただの間は、私たちが愛すべき存在ではありませんもの」

ティフィと呼ばれた女性は、にこやかに笑って、こちらに手まで振ってきた。遠い距離で目が合い、そのため挨拶をする友人の間柄のように、親しげに。

思わず、手を振り返しそうになる。半ばまで上げた手を慌てて下げた。すると、彼女は、残念そうに唇を尖らせた。

「最近の子供は、マナーが成っていません……。そうは思いませんか？ アルファ様」

クレイジー・チャーチ
「黙れよ狂会」

瞬間的に返されるその単語に、意味が解らず首をかしげた。

クレイジー・チャーチ
「狂会……？」

自然とでた呟きに、修道女の服を着た、長い茶髪の女性は「まあ！」と嬉しそうな笑みを浮かべた。

「まあ！ まあまあ！ こんなところに、無知で無垢な少女が！
なんと可愛らしい……。解らないようでしたら、私がお教えしましょう」

どうも初めまして。

慣れた動作で、両手でちょこんと修道女の服を摘み、僅かに頭を下げる。

そして、またにこやかに笑みを浮かべると、

クレイジー・チャーチ クラウンハンター
「私は狂会に身を置く、異物捕縛者を務めております、ティファイ・アルマスクと申します。以後、お見知りおきを。……さて、では、
クレイジー・チャーチ
我らが異端者保護団体、狂会についてお説明しましょう」

化け物さんは動かない。相手の動向を、じつくりと見定めるように、その体を一切動かさず、体勢を崩さない。

「私たちは、端的に言ってしまうえば、
クレウンチップ
異物刻印を施した、異端者のお方々を保護する事を義務としております」

「保護……?」

「ええ！ そうですとも！ 保護！ なんと美しい響きの言葉でしょうか！ 嗚呼！ 素晴らしいですわあ！」

突然、大仰に両手を広げて叫びだすティフィ。驚きで肩が震えた。目の前の背中が語る。

「気にするな。アイツは、親が狂会クレイジー・チャーチの幹部格でな。だから、そんな親の子供として生まれたアイツの脳内は、異物愛しかないのさ。一種の洗脳だよ
狂会自体がその“異物愛”を基本指針としているけど、ティフィ並みにキチって異物ラブな奴はいないんじゃないかな」

尚も叫び続けるティフィを目の前に、化け物さんは続ける。

「……厄介さ。愛情だ保護だ居場所を作るだ言って、やってること
はただの殺人」

まったく、俺が殺すはずの人間を、勝手に減らしてくれるじゃん。そう、苛立たしげに呟く姿は確実にどこか歪だ。

この場には、歪しかない。ティフィも、化け物さんも、確実に歪んでいる。

正常が無く、だからこそ歪な舞台で華を咲かせる人々。それを醜いと思うか、腐ってると思うかは、解らない。ただ、やはり私は普通なのだと思います。知らされた。脳内に、化け物さんの晒う声が聞こえた。

“普通”で挑むの？

拳を、握る。意志をその拳に宿すように。

やってみせる。

絶対に、私は私の得た価値観で、必ず化け物さんを、アルファ・アリイを殺してみせる。

諦めない心で、その化け物さんの背中を見た。

「四肢を切断しようが首だけになろうが“保護”する。“保護”して保管し、異物者の収容を行う。……その歪さから表舞台じゃ非公式、非公認、非合法的な組織団体だけどな、裏じゃあれが持つ権力は世界を左右できるレベルだよ。
頭首を“教祖”^{ヘッド・クイーン}って言うんだけど、そいつが睡蓮眼つつう異物を^{オイル・オブ・ワン}持つててな。それに頭もキれる。ぶっちゃけ、アイツがいないと^{クレイジー・チャーチ}狂会はとつくの昔に滅びてただろうな」

どこか懐かしむ口調で語られる言葉に、今自分が見ている女性の所属する組織の巨大さを感じた。

思わずといった風に、驚嘆の声が出る。

「そんなに……」

「ああ。“傀儡巨国”^{かいらいきょこく}っていうあだ名のある国って知ってるか？」

「い、いえ。……地理はまったく駄目です」

あの村からは、一度も出た事が無い。教えられるのも、生活に必要な知識や、軽い勉強程度で、地理についてはまったく教えられなかった。

そのせいか、少し肩を縮めた私を見ずに、化け物さんは頷いた。

「そっか。傀儡巨国イエスカル。クレイジー・チャーチ 狂会が裏で操ってる、北東辺

り、大陸の五分の一を支配領土にする民主政の巨国だよ。あの辺りは日の入りも多くて四季の気候がハッキリしてるから、穀物がよく育ってね。だからそこに居つく人間たちは利用できる資源が豊富だから国力で言うなら“西”と同等。“西”の半分以下の領土で“西”と対等に渡り合えるんだから、相当さ。

そういうわけだから、あの狂会が持つ権力は、大陸の五分の一を自由にするってこと」

「え、えっと……。その、“西”ってなんですか？」

言った瞬間、首がこちらを振り向いて、右の房が強く揺れる。その顔は、呆れた、と言わんばかりに半眼だった。

「お前ホントに地理駄目なんだな……。超有名っていうか常識だぞ……」

「う、うるさいですねっ。……で、なんなんですか？」

「“西”っていうのは、あだ名っちゃあ、あだ名だな。

大陸の西全域を治める、フォンって言う国のあだ名。元々民主政の小国だったんだけど、革命めいた事件が起きて、そんで民主政から王政に変わってな。その王様が周辺の国々を次々と征服してって、今に至るってわけ。

ついでに言えば、その王様、本人が異物刻印保有者で、あんまりにも強いから“タイラント 覇者”って呼ばれてるんだけどな」

「へえ……。その王様、凄い頭がいいんでしょうね。国を変えて、

どんどん支配していったなんて」

純粹な感想を漏らした瞬間、言葉は平淡に返ってくる。

「馬鹿だよ？ アイツ、超馬鹿だよ？ 三年くらい前に会ったことあるけど、鼻の穴ほじくりながら、

『お前彼女出来たア？ え……？ マジで？ お前、まだなの……？ ぶはっ、お前まだ童貞かよ！ マジウケるんですけどぉ！！ オレとか側室だらけで毎日ウツホウホなのに！ いやぁ子種残さないといけないつつても毎日キツいっしょ……。……マジで最近の夜はキツイわ……。』

……とか、他人気にせず大声で言うくらい馬鹿だよ？」

「うつわ、その人盛った猿だ……」

「まあ、アイツ自体は、王政の欠点みたいなものは解ってるらしくて、自分が死んだら民主政か、試験を行って優秀な人材を王に付けるように、って言ってるらしいけどな。周りはそれでも、『あの王の息子』っていう肩書きの方が安心できるってことだろうよ」

「ふーん。……ていうか、知り合いですか……？」

まるで友人の事を語るかのような背中では、私の一言で肩を小さく揺らした。

「まあ、幼馴染さ」

「へえ……。嘘かもしれないけど、凄いですね」

「どういたしまして。嘘じゃないけどな。」

…… ったく、リアもアズナも、いつの間にか“異物王”だなんて呼ばれるようになって、偉くなっちまったなあ……」

「？ 幼馴染の、名前ですか？」

「そ。

“クイーン教祖”リア・トリロージ。オール・オブ・ワン睡蓮眠つていう、他者の命を自分の命に変換できる両目を持った、異物と人との愛情の結果。北東の“知性の異物王”。

タイラント“覇者”アズナ・エンゼンティ。魔神エウリスを屈服させて、その身に宿し手繰る、真正正銘の“魔王”。更に、全員が異物刻印クラウンチップ保有者で構成された“百天王”という、僅か五人で一個師団級の戦力を誇る最強精鋭部隊を私軍しぐんとして持っている、西の“武力の異物王”。

…… いやあ、二人とも随分有名になったもんだよ」

王とか最強とか異物と人との愛情こひもの結果とか、スケールが大きいと言つか、別次元すぎて、ほあ……、としか言えない。

化け物さんは、私の息混じりの言葉をどう受け取ったのか知らないが、頷いた。

「幼馴染が世界の実権を握ってるなんて、驚きだよなあ。…… まあ、ともかく、今解ればいいのは、 テイフィは敵で、俺は狙われてるってこと」

「私はどうやら、関係無さそうですね」

「安心するなよ？ アレは、異物を捕まえるためなら何でもするさ。家族故郷友人宝物、何でも脅しの材料に使っし、ケースによっては街一つ滅ぼした例もある」

「……ヤバい組織ですね」

「ああ、ヤバい組織だ」

そこで一度会話が途切れ、少し不安になって口を開いた。
たぶん、闘うのだろう。

まさかとは思うけど。

ここで死ぬとか、再起不能になるとかはない、と思いたい。
えっと、と前置きしてから、

「あの女の人は、強いんですか？　なんだか化け物さん、ヤル気満々ですけど」

「あー、弱いな。まあ……油断はできないけど、どうだか。異物刻^{クラウンチップ}印をしているのは確かだけど、でも二年前に会ったただだからな。もしかしたら異物刻印を増やしてるかもしれない」

そうですか。

呟く口調は、少し声色が柔らかくなった。口元は僅かに緩み、眉を浅く立てた微笑みが生まれる。

別に心配とかではなくて。

ただ、こんな所で死なれては困るのだ。

迷ってる暇は無い。

この、化け物さんにとっての敵との接触を好機^{チャンス}と、そう思い込んでしまえ。

アクシデントは、少なからず人の心に何かしらの作用を起こす。

ならば、今自分は、“得た”と思えばいい。

確信を。

有効打^{ゆうこうだ}を。

「はあ……。まあ、色々大変ですけど、言わせてもらっていいですか？」

この場合は異常しかない。

アルファ ・ アリイという人物も、ティフィと名乗った女性も、どちらも異常を常とする、異形だ。

そこに“普通”という解釈はきつと存在しない。ならば。

「？」

「死んだら、許しませんから」

「……」

だって自分が殺すのだから。普通の境地で、いつか必ずアルファ

・ アリイを。

そして、

異常しかないなら。

そこには、“普通”が決定打になれるはずだ。

昨日、あれだけ夜に言われても、私は“普通”で挑もうと思う。

負ける気は、ない。

化け物さんの言動は、歪で、だからこそ、絶対に“普通”が通用する。

そう思える。確信ができる。拳が握れる。

どうにか、なる。

心は大きく揺れ動いた。そして、確実に硬く、強く固まった。だから、しっかりと自分の心を再確認するように、口を開く。

「貴方を殺すのは、私です。勝手にぶつ倒れるのも、くたばるのも、絶対に許しません。貴方の命を潰すのは、私の手だ。私以外の手で、その心臓が破壊されるのは認めません。そんな状況になったら、嫌でも心臓を再生してください」

心は絶対の自信で溢れ、思考は前進的に物事への対処を考え始めた。

そんな中、目の前の“異常”は肩を一度揺らす。

「……ハ。とんでもない執念深さだねえ」

「諦めるのは、嫌なんです。ですから、」

「解ってる解ってる。くたばらないさ。俺も、まだ諦めるわけにはいかないしな」

「それなら結構。私の理想のために、頑張ってください」

「へいへい。俺も、俺の理想のためにいっちょ頑張りますかねえ」

前方へと緩やかな歩調で歩きながら、

「誇り高く、自らが課す理想を、誉れと謳え、か」

コートを脱ぐ。ぱさりと地面に落ちたコートを見向きもせず、身軽な服装になった化け物さんは、ふ、と小さく笑い声を上げた。刀が振り払われる。薄黄色の、金色にも似た色合いの刀だ。

「借りるぜ、グズイ。理想の死守のために、アンタの血肉を」

そして、確実に笑っているだろう顔は、言った。

「さあって、理想を説きに、走ろっか」

その足は、足元の土くれを爆ぜるように吹き飛ばしながら、爆走した。

“折れようと、砕けようと、その先には”

鉄が鋼になるって事？（後書き）

おかしい部分を修正、補填文章を入れました。すみませんでした。

2011/12/26

なぜか“北東”が“北西”になっていました。その誤方角を修正。

2012/1/2

“アンリアルな戦場” リアルな戦場って何？

速っ！！

思わず唖然と内心思った。

なんとこの速さだ。一度瞬きをしただけで、いつの間にか距離が五メートル程度だったものが十メートルまで開いている。

走っている足は私の動体視力ではブレにブレ、まるで地面を低空飛行しているかのよう。

そして、僅か二秒で五十メートルほど先のティフィに接触。右手の刀が斜めに袈裟切りされる。

空気を裂くような音が聞こえるほどの速度の、神速の腕は、その延長線上の刀で致命傷を負わせんとする、
が。

「あら」

僅かな声が響き、その刀が受け止められた。片手で包み込むように、その刀を受け止める。
止められる。

「ッ」

僅かな舌打ち。だがその後の行動も即座だ。

一瞬で左腕が駆ける。殴る拳が真っ直ぐその腕を横殴りにした。直撃。

ゴキッ、という嫌に生々しい音が響き、その腕が奇妙な方向へと動く。

骨折だった。同時に痛みのおかげで手が開かれ、刀が自由に。

「
」

その刀は、その軌道のままに振るわれた。折れた腕ごと、脇から左腰のラインで刀が襲う。

親指の根元から、腕を縦に裂くかのように刃が走る。
しかし、

「ページ」

刀が肘辺りまでを切断したところで、その右腕が肩から外れた。

「
ヒュ」

アルファの、驚愕を表すかのような小さな口笛。そして円弧を描いた両者の唇。

更に、

「
変わりなさい」

言葉が流れると同時に、その外れた腕が、ひとりでにその形状を変化させた。

ぐにやぐにやと、形を正しく成さない、まるで粘土のように。

それは、一瞬で形状をウニの針のように、意思を持ち蠢くと、アルファの右腕全体に突き刺さった。その数にして数百本。

的確に、筋肉と骨の接合箇所、つまり腱と右ひじの間接部分を多重に貫く。容易に針は骨も筋肉も肉も貫き、貫通。

アルファの両の紅色が見開かれ、その紅色を怪しく発光させる。
瞳孔の形は、いつの間にか獣のものになる。

痛みが神経を通じて脳へと伝達。一瞬だが動きが止まる。

だが、彼の思考はその程度の傷では止まらない。

その一瞬の静止、僅かな時間で強く踏み込まれた左足と、それと同時に撥ねた右足。まるで警棒のような色合いのパンツを穿く黒の右足は、左足の踏み込みと腰の回した分の加速を受け、豪速で動く。狙いは一直線に、ティフィの右脇腹。

直撃。

ティフィの肉体が高速でブレ、右へと吹き飛ぶ。それにつられる動きで形状を変化させ、宙に浮いている右腕も同じ方向へ吹き飛ぶ。近くの木に、ティフィは体勢を変更する事すら出来ず、直撃。

ずばお、と水つぽく、肉と血が奏でる音響と共に右腕を貫いていた針の数々が抜ける。右腕は大量に、小さな穴が穿たれていた。

だらりと、関節と腱を貫かれ、破壊されたせいで垂れる右腕。その手が震え、刀が地に落ちた。

「っ」

痛みで顔を顰めつつも、動く。左腕がその刀を拾い、握る。

左足が駆け、次ぐ形で右足も動く。ただ、以前のような速度は出せない。唐突に右腕が使えなくなったことで、体の重心管理　バ　ランス力が崩れているためだ。その事実にはアルファは舌打ちしながらも走る動きは止めない。

二秒、ティフィが動く。その右腕の形状を巨大な刃に。全長は優に十メートルを越している。

三秒、それが振るわれ、それを左手の刀が腹の部分で受け止める。アルファの体はそのまま刃を滑らせるように前へ。

四秒、しかしその巨大な刃は突如形を変更。刃の先端がぐにやりと曲がり、アルファの背中を狙おうと迫る。

だが。

五秒、　傷が完治。そして治ると同時に、

その右腕は一瞬で腰にあるショットガンホルスターから引き抜き、握る。腕を後方へと回して構え、引き金を引いた。

首すら回さず、適当に背面射撃。
引き金が引かれた回数は二回。

ド、ドゴツ！！ そして命中。

肉を素材とした鋭い刃は、血を噴きながら刃の形状を変え、ただの肉に変貌する。あまりの衝撃と散弾の拡散範囲に刃は肉片を飛び散らして、一部を引きちぎりながら吹き飛んでいく。

当然だ。ソードオフ・ショットガンは、その銃身を短くすることで近距離での殺傷能力を高めたショットガン。絞りを無くす事で散弾は大量に拡散し、距離が縮まれば縮まるほど威力を増す。そして肉の刃との距離は僅か。当然のようにその肉は吹き飛ぶ。

ショットガンが元の場合へ仕舞われ、その右腕はまるで流れるように更に動く。

左腰の、柄の群れへと。

「行くよ」

律龍と呼ばれる、常に微振動を起こす薄い桜色の刀が虚空を振り払った。

ふむ。

さすがだと、ティフィは思った。
五秒を完全に把握している。そして、銃の構えが速い。身体的な

利を、そして元来の銃の腕前を使用した早撃ち。そして反動はあるだろうに、そんなもの無いかのように振る舞い触れた刀、
律龍。
厄介ですね、と内心呟いた。

あー、痛い。右腕の出血は異物の血によって既に傷跡をかさぶたで覆い、止血は完了。左半身に受けたダメージも肉体疲労を、脳に植えた異物の、脳の一部が分泌する脳内麻薬で誤魔化す。よって痛み問題は特になし。

痛いのがあがるが、別に気にするほどではない。私の持つ異物刻印は三つ。ドリングシステム 麻薬翻弄、ミートバイミート 肉体自由化、ブラッディ 血の性。この三つだ。あと一つあるが、これはちよつと内緒の異物刻印でもある。クラウンチップ

ドリングシステム 麻薬翻弄は、脳内麻薬を大量に分泌する事で、興奮状態による痛みの軽減、更に身体能力の一時的な超上昇。

ミートバイミート 肉体自由化は、自らの肉体を自由に切り離し、更に形状を自在に変化できる。また、外れた肉体はよく解らないが浮遊できる。ブラッディ

血の性は、赤血球を大量に生成、そして傷跡を一瞬で止血する。それぞれは大して強くない。それに一つずつでは出血や痛覚を力バーできず、役立たずだ。だが、これらが合わされば、痛みも出血も気にせずに力を振るえる。

三つ 正確には四つ クラウンチップ も異物刻印があるせいで、自分の寿命はあと二年ほどだが、どうでもいいことです、と思う。そもそも、死なずにこうして力を振るえる時点で幸運なのだから。

異物を愛するのが、私の仕事ですから。

そう思うと、やはり笑みが生まれる。

アルファ様は、走る右足で踏み込むと、軽い跳躍。足元の地面が軽く削られ、後方へと爆ぜる。

その右腕は大きく横薙ぎするために目一杯引き絞られ、腰は左側へと曲げられる。そして左腕は腰より低く構えられ、下から上へと切り上げる軌道で構えられる。

あと一秒も経たずに私と触れるだろう刀の二本を前に、思考のギアを超速で回転させる。

喰龍はそこまで危険視しなくてもいい。あれはぶっちゃけ、切れ味が良過ぎる刀と同じだ。何でも切断可能な刀。たしかに厄介だが、だからといって相当ヤバイものでもない。

だが、律龍は少々マズい。あれは触れただけで何もかもが粉々になる、刀の形をしたハンマーだ。切るというか、肌に触れただけで肉体の全てが爆砕されてしまう。そうなったら完全にアウト。死亡一直線だ。

まだ、死ぬわけにはいかない。あと二年、異物を愛して愛して愛して、そうして愛し続けて死ぬつもりなのだから。アルファ様は言った。

誇り高く、自らが課す理想を、誉れと謳え。

彼の、よく呟かれるセリフだ。そして、それは自分の理想のためだけに力を振るうという意味合いでもある。

殺人も蹂躪でも何でも行う。そう言っている。

でしたら。

私も、そうさせてもらおうじゃないか。

異物愛の理想のために、力を使おう。

だから、

「貴方も愛しましょうか……！ アルファ様っ！」

相手の顔が、うげえ、と舌を出し、一瞬で気迫ある睨む眼光へと変化する。昼間だというのに、紅の二つの光はラインを虚空に生んでいた。

綺麗、と純粹に感動。やっぱり異物は素晴らしいです、と思いつつ、宙に浮く、右腕だったはずの芋虫のような肉塊に意思を伝令。振るえ。

形は勝手に形状を、無茶苦茶なものへと変化させる。

最終的に鎌になったものは、そのまま振るわれる。
後ろから首を狙う動き。
だがやはり、

「ア、ああ！」

小さな覇気の、息混じり声がその口から出て、その右腕が振るわれる。引き絞られて弓のようになっていた肉体はその反動から開放され、一気に回転。

鎌と触れようかという一瞬の間で、体は独楽こまのように回転し右腕の律龍は横薙ぎに刃を回す。

肉の鎌が刃に触れ。

一瞬で音も無く爆発。血と肉片を大量に撒き散らし、吹き飛んだ。その髪や頬、服等、全身に粉上になった血や肉が降り注ぎ、色を主に赤い色で染めていく。

ッ。

内心舌打ち。体で行うだけの余裕は無い。そして、やはり龍王ともなるとスケールが違つと、驚きも隠せない。

ミートバイミート
肉体自由化は骨や肉や神経が粉々にされようとその形を変化させられる。だが、それには絶対の条件がある。

最低でも二十センチ立方メートルの物質であること、だ。

自立稼動でその大きさ以下になった場合は再生するが、だけどそれは時間が掛かる。つまりこの時点で右腕は役立たずになった。

眼前でアルファ様の体は、そのまま、回転のままに前へと向き、緩やかな速度で体は左むきになる。

すると、その左腕は流れに逆らわず、体の後ろへと引き絞られた。
なるほど！

貫く構え。回転の勢いを乗算した一撃を見舞うつもりだ。連動ムーブする動き。彼が最も得意とする、一つ一つの行動が次の行動へと繋げる戦法だ。特にその闘い方が魅せる、早撃ちからの瞬時の抜刀など

は、見ていて惚れ惚れとする。

だが、あとほんの僅かという時間内で、私も動いていた。

左腕を外し、それを更に細かく千切る。そして形状を盾のようにし、重ね自身の刀が当たる軌道へと重ねる。

左肩から血が噴出。それを血の性で止血。ブラッディ痛みが爆発するもそれを麻薬ドレーピングシステム翻弄で軽減。

じわりと額に汗が浮かぶが、気にしない。

そして、一秒未満で起こった攻防は、距離を縮める。

溜めに溜めた左腕が、爆発するように動く。

腕全体をブレを起こしながらも、前方へとレーザーのように、一直線に飛んだ。

音速はいつていないだろうが、それでもそのギリ手前はあるだろう速度だ。面倒くさいながら、この程度で腕は悲鳴を上げて肘が脱臼している。それもあと五秒で戻る。だから痛みは気にしない。速度だけで動く腕は、肉を突き刺すたびに妙な動きを見せるが、しかし手首を前へと延ばす事で誤魔化す。

一瞬で串刺しの人肉が完成する。貫くたびにやはり肘が悲鳴を上げたが、気にしない。

奥にティファイがない。

飛び退いている。そのピッタリと張り付く修道女の服装には、筋の浮かぶ、さつきとは明らかに大きさの違う太ももがある。明らかに服がキツそうだ。銃で撃つ事も考えたが、一瞬の何百分の一という時間で足は地面に付く。その間で刀を捨てるか鞘に収めるかしてハンドガンの早撃ちをするのは 聊ちやうが無理があった。

ドーピングか。

そういえばそんなものを二年前にも使っていた。それくらいしか使ってなかったが、どうやら今回は増やしてきたらしい。

ハ、と自然と鼻が鳴る。嘲笑だった。

寿命を減らして、

肉片がその飛びのきに合わせて移動し、刀から剥がれていく。次いで俺の右のつま先が地面に着地。

それで何がしたいんだ？

付いた瞬間、そのつま先で地面を強く蹴る。狙いはティファイ一直線。左腕の脱臼が完治するまで四・五秒。

右腕が下から上へと跳ねる。そしてその動きの際にスナップが発生、刀が縦回転で吹き飛ぶ。爆砕するブーメランはかなりの速度でティファイを狙う。右腕はスナップで刀を投てきした時点で滑らかに拳動。ハンドガンをストラップから外し握っている。

クソが。勝手に命減らして、アホじゃねえの。

ティファイは、にい、と笑うと横へ更に飛びのく。体を投げ出すような動きは、すぐに地面を転がって擦過傷と土埃で体と服を痛めつける。刀はそのまま地面を砕きながらも速度を減衰させ、十メートルほど先でようやく止まった。

痛いだろうに、その顔から笑みが取れることが無い。その瞳は俺だけを、熱っぽい愛情の籠る瞳で見ている。

吐き気を感じた。左腕の脱臼が完治するまで二・五秒。

だらりと下がる左腕を厄介に思いながら地に付いた左足で駆けつつ、ハンドガンの引き金を引く。残り十一発。左腕が完治するまで二秒。

銃弾は真っ直ぐティファイを狙うが、それは外された左腕の、今度は大きな正方形となった肉壁に阻まれる。残り一・六秒。

右足で、足の回転量で速度を出すのではなく、たった一步で爆速する方法で駆ける。そうしないと、今度は左腕が肘を脱臼させているせいでバランスを崩して、いつもの加速で走れないからだ。その

分肉体に疲労は溜まる。だが、それ……も五秒で治る。そして残り一秒。距離は約二メートルにまで縮まり、右腕のハンドガンが更に銃声を吼えさせる。一発、二発、撃った時点でストラップに戻し、左手の喰龍を右手に残り、ゼロ。喰龍でその肉の壁を貫きながら、ティフィの横を素通り。そして地面にクレーターを生みながら突き刺さる律龍の柄を握った。振り向く。ティフィはやはり笑って、俺を見ていた。距離が二十メートルほど開いたことで、両者の動きにも停止が掛かる。

「随分と、お強いですね。さすがはアルファ様。アヒリティアブローチ人間解脱クラウンチップを出来る異物刻印のように解放系の能力ではないにも関わらず、異物刻印による身体能力と銃の腕前、そして龍王の肉体の結晶体だけでよくぞここまで」

この世の人類を壊滅できるだけの力が欲しい俺からすれば、それは嫌味にしか聞こえない。

なので渋った顔で接した。

「お褒めに預かり光栄ですねえ。まあ、どうでもいいけどさ、お前、やっぱり弱いよなあ」

「あら？ 私、あと寿命を二年に縮めてようやく二つも増やしましたのに、それは幾らなんでも酷くありません？」

「二つ？ 三つの間違いだろ？」

「あらあら、バれてしまいましたか……」

これは失策、と茶目っ気を含んだ笑みで、いつの間にか腕の形に

戻り、そのかさぶたを剥がして接合された右腕を動かす。その拳動は、軽く自分の額を叩くというものだった。

純粋な疑問が脳裏を走る。荒れた息を五秒で完治した肺は、その心臓の鼓動の強さを、疲れを感じない体で不快に思いながらも息を吸う。

「痛くねえの？」

「痛いですよ？　ですけど、それも脳内麻薬で誤魔化せますので」

「凄いでしょう？」

その幸せそうに笑う姿は、現況とずれていて、どこか歪だ。

「俺とは真逆だな、お前は」

「まあ、そうですね。私は、治癒するのではなく痛みだけを断っている。対し、アルファ様は痛みを残す代わりにそれを発生させる傷を断つ」

「どっちが役に立ちますか？」

「解るかなもん。現に俺は、」

はあ、と身体の酷使による心臓のペースの速い鼓動と、疲れを感じない身体との誤差に、酷い違和感を感じながらもため息を吐く。そして、ため息を吐くことで僅かに下がった頭を元の位置に戻し、いつも通りに言う。

「心臓のバクバク音が治らない。これ、結構不愉快なんだよね。幾ら走ろうが肉体的な疲労が五秒で完治される。だけど、その代わ

り運動をするから心臓は大量に酸素を必要として、よって心臓は走った分だけ鼓動を強める。まあ？ 心臓が過労で動かなくなるとか、酷使のせいで血管千切れようと？ 絶対に五秒で治すんですけどねー」

「それって、心臓が動きを止めても五秒後には再生ってことなのでは？」

「あー、さあ？ 心臓そのものを破壊、とか脳の破壊、とかは起きてないんでね。それに心臓が動きを止めた事も無い。けどたぶん、心臓が消滅した程度じゃ死なないだろうさ。心臓破裂＝即死じゃないだろうから。まあ、首の切断でもあれば、どうだか解らないけど」

でもさあ。

と、彼はいつものような笑みを浮かべて、しかし目はどうでもよさそうに言う。

「俺、右足を一度切られたことが合ってたさあ。つまり骨を神経を肉を血管を失ったわけなんだけど、五秒したら断面から、右足が生えてきたんだよね。こう……スボッ！ って感じに。そりゃもう、断面の接合跡なんか一切無し。神経はいつも通り遜色なく繋がっていて余裕で動く。切断面が超痛かったけど、それを無視すれば、完全な状態の右足が生えてきた」

だからさー。

本当にどうでもよさそうな声が、刀を握って音を奏でる。

「たぶん、憶測だろうけど、首が切れても、五秒で再生するんじゃないかと思うんだよねえ。首から下が生えるか、胴体から上が生えるかは別として、ね」

「もし後者だったら、リアル自分の首、見てしまいますね」

「キメエ……。つか、それ前者でもリアル自分の体、見ちまうじゃんか」

「きめえ……」

「俺の真似しなくていいから」

「ばれました？ 上品に口元を隠して笑う。生まれが金持ちだから、そういうのは強引にあしらえた感が無く、板についている。」

「ハ、と鼻で笑った。」

「同じだ。自分と、同じだ。親からの傍受の結果が、違う形を成したものがいる。」

「それが滑稽で、だから鼻が鳴った。」

「何か？」

「いんや。……そろそろ、始めないか？」

「まあ、そうですね。いい加減始めないと、追いつかれますし、ねえ？」

「は？ と一瞬動きが止まり、瞬時に思考に電撃が走った。体を動かし、首を曲げて後ろを見た。シルベがない。」

「ッ！ テイファイ……！！」

見ると、ティファイがこちらに向かって、全長二十メートルの肉の刃を振り下ろしていた。大上段の一撃を、左手の律龍で反射的に受け止め砕く。

爆砕。一度真上へ吹き飛んだ肉や血の粒子は、粉塵となって舞い降りる。

二歩、粉塵のシャワーから避けるために右へ移動。思考は冷静に、心臓の鼓動はさつきとは違う重みで激しく脈動する。

「そうか……。そういう事かよ。 罔か、お前」

少し先の女は、にっこりと微笑んだ。右肩の接合部を、かさぶたで覆いながら。

「ええ。彼女は私の同僚で、^{エスケーパー}“完全犯罪”と呼ばれていますよ？ それほどの名が付く人を相手に、追う事は不可能かと」

「……“逃げ”の天才って所か」

さつき見た映像を思い返す。

シルベが座っていた形跡はあった。木の葉は僅かに踏まれたように歪んでいた。

他の形跡が何も無い。

シルベが居たという事実以外、人がいたという事実がそもそも無かった。

^{クラウンチップ}そういう異物刻印か、もしくは^{たまもの}体術の賜物か。

まあ、そこはどうでもいい。

「追えない、な」

「でしょう？ その場に何も無いのでは、逃げ道の特定すら無理ですもの」

舌打ちをする。

ティフィは笑みのまま、再生させ元の形にした右腕を、自然に剥がれたかさぶたに見向きもせず、接合させる。

「ああ、匂いなどで探すのも無理ですよ？ 彼女、そういうのも消していくので」

「……ハッキリ言えよ。どうせ、追えないんだろ？」

「ええ、そういう事ですね」

ハア……、とため息を吐く。

まあ、無理だ。ティフィの言うように、形跡が何も無いのでは、追いようが無い。

だから、そっちは諦めるとして、だ。

「あー……」

ちょっと、イライラが過ぎるよねえ。

「へえ」

律龍を地面に触れさせる。

土がクレーターを発生しながら爆ぜる。

「へえ」

喰龍が地面に切れ込みを入れる切れた断面は鮮やかだった。

「へえ」

律龍を仕舞ってショットガンを握る。一・五秒で銃弾を込める。

「へえ」

ショットガンが仕舞われ更にハンドガンを握る。

「へえ」

撃つ。

ガンガンガンガン！　　カチカチカチ。

銃弾を全て撃ち終わったところで再装填。リロード

前方に向けて撃った銃弾は全て、肉の盾が塞いだ。

「へえ……」

苛立つ。

ああ、ウゼエ。

「……これは俺の落ち度だねえ」

苛立ちが怒りに変貌し、

「ええ、その通りです。私自身は、自分が弱いことを承知ですので、ですから、今回はこのような方法を取らしてもらいました」

怒りはどろどろ煮立つ。

視界が燃えたように紅色に染まり、怒りが嫌悪、忌避、怒り、殺意……そんなサイクルを繰り返す。

「脅すってか？」

「そんな物騒ではありませんよ。ただ、入会してもらいたいのので、その入会手続きを円滑に進めるための方法です。アルファ様ほどの手^て足^だれであれば、かなりお役に立てますし」

「脅しって言うんだろ？ それを」

殺意。殺意。殺意。

よくもまあ、仕事の邪魔してくれちゃって。

依頼失敗。その一言が脳みその中を、悪魔の嘲笑付きで駆け巡る。ブチ、と脳内でそれを潰すのか、血管が千切れたのか、それともそついう類の幻聴かが聞こえた。

ブチ殺す。

この女は狂会クレイジー・チャーチの幹部格の親がいるから交渉材料に使えとか、そんな思考は脳裏かすを掠めてどこかへ飛んでいった。
んなことどうでもいい。依頼を勝手に邪魔した時点で極刑だ。
オーケー。オーケー。あー……。

「うし、決めた。裁龍でいかしてもらっ」

ハンドガンをストラップに。そして、最も長い刀を取り出す。
刃に、小さな光の線が定期的に走る、乳白色の刀。
そして、柄を握った瞬間、

「溶ける肉体。溶ける神経」

それを握る右手が、刀の柄と同化し始める。
音は無く、痛みも無く、ゆっくりと、自分の右手が八十センチ伸びる感覚がある。

二秒で、同化は完了した。

そこに、右手という形状の部位は存在しなかった。
手首から一直線に八十センチの刀が伸びている。刀の根元辺りには血管の筋のようなものが浮かぶ。

「こっからは、“龍殺し”のつもりで行かしてもらっよ」

左手の喰龍が鞘に。そしてその左手は繋がる動きで滑らかに律龍の柄を握った。

引き抜く。

桜色が生まれた。

桜と白が、左と右に生まれる。

「ティファイ、いや、龍か。」

右手は龍を切断するために使う、と」

暗示を自分に与える。

認める。いや、勘違いしてしまえ。

目の前にいるのは、龍だ。

振るう右手は、ただ『考える』だけで動く。

“切りたいから右手を振るう”、ではなく“切りたいと思った瞬間には動いていた”だ。

脳の命令が一瞬で全身に到達するのが解る。

右足。

勝手に上がり、一步を前へ。

そしてすぐに。

左足。

すぐに上がり、一步を前へ。

うん、と頷いた。

調子は良好だ。

視界内の落ち葉の動きが、まるでスーパースローモーのようにゆったりと見える。

「左手は龍の鱗を頭蓋を、全てを砕くために、ね」

そして、

「両眼の“王冠”は龍と対等に渡り合うがために、だ」

紅のラインは、傷の治癒もなしに発光する。

強く。瞳に浮かぶ紅色を濃く強く焼き付けるように、瞼を閉じてもその光を残すように。

龍の神経と結合する事で、龍そのものの瞳へと変化しているのだ。

紅色は発光し、獣の瞳孔はその黒を強く残す。

「行くぜ龍」

考えるだけでいい。

それだけで、肉体は動いてくれる。

だから、

奔れ。^{はし}

瞬間、肉体はキレの圧倒的に違う速度、回転で動いた。

振るえ。

左手が勝手に横薙ぎに動く。
龍の手がそれを止めた。^{ディスプレイ}

近くの顔は、にいいいい、と緩やかに柔軟に笑みを見せた。

やはりと、舌打ちを内心する。

蹴れ。

右足は一瞬で槍のようにその腹を突き潰す。

ドゴー！

吹き飛ぶ。五メートルを一秒未満で突き放された距離は、

追え。

やはり勝手に動く足によって詰められる。

だが、この“やはり”や“一瞬”、“勝手に”に身を思考を任せ
てはいけない。それは思考の画一化を促す。それが齎すのは、単純
な思考の完成だ。

俺には考える脳が在って、それに体を従えさせているだけ。

だから、その主導権を体に乗っ取られてはいけない。そう意識的に考える。

考える。

あの、龍が俺の一撃を止められるのはなぜだ。

そして振るえ、蹴れ。

相手は龍。この世で最強の王座に君臨している、俺が欲しいと素直に思えるほどの強さの象徴。

走り距離を詰めながら、右斜めに振るわれる裁龍の一撃を、今度はパージした右腕が粘土のような形のままに盾となる。

だが、

加速。

その振るう速度が一気に二倍になる。自身が出せる身体能力の限界を無視して、筋肉を使用しているがための加速だ。

肉が当たった部分から柔らかく歪み、そして一瞬で切断。ついでに右腕の手首が突然の速度に悲鳴を上げるが、無視。この調子だと、手首が捻挫をおこしているだろうか。

五秒はカウントしない。

思考が勝手に振り回す。それに体は付き従えばいい。

痛みも身体能力の限界も超えて、神経が肉体に命令を起こす、思考直結の行動。それがこの裁龍の力だ。

精神が正常であり、思考のギアが速まれば速まるほど、俺の動きも速くなる。

行こう。

肉が縦に切断され、血を撒き散らすのを見ながら、体を前へ。

一步。踏み込むタイミングで律龍を手から離す。そして、拳を握った。

切らない理由はただ一つ。切断しても操作されるのなら、砕いて使えなくしてしまえばいい。その砕いた部分を越して肉体操作をするならば、狙うべきは肩。なぜなら、歩行のための両足、内臓器官と脳が存在する胴体、首、頭。これらを抜けば、自由に扱える部位など両腕しかない。だからこそ、その腕を使えなくするために肩を砕く。

だから、

行け！！

一瞬で左腕が前方へと伸びる。

それは光が突き進むものと似て、ありえない速度で動いていた。

つまり、音速。

サウンドスピード
限界超過の一撃。

ディファイ
そして、龍の右肩を直撃した。

爆音が炸裂し、鼓膜が音をシャットダウンする寸前で、

「ギ、」

どちらかの悲鳴が口から鳴った。もはや感覚は鋭敏になりすぎて、解らなくなっている。

肩が砕けたのが、自分の拳の感触で解る。同時に、自身の指が何本か折れたのも解る、

ディファイ
龍が、右肩を後ろに下げるようにして、縦回転。足をもつれさせながらも宙に浮かび、一気に十メートルもの距離を飛んだ。

動こう。

前へと動きながら左手は強引に下へと下がり、腰を低くして喰龍を拾う。痛みが爆発的に生成。そもそも折れている指で拾えなどしないので、親指と掌ではさむようにして持つ。残りは五秒。だが、数えない。

ティファイは、回転し吹き飛びながらも痛みで顔を顰めている。さすがに脳内麻薬で誤魔化せるレベルの痛みではないらしい。

だがまだ死んでいない。

なら、

もつとだ。

もつと。もつと行こう。

更なる高みへ。龍を殺すことで、更なる“上”へ。
だから、

「いつつつ、」

右足は土を踏み潰し、地面すらへこませて踏み込む。腰が低く、姿勢が低く、チャージ。

筋肉が収縮し、体中に力が充満する。右手辺りの紅色のオーラも強く噴き出す。

そして、

「けえ！」

右足が爆ぜる。

筋肉が異常な動作を起こしたのが解る。蠢く感触がハッキリ伝わり、痛みが痺れにも似た感覚になる。

だが、突き進む。

一秒以下の時間でその、今では二十メートル以上ある距離が縮まる。

そして、腕がその速度の中勝手に動き、斬撃を負わせようとした瞬間、

「
アビリティアブローチ ファーストバースト
人間解脱、第一段階までを開放」

何が起きたか解らなかった。

いや、見えていた。だが、理解が出来なかった。

解らないままに、龍の左の手の平が、見えない陽炎のような、何かを前方に向けて撃ちだした。

そして、それを見た瞬間、体に衝撃が走った。前方の、光から来る衝撃。それが、超速の弾丸と化した肉体に強引にブレーキを掛け、そのまま自分が飛んだ逆の方向に吹き飛ばした。

最後に、熱があつた。

熱を左腕に感じた時には、地面を転がっていた。

な、にが。

全身が激痛を発生させ、それが裁龍によって瞬間的に脳に侵入、頭が爆発しそうになる。

その絶叫しそうになる口を、噛み締めることで我慢し、未だに回転している視界を必死に収める。

ティファイがいた。回る。土が見える。回る。血が自分の回った後

の地面に付着している。回る。ティファイがいた。笑っていた。無傷だった。回る。回る。回る。回る回る回る回る回る回る回る回る回る。そして停止。うつ伏せの体勢で、計二十回以上を回転しながら、ようやく停止した。

立ち上がろうと、右腕の腹と左手を動し体を持ち上げたとき、違和感が募った。

（あれ……）

左手と、右腕の腹で体を持ち上げようとした瞬間、スカツ、と軽い感覚があった。そして、何故かバランスを崩し、また地面に倒れた。

どういう事かと、そう疑問に思った瞬間、

ズボア！！！！

左肩辺りから、左腕が生えた。その際発した音は、酷く水っぽくて、気持ち悪かった。

そして、ようやく気付いた。

左腕を根元から切断された。

転がっている間にも、熱い激痛と、何かを無くしたような感覚があった。そして、さっき左腕を動かそうとしても、何も無かった。

つまり、そういうことか。

納得すると同時に、全身に痛みを残し、傷の疼きが無くなる。

全身の治癒が完了。

立ち上がる。まだ体中に擦過傷の感覚や、左腕の根元からは動かすたびにナイフを切り込まれるような痛みが走る。

両腕に力を込めて、膝立ちの体勢になりながら、呟く。

「気にしないで、いこーかぁ……」

喋った瞬間だ。

腹に重い感覚。

ゴッ！！ と何かが風を押す音が聞こえ、自分の下腹に何か人の肌の色合いをした、巨大な金槌のようなものが直撃し、自身の視界が急速に吹き飛ぶ。

それは、当然のようにティフィの肉で出来た槌だった。見えていたのに、目先の痛覚に脳は揺さぶられていた。

体が軽くなり、宙を舞っているのだと気付いた。

宙を浮いている時間は、一秒にも満たなかった。

そして、地面に頭から落下。

縦に回転しながら、擦過傷が大量に出来る。

ようやく停止し、縦回転のせいか崩した正座のような姿勢で、自然と口がうめき声をだした。

「ゴ、が……ッ!？」

そして、大量に吐血した。

ビチャビチャと、土が鮮血で染まる。
激痛激痛激痛。

震える右手 は刀と直結しているため、やはり振動する左手で腹を撫でた。いつの間にか骨折は治っていた。

薄い筋肉と肉の下、確実に色々なものがおかしく配置されている。ぐにぐにと押すたびに吐き気が酷くなり、痛みも増す。

やはり、と思った。

(くそ……内臓破裂かよ……)

運良く肺は生きているらしく、奇妙に痙攣しながらも息を吸う喉に、必死に従う。

視界を前に上げる。

五メートルほど先に、ティフィが微笑んで立っていた。

右腕は、ぶらぶらとイカの足のように揺れている。

その奥には、俺の元左腕が根元から切られ、転がっていた。

「……ど、という……」

「あら、聞こえませんでしたか？
ンチップ刻印ですよ？」

アフソリユート龍皮。そう呼ばれる、クラウ異物

にこりと笑う。そして左手で刃の部分を握っている、薄い黄色の刀を俺に向かつてを放り投げた。

それを反射的に掴む。だが、腕の震えがあまりにも酷く、よって仕方なく鞘に戻した。

仕舞い終わった瞬間、

待て。

今、どこに触っていた？

そして、まるで脳内で撃鉄が押されるような感覚が走り、
ハンマー

「……………グズイの皮膚か……………」

龍王の肉体を統べられるのは、龍王のみ。

つまり、そういう事だ。

ありえない話じゃない。事実、俺の三本の刀が納まる鞘も、グズ

イの骨を削って作ってある。その中であれば、律龍も喰龍も自身の力を発揮できなかった。無論、肉体と同化する裁龍もだ。

そして、

「ええ、よくお分かりで。……まあ、私が龍皮を付けているのは、アブソリュート右肘と左肘から下のみですが。それに、これは龍を使った異物刻印クラウンチップを無視できる程度ですしね。

……ミートバイミートついでに言えば、どうも肉体自由化を使って腕という形から外れると、龍皮が効力を発揮しませんしね」

でも、凄いでしょおう？

自慢げに言う、その口ぶり。自分が異物を所持し、それが龍王の皮膚である事から来る、恍惚の笑み。

腹や左肩、他にも全身に痛みだけを感じながらも、俺は齒軋りをした。

「……それだけじゃない筈だ。アビリティアプローチ人間解脱が出来るってことは、ただ単に龍の力をキャンセルするだけじゃないんだろ……！！」

「う」名答」

あっさりと、笑みで肯定するティファイ。

自身の力を、まるでマジックで驚く子供に種明かしをするかのような、大人の微笑みで恍惚と言う。

「今のは、龍王の威厳の爆発ですね。龍王という異物は、ただそこにいるだけで全生命体を平伏させる“力”が存在する。……それに指向性を持たせ、砲撃のように衝撃波として飛ばしたのですよ」

ただまあ、アルファ様は龍の象徴たる瞳を持っていますので、あまり効果がありませんが。

「本当は、首を切断、もしくは肉体を粉々にするつもりで発動したのに、何故か左腕ですもの。龍の瞳という、龍の皮膚よりも上位存在を持つからこそその耐性だと思えますわ。

やっぱり、アルファ様は素晴らしいですわね……！」

その、二年前にも言われた一言に、反応が返せない。

ゆっくりと立ち上がる体に、危機感を抱いて、焦燥感も徐々に生まれているからだ。

まず、い。

動きが鈍っている。

裁龍。これは、思考と肉体を直結する、諸刃の剣だ。

思考が興奮状態が平常であり、思考が速まれば、身体も速くなる。だが、弱気になれば、どうなるか。

簡単な話だ。

思考が鈍り、決定力を持たない曖昧な心になれば、肉体の動きも不安定になっていく。

まずい……！

そう思う時点で、既に肉体の動きは鈍っている。

心が、折れている。

何故かは実に簡単。

あの、“力”の嵐。

圧倒的なまでの、龍の強さ。

それを、まざまざと見せ付けられた。

あれが龍王。

俺が目指し、望むべき力。その片鱗。

たかが皮膚。それが起こす暴虐の波動ですら、圧倒的すぎる。それすら掴めない。

更に言えば、それを俺は扱えない。解放系の異物^{クラウンチップ}刻印ではない、それが理由だ。

ただ溶かし、砕き、肉体の限界を超え、完全治癒^{もたら}を齎す。それだけでは、あの破壊力に勝れない。

勝てないという事実がまた、動きをゆったりと、おかしいものにさせる。

「く、そお……ッ！ 足りない、ってか……！」

痛みが、今更のように全身を蝕み、それが更に思考を鈍らせる。

悪循環が、始まった。

そして、

「……アルファ様？ 種明かしもすんだことですし、割と本気で、行かしてもらいますよ？」

暴虐の嵐も、起こっていた。

見える。

さっきの肉槌が、横殴りに俺の脇腹を狙っている。

「く、そッ……！」

立ち上がれ！！

心と口で別の言葉を叫び、身体を強引に動かす。
ヘッドスライディングのように、前へと飛び退いた。うつ伏せの体制になる。

どこかぎこちない動作。そして確実に遅い動作。

ギリギリのラインを、肉槌が素通りした。

息を吐く暇すらなく、

「あら、こんなところにアルファ様が」

頭上からティファイが襲い掛かる。そのブーツの厚底が、俺の頭を潰そうと重力落下している。

チッ！！

もはや口を開く暇すらなく、横へ同じ体勢のままにローリングをした。

またも、ギリギリ顔の横に、ティファイの履いたブーツの厚底が土を踏んだ。

そのまま、刀と同化している右腕のひじ辺りで地面を強く押し、その勢いで横へ移動。ゴロゴロと、無様に地面を這い転がった。

「逃がしません」

肉槌がいつの間にか三つになって、頭上から降り注ぐ。

痛みで歯を噛み締めながら、

前へ！！

右足のつま先で地面を蹴った。蹴った勢いで肉体は前に。縦に一回転して、勢いを利用して立ち上

「ゴ、！？」

立ち上がる寸前、背中に重い衝撃。肉槌のどれかか、それともティファイか。

解らないがともかく、回転分と衝撃分の速度が乗った身体は、ろくにバランスも取れないままに前方へ勢い良く吹っ飛ぶ。

ゴリゴリと土と顔がぶつかり、耳元で音を立てる。ひどく耳障りだ。だが、それを声に出す暇も無く三撃目がやってくる。

だから、

動、けえ！

不快感で眉が歪む中、未だに土の地面を滑走していた肉体の、左腕を強引に地面と垂直に立て、身体を押し上げる。

そのまま右ひざを上げ、足が地面を踏んだ瞬間にダッシュ。

二歩目で身体を半回転。視界の、数メートル先に悠々と立つティファイがいた。

そのティファイの口は、饒舌に言葉を紡ぐ。

「アビリティアブローチ フォースパースト
人間解脱、第四段階までを開放」

直後、前方へと、扇状に地面を抉りながら進む不可視の大津波が発生。以前の、言葉だけを聞けば四倍の威力が襲うと言う事。

慌てるとかそんな言葉を思いつく前に、ティファイの言葉が発せられた時点で身体は横へ猛然と駆けていた。

走れ。

陽炎のような揺らぎを見せる津波は、扇状に近づいてくる。土が抉れ、草はその陽炎に触れた瞬間千切れ飛び、樹木は一瞬でへし折れる。

走れ。

津波は、もう近い。だがあと少しでその範囲外だ。範囲外まで残り、約五メートル。

走れ。

その五メートルが遠い。一步で土を蹴る力が増え、二歩で残りが一メートル。

いける。そう確信し、左足で地面を強く踏んだ瞬間に、

「
」

脇腹に、すぐそこにまで来ていた津波の、二次的災害である、土くれの巨大な塊が直撃した。

痛みよりも先に、僅かにバランスが崩れる感覚。そして、踏み込んだ足が、僅かに滑り、速度が二分の一にまで落ちる。

体はそのままに、顔を横に向けた。裁龍は、何もかも時間をゆったりを流れさせる。

その視界に映った全てを見た瞬間

あ、やばい。

思考は、危険な状態を鼻先数センチにすると、能天気になるようだった。

龍王の威厳が直撃した。

反射的に、左腕で首からぶら下がる十字架を覆い、庇った。覆った瞬間には、左腕の何箇所かの骨が折れた。

そして折れたと思った瞬間には、左腕の肘から先が千切れた。それと同時に、左足の何箇所かも折れた。

吹っ飛ぶ。

その虚空を舞う間に、ようやく腹に重い衝撃を感じた。口から、当たり前のように血が出る。

吹っ飛び、地面に肩甲骨辺りで落下し、バウンドする。

痛みは熱となり暴発し、そしてまた一瞬でバウンド。身体がゴム製のように、無茶苦茶に暴れながら縦回転や横回転を繰り返す。

表情は、動いているだろうか。解らない。痛みと、視界の急激なアップダウン、そして大きい揺れ。それらが脳を揺らし気持ち悪くさせる。そのせいか視覚以外の情報を丸潰しにしている。息ができない。鳩尾にも衝撃が来たのと、更に言うならあまりに身体が無茶苦茶に動きすぎて、息を吸う暇が無い。

計三回バウンドし、気がつくとも身体は横回転に地面を何十回も転がっていた。

上体を起こした。

左肘から先は既に再生し、肘より上の箇所での骨折も既に治っていた。無論、左足の骨折も治っている。

「

」

言葉が出ない。口はただ開き、激痛とバウンドによる視界のブレ、それらが起こす酷い頭痛によって息を吐き、吸うだけだった。

全身から、痛みのせいで噴き出る熱を持った汗に、ボロボロの衣服、そして土が付着して酷く不快感がする。

痛み、全身を伝う汗、震える体、未だにぐらつく視界。それらを同時に感じながら、意味も無く首をかしげた。

あー？

思考までもが、酸欠のせいかぼやけている。身体が動かない。というか、なんだろうか。ぼけっとしてしまっ

ている。

まずいなあ。

そう思う時点で、確実に何かおかしくなっている。

目は、ゆっくりと色々なものを見た。見て、現状を把握して、動こうと思った。

前方。ティファイがゆっくりこちらへ歩いてくる。

あー、近づいてきたら動くか。

そう、適度にやる気を注入しつつ、他にも視線を動かす。

右。腰にあったハンドガンは、無傷といかなくとも、ほぼ完全な状態だった。左側で衝撃を受けたからだと思う。だがポーチの中身はそこら中にぶちまけられ、もはや銃弾はほとんど無い。

左。ベルトに付属させている鞘、それに納まる刀は当然のように無傷だった。皮膚よりも上位存在だから、だろう。

胸。よかった。まだ十字架は、シルバーネックレスは無事だ。守った甲斐があった。

痛みが延々と続く左手で、後ろ腰のホルスター、その中身を少し手間取りながら取り出す。右手で取るようにホルスターが設置してあるので、どうしても手間取ってしまう。

「……うあ」

銃口が真つ二つに裂かれていた。他にもグリップ部分がひび割れている。修理は不可能だろう。使い物にはなりそうに無い。

仕方なく、横の地面に置く。

そして、

「大丈夫ですか？」

二メートル先で、ティファイが歩む足を止めた。

その顔には、余裕からか、それともやはり異物愛でか、はたまた

運動のせい、頬を緩め僅かに紅潮させた、微笑みがあつた。

息は乱れる事も無く、胸を浅く上下させる。右腕はぶらぶらと揺れるが、それすら無視して笑みを浮かべる姿は、俺と近似して異常だつた。

なぜなら、俺も今笑っているから。

小さい頃から、痛いことがあると笑みを浮かべる癖があつた。

そして、返答として、

「……おかげさまで、なッ！」

身体を跳ね起こし、瞬間的に右腕と同義の裁龍をティファイに向かつて延ばす。

ティファイの心臓を貫く軌道は、彼女の左手が刃を掴むことで止められる。

そんな事は予測済み。

ならばと左手で、逆手に喰龍を引き抜く。その動作に乗った形で、刃を上向きにその顎から脳天までを断裂する狙いで走らせる。

視線が左手に向く。そして、顔を横に逸らそうとした瞬間に、左手を開いた。

喰龍は速度のままに上へと動き、縦に回転するのを見る間もなく、開いた手を握る。

そして、超加速でティファイを殴り飛ばそうとした、その瞬間。

「二度も同じ事に」

引っ掛かりませんよ。

掴まれた裁龍ごと、三倍ほどまで膨れ上がったティファイの左腕が振り回す。

「お」

百八十度回転。そして吹き飛ばされる。
宙を舞う時間は約一秒。そして地面を滑走し、五メートルほど滑りようやく停止。

「あー……」

やばい。視界は歪み、思考は動かない。

龍王の、圧倒的な破壊。それを全身で感じていた。
恐ろしく強い。

あれでただの皮膚なのだ。なのにあれほどの威力。

悔しい、か。

自分は龍王の瞳も、肉体の結晶体も持っているのに、勝てない。
それが酷く悔しくて、そして思考の歯車に錆をもたらし動きを止める。

あれほどにキレた心も、雑魚だと思った感想も、どこかへ吹き飛んでいる。それ以外の感慨が思い浮かばない。

何も思い浮かばない。

ゆえに身体も動かない。

だが、現状把握のために、嫌でも身体を起こす。

肉の金槌が迫っていた。俺の下腹を狙う、振り子の軌道。

見える。だが、体がまったく動かない。動けと思えど、肉体の動きは緩慢だった。

そして、

「ッ、」

易々と、避ける動作の一つも出来ずに直撃。

ミシミシという音が、肉槌の直撃する間肉体を響かせ聞こえ、肋骨にヒビが入り続けている、と告げる。他にも、また腹の中身がお

かしくなるのも、解る。

感覚だけはゆっくりに、肉体はまったく動かず、その直撃に振り回された。

振り払われる。

加速が早まり、吹っ飛ばされる。

木の幹に、背中から直撃。

その幹が、一瞬で着弾地点を中心にへし折れた。

そ。

そう思う間すらなく、二本目の木が更に直撃。

○

それをゆつくりと時間を掛けて、ミシミシペキペキ……ッ、と音を立てながら、ささくれ立つ切り株にして、俺の体はようやく動きを止めた。

ずどん、と腰から地面に落ち、尻を打つ。

瞬間、口から吐血と唾液の混じる大量の液体が吐かれた。

そして、

「……つ、あ、あ、ああ、ああああ」

痛みが、今度こそ理性を吹き飛ばした。

あ。

「ああああああああああアアアアアアアアアア
アアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオ、アアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアツツツ！！！！」

絶叫が吼えた。龍なんかではなく、理想とかどうでもよく、ただ

痛みで、人間としての絶叫が木霊した。

痛い。

ハンパじゃない。

内臓は、腹部に集中するものは全てが完全に破裂。胃は胃下垂に確実に穴が開いている。横隔膜はギリギリ生きているが、それでも左側の肋骨が折れているせいで、息をするたびに激痛が走る。

痛みで、涙が視界を滲めた。

く、っそ。

痛みで苦しむなど、戦闘中の俺ではあり得ない。

生まれて、この仕事をやって、初めてここまで心が折れた。

それほどまでに、衝撃的な強さだった。

「まだ、終わってもいませんけど」

そして、俺と同じ龍王の肉体を手繰る女が、目の前に立った。

その右足が、鋭い一閃を見せる。明らかに、太もも、ふくらはぎの太さが女性のものとは常軌を逸した太さ。ドーピング、いや、エンドルフィンだったか。どっちだ。くそ、雑学くらい持っておいたほうがいいんじゃないのか。

そんな、どうでもいい思考がばやけた視界の中で動き、刹那。

左側の顔を、直に横蹴り。

「ッ

」

右方向にぶっ飛んだ。

当たった瞬間、ペキポキ……！ という音が聞こえ、口内には硬い小さなものが転がりまわるのが知覚できた。

頬骨、を砕かれ、蹴られた側の歯が何本かへし折れた、既に内臓破裂も骨折も完治している。痛みが尾を引くのが、治っているのかと真剣に疑うが、きつと治っているのだらう。

何メートル飛んだのだろうか。

解らない。数えてはいない。

ただ、飛んでいる間に口内に歯がすっかり生え揃っているとなると、どうやら五秒間は飛んでいたらしい。

そう、ぼうつと思いつつながら、地面に蹴られた逆の頬から着地。

ゴリゴリと頬を砂利で削られる痛み。そして、それが何十秒も続き、ようやく停止。

停止して、うつ伏せに近い姿勢で思う。

ああ、痛い。

もう止めたい。

理想とか、どうでもいいじゃんか。

だってそうだろう？

それなりに銃の腕前はあるんだ。傷の治りもかなり、というかあり得ないくらい速い。こんな辛い思いしなくたって、いいじゃないか。生きていこうと思えば、用心棒でもやればいい。そういうのを必要とする人々は腐るほどいる。だったら、それをすればいい。なあ、そうだろう？ 痛いなんて、嫌だし。辛いつてこれ。普通あり得ないだろ？ 人生で二度も内臓破裂をするなんて、早々あるものじゃないって。

もう頑張ったよ俺。

絶対そうだって。

だから、さあ……。

もう、いいんじゃないの？

思った瞬間、視界の裏側に、思い出す情景があった。

ああ。

これで、何回目だっけ。

全人類の抹殺を諦めようとすると、嫌でも思い出すことがあるのだ。

暗い。何も見えない。その理由を、俺は知っている。

目が見えないのだ。

昔、俺が七歳の頃に、父親の狂気っぷりに恐怖した街の人々が、爆弾を家に投げ込んだんだ。

そうして、その爆発で割れた硝子が、爆風で全方位に吹き飛び、それが運悪く両目に入って、見事に失明した。

それから、何も見えない日々を過ごして、それでもグズイとは話していた。

『なあ、少年』

なあに。

そう呟いたのは、大分昔だ。

今でも鮮明に覚えている、龍の瞳を受け継いだあの日。
懐かしい。

『君は、全人類が憎い、殺したい。……そういう、願いがあったね

？」

頷く首。

何かを喋る誰かの口。罵詈雑言。

そして投げかけられる、超越者の声。

最後に、言われた言葉。

理想を、誉れと謳え。

……ああ。そうだった。

まだ、諦めるわけには、いかないんだ。

理想を誉れと、謳っているのだから。

そして。

「まだ、謳って、やるとも……………」

諦める心に、灯が灯る。

過去の回想が勝手に脳の中を駆け、俺を強引に動かす。

立ち、

体は、

上が、

思考は、

れ…………。

動こうとする。

だが、

「ギ、が……あああ」

あまりの、壮絶な痛みに、腕を動かしただけで行動を停止する。
まだ左手が地面を、土を掴んだだけだ。その手すら、掴んだ瞬間
広げていた。

だから、ほら、諦めようぜ。痛いだろ？ さっさと狂会クレイジー・チャーチに入っち
まえよ。そうしたら、とりあえず、今は痛くなくなるぜ？

心のどこかが楽な方へと誘う。
しかしそれを、否定する声が、生まれる。

「ざ、つけ、んなあ……！！」

土を掴む手が、強く握る。そして、筋肉が骨が肉が神経が、全て
が悲鳴を上げる中、その手は、地面を強く押す。
体が、徐々に上がりだす。

「あき、らめ……る、だ？」

喉はおかしい。震えているというか、動いているのかと疑問する
ほど、出る声が潰れて嘔れている。
だけど、でも。

「力、無くて……。諦、観しないッ！ ……甘い言葉は、言っだ、
ッ！ つ、う……。……言う、だけで、結構！」

言葉が既に、支離滅裂に近くなっている。
だが。

「龍、がどつ、したよ……。そんな、ッ……！！ 程度、でっ」

それでいい。

意味が不明でもいい。

叫べなくともいい。

「い、ま。……はッ！」

とにかく、とにかく今は。

「立ち、上がった、る、のを、……やめ、ない！」

ギチギチギチギチメリメリメリメリギガガ……！！ 痛みが、
全身に音となって響きあう。

だが、それに伴って、確実に体は上がる。既に左腕だけじゃない。
右足も、左足も、手の形をしていない右手も、全てが稼動し、動い
ている。

重なり合い、意味を成さず、ただ、泣き叫ぶ。

痛い、 そう叫ぶ。

「だっ、からって……さあアアアアアアアアア！！」

だったら、思考も叫べ。

それを塗りつぶす大音響で。

絶叫。それは痛みを抑える三番手の方法。

「俺がアアアアアアッ！ 諦めるッ、理由にッ！ なるかアアア
アア！！」

そう！

「理想、……あるんだよッ!!」

そう!!!

「誓い、……あるッ、んだよォ!!」

そう!!!!

そうやって、俺の背を押す何かがある。腕に、足に、全身に力を籠らせ漲らせる何かがある。

努力とか熱血とか根性とかそんなもんじゃない。

これは、ただの、

執着心。

醜い醜い、人である証拠。

何かを守りたい、それも執着心。何かを壊したくない、それも執着心。何かと一緒に居たい、それも執着心。何かを殺したい、それも執着心。

そして、自分の願いにすぎるのも、執着心。

自分の願いに執着し続けるからこそ、貪欲に肉体は理想へと到達せんと、動きを止めない。

体は勝手に、でも思考は熱を持ち、

「う、」

左腕が、曲げているのを伸ばす。
痛みは肘を肩を襲い、動かすたびに身体のどこかの血管が蠢いて

いる。

「　ごッ、」

右手の刀が、強引に土に突き刺さる。それが、また一つの力になる。

「　けエー!!」

『……オレは、きっと世界征服してやる！　そんでもって！　お前の夢なんか無駄にしてやつからな!!』

別れの一言に、夢を投げかけたアズナ。

夕日は既に傾いている。

そして、リアも。

瞳を閉じ、そしてにっこり笑った。

黒の髪が風で揺れ動き、さらさらと黒の筋を幾重にも浮かべる、

『……私も、きつといつか、みんなを幸せにするね？　……うん。
だから、絶対にアルファに先を越されないよ』

リアも夢を言い、アズナとも違う方向へ歩いていった。

その先は既に日が落ち、コバルトブルーから黒へと、空は色を変えていた。

でも、

『……俺も、きつといつか、絶対に皆を殺す。極悪の、悪役になつて……ほまれとうたうよ、グズイ』

俺も、グズイの言つた言葉の意味も宛がわれる漢字も解らずに呟き、自分の定めた道を歩き出した。

俺は東に。

リアは北東へ。

アズナは南西へ。

俺たちが歩く道。

別々に別れ、好きだったという感情も、負けず嫌いな部分も、全てを引き摺り、そして選んだ、それぞれの道。

世界の征服は、ゆめものがたり苦難の道かもしれない。
究極の幸福は、ゆめものがたり地獄の道かもしれない。
人々の抹殺は、ゆめものがたり修羅の道かもしれない。

でも諦めなければ。

その先にはきつと。

夢が、光が満ち溢あふれている。

夢物語が、現実の伝説になるのだ。

だから、アズナもリアも、あそこまで強くなれた。
光を浴びる、あと一步のところまで、行っている。

今の俺は、光を浴びてはいない。
そこに至る、道筋を歩いているだけだ。
だから。

「通る……ッ」

唸る声に、力は漲る。みなぎ

錆びた歯車を、壊れる事を覚悟して動かすように、ギギギギギ、
と右太ももが上がっていく。

「通させて、貰おうかア……！」

体は熱い。全身が噴き出す汗に不快感を寄せる。

伸びる右腕と左腕は体を支えながらも、その汗の筋を幾重にも流
し続ける。

「まか罷り通るぜ……。ここは、まだッ、通過点でしか、ねえんだから
な……！」

生きよう。

地獄を修羅を、最悪の極悪の悪役を。
その先に、きつと光があるのだから。

理想をゴールとして、だから俺は俺の道を往く。

「……アズナ」

お前今、何してるよ。世界征服、してるか？
してるんだったら、それでいい。俺も頑張れるし、な。
太ももが、ゆっくり、ゆっくり、上がっていく。

「……リア」

お前今、何してるよ。皆を幸福にしてるか？
してるんだったら、それでいい。俺も頑張れるし、な。
太ももはようやく地面と水平のところまで持ってきた。
右足が、地面を踏む。

「ふッ」

籠^こめる。

力を、思いを、理想を、何もかもを、全て。

「アアアア……………」

ぐぐぐ、と体が、老いたブリキ人形の背を伸ばすように動く。
だが、

「ッ……！」

腹部を起点に、全身に耐え難い痛みが爆散した。

内臓破裂、肋骨骨折、頬骨骨折、左腕切断。それらの痛みが全て
脳を刺激し、上がった腰が一気に下がる。

裁龍のおかげで恐ろしく長いその、下がるという、諦めへの近づ
きの時間。
。

思考は空白になっていた。疲れでか、目は少しずつ閉じていく。

そんな中、

……？

首に、何かがぶら下がっている。

俺は首にぶら下がる重みに気付いた。

いや、何かじゃない。

それは。

それは。

!!!!!!

憔悴で半分閉じていた目が、一気に見開かれる。

左腕が自動で駆け、首からぶら下がる、十字架を握った。

親父が、笑った。口周りを血で染め、笑う。

『私を、殺すか？』

母さんを殺し、その肉を俺に見せつけ、俺に右腕を撃ち抜かれた親父。

無様だった。あれほど人を殺すのに長けた、化け物じみた親父は、どこにもいなかった。

俺の首が、縦に動く。それを親父は、ゆっくりと、その黒く濁った瞳で追った。

そして

「……ッ!!」

下がる腰は、地面に付かない。

付けては、駄目だ。

諦めては、駄目だ。

激痛が、腹筋に力を籠め、太もを支えたがために噴出する。血が出ていないのが不思議だと、素直に思った。

口から、意味を成さない痛みの羅列を吐く。

「ギ、が、ア。ああアア……お、や、じ、い……」

歯を食いしばれ。絶叫をそれで誤魔化せ。はじけ飛びそうになる理性を、声を出さない事で掴み続ける。

痛い？ 苦しい？ 涙が出る？ 死にそうなくらい痛い？

そんな、もの。

「とつくの昔に、慣れたんだよ……!!」

母親に、皮膚を削がれ夕食のおかずにされる事で。

思考は、理性を残したままに叫ぶ。

ああそうさ!!

下がる腰が、ゆっくり、重力に勝とうと動く。

俺の体中、長方形の形に皮膚を綺麗に切り取られたような傷

跡だらけだよ、くそつたれ!!

怒り。

それが痛みを抑える二番手の方法。

だったら叫ぶ。

「最悪の家庭だったさ!!」

喉が、既に嚙れた声で叫ぶ。

「出てくる肉は全て人の肉だった!!」

潤いなんて無い過去だった。

「母親はキチガイだった!! 父親を喜ばすために、俺の表皮とその下の肉を削る、最低の母親だった!!!!!!」

母さんの笑みは怖かった。いつしか俺も、その笑みを自身の表情として使っていた。

「父親もキチガイだったッ! 血だるまの人を運んでっ、肉切り包丁で太ももを笑みで切断した、頭のおかしい父親だった……ッ!」

絶叫し、吼え、咆哮し、叫び、嘆き、震えさせ空間を膨張させる。

「でもッ……」

それでも。

それでも、親父と母さんが死んだ日の親父は、

「最高だったよ!!!!!!」

『じゃあ、撃つ前にお前に、渡したいものがある』

親父はそう言うと、右腕の撃たれた箇所を押さえつつ、ふらふらと家の中の、机の引き出しを開けた。

そこから出てきたのは、銀の十字架をぶら下げた、三つの銀のネツクレスだった。

そして、無表情に銃を構えていた俺の首に、その三つのシルバーネツクレスをぶら下げた。

重みが首に、冷たさが首に。

そして、親父は、初めて見せた、嬉しそうに恥ずかしそうにはにかむ表情で言った。

『母さんが、な。昔に敬虔な信徒って奴でさ。私と結婚して、そしてお前が生まれた日、三つも持ち運んできてな。それぞれの、幸せ成就のお守り、だそうだ』

言いながら、俺の頭を撫でるのだ。

意味が、解らない。

『……いつか、こんな日が来るだろうと思ってな』

今日で良かった。

そう付け足された一言。

僅かに首を傾げた。

それを見た親父は、にっこりと、優しく強さにあふれた、父親の笑みで、俺をやさしく抱きしめた。

俺の両手で握った、銀細工の美しいハンドガンは、肘を曲げる事

で、目の前に父親の体があることで、自然とその心臓の位置に動いた。

囁かれた言葉の、優しさ。重み。悲しみ。喜び。祝福。

……全部、今でも覚えている。

『今日はな？ アルファ、お前の誕生日だよ。ハッピーバースデー、アルファ。それは誕生日プレゼントだと思ってくれ』

それは祝福。

『……アルファ、お前が息子で、良かった』

それは喜び。

『お前に母さんと私の分の幸せまで持つて行ってもらえて、本当に良かった……』

それは悲しみ。

『アルファ。私を越えていきなさい。昔母さんや私に言ったように、自分の望みを叶えなさい。せいぜい千人ほどしか殺していない私を、越えていきなさい。』

子を殺せる親は居なくとも、親を殺せる子が居る。その残酷さは、お前を絶対に負けない存在にさせるだろうから』

それは重み。

『そして、アルファという名を、アリイという姓を、誇りと思わなくとも、決して忘れずに生きてくれ』

それが 子へ全てを預けた、優しい言葉の全て。

四月二十二日。

俺の誕生日。

その日、^{親父}デュラン ・ ^{母さん}アリイとアージイ ・ アリイは、

父親として自らの息子を最後に愛し、

母親として一人の夫を愛し続け、

歯を見せる笑みで微笑みあつて、

子に、自らの残りの幸せを託し、

そうして両者とも、それぞれが各々の幸せを胸に抱き、

死んだ。

覚えている。

あの、引き金の重さ。

引いた瞬間、衝撃で僅かに揺れた重い肉体。そして吹き飛んだ殺

人への忌避感。

残ったのは、死んだ肉体が二つ。銀細工の美しい、見るからに高級なハンドガンが一丁。

そして。

たった一度だけ祝福された証拠である、大事な大事な、銀の十字架^{ント}。

バースデープレゼント

「あんのクソ親父……ッ！俺の誕生日覚えてやがったのさ！一度も、祝った事も無いくせに……！」

笑えるよ。

本当に、笑える。

だけど、でも。

「……嬉しかったんだよ……！！！！！」

声が掠れながらに震えている。何故だろうか、涙まで、零れ落ちた。視界は歪み、ぼろぼろと頬を滑り落ちる温い液体。

その震え、涙の訳。

心に染み入る、暖かい何か。

ああ、俺。

嬉しい。そう、思ってるのか。

正の感情のほとんどは壊死した俺でも感じられる、子供の純粹無垢な一言。

嬉しい。

それだけを、俺は胸の中にしまい込んだのだ。

十字架に形を、秘める過去に嬉々を。

ああ。

「本当に、嬉しかった……！」

だって、親が、自分に何かをくれた。

奪うことしかしなかった母親は、渡すための十字架を父親に預けた。

食べ、殺すことしかしなかった父親は、最後に俺を抱擁し、親らしく締めくくった。

二人はそうして、幸せそうに笑って死んだ。

それだけで、胸は暖かさを全身に広げていく。

「バカだよ、俺……」

握る左手は、十字架を強く、更に握る。

胸に触れる拳は胸中に全てを納める。

そして、理想も、誓いも、十字架もある以上、
体は重力に逆らい続ける！

バカで結構。それで立ち上がれるのなら、幾らでもバカになって親に感謝してやるよ。

ありがとよ親父！
アンタのおかげで、過去を憎んでも、過去を悔やんじやいない！！

ありがとよ母さん！
アンタのおかげで、痛みが苦しくても、痛みを克服できる……！

まだ、右足は地面を踏むだけ。左足はまったく動いていない。

だけど全てを抱えられるのなら。
歩けるのなら。

果てしなく遠い未来であれ、光をこの身体で感じられる日が来る
のなら。

もう一步を、強く踏み込めるはずだ。

何せ、俺は。

アズナとリアと、誓った。思い出を分け与えて、誓った。
その誓いの証拠は、今も首にぶら下がってる。
アイツ等も、今持っているだろうか。

理想を持った。誇り高き理想を抱き、そして誉れと謳う。
そのための心を、俺は持った。
理想を持ち、貪欲にそれに執着し続ける肉体を得た。

十字架を持った。親父が、母さんの形見も含めて、銃口を突きつ
けた俺に渡した、最後で最初の、誕生日プレゼント。

本当に、本当に、嬉しかった。狂ってる親でも、それでも“嬉し
い”って素直に思えた。そして、“嬉しい”という感情を得た。

“嬉しい”も、あの家族がくれた贈り物だったのだ。二人が死ん
だ日、俺に与えた“幸福”の導入感情。それを、俺に預けた。

“嬉しい”は好きだ。滅多に感じられなくて、そして、正の感情
が壊死しているような俺でも味わえた、そんな“嬉しい”は好きだ。
頬が熱を持って、張ったような感じがして。耳先まで熱くて赤い
のが解って。口元は緩みっぱなしになる。そして胸中の、心臓の横

辺りに、バケットに暖かいスープを染み込ませるように、優しい熱が広がっていく。そういう、純粹に“嬉しい”と思えるのは、凄いい好きだ。

そして、最強の苦痛抑制方法とは。

至極単純。

心を、陽の感情で塗りつぶせ。

例えば、“嬉しい”とか。

それがもたらす笑顔、とか。

笑え。

嬉しいと、そう思えるならば、笑え。

笑って、痛みで苦しむ箇所なんて気にせず、笑い続ける。

暗く沈むな。

絶望なんて、笑顔で吹き飛ばせ。

“笑う”事は、それだけで命に鮮やかさを吹き返させる、究極の精神コントロール法。

「今、俺がア」

貪欲であれ。

「笑っているかなんて、知らッ、ない！」

謳い続ける。

「そっじゃあ、ねえッ　　！！」

光を目指せ。

そして、そのためにまず。

「心が、笑っているっ！ それだけで、 充分ッッッ！！」

笑おう。

だから俺は、今。

嬉しさを、どこまで続くか解らない未来の果てで感じるために。
まずこの十字架を、

「握ってエ……」

思い出して。

「離さずにさあ！」

そして理想を、

「呟いてッ！」

足を震わせ、しっかり地面踏んで、バランス欠いても、地獄でも、嫌でも、苦しくても、泣き言漏らしそうでも。

それでも。

胸の中、色々納まってるから、

「全部、色々オッ！！」

“ アンリアルな戦場 ”

リアルな戦場って何？（後書き）

色々修正したり増したりしながら書いてるせいか、冷静に見ると恐ろしく辻褄合っていない部分が多々ありました。

少々それを補填するための文章を継ぎ足したりしました。

2011 / 12 / 26

“ たった一人だけの舞踏会 ”

…… お見事？

「 …… 第二ラウンド、いこうじゃなか、ティファイ」

負けねえよ。

近くで俺の奮闘を見ていたティファイは、いつもの笑みを見せる。
こちらは腹部を中心に激痛の嵐。

だけど。

ティファイも、碎けた右肩をぶら下げている。

ならば、釣り合わなくとも互角なはずだ。

笑っている。痛みを持っている。怪我を持っている。武装を所持している。

ならば、 互角！！

「 そんなぼろぼろで、立っているだけでもふらふらですのに、勝てますの？ 」

バカにしていると言うより、劣る音色と微笑の目。どうやらティファイの異物愛は筋金入りらしい。ティファイの右手にはいつの間にか喰龍が握られていた。それを俺に放り投げる。空いている右手で掴む。

「 はあ？ 何言ってるんのお前。勝てるさ」

にこお、と笑みは浮かぶ。

笑みを刻むだけで、蹴られた側の顔に激痛が走る。

それでも笑えば、痛いだなんて、気にする必要がなくなる。

笑顔は究極の苦痛抑制方法。だったら、笑い続けるまでだ。

「俺が立つと、どうなるか、知ってるか？」

「どうなるんですか？」

簡単なことだよ。

小さく呟き喰龍の前に突きつける。

刹那に走る、腕を中心とした、電気にも似た、骨や肉を内側から貫かれるような痛み。

全身が熱い汗を吹き出し、首筋を汗が伝う感覚は酷く不快だ。

だけど、激痛がどうしたよ。

俺の思考が生きている限り。

俺が理想を誉れと謳い続ける限り。

幼馴染達との誓いがある限り。

十字架が首からぶら下がる限り。

俺が笑い続ける限り。

俺が屈する事は無いと知れ。

そして、屈せず立ち上がるとどうなるか。

それは非常に簡単、そして明快。

「……本当に簡単なことさ」

左手を振り払う。喰龍の、薄い黄色が光を反射し、明るく刃を輝かせた。

その透き通る刃に写る俺の顔は、

「蹂躪が、始まるだけだよ」

歯を見せて、笑みを濃くした、自分の表情があった。
そこには、痛みによる頬の引き攣りは無い。

目の前、僅か数メートル先に、絶叫を何度も繰り返し、立ち上がった姿があった。

容姿は端麗。いつものとろりとした光ある緋色の紅玉に、白金のサラサラとした髪。右の房は龍の髭ひげのように、体の動きに沿ってたゆたう。

だが体中から、癒えた傷の吐き出した血を流し、既に服装はぼろぼろ。銃器の類は、その右腰にぶら下がるストラップに奇跡的に繋がっているハンドガンのみ。ホルスターに納まっていたシヨットガンは既に破壊されている。刀は三つ残るも、それを握る腕が使えるかどうか怪しいくらいに震えている。

「……」

「……」

私とアルファ様が、笑みの瞳で見つめあう。紅の瞳は、鮮やかさ

を華にして、私をジツ、と見る。 いやだ、これが愛の芽生えで
しょうか……。

そう、思わず見つめ返して頬を紅色に染めていると、

「ウッ……」

と唐突に顔を俯かせ、

「オゝエゝエゝエゝエゝエゝエゝエゝ……」

透明な胃液と血液の緋色を混ぜた液体を、吐き出した。

「……………」

吐瀉物が地面を跳ね、血の赤が色を染め、胃液の無色がぬめった
光沢を齎した。^{もたら}

ゲロであつた。

そして、色々吐き終えたアルファ様は、ふう、と息を吐き出すと、
腕でその口周りを拭った。

顔を上げる。その右の長い房は、いつも通り緩やかに揺れていた。
こちらをさっきの強い眼光灯る熱い視線ではなく、どんよりと陰
りある暗い瞳で言う。

二日酔いしたオッサンの目だった。

「すまん、もう一回出るわ」

オ（以下略）。

しばらくして、また、ふう、と息を出して腕で口元を拭う。

顔を上げた。やはり右の長い房は、いつも通りだった。ついでに瞳はさつきと同等に暗かった。

口元から笑みが消え、眉をフラットにして、顔を血の気の失せた青にしている。

「……内臓破裂したのを、傷だけ完治するもんだから、う」

「ヲ」「あー！ 聞こえない聞こえない！！ 聞こえませんよ
「……」エエエ……」

「……まだ、なんか腹に奇妙な感覚あって、さあ……色々気持ち悪い……。痛いのは笑えば平気だけど、吐き気ばかりは……。二日酔いだけ味わって、酒を味わえないなんて最悪……」

「そ、そうですか……」

どう見ても未成年……。犯罪じゃありませんでしたっけ。

思う眼前、酒好きのアルファ様は、ようやく吐き気も治まったのが大きく息を吸うと、笑った。

目尻を僅かに下げ、瞼は少し薄められ、口元は緩やかに上昇している。

「だがまあ、おかげで色々目エ醒めた。……こつからは、“龍殺し”は無しだ」

言った瞬間、形状を変化させていた右手が、ずるりと乳白色の刀と離れた。肉が蠢き、手首から先が出来て、いつの間にかその刀の柄を握っている。それが、鞘に戻った。

「いいんですか？」

「何が？」

「それが無いと、確実に負けますが？」

少し遠くの笑みが、私の一言で深まった。
さもおかしそうに、眉を立てて、くつくつと笑う。

「……さあって、どうだかなあ」

「随分強気ですね」

「ああ。……あー、そうそう。これは言っておくぜ」

「？」

ヒュン、とその手に握る刀が動き、切っ先を私に真っ直ぐ向ける。笑みのまま、眉が強く、以前よりも高い角度になる。

「俺は負けないし、これ以上、今のお前の前では、地面に倒れない」

「……」

「これは、強情だからとか、絶対に負けられないとか、死ぬ気で頑張るとか、根性論とか、熱血とか、……そんなものじゃない。確定事項だ」

その、確信溢れる言葉。

……一体なにが。

さっきの絶叫からの立ち上がりで、パワーアップしたわけじゃないだろう。ただ、折れかかった心が逆に硬く、鋼になった。それだけの筈だ。

なのにそう言う。

「……解らないか？　すげえ意味不明って感じの表情してるぞお前。……じゃあ、解りやすく言ってるよ。俺が勝つ。お前は負ける。これは、絶対の事実だよ、ティファイ」

「かなり、お花畑な思考になりましたね……」

純粹な思考が、言葉となった。

か、可哀想に……。

これはなんというか、思考が一巡しちゃってパーになったとかそんな感じだ。

だが、私の哀れみの視線を笑みの目で返したアルファ様は、手をひらひらと振った。

「好きに言いなつて。勝てた人間が正常になるんだからな。歴史つて、そういうものだったろ？ まだまだ通過点、だったら楽しく罷り通させてもらうとするだけさ」

不思議と言葉は、力を充満させている。

空気の質が変わっている。今日出会ったときからの殺意や快樂といった感情が無くなり、まるで親友と仲睦まじく談笑しているかのような、そんな心地よい空気になっている。

笑みに、敵意を感じない。

それは純粹で素直な笑みだ。虐殺的な感情にも値しない、笑顔。子供が好きなものと対面しているときに見せる、純粹な“嬉々”の感情が呼ぶ笑み。

ほお。

その笑みは、確かに現実を見ている。だが、確実にその先を見ている。

未来。自らが描く究極ひとひとりいないの理想世界。

それをその紅玉は、見ているのだろつ。

だからこそ、強気ですか。

そして、そうだからこそその折れない心。

「……まるで、漫画の主人公ですね、アルファ様」

「どーでもいいっつ」

「え？ でも知りません？ アルファ様、同人誌とかでよくホモキャラで登場されてますよ？」

「ツツツ！？ ごぼっ！ ゲボア！ ゴボオ！」

アルファ様が、身体を曲げて大きく噎せた。
そんなに驚くことだろうか、と首を傾げていると、その噎せた息を直すように、大きく深呼吸する。

「すうー……、はあ……。よし、心拍数は平常、脈拍もオツケー、汗も驚きで出るとかは無い。よし、俺はへーじょーしんで動いている。オーケーオーケー……」

身体を真つ直ぐにし、私を強い眼光で、しかし頬から汗を一筋流しながら叫んだ。

「は！？ い、今何て言った！？ ホモ！？ 誰が！？ 俺が！？」

「いや、私の同僚……。ああ、エスケーパー完全犯罪”の彼女のことですが。彼女が見せてくれた奴だと、アルファ様、町ぶつ壊してそこに住んでたBoyをbedにpushしてexciteしながらhardでhotでsweetなnightを

「やめろおおおおオオオオオオオオオオオオ！！！！　つか
フザけんな！！　誰だそんなの書いてるのはア！　真っ先に殺すぞ
オラァ！！！」

「え？ 主に全世界規模で私達や他のサークルの方々が。あ、

『アルファがGo!!』の最新作である八冊目はどうやら兵糧攻めで飢えている状態のアルファ様が食っては銃でズドンして、食っては刀でスパンするとかで、そりゃもう凄い暴走するらしいですよ?」

「テメエら! テメエら!! 言わせてもらうがそのタイトルは何も上手くねえからな!! 大体何が“Go!!”だよ! お前それどうせ“イク”とか書きたくなかっただけじゃねえか!!」

「いやまあそうですけど」「認めちゃうんだ!?!」「ですけど……割と業績あるんですよ? オスカルダや“西”で開かれるコミケだと、アルファ様を知らない人間はいないかと」

「誰か !! ここに犯罪者がいまあ すう!!!!!!」

「……顔が良いんですし、尚且つ有名なので、まあ仕方が無いと思うべきかと」

「絶対許さない……!! “西”も! お前らが裏で操ってる、オスカルダも! 絶対に! 絶対エツツ対に許さないからな!!」

「そう言われても。 私も手伝ってますし」

「肩竦めんな!!」

そこで会話が途切れた。

風が一陣、二人の間を流れた。頬を撫で、髪が揺れる。アルファ

様の白金色の右房が、瞳の緋色と合わさり龍の尾のように揺れる。

「……そろそろ、世間話もお終いにするか」

「……ええ、そうですね。いい加減、始めましょう」

シャア、と、真ん中の鞘に納まった、桜色の刀が引き抜かれる。そして、左手で構えた。

両足を肩幅ほどの広さに、腰は落とすこともせず自然体。背筋は緩く曲がり、リラックスしていると見える。

「構えないんですか？」

「これで結構なんでね」

短い言葉。もう既に、空間が戦闘モードにシフトしている。始まりますね。

右腕は、肩が砕かれ、動きようがない。また、根元から完全にやられているために、ミートバイミート肉体自由化によって動かすのも難しい。というか痛みがハンパない。ドーピングシステム幾ら麻薬翻弄で騙していると言っても、限界はある。正直、動かしたくない。

アブソリュート龍皮がある以上、右手でも龍の威厳は発せますからね。

別に構える必要もなく、前方に向けて飛ばそうと思えば出来る。ならば役には立つのだ。

だがともかく、今の私に使えるのは、左腕のみ。その左腕を、ミートバイミート一度肉体自由化の能力で切断し、ブラッディ血の性でかさぶた生成。そして左腕を巨大な剣にする。全長五メートルほどか。

「……俺にはそれ、通用しないぜ？」

「^{アブリュート}ですが、龍皮の龍物質遮断能力と、龍王の威厳の爆発は、凌げませんでしょう?」

笑みだけが帰ってくる。

「どうやらも、本当にこれだけでいいようですね。」

ならばと、私も笑みを返す。

そして、両者の準備が整い、

「では、行きましょうか……!!」

肉の剣が、何かに押されるように、空を弾き飛ぶ。

縦の軌道で振り下ろされる肉の剣。

それを、ワンステップで軌道から外れた白金の青年。

だが避けられる事は予測済み。

曲がりなさい!!

瞬間、肉が軌道を変え、形を緩く湾曲させながら移動先に振り下ろされる。

足の動きは、やはり痛みが引きずるのか遅い。まるで滑車でゆっくりと滑っているかのような動きだ。

直撃、する筈だった。

「……?」

なんだ、今の。

脳内で、映像を再生する。

確かに当たるはずだった。

なのに、相手の移動先に合わせて曲がった剣が、何故か避けられた。

一歩が歩くような歩幅で踏まれ、更にもう一歩が踏まれた。

そんな単純な話だ。

だが、

嘘でしょう？

あり得ない。

速度がおかしい。

歩くようなスピードで、走るよりも確実に速い速度で振り下ろされた剣に勝てるわけがない。

ならば何故。

そう思う間にも、

「ぼーっとしてんなよ？」

アルファ様が、ゆったりとした歩調でこちらに向かって歩く。

舌打ちを一つし、軽く後退。そのまま、剣を振るった。今度は剣

そのものを槍投げのように前方へ投げた。

腹を狙う真っ直ぐな投擲は、

「よ」

軽い一声と共に、斜め前への進み足で避けられる。

やはり、歩いている。歩いて避けられる速度ではないのに。

？

今、何か違和感を感じた。歩くというのは相当な違和感だが、だがそれ以外にも何か、小さな違和感を。

駄目だ。大きな違和感が小さな違和感を掻き消していて、その先が見えない。

だが、アルファ様が近づいてくるのを見て、慌てて思考を動かす。槍の先端が曲がり、背中を鋭い切っ先で狙った。だが。

「ずばーん」

ふざけた言葉ついでに、体が右方向にターン。回転する体にあわせて、右の房が踊り、右手の薄黄色が地平と水平に回る。

背中を狙っていた肉が、半分辺りから横に真っ二つに断絶。そのままの動きで、彼は私のほうを向いた。

やはり遅い動き。だが、的確な動き。

疑問は膨れ上がるが今は、

蠢け。

その二股に分かれた切っ先を尖らせ、今度は生物的な動きで迫らせる。

一つは脇腹を。

一つはわざと迂回し彼の前方の空間を。

後退しようとするれば脇腹を狙う肉が襲うし、前方への空間はもう一方が牽制をしている。

肉とは逆方向に逃げようともそれを逃がす私ではない。

……。

心は、じつとりと疑問で濡れている。背にも鈍い流れの汗が浮かび、身体が危険信号を鳴らしているのが解る。

見極めるべきだ。

アルファ様がどうやって避けているかを。

彼は既に動いている。

右足が半歩を前に。そしてそれに合わせた右手の喰龍は、前方の空間を突き刺そうとしていた肉槍を貫く。鮮血が噴き出し、だが肉

槍は止まらない。生物的な動きで軌道を変え、真正面から心臓を突き刺さんと動く。

しかし彼の動きも止まらない。突き刺した刀を下に振るうと、その行動の結果前かがみになった体の縦軸を、右へ曲げた。結果、その肉槍の先端は虚空を通過していく。

刹那、

「舞おう」

爆速で急遽加速した左手の桜色が斜めの軌道で、通過した肉槍を砕く。それにあわせ、身体は回転を始める。

だが、碎かれる前に、肉槍は二十センチの限界で千切っていた。だから、まだ生きている。

肉の槍のもう一つが、回転することで背中を見せたアルファを肉槍の腹で横薙ぎに吹き飛ばさんとする。

「踊ろう」

しかしそれを見ていたかのように、回る身体に振り回されるようにして右の薄い黄色は動き、切断。だが、切断面はすぐさまにその上から槍を生む。

アルファが一回転し、同時に前面からの双方の槍が目前に。それを右手の律龍が一直線の軌道で碎いた。

「背中があつて」

その口は、まるで歌でも歌っているように、鼻歌交じりの言葉を紡ぐ。その間にも身体は動く。動き、身体を揺らしながら腕を振るい、その二つを操り、碎いて千切る。

動きは、ターンとステップ、軽い前への踏み込み、遅い前進。そ

れが生じる突きと袈裟切りだけだ。

だが、

「止まって、ない……！？」

まるで舞っている。オリジナルの舞踊のように、キレを無くした流動的に無限の繋がりを見せる動き。

荒れた大地をステージに、風の鳴りをBGMに、木の葉の落ちるのを背景に、踊っている。

片足を軸にターン。それに合わせて腕が踊り、水平にになる。そしてその延長線上の刀は碎くか溶かす。

逆の足が地面を踏み、ターンは逆方向へ。

「身体があつて」

降り注ぐ陽光は冷たさを残す刃を、振り抜かれる軌道に合わせ光らせ、桜色の輝きと蜂蜜めいた薄い黄色の彩色で、世界に残滓を残す。

「腕があつて」

身体がうねり一步を前に出すたびに、その周りを血と粉塵が舞い、光はそれすら反射させ、彼を彩る。その中には白金の髪が靡き、右のひと房は楽しそうに揺れる。

瞳の飲み込まれそうな紅が、血の赤を伴って、赤色の舞台を生み上げる。

「足があつて」

それはまるで、龍が濃い夕焼けの天空を、身体をうねらせ動いて

いるかのようだ。

美しい。

素直にそう思った。

「自分がいる」

砕かれたり千切れたりしても、自動で復元されていくために、肉の槍の二つは減らない。ただ血だけは噴出していき、地面に吸い取られるものもあるために、徐々に減っていつているが。

しかし、

このままじゃ埒が明きません！

しかも、着実にアルファ様の踊りはこちらに近づいてきている。右手を使えばいいが、

今の現状では、不可解な点が多すぎます。

不確定材料は、それだけで危険を呼ぶ。

だからこそ、

「増えなさい……！」

二つを四つに。

四つを八つに。

八つを十六に。

これ以上はできない。それに、数を増やしたがために、平たい、紙のような薄さの杭となる。

だが手数は一気に八倍。

一気に、全方位から針のむしろにする。そのために、立体的な配置で一点へと飛ばす。

だが、

「龍らしくあろうよ」

いつの間にかその、突き刺すべき場所から前へと移動している。こちらへ、アルファ様は二歩目を進んでいた。

「ッ！」

一気に三步を後退する。

なぜ避けられるのですか！？

焦る思考。その思考で、その背中を突き刺せと命令を出す。だがやはり、

「人らしくあろうと」

止めのない動きで、滑らかに身体がスピン。回る体は背後の槍を視界内に収める。

二刀が切断と爆砕を繰り返す。

「願ったつけ」

頭上から来る肉の杭を、回る肉体に合わせ、振り上げた桜色がそれを破砕する。

「願い」

瞬間には、その流れで身体を右方向に九十度曲げ、右腕はそのままに動く。他にも頭上から来ていた杭を破砕。更には左腕が駆け、その軌道上の杭を切断。

そのまま右足の踵を軸にスピンの起こり、突き、貫き、一閃し、回転が終わりすぐさまステップ、一步を前に、すぐに後ろに、そしてまた突く。

「殺したつけ」

意味を成しているようで成していないような言葉。それと共に起

こる舞踊の剣戟。

ムーブアタック
連動する動き。

その圧倒的な強さを、目の当たりにしていた。

そしておそらく、その紡がれる言葉は、

自分を、自然体な状態に持つていくため……？

書類の片づけ等の、あまりやる気の起きない仕事に、自分の好きな歌を鼻歌交じりで口ずさみ、思考を空にして作業的な行動を繰り返すのと似ているか。

だとすると。

「今は、ただただ流れに沿って動いているだけ、と言っているのか……！！」

何も考えず、空虚に平静すぎる心で動き、障壁を壊していく。

無茶苦茶だ。あまりに無謀すぎる。

一歩間違えばその動きには淀みが流れ、確実に動きは遅くなる、空っぽであるからこそ、何か別のものが入り込みやすい。そして、淀みがなくとも、その行動で肉体を貫く杭の群れを相手に出来ているのがおかしい。一つ選択を、動きの流れを間違えるだけでその肉体は全身を杭だらけにする。

しかし、その瞳は、

「誇ろっ」

意思を持ち、すべてを見ている。龍眼の瞳孔でなくとも、しっかりと、全てを睥睨していた。

「ッ！」

その、まるで次元すら違うかのような真紅の光を宿す瞳に、身体が震えた。

この震えは……！

死体の龍王を見たときと似ている。あの龍は、確か死亡したのは今から七年ほど前。なのに腐^{くさ}ってもい^いな^なかつた。

その異常さ。異物の王であるという事をまざまざと感じさせる、腐敗しない超越的な姿。

異物愛を自負する私ですら、怖気^{おそ}だった存在、
龍王。それを、少し先の少年に感じた。

人の身でありながら、霸王の王冠を握^{にぎ}った少年。

その王冠は、無機質に紅色の光を発している。そして、両腕は桜色と薄黄色の王冠を見せ付ける。

「凄い……！！！」

肉杭を破壊していく姿を見て、そう思う。
そして、見て、気付いた。

？

「自分を」

言葉と共に動いている。いや、動いているのは、

杭^{くい}の何れかが、動いた瞬間？

まさか、と思う。

「そこに残す そのために」

そして、嘘でしょう？　とも。

初速の段階で身体を動かしているというのはつまり。

「　全ての動きを見切っていると、そう言うのですか？！」

あり得ないと、ティファイは考え結論を出す。だが、現実はそのようにしている。そして、それならさっきの回避も頷ける。

初速の時点で動いていれば、それは与えられる行動に、大幅な時間をもたらす。ならば、余裕で避けられるだろう。

しっかりと見れば、杭が振り下ろされると同時、その足は必ず動いている。

杭は切断され、再生し、碎かれ、再生し、尚も貫く。

確かに、単純な動きだ。だが、

無理に近い所業ですよ……！？

杭は時折、二つを一つにし、攻撃の途中で融合し、槍となって動く。更に、動きを追随させ、曲がったり直角の動きも見せる。そんな、途中から動きの変わる攻撃を、一体どうやって見切っているのか。

剣同士の戦いで、相手の身体全体の動きを見て、一瞬で判断し動くのとは訳が違う。人の身体は、動作の途中で動作自体を切り替えるのが難しい。速度が、ブレーキを掛け一瞬で変えるために、比例した分の膂力を必要とするからだ。

しかし今、彼が対峙してるのは、人の肉体からはなれ、命令一つでどんな動きも見せる異形。骨や神経といった物質は碎かれようとつなぎ合わせ、大きさに制限はあるが、幾らでも分離できる。そんな異物を相手に、見切るだなんて、武道の達人でも難しい所業をこ

なせるのだろうか。

いや、ですが……。

彼の瞳は、通常時でも音速を捉えるらしい。いくらそれに肉体が追いつけなくとも、目では追える。そして、彼の動きは常にレールチェンジの可能な舞踊。

見切りじゃない。

これは違う。自分の考えを、一気に変える。

見切っているのではなく。

生まれた結論を、しっかりと確認するために口を開く。

「全てを見て、動きに合わせて自身の流れを調整しているのですか……！？」

解りやすく言えば、相手のステップや足の踏みに合わせて、自分の動きも変えていくような、そんなダンス。ただ相手にあわせ、自分を透明化させ、合わせ続ける、味のないダンスだ。

だが、それ故に、絶対にミスがない。

だって、楽しんで踊っているのではなく、ただ肉杭達に合わせしているだけなのだから。

「問うよ」

だからこそ、その剣戟にはキレもなく。

「何のためか 知らないけれど」

だからこそ、その動きには流動しがなく。

「それでも 問おう」

だからこそ、彼は表情無き顔のままに言葉で遊み^{すさ}。

「俺は 龍だろうか？」

動き続ける。

アルファは踊っていた。一人、舞踏会を作り上げ、そこで踊っていた。

音は軽やかに風と葉の擦れる音が。

華やかさは刀の織り成す光のラインが。

そして共に踊る相手には、肉杭が。

「残念 知るわけがない」

十八になり、十一になり、肉槍になり、肉のツタになって自分へと向かう。

それを、相手の動きだと、勝手に思う。

自分の身体を、動く足であり繋ぐ手だとも、勝手に思う。

更に、主導権は自分ではなく、勝手にこちらに手を伸ばす相手にあると、思い込む。

全ては思い込み。

そら、右上方から、相手^{肉杭}が手を取りに来ている。

「だけど 言えることはある」

言葉と共に、動く自分^足。軽い右へのステップついでに振るわれる

左腕。横薙ぎの払いは、拒否の一言。

だが肉杭は、動く視界の中で、突如軌道を変えた。

おいおい、胸に手を伸ばして何したいんだ。

思いながらに右腕を振るう。左腕の払いの隙間を縫うように、突きの行動。

蜂蜜色が真っ直ぐに駆け、肉杭と衝突。肉杭はそのままのスピードのせいで、半溶けのバターのように滑らかに真っ二つになった。

「まだ遠い　と」

ステップを踏んだ右足の爪先を基点に、右足を右に左に動かしつつ、そのまま横へと僅かに移動。迫る肉杭はその行動のついでに右へ左へ揺れ動く左手に、碎かれていく。

右の房が遠心力で揺れ、右に、左に、毛先を踊らせる。踊っている。

それは自分で、でも自分じゃない。

言葉は心に思ったことの吐き出し。

声に出す事で、心を空っぽにし続ける。

疑問は言葉に出して今は忘れる。

そして、ただ踊り続け、前へと行き続ける。

自分はただそれだけをする、ダンスマシーン。

そう思い込むことにした。実に自分勝手に。

「だから往こう　望む場所に」

流れる声に、木の葉のカサカサ、空気のざわめき、それを断裂し鳴る刀。

「謳って　往こう」

前へと足を進め、見えた杭は払う。

「見て 上ろう」

言葉は徐々に、形を成し、自身を作り上げる。

「理想を その果てを」

歩き、呟き、説く。払い、払っても立ち上がる相手に、払いの手を当て続ける。

「そしてお前は」

否定しようと、拒絶しようと立ち上がり、再生し、こちらに向かってくる相手。それに告げる。

「所詮通過点だ」

頑なな払いの言葉を。

……！！

マズイマズイマズイ。

距離を詰める速度が、段々と速くなっている。もう、五メートルあるだろうか。

速度はキレのないままに速まり、常に身体はしなり続けている。

回転、前進、軽いステップ、そしてまた前進。

そのたびに腕は動き、しなうて肉を破碎し切断する。動きは全てが繋がっている。

止まらない。

別になんら特別な行動はしていない。だが、その全ては無駄がなく、ただただ動くだけ。

本当に、人間に可能なのですか……？

「行くよ」

それはもう、人の動きではない。徐々に形を変え、どこまでも無限に動き続ける。筋肉繊維のみで作られた人型のようだ。

関節という解釈が存在しないような腕の蠢き。まるで背骨が一本の柔らかい棒のような、柔軟な腰の使い。踊る龍の一房。無機質な緋色の輝き。

「歩く先に 見えるのだから」

生々しく、流れに逆らわず、ただ肉杭達を触れさせない。そのためだけの動きが、進むと言う行動を得て、更に加速していく。

前に出した足と共に揺れ動く肢体。だが逆の足が後方へ一瞬で動き、引つ込む動作を見せる。それに吊られて左手の桜色は優しく切り払う。迫っていた肉杭は碎かれる。

右足を前に。横に身体を揺れ動かし、右手が真一文字の横薙ぎを見せ、今度は左足が左に出され、また身体は横に揺れ動く。

絶対不可侵領域でも見ているかのように、その身体には何者も触れられない。

「光が其処に あるのだから」

更に二歩が踏み込まれ、四メートルほどになった時、慌てて後退した。

どうしますか!?

心に疑問をぶつける。答えは『困惑』しか返ってこない。

今のアルファ様は、以前の力をねじ込むような動きではない。傷を無視した動きでもない。

ただ“進む”ためだけに、障害をすり抜けているだけだ。その“進む”ことは、どこまで先を言うのか、自分では解らない。

危険だというのは、解る。

どうしますか。

迷う。視線は、一瞬ぶらぶらと揺れる右腕の、右手を見る。

縫合の跡は袖に隠れ見えない。指だって、そこにあるのは人と同じ色の皮膚だ。

張り付けた際、龍王の皮膚は、純白だった。ホワイトパール。そう許容できる色だった皮膚は、いつの間にか自身の皮膚と同色と化している。

染色しているわけではない。異物が自身の肉体と同一化したのだ。ともかく。

どうする。思っ間にもアルファ様はこちらへと、じっくり、確実に進んでいる。

どうする。

足は動き。

どうする?

腕が振るわれ。

どうする……?

彼は無機質な瞳を私に向け。

どうする……!?

向けた瞳は。
ど、

笑んだ。

恐怖が全身を走った。

眉を僅かに上げ、口角を上を持ち上げ、薄く歯を見せる。

何故笑える。

笑うという行為が、現在起こっている不可解な状況を加速させ、怖気立つ。

これは、圧倒的な勝者の浮かべる笑みだ。

嗜虐的でも、憐憫でも、蹂躪でもない。

ただ、勝ったという、等身大の喜びを噛み締める、幸せの笑み。
私が負けている、そう言いたいのですか？

確かに押されている。だからといって、自分には龍皮アフソリユートがある。

なのに何故、勝者の笑みが浮かべられる。

疑問と不安で揺れる心は、彼を見る。

白い頬に、血が飛び散り赤い染みを生む。それに見向きもせず、
ただ腕を動かし、足を進ませ続ける。

嘘。

踊っていない。

ただ前に、前進。

「何故……！？」

驚きは声となり、疑問は彼にぶつかる。
右の房が圧で揺れ、そして。

「 答えようか」

身体を反らせ、避け、軌道を曲げた肉杭を右手の刀で切断。
歩く。

その行動の中で、俺は笑う。

「舞踏会はお終いさ」

何故なら、

「飽きたし。そもそも、追いつけないからな」

数メートル先のティファイが、啞然と口を開けたままにする。

いいねえ。

乗ってきた。

つまらないダンスは終了。

ここからは、

「蹂躪だ」

だから。

呟きながらも、緩やかに歩く速度は上がる。

「来いよ。皮膚と王冠、どっちが強いか、試してみようじゃないか」

挑発する。

いけるぞ。

これは勝てる。

何しろ確定事項。

そしてここはまだまだ通過点。

ならば意地でも通る。

越えさせてもらおう。

「本気ですか……？」

ティファイは、汗の珠を頬に滑らせつつも、笑みで目を細めた。

「龍王の皮膚程度、障壁なんかにはならないと、言わしてもらっ

だから来いよ。本気の一撃、向けてみな」

「……了解しました。危険分子も多いですし、妙な強気も、嫌な予感がしますが、撃たせてもらいます。本気の、第十段階まで」

解りますよね。

ティファイは、やはり同じ笑みのままに、自分の言う事が絶対の事実だと、そう思い込むように確認のための言を口から流す。

「以前の二・五倍。運が悪かろうと運が良かろうと、触れた瞬間、肉体は粉碎されると思ってください。」

そして、以前のような動きの遅い扇状ではなく、一直線のレーザーのようにして、相当な速度にて撃たしてもらいます」

言葉は、眉を僅かに上げたものにして、呟かれた。

「アヒリティアプローチ テンスバースト
人間解脱。第十段階までを開放……！！」

そして、ゴ、とも、ガ、とも聞こえる音が一瞬で鼓膜を破壊し、痛みの中、突っ走る。

走り、肉杭の全てを無視する。どうせ龍王の威厳に吹き飛ばされるだろう。

アルファは両刀の内の、右手に握る喰龍を、走りながらに真っ直ぐ槍で貫くように構えた。

「オオ……！！！」

既に言葉は聞こえない。何しろ、両の鼓膜は潰れている。五秒経ったとしても、どうせまた潰される。耳の穴から温い熱が流れて髪を濡らすが、気にしない。

ともかく叫んだ。叫ぶように口を開いて舌を動かした。

息が吐き出され、時間は音速の域にて動く。

前方五メートル先に、以前とは比べ物にならないほどの揺らぎがある。

それは、触れるだけで草木が消し飛ぶほどのものだ。以前のように、折れるとかじゃない。粉末状になって、消え失せている。

空気がその揺らぎに押され、爆風が起き、それが前方から身体に衝撃を与える。

「右の龍は何もかもを溶かす　　ッ！！！」

五メートルは、踏み込まれる二歩で一メートル五十にまで縮んだ。三歩目、右足で地面を押しつぶすように踏み、力を込める。

一秒の百分の一の時間で、両者がぶつかる。

右手の先の刀が、揺らぎに触れ、差し込まれる。

揺らぎの突っ込まれた場所が溶ける。

そして、アルファはその手首を右に九十度、スナップを利かせて曲げた。

当然、その延長線上の刀も曲がり、

揺らぎの一部が軌道を捻じ曲げられ、一部が千切れ、吹き飛んだ。

は？ とテイフィの顔が、自然に、疑問で傾いた。その両耳は、アルファのように鼓膜を潰され血を流している。

やはり、とアルファは心の中で確信を得る。

以前、第四段階での一撃を喰らった際にも、この三本の刀、それが納まる鞘は無傷だった。傷ひとつない姿。それは、龍王の威厳が通用しないという事。

それは、喰龍、律龍、裁龍の三つの刀であれば、龍王の威厳を切断可能という事。

揺らぎは空気の層ではない。龍王の威厳という、視認不可の陽炎のような物質。だったら、いける。

喰龍に切断できない物質は存在せず。

律龍に碎けない物質は存在しない。

いける、アルファは再度確信する。

アルファはティフィの呆然の表情をいつもの笑みで、揺らぎの奥に見ながらも、動く。

左手を動かす。突き込む動き。

触れた部分から徐々に、揺らぎが砕かれていく。

「左の龍は何もかもを砕く　　ッ！！」

そして、その揺らぎにぶち込んだ左の刀の後ろ、　　左手を斜め左下に振り下ろす。

砕かれ、強引に刀の腹に押された揺らぎの一部が千切れ、地面に直撃。陽炎は地面を二メートルも抉り、消える。

振り下ろす事で空いた左空間を、揺らぎが補い、進む。アルファの左肩を襲わんと。

だが、アルファの動きは振り下ろした時点で動いていた。

曲げられた手首の形のままに、右手が横薙ぎに、左へと駆ける。

「ウラッ！！」

喰龍の腹は、切っ先から剣身の半分までを、揺らぎで覆い、そしてそのまま左方向に吹き飛ばす。

左方向の空間に在留する全てが粉碎され、だがアルファは無傷。そのまま、左足を僅かに進ませる。その速度は相当に速い。ゆったり走ってる暇がないのだ。

僅かな時間　一秒以下　で揺らぎは前方を覆い、更に襲う。

喰龍でそれを、返す動きで跳ね飛ばそうとするが、

「　　ッ！！」

その刀の腹に、その奥の手首に一気に重い圧が爆発する。目が見開かれ、笑みの目は焦りの目になる。

だが、僅かに下がった頭の、唇は音無くし、超高速で動く。

誉れと謳え。

瞬間、焦りの感情は消え失せ、誇り高き龍と成り笑む。

自分は何だ。

思いながら、腕全体に掛かる、一トン超の重圧を、奥歯を噛み締め一部をひび割れさせ砕き、右へと振り払う。

揺らぎが吹っ飛ぶのを見ようとせず、更に襲ってくる揺らぎへと向かうため、左手を貫く挙動で、手首を左に回しながらぶち込む。

手首は揺らぎに触れた瞬間重くなり、捻挫を起こし、それを直す五秒後は恐ろしく遠い。

それだけじゃない。全身は、今までの痛みで苦しみ、汗を噴き出している。その汗に爆風が入り込み、酷く心地がよい。

誓った。

そのために、律龍を、

「ア、ア、ア」

握る手首を、上へとスナップさせる！

揺らぎは頭上三十センチの位置を跳ね、後方へ行った。

下の空間の揺らぎには、右に振り払いの軌道途中の喰龍を、腕の

筋肉を行使し真つ二つに断絶。

柔らかい肉を切るような、それでいて空虚な感触。

揺らぎは舌が真ん中から縦に裂かれるように、二つに分かれそれぞれがそれぞれの方向に吹き飛ぶ。

「ッ、ラアッ!!」

揺らぎの残りはまだある。秒数換算で、約十秒。

その奥のティファイは、歯を噛み締め、こちらを睨む。

動けないのだろう。それは、何となくだが二回目の威厳の爆発の際で理解していた。

そして、

謳い続ける。

だから右足を、一步前へ。それと連動させて、切っ先を揺らぎへと向けた喰龍で、足場の揺らぎを切っていく。

切り払い、動く。

一步。

口は自然と動いていた。

「

」

何を喋っているのか、聞こえない。

だがそれでもいい。

何故ならその口は、

俺は、

笑っているのだ。

右手が横薙ぎに動き、空間を、陽炎の揺らぎを吹き飛ばす。
その吹き飛んだ次の瞬間には揺らぎは空間を詰める。そこに喰龍
を突っ込み、手首のスナップで綿飴わたあめをそつするように千切る。
千切り、二歩目。残り八秒。

「
「
ティファイが何かを叫ぶ。生憎、読唇術は持っていない。
だから行動で示す。
千切り、また千切り、三歩目。残り五秒。

「
なぜ
「

一瞬、鼓膜が治り、だがすぐさま轟音によって潰された。
俺は、意味も理解できないままに、

「
とおる
そのためだ
「

ただ喋った。
何を喋ったのなんて覚えちゃいない。
意味不明の言葉だったかもしれない。支離滅裂で無茶苦茶な言葉
かもしれない。

ただ、言う。それだけ。
そこに行動の結果なんて必要無い。
四歩目。残り四秒。

既にティファイとの距離はあと三メートルほど。
遠い。だが、威敵の爆発も収まってきている。
いける。

そう思いながら、足を前へ、進める。

ティファイは、小さな頃から、親の教育の基で育った。

気がつくとも、異物の素晴らしさに憧れを抱いていた。親の洗脳だとも思うけど、でもその本心は事実だった。

そんな人生は、やはり普通ではないのだろう。だから奇異の目で見られた。

仕事柄、よく出張する事が多い。そのため、行く先々で自分の素性を知らない人から何度か求婚されたけど、全部跳ね除けた。

興味が無いのだ。人には、興味が無かった。自分が結構な美人であるのも知ってたし、だから、求婚されるのも仕方が無いのだろうと思っていた。

今までの人生であつたのは、痛みと、苦勞と、それでも残った愛情だ。

別に不満も無い。

だから、アルファという十八かそこの少年とであつたときは、驚いた。

美しい顔。それを塗りつぶす勢いで紅い瞳。そして瞳孔が変化し、龍眼になったとき、これだと思えた。

私はこの人を愛そう。

そう思った。

だから、彼の龍眼を見ることは、自分にとっての愛情になった。

結婚したい、はさすがに行きすぎだから、とりあえずいつものように「好きです」と言ったら「気持ち悪い」と言われた。

さっくり失恋した気もするが、諦める気も無かった。

だけど自分の愛情は、やはりどこかおかしいのだろう。

私は、彼の瞳が見たかったのだ。美しい、紅光を発する、龍の瞳

孔。それが見たくて見たくて、それを愛情だと思っている。

望むということは愛情だと、自分は思うから。だから私は、彼の瞳を見たかった。

やはり、自分は普通ではない。

おかしいとは思っても、それでも。

往こう。

揺らぎを千切った。

まだ遠い。

歩いた。両腕は必死に前方へと、もがく様に振るって、揺らぎ無き空間を強引に作っていく。

だから往こう。

残りは三秒。距離を詰める速度は速まる。

死ぬわけにはいかない。

残りは二・五秒。足の速度は更に加速する。それに乗じて、腕の突き刺し払い、ぶち込む動きも加速する。

光を見ていない。

「
見たい。」

「
足は既に、駆けている。遅く、でも、歩いていない。腰は低く、身体を折り曲げ、入り込む空間を少なくして、必死に腕で掻き分けていく。」

「
だから理想を謳う。」

「
残りは既に一秒。ティフィは、いつの間にか一メートルの所にいた。」

「
そして、鼓膜が治った瞬間、龍王の威厳は消え失せた。足が、重圧を失うことで、一気に爆発するように駆ける。」

「
ッ！！
アビリティア
人間解」

「
ティフィが、舌打ちのような言葉とともに、笑みを眉間に皺を寄せたものし、また更に龍王の威厳を行使しようとする。」

「
だが、そんなことはさせない。」

「
駆ける足は、一步で剣の間合いにまで距離を詰めた。」

「
白金の右の一房は圧で揺れ、まさしく龍の尾のようになる。」

「
右足が踏み込まれ、」

「
理想を謳い」

「
同時に腰が左に捻られ、」

「誉れと叫び」

すぐさま右手が上がり、

「
龍と成す」

振り下ろした。
斜め上段の一撃で、ティフィの身体に、ざんげき斬撃が入り、軌跡に沿って、血が飛んだ。

雪。

それが、何も見えない自分に感じられた。

ああ。

これは、二年前の、アルファ様との出会いか。

「……綺麗、ですね」

初めに言ったのは、そんな言葉。

アルファ様は、そうかい、とだけ呟いて、戦闘を始めた。
戦闘になった理由はなんだったか。

確か、私が酔った中年の男性数人の囲まれていて、どうしたもん

かと悩んでいたところに、突然飛び蹴りが入ってきて。

その飛び蹴りした本人もべろんべろんに酔っていたのですけど。酔った目で、千鳥足で、中年の男性達をボッコボコにして、まあ当然中年の男性達も反抗するわけで。

怪我を負った瞬間、その瞳が龍の瞳孔になった。その後は、まあ自分は仕事という理由で、彼と戦闘をして。

そうして、二年前は敗走し。

今回も負けた。

でも、それでも私は　。

光が、暖かい。

「……」

意識の覚醒を感じて、瞼を薄っすらと開ける。

後頭部には、小さな砂のようなものが当たる感触。体は、どうやら地面に仰向けになっているらしい。そして、右の側頭部には鈍い痛みがある。

そういえば、切られたすぐ後に、頭にハイキックが来ましたっけ。

だから自分は、気を失った。

負けたのだと、今更のように思った。

でも。

それでもいい。

見れたのだから。美しい紅玉を。二年前は圧倒されて、すぐに逃走したからちゃんと見れなかったが、今回はかなりの時間を見れた。

もう満足だ。

もう死んでもいい。

思い、充実感を体中で感じ、口を笑みに持っていたところで気付く。

誰かが、自分のすぐ傍に立っている。

誰だろうか。脳震盪を起こし、ちゃんと機能しない思考では、そして逆光の当たる姿では、誰かが判別できない。

だが、

ああ。

死ぬのだと、何となく思った。

何故なら、その人の右手には、ハンドガンがある。そのハンドガンは、光で、その銀色をきらりと煌かせた。

銃口は、しっかり自分の眉間を狙っていた。

眼を向けたことで、その引き金を引く指先の動きが、止まった。

口を開く。口内は、粘つく粘液と、乾いた喉奥で、不愉快だった。

「
ねえ

」

聞こえているだろうか。ちゃんと、声は出ているだろうか。鼓膜が潰されているせいで、解らない。

その人はこちらを見ているだろうか。それも逆光のせいで解らない。

「
わたし

あいせましたか？」

」

誰でもいいから、死ぬくらいなら、言いたい。その人の記憶の一

部にでも居座れば、それでいいと思う。そんな風に思うのは、やはり末期を誰かに見ていて欲しいと、そんな願望があるからだろうか。

できればアルファ様だといいなあ。

死ぬというのに、暢気に思いながら、目を瞑^{つむ}った。

両腕を動かそうとして、右腕は肩が酷く痛んだ。砕かれていたのを今更のように気付いた。

だから、左手だけを上げた。いつの間にか、左腕は、左腕の形になっていた。肉体自由化^{ミートバイミート}の自動修復だろう。よく頑張ってくれた、そう、心で謝辞を述べた。

血が無さすぎて、ガタガタと震える手を、自分の腹に置いた。掌は、痺れの感触ついでに、切られた服と、その下のかさぶたのある肌の感触を、頭に伝えた。

惨めな姿で死ぬのは、何となく嫌だった。

口を閉じた笑みを、唇で描いて。

「しあわせてしたよ」

「

視界は瞼で覆われながらも、光によって黒の中に、熱のある赤を浮かばせて。

「いろいろあつて」

「せ」

陽光が、全身の痛みに、和らぐ暖かみを持つてくる。

「あいせましたか？」

「そつだいいのですが」

「

「

何となく、眼を薄っすらと開いて。

「あ」

「

雲が太陽を僅かに覆い、光が薄くなった。そこには、紅色の瞳が、鎮座していて。

「あかい　　め　　みれてよかった

」

そこにいたのは、アルファ様だった。違っても、そう思い込むことにした。

ああ、良かった。

そう思えて、幸せだと、そう思っ

て。やっぱり、死にたくないなあ。

できれば、アルファ様と一緒に、生きてみたかったり。

でもまあ……。

彼に殺されるのなら、それでいいか。

幸せが全身を包む中、ティファイ・アルマスクは、色々なことを思い出した。

生まれは豪奢な家。

幼少期は家の中だけの生活。

異物は凄くて、だから真剣に懂れて。

そうして出会ったのは、龍王の瞳を持った少年。

強かった。凄く凄く、強かった。

カッコいいなあ、なんて思ったりもして、好きだと気付くのに時間は要らなかった。

逆境にも負けずに立ち上がった。そういう部分も素敵だと思った。

苦しんでも、笑った。

同じだと思いついでに、愛した。

「
」
「
」
そうして、これが走馬灯か、と思って笑い、

銃声が鳴って。

「……んー、君は、ちょっと難しいなあ」

その頃、別の山道にて。

シルベは欠伸をした。

気がついたら、腕を縛られていた。ついでに足も縛られている。

気がついたら、でしたね本当に。

一瞬で視界が真っ黒になって、何も見えない所に、気がついたら担がれていて、気がついたら両手両足を縛られていた。

そんな状況が既に一時間ほど続いている。

芋虫のような体勢となった私を、誰かが担いで運んでいる。頭を背中の方にされているので、誰かは判断できない。ただ髪がセミロング程度の長さで、そして肩の丸み具合や肩幅の小ささ、それと背の低さから女性だと言うのは解った。

定期的な振動と、体を動かせないというのが不快で、だから思考をいつもよりも動かし、目で景色を見続けた。あつ、あの桜綺麗！。

どうでしょうか……。

最初こそ暴れたが、まあこの芋虫のような状態では逃げるのは普通に無理だ。もしかしたら化け物さんのほうがマシだった気がする。比較対象が最悪だと思っ　わー、あの花綺麗！。

焦る思考はどこかへ飛び、暇つぶしに見ている景色が面白い。わあ、あの鳥可愛い！。化け物さんというとき色々衝突が多すぎて、景

色を見る気力も無かったがために、新鮮な気持ちが心にあった。

気楽ですねえ私。

さつき「どこに連れて行かれるんですか？」と聞いたら、「セルク街です」と律儀に敬語で言われた。目的地も解っているせいで、もはや観光気分。

わぁ！ あのお花畑凄い綺麗ー！！ ひょー。

という内心思った風景に、自然と頬が緩んで口から声が出た。

「きれー……」

すると、

「少し休憩しましょうか？ まあ、手足を縛ったのは外せませんが」

律儀な、硬質な響きを含む、大人っぽい女性の声が聞こえた。

「あー……」

どうしようか。この女性、凄い親切。化け物さんなんか比じゃない。

そう思い、お願いしますと、そう言おうとしたとき。
む。

トイレに行きたくなった。冷静に考えると、昨日の夜から行っていない。

思わず、両の太ももを擦り合わせてしまつと、クス、と笑う声が聞こえた。

「休憩しましょうか。あ、ポケットティッシュならありますけど」

疑問ではなくなった。悟られた！ と思わず顔が赤く熱くなり、

「はい……」

と了承の意を告げた。

両手両足を縛っていた紐が外され、雑木林の中で、こそこそとし
終わり、ふうと息を出す。

後ろを振り返ると、自分のなんやかんやが見えない位置に、しか
し視界内に収められる距離に、その女性がいた。微笑み、手を小さ
く振ってくる。

明るい茶の髪はセミロング。瞳は色素の薄い青で、歳は二十ほど
だろうか。

ティファイという女性のようにシスターの格好ではなく、Ｔシャツ
にニットパーカーを羽織り、下はジーンズ。スニーカー。春の季節
に合った軽装だ。ただ、腰のベルトに付属しているホルスターの中
の拳銃と、その逆の腰にある、鞘に納まる刃渡りに三十センチほど
のナイフが物騒だった。やっぱり普通の人には見えないなあ、と暢
気に思う。

危害らしい危害が、両手両足を縛られるだけだ。だからあまり敵
愾がいしん心も感じない。真剣に化け物さんよりマシに思えてきた。

立ち上がる。すると、

「もう、宜しいですか？」

首を回すと、近くにその女性がいた。頷き、その顔を見る。
化粧らしい化粧はしていない。ただ、作り笑顔がある。

テイフイっていう人とは少し違う。

あの人は、本心から笑っている。化け物さんも同じだ。だが、この人は、嘘の笑みを浮かべている。

違和感、とでも言えはいいのだろうか。そんなものを感じるのだ。あのシスターの人も、化け物さんも、村の皆と同じように、純粹に心の底から笑っている。喜の感情で、笑っているのだ。そういう笑みは邪気がなく、だからこそ人としての綺麗さを感じるのだが。

この人、違う。

そう、違和感。邪気だらけの笑み。無邪気な笑みを見続けていたせいだろうか。この人が浮かべる笑みに、言い難い違和感を感じる。笑みに怒りと憐憫を感じるのは何故だろう。

憐憫はいい。自分の境遇を、哀れんでいるとでも思えば納得がいく。

だが怒りは何だ。誰に向けた怒りだろう。

もしか、化け物さん？

そこまで考えて、心の中で疑問を払い消した。

考える必要は無い。

他人の内情に入り込むような真似は、あまりしてはいけない。失礼だと思っからだ。

「……どうかしましたか？」

数秒の思考だったが、しかし無言で黙っているのが不思議だったのだらう。こちらを小首を傾げ、やはり笑みで見てきた。

「あ、いえ。その……、お名前、教えてもらってもいいですか？」

このまま「この人」という呼称でいるのは面倒だ。ついでだと思って、尋ねる。

目の前の女性は、おや、と口を小さく動かし、少し恥ずかしそう

に後頭部を掻いた。

「私、言ってますでしたか」

「え、ええ、まあ」

「それは失態」

茶化した拳動で、額を軽く掌で打つ。そして、チロ、と舌を出して笑う。

そして、僅かに頭を下げて、こちらに右手を差し出した。

慌てて、握手が来るとは思わなくて 右手を出してしまい、

「……」

小さな沈黙が生まれた。顔が、カァア、と赤くなるのが解る。

それを、目の前の大人は、くすくすとおかしそうに笑って、右手を下ろし、左手を出した。そして、下げる事も逆の手を出す事も思いつかなかった自分の右手を、優しく握った。暖かい熱が、手を伝って感じる。

うわ、凄い大人……！

大人だ！ と素直に思い驚いた。こういう、自分より他人を優先できるというか、世渡りが上手というか……、ともかく、目の前のこの人が大人に見えてきた。出来た性格だと思う。年下の自分にも敬語で接してくれるし。他人行儀といえはそれだけだけど。

そして、

「初めまして。私はエルト。エルト ・ ダロルリード。……シルベ ・ イルタリネさんで、宜しかったですよね？」

「あ、はい！ え、えつとー……短い間ですけど、よろしく願います。エルトさん、でいいですか？」

握られた手は離され、大体同じくらいの背のエルトさんは、にこやかに笑った。

「いいですよ。別に、敬称なんか」

「い、いえいえ。年上相手にはきちんとした言葉で話せと、村の皆から言われていたので」

言った瞬間、
ッ。

心が小さな軋みの音を発した。小さく、下唇を噛む。
村の皆から言われていた。

既に、自分の心の中では、過去形の話なのだろうか？

……死んだ。

それを否定するのは、難しい。
だから過去形なのか。それは嫌だと思う。ずっと進行形でいいと、そう思った。

過去の話になんか、したくない。
認める。

もう皆死んだのだ。

あの村は血と硝煙と蛆虫が残る、廃墟と化した。

それは認めても、だからとそれを、過去形の話にしたくなかった。
ずっと覚えてる。

色々なことを、忘れたくない。

だから褪^あせない。

忘れそうになったら、嫌でも皆の笑顔を思い出せばいい。

決して、忘れない。

強く、僅かに下を向く視界の中で、拳を握る。小さな拳で、力もあまり無いけれど、それでも握る。握った拳の内に、全部を掴んで。

「……」

それを、エルトさんはただ静観していた。無言で、自分の前に立っている。頭を撫でるとか、何か言葉を言うとか、そんな事を一切しない。

その、何もしないという気遣いが、心を楽にしてくれた。

中途半端に気遣いの言葉を投げかけられたって、被害者の心には塩を傷口に塗られるような思いしかない。ハッキリ言って、そういうのをされたら凄く不愉快だと思う。

そういう事を、他者の心に勝手に土足で入り込むような輩は、アルファ・アリー一人で充分だろう。

涙は出ないし、悔しさで視界が滲むとかも無い。

ただ、忘れないと、そう思った。

昼を僅かに過ぎた太陽は、高く高く、大地に立つ自分を照らして、空に在る。

「……」

さてどうしようか、とアルファは悩んだ。

周りを見渡す。ティフィは眉間に風穴を開け、安らかな表情で死んだ。俺が撃った。

愛せましたか、ねえ。

愛せてたんじゃないのか。一方通行だったけど。

人は。

人はやっぱり、死ぬときは皆幸せに死ぬのだろうか。
俺の親父や、母さんのように幸せそうに笑って、死ぬのだろうか。
俺はまだ死にたくない。死ぬつもりも無い。だから、解らない。
それでもティファイは、笑って死んだ。

俺が死ぬときに、俺は笑ってるのかね。

死ぬ時、俺は自らの理想を、果たせているだろうか。
そうしたならきつと。きつと笑える。

笑って、死んでもいいと、そう思える。

まあそれはどうでもいい。

問題は、だ。

「……コートとザックに、ポーチの中の弾丸、あとソードオフ・
ショットガン。……相当な痛手」

げんなりと、今現在の問題を呟く。

コートや弾丸、銃については買えばいい。ソードオフ・ショ
ットガンはその小ささに見合わず、改造銃のために高価だったりす
るのだが、まあ金自体は気にしなくてもいいだろう。基本、金に興
味が無いので溜めてばっかだ。たぶん間に合う。服もぼろぼろだが、
それも買えばどうにかなるか。
ただ、

「ザックがどつかいったのは痛いな……」

やれやれ、と頭を小さく左右に振った。

あの中には、旅をする過程で必要だと思えるものが入っている。
保存食、寝袋、ライター、森等で捕まえた野獣を食べる際の塩やこ
しょう等の調味料。他にも色々、突っ込んである。
それが全部どつかいった。

腕を組んで、目の前に広がる、凄惨な山道を見た。

もはや平地の道など存在せず、起伏の大きい、扇状に挟れた場所がある。木はへし折れ吹き飛び、草花はどこにも無い。掘り返された土は黒く、表面の茶色の土との奇妙なグラデーションを引き起こしていた。とくに、ティファイが死んでいる場所辺りは酷い。地面は二メートルから最大十メートルまで抉れ、土以外は何も無い。木や草といった物質全てが粉末状に破碎され、どこかへ風に乗って飛んでいってしまったためだ。

当然、ポーチの中身もどっかいったし、コートはなんかボロツボ口の黒い布きれが少しあるだけだし、ザックは完全に行方不明。

「……どうするよこれ」

残りの道程は、約二日。食料も自給自足と来た。死ぬ事は無くても、空腹は感じる。

なんだか段々、イライラしてきた。

酒が飲みたい。

こう、焼き鳥と一緒に酒をくいつ、と。ビールとチーズなんかもいける。……うあー、飲みたいよお。

セルク街に到着したら、とりあえず弾丸と服、あとはできればシヨットガン。絶対に酒を飲む。

迷って、立ち止まっても仕方が無い。酒が待ってるし。

やれやれと、ため息を吐いて、ぼろぼろの服装のままに歩き始めた。

目指すはセルク街。市長、ウェッド・アルケオに依頼失敗の旨と、再依頼の旨を伝えたら、その後に自棄酒やけざけでも飲もうと、そう思い、足を動かした。

そうして、それぞれはそれぞれが、二日の道程を往く。
邂逅は無く、ただ前へ進み、色々なものを引き摺って。

「始まるね」

何が、と問う者は存在しない。

「全部が壊れていくよ」

誰も“其処”には居ない。

「キャストは五人、脱落者を省くなら四人」

ただ、言葉は流れる。

「一人目、
“初祝”^{カース} アルファ ・ アリイ」

空間を満たし、飽和せずに消えていく。

「二人目、
“断罪”^{ジャステイス} シルベ ・ イルタリネ」

其処を其処と定義するには、彼女が居る事が必然だった。

「三人目、
“破滅”^{バッドエンド} エルト ・ ダロルリード」

彼女はただ一人、椅子に座り、笑う。

「四人目、
“悪人”^{ディア} ウエッド ・ アルケオ」

頼杖をし、ここから先に続く世界がどうなるのか、高揚を感じながら、呟く。

「五人目、
アニユージュアル “親愛” テイファイ ・ アルマスク……は脱落したんだっ」

目を閉じて、胸辺りの強い鼓動を感じながら、彼女は笑みを続けた。

「ようやく廻りだすよ。グズイの後継者と、彼に乱された因果律の
見せる、舞台が」

回転しだす。

錆を付けたまま、ゆったり、ゆっくり、ギチギチと音を立て、廻る。

そうして歯車の中心に位置する龍王の瞳は、それを持つ彼は、何を見るだろうか。

“ たった一人だけの舞踏会 ”

…… お見事？（後書き）

はい、つーこって折り返し地点です。

こっから一章は、伏線っぽいものを回収したり、シルベの村の秘密を暴いたり、他にも色々、します。気がついたら戦闘だらけでしたというのは、うん、実際気付いたらそうなっていました。

最後まで見てれば解りますが、自分、相当サブタイトルで遊ぶの好きです。ええ、はい。二章から也相当に遊びます。ええ、はい。

どいう風に一章を終らすのかも頭の中で完成しているので、できれば一月の中旬までに一章の後半を半分ほど完成させたいですね。

2011/12/26

“全部一体誰のせい”

さあ？

セルク街。

大陸の中心から少し北東にある都市国家。^{ボリス}半径二キロの、円形の小さな街。

しかし、賊に対抗するために、その周囲は十メートルほどの塀があり、街と外とを繋がらせているのは一つだけの門。

街内では市警が存在し、銃器を所有している。どこの街でもあるようなりボルバー式の拳銃のみではなく、重火器の所持も認められた、“軍”と言っても過言ではないレベルの警察だ。

また、十七代目市長ウエッド・アルケオの前代、アロルド・アルケオ前市長が定めた新法律により、街内での犯罪を犯したものは、その全てが家族ともども流刑という事になっている。

これは、アロルド氏の代の前から、セルク街内には、相当な数の強盗、殺害事件などが発生しており、その撲滅のため、しいては治安の向上のためと、セルク街の史書に記されている。

四月二十日。午後六時ごろ。

小さな部屋だ。

左右でツインのベッドと、その間に置き机。机には引き出しが一つ、鏡台、冷蔵庫がある。部屋の入り口のすぐ側面にはユニット

バスがあつて、洗面台も付属している。

それでも私は、最初にこの部屋に入ったとき、ベッドというものがふかふかしていてぼよんぼよんで気持ち良いなどと思ったが、エルトさん曰くそれが普通なんだそうだ。ついでに、こういう、そこまで高価じゃなく、観光目的ではない宿の事をシステムホテルと言うらしい。確かに、必要な機能だけを組み込んだホテルだ。

そして、自分が窓があり外の景色を見れる方のベッドで、エルトさんは入り口の方のベッドに決まって、既に二日。つまり二日をこの宿で過ごしている。

宿からは出るなと厳命されていた。だから自分は、一度も入り口に近づいた事が無い。言いつけを守る犬みたいで何だか嫌だったが、腰にあるナイフと拳銃が物騒だったし、だから素直になつておいた。

銃も、武器も、もう見たくない。

弱気になる心を、強引に強気になる心で押さえつけ、消した。

まあ、窓の外の景色を見るのは自由だったし、それに外の世界は初めてだ。興味津々で見ていたのだが、五分で景色が変わらないことに気付くと、ベッドでゴロゴロするしかなかった。つまり暇だった。

退屈、などと思わず口から漏らしたら。

エルトさんは「ですよ」と苦笑した。

そうして夕方になるまで帰らないのだが、帰ってきてからこの街特産のお菓子や売店の食べ物を持ってきたのが、今回で二回目。

まあ、言いようによつては餌付けである。

そうして今は、セルク街の歴史を教えてもらっていた。

エルトさんの、はつきりとした硬質な声は室内に響く。

「犯罪者の親族も含めた完全流刑という法案に、反対はあつたものの、施行してからの治安の良さに結局は全員が納得し、そのため今代のウェッド氏になつても、その法律案が廃止される事はない。」……中々、独裁的な街ですね、シルベさん」

エルトさんが持ってきた、セルク街の史書解説本を読み上げ、私は頷いた。

「……そうですね。だから、街の中が平和なんでしょうか」

ちらと視線を、ツインベッドの奥にある窓に向ける。ガラス製の窓は開けられていないが、それでも外の風景を見れた。

丁度、夕焼けが落ちる頃合だった。その風景の左端には大きな堀があり、その中には区画整理された家々が並び、少し遠くの主街道^{メインストリート}では商いで生計を立てる人々が様々なものを売っている。その全てが夕焼けに照らされ、森の木々の緑が朱色に燃えるのとはまた違った色の美しさがある。

「でしょうね。ここまで特殊な法案があつて、そして平和な街は珍しいですよ。でも、年表を見るに、法律が施行された直後はまだまだ犯罪が絶えなかったようですよ？ ですがそれも、十四年前に起きた強盗事件を境に、根絶しているようです。」

つまり、十四年間、一度も犯罪が起きていないんです。相当に平和な街だと思いますよ」

私が視線を戻すと、隣のベッドに腰掛けるエルトさんは、やはり嘘の笑みを浮かべた。

いい加減、慣れましたね。

この街に到着するまでの二日と、ついでにこの街に来てから二日。その間をほぼ二人だけで行動し、会話している。その間何度も嘘笑いを見えていて、だからもはや慣れた。

「そうですね。……エルトさんは確か、ここから大分西に行ったほうの街に、住んで……？」

あ、い、いやっ……！」

あ。

言ってから、しまったと思った。この、エルトさんの過去を掘り返すような話の振りは、まずい。

だが、こういう経験が少ない私ではどうしたらいいのか解らない。肩がこわばり、親の大事なものを壊してしまった子供のように、心臓の鼓動は不味い、大きなものになる。

だから、

「あ、え、えつと、ち、違うんですっ！ 私は、あの、ですから……」

と、意味の無い言葉を舌を噛みながら繰り返してしまう。エルトさんは分厚い本を傍に置くと、気にするな、と手をひらひら振り、微笑んだ。

目を、置かれた本に向けると、

「ええ、そうですよ。まあ、今はどうなっているかは知りませんが。全てアルファに壊されましたから」

笑みのままに、憎悪の言葉が吐き出された。

その言葉は平淡で、感情の籠らない、軽いものだった。

しかし内容は残酷だった。エルトさんの過去を思い出すたびに、心は狭く、自分の悲劇は酷く小さかったのだと思い知らされる。

彼女、エルト ・ ダロルリードは現在の年齢が十九歳。

そして六年前に、彼女が住んでいた町の住人、五百人余りを全員殺害されている。

たった一人の少年に。

二日前の話だ。

エルトさんが、夜中になって唐突に言ったのだ。

寝袋に、両手を縛られたまま入れられた私のすぐ隣で、同じように寝袋に入ったエルトさんは、言った。

『……シルベさんは、似てますね』

誰と？ と無邪気に聞いた自分は、きつと馬鹿だ。

聞かなければよかった、とは思わない。

ただ、現実残酷だと、そう思った。だから、尋ねてしまった自分は、きつと馬鹿だ。

やってしまったんですよ。

他者の心理に土足で入り込む事を。

それは、化け物さん一人が行えばいい所業なのに。

何も悟れない自分は子供で、十五歳で、だから馬鹿だ。

そして、訪ねた先、エルトさんは、こちらに背を向けながら言った。

『私と』

そこからは、昔話のような口調で、何もかもが蕩蕩と語られた。

そこまで大きくなくて、でも、割と普通の規模の都市国家があった。

たんです。

その町では、皆が皆、家族のようなものでした。

誰かと誰かが結ばれたなら全員が祝福し、二人が手を繋いで道を行けば、それを見た全員が祝福の賛辞を与えます。

綺麗な町だった。北東のように、気候の起伏が大きく穀物が多く育つような土地でもなかったし、冬は豪雪で地獄だった。

それでも、綺麗な町だった。

赤いレンガの町並みに、鍛冶屋に果物屋、服屋、肉屋や八百屋とかパン屋……他にも色んな店が並んで、そうして活気溢れていた。

祖父は優しかった。いつも私に飴玉をくれて、だから好きでした。

祖母は毎年、冬になるとマフラーを編んでくれた。暖かくて、毛糸の少しチクチクするのも、好きだった。

母は料理が上手で、元気に笑った。誕生日に出たケーキは甘くて、本当に美味しかった。

父はレンガ職人だった。町では有名な人で、よくレンガを焼いていた。その後姿は格好よかった。

皆が皆、家族のような町だったんです。

でも、悲劇が起きました。

その日は四月の下旬で、ぽかぽかしていた心地よい春日和だった。私は町から少し離れた森で、遊んでいました。

川で水遊びをして、虫を追いかけて、小鳥を見て、鳥の巣を見て、木の実を食べて……。楽しいと思える時間は、夕方には終わりました。

日が落ちる前に帰らないと、都市国家ボリスですから、門が閉まってしまふんです。だから少し小走りで、祖父や祖母に今日あった出来事を話そうと、ワクワクしながら森を抜け出て、町の中に入ったんです。

そこでは、燃える町の光景が広がっていました。

鼻腔をなぞるような、濃い血の臭いと火薬の臭い。火が何かを燃やしている焦げ臭さを今でも覚えています。

燃えていました。人が、町が。

私は余りの赤色の狂乱ぶりに、祭りか何かだと勘違いしました。

そして、できるだけ地面に転がっている人だった筈の“何か”を見ないように、前だけを見て、町中を走り回りました。

炎は熱かった。

血の匂いは目に染みて、涙を流した。

走って、吸い込む息は暑苦しくて、噎せるような湿っぱさがあった。

認めたくなくて、必死に自分の家を目指しました。

右に曲がって左に曲がって右に曲がって真っ直ぐ行って左に曲がって……。

到着した家の前に、青年がいました。

美しかった。

服装は真っ黒で、髪は火の光を浴びて白く輝いて、肌は炎で煌々と真っ白なものを真珠にさせて、瞳はその場にある赤の祭りの全てを超越して紅色だった。

そして、その足元に、転がっていたんです。

上半身だけの祖父だった“何か”。

右足と左腕が無い祖母だった“何か”。

両腕両足共に欠けた母だった“何か”。

首が違ふ場所にある父だつた“何か”。

速攻で吐きました。その日の朝に食べた、母の作ったスクランブルエッグも目玉焼きも、森の中で昼時に食べた、祖母手製のお握りや木の実も、全て吐きました。

吐いてはいけないのに。

そこにあつたのは、家族だったのに。

酷い、そう思いました。色々な事に、理解不能な何かに、全世界に、酷いと、そう思いました。

何をしたんだ、と叫んだ気がします。すると、その美しい青年はこちらを見て、言つたんです。

切つただけだよー。

ただそう、呟いたんです。

……今でも忘れられない。

まるで友人と話すときのような軽い喋り。

ゾツとするほど喜色満面の声。

呆然と、その余りの返答に思考を真つ白にして、屍餅を着いて見上げた彼は、嬉しそうに笑っていました。その頬には赤い血がべつとりとこびりついていて、プラチナの髪は右の長いひと房が血で染まっていました。服にも血がついていました。なのに笑っていました。

何も思いつかなくて、ただ見上げるだけの私に向かって彼は、一振りの刀を腰にある鞘から取り出しました。

殺されるのだと思いました。
だけど、振り下ろされるその瞬間、

おぎゃあおぎゃあ、 そう泣く声が聞こえたんです。

それは隣の家の、生後三ヶ月の赤子でした。確か、ラクスという名前だったと思います。

青年は、その泣き声を聞くと、口端を愉快そうに歪めて、振り下ろす刀をゆったり戻しました。そして私を素通りしました。

ブーツのコツコツという音が鳴って、ごうごうという炎の爆ぜる音が聞こえて、倒壊する家の轟音が響いて。

気がついたら、私は森の中で朝を迎えていました。

何をしたのか覚えていません。

たぶん、逃げたんだと思います。赤子の鳴き声で、隙が生まれて、だから逃げたんです。

酷いでしょう？

醜いでしょう？

でも、私は家族の惨たらしい姿を見て、気付いたんです。

死にたくない。死にたくなんか無い。普通に死にたい、と。

……私はただ、死にたくなかった。

ただそれだけの理由で、私は赤子の命よりも、自分の命を、優先しました。

自分は幾ら笑おうと、所詮は、 醜い醜い人なんだと気付いたんです。

そう気付いた時点で、私の心は崩壊しました。
その頃から、何故でしょうか。人を敬うようになっていました。
自分は気付いてしまって、でも気付かない人が、途方も無く羨ましかった。だから、尊敬の念が生まれていました。
例えばシルベさんのように、年下の相手であっても敬語である訳も、
そういう理由ですよ。

これが、私の幸せも不幸も何もかもを壊された、十三歳の思い出です。

『……“百鬼夜行”^{ボリス壊し}という巨大強盗組織による犯行とされた、六年前の四月二十二日の出来事です』

『それは、化け物さんが、やったんですか……』

『そうですね。負傷者ゼロ、死者五百二十一名。……全員が死亡し、残ったのは十三歳の私だけです。町の凄惨な状況を見ても、周囲の町の大人たちは、組織的な強盗だと決め付けて、何も調べませんでした。証拠が、何もかもを焼き払われていましたから。
ですから、子供が必死に叫んでも、それは余りのショックで錯乱しているからだ、そう憐れみの目で見られました。』

……だから、似てるんですよ、私とシルベさんは』

『……ごめ、んなさい……私、別に、そんなつもりじゃ……』

『いいんですよ。ただ、たまに人に言ってみたくあるだけですから』

エルトさんがそう締めくくって、おやすみなさい、と小さく呟いた。

すすり泣く声も聞こえなかった。

嗚咽で肩が震えてもいなかった。

ただ淡々と過去を語っていた。

私は、余りの惨さ、酷さに、呼吸をするだけで。

涙は一筋だけ流れた。

四月二十二日。

それは私の誕生日だった。

数時間前。 四月二十日、日中。

セルク街に到着したのは、 正確にはセルク街に入れたのはつい数時間前。二日前、夕焼けが眩しいと思いながら街の中に入ろうとし、門番に不審者として捕まった。

ひでえ、と思う間もなくその場の勾留所の牢屋に突っ込まれ、ハ

ンドガンも刀もナイフも没収。真剣に、ひでえ、となみだ目になりながら二日を過ごし、そして釈放されたのは数時間前。市長が俺の入国を許可したのだ。門番は不審がっていたが、俺に渋々刀と銃とナイフを返した。

その後は市長の使いという事で秘書が何かだろう。女がやってきて、俺の服装を見るなり「まずは服ですね」と言って男物の服屋にぶち込んだ。俺は適当に服を選び、買った。市長持ちかと思ったら俺名義の領収書を渡された。チクショウ、ケチめ。

その後は銭湯に突っ込まれ、全身を洗い、一息ついたのはついさっき。

冷静に考えると、服にはところどころ穴が開き、左肩の部分は根元から千切れ、髪は耳辺りが血で染まったりしてたらそりや不審者だ。

俺馬鹿だなあ。

うん、と自分で自分を貶し、ぶふえー、と息を吐き出した。

黒のソファアの背もたれに、全身を預け、その柔らかさに心を安らかにする。あー、凄い柔らかい。

「……あまり、武装を所持したまま街中をうろつかないでくれ」

背をピシ、と延ばし椅子に座るオッサン、ウェッド・イルタリネ。年は三十五。鋭い眼光宿る薄い瞳と、濃い髭。年相応の湯きを見せる顔に、広い肩幅。短い髪。ナイスガイ、とでも言えば中年と若年の中間体が、市長席に座り、こちらを睨む。市長席には整然と並べられている書類の束や、端っこに写真立てがある。

家族との写真、って奴？

僅かに興味が出る。家族、というのはやっぱり自分にとって大事なもののなんだと、そう思い直して、心の中で苦笑した。

しかし。

この家には誰もいない。死んでる、といった辺りだろう。

身体が柔らかさに包まれることで、目を瞑りながら、片手を挙げてぷらぷら左右に振る。

「あー解ってる解ってる」

瞼を開く。ふう、と息を出した。

市長室兼市長宅、か。

市長が代々自宅として使う事になっている家らしい。家族も同居するらしいが、見当たらない。やはり死んでいるのだろうか。

床も壁も何もかもがピカピカで綺麗だ。金と手の込んだ家だと思う。

金持ちの家は、空気もなんか違うなあ、とか思いながら続けた。

「宿に戻ったら、刀は置いておくよ」

その刀は、ソファーに座るために目の前のテーブルに置かれている。ソードオフ・ショットガン入りのホルスターもだ。

俺の視界の中央にある、巨大な本棚を見た。そこには隙間なく本が並べられ、何と読むのか不明だが、仰々しそうな漢字の文字群が並ぶ。その所々が引き抜かれている。資料本か何かだろうか。

キッチリ整頓された本の数々の、タイトルを読もうとして、止めた。俺はひらがな以外読めないのだ。全然自慢できないが、一応言え、俺は学校など行ったことが無い。つまり勉学方面は完全に馬鹿だ。

閑話休題。

来客用の黒のソファーの、背もたれに身体を預ける。新しく買った服 黒の、派手なプリントの描かれたＴシャツ、濃い色のデニムジーンズ、いつもの黒のブーツに、コート代わりの黒のジャケット 慣れ、ついでにジャケットが地味に値が張ったことを少々心の中でばやきながらも、口を開いた。

「んじゃ、話をしようか」

「まず、お前からだ」

声だけはハリがあり若々しさに溢れている。その声の主の顔色を見て、内心気付いた。

酒もタバコもしてないのか。

俺は酒を幾ら飲んで喉を潰そうと、五秒で治す。タバコは吸う奴の気が知れない。

そんな事をどうでもよく思いつつ、ブーツのかかとで床をコツコツ叩きながら、右の指を一本、ピンと伸ばす。

「まず、残念だけど依頼は失敗だ」

「……ッ。……で？ 何か、言い訳は？」

俺の一言に、冷静な無表情が、瞳を僅かに見開いたものになる。そして、何かを叫ぼうとして口を開き、身体全体を小さく震わせながら、その口を一度閉じた。次に関くときには、既に冷静なウェツドがそこにいる。

ふーん。

その怒りかけたと言わんばかりの表情に、悟る部分はある。自身の推測を確信に変えながら、言葉を探り、呟いた。

「……まあ、悪い。こっちの落ち度だ。護衛は初でね。だから、色々失念してた部分も多い」

「シルベ……イルタリネは今どこだ」

護衛対象の名を呼び、しかし姓に切り替えた。声は押し殺された、何か様々な感情を我慢したものになっている。

……。

大体、確信が得られた。

もう充分だ。

この時点で、この依頼、あの村、大体の真実は飲み込めた。思考で喋り、ウェッドを見ていると、中々返答しないのが苛立ったのか、こちらを睨む目が一層強くなった。

「さあな。……シルベを」「名前で呼ぶな」

短く叱責され、うへえ、と舌を出すと更に睨まれ、眉間の皺が増えた。

父親って面倒だねえ。

自分だっけ呼んでたくせに、と唇を尖らせながら続ける。

「……イルタリネさんを攫った奴は、クレイジー・チャーチ狂会の人間。一人は殺したけど、……残念、もう一人いた。そいつに攫われて、たぶんこの街のどこかにいる」

「面識のある相手か？」

「さあ？ たぶん会ったことも無い」

「……外見などの特徴は」

「知らん。見てないからな」

「とんだ役立たずだな……」

「すみませんねえ。俺だってまさか二人いるとは思わなかったんですよー、だ」

ウェッドは、はぁ、と短くため息を吐き、睨んでいた眉をフラットに戻す。顔はいつもの冷たさ残る無表情が彩る。

初めて出会ったときとは大違いだな。

あの時は飄々として、大人というより道化の性格をしていた。言葉遣いもどこか嘘っぱいし、だから、嫌な奴だと思ったが。

今はいい感じだね。

焦ってる。表情に言葉に出なくとも、焦っている。

「……それで、イルタリネを救うにはどうしたらいい。外見的特長は不明。この街にいるかもしれないという不確定な状況。そしてお前も面識は無い」

「救う？」

思わず口から疑問が出た。

ウェッドを横目に見る。

既に自分の口は笑みを刻んでいた。

ウェッドは僅かに右眉を動かし、

「ああ、そうだが？」

とだけ言った。短い言葉から流れる、明確な“聞くな”という拒絶の意。

だが、

「オッサン。アンタ、救うつもりだったのか？　おいおい、本気が？」

俺はそんなの無視する。拒絶？ 知らないね。ハッキリ言え。
ウェッドは、今度は眉すら動かさず、口だけを動かし、意思を見
せた。

「その通りだ。私は本気で、シルベ ・ イルタリネを救うつもり
だ」

「何故？ 父親だから？」

「……お前には関係が無い」

「だろうね。でも言うぜ。感謝されるだなんて幻想抱くなよ。

アンタがやったのは、彼女からすれば破壊でしかないんだからな。

……面識も無いんだろ？ ハッキリ言っておいてやるよ。面
識の無い人間なんか他人と同じだ。勘違いするなよ、ウェッド。ア
ンタはシルベからすれば、ただの他人だ」

「
」

ウェッドが口をキツく閉じ、無言を保った。

対しアルファは、クク、と喉奥で笑みの音を発し、愉快そうに目
尻が下げる。

嗜虐的に、愉快そうに笑っていた。

あと数日で十八になる少年が出せる表情ではなかった。

「……感謝なんて、必要ない。これは私の、ただのエゴだ」

「エゴで俺に、破壊の代行をやらせたのか？」

「ああ、そうだ」

「シルベ、じゃなくってイルタリネさん、絶対にアンタを恨むぜ」

「解つてることだ」

即答に、ひく、とアルファの右口端が蠢いた。

あ？

その奇妙に歪んだ笑みのまま、口を動かした。

「ウェッド。俺は、あの村の事、アンタの抱える秘密、……大体知
つてるぜ。いや、もう確信してると言ってもいい」

「だからどうした」

「アンタ、俺の事も知つてるんだよな？」

彼は、笑うことを止める。笑顔から無表情への変化。

問いかかけの意味を紅の瞳は語らない。

ただ真っ直ぐに言葉を投げかけた。

そして、

「当たり前だ」

答えを聞いた瞬間。

一瞬だった。

一瞬で、銀銃は構えられた。
ハンドガン

「じゃあ聞かせオッサン」

構えは動かず、狙い変わらず、僅か先にいるウェッド・イルタリネの眉間を射線上に、目視でノーエイム合わせた。
誰もが見ても天才的な銃の腕前。しかしウェッドは臆おくさない。臆さず、ただ堂々と市長席に鎮座している。

「何を、解ってるって？」

アルファを中心に、空気の質が変わる。穏やかだった空気の流れが、ゆったりと、歪に冷えるものになり、流れ自体が止まる。

殺意だった。

表情はそげ落とした無表情。

構えられた銃は無慈悲な殺人の象徴。

「……ウェッド・イルタリネ。俺は知ってるぜ。アンタが、依頼するに値する何でも屋、もしくは殺し屋をリスト化してる事くらい」

それは推測。彼は今、自身の憶測を確実なものだと思い込んで、

殺意を更に増やしている。

そうやって、自身の感情がどうやれば動くかを理解し、そしてコントロールし、その冷静な殺意で行動を迅速化する。

十七の少年に出来る自己統制ではない。暗示という超強力な思い込みは、彼の武器の一つでもあった。

「それがどうした？」

「何故俺に依頼したのか、それも知ってるぜ」

なあ、アンタさ。

「語弊込みで言わしてもらうけど、俺が男として不能なの、知ってるんだろ？」

帰ってくるのは無言。アルファはその対応に、舌打ちをした。無言というのが一番嫌いだと、アルファは思う。状況によるが、答えるべき質問に答ええないのは“大人”臭くて嫌いだ。

苛立ちで引き金に添えられた指が動きそうになるが、

……まだ、撃ちはしない。

我慢、我慢だ。

何故なら、可能性の話だが、最悪の人間の可能性が高い。

更に言えば、非常に認めたくないが、善人の可能性もある。

俺は可能性なんて言葉は嫌いだ。そんな言葉で過去も未来も変わるなら、幾らでも呟いてやるけど、変わるわけが無い。だから嫌いだ。

銃は下げられない。それは、自身の心が計りかねているから。拡大鏡で小さな宝石を見て、値段を鑑定するような心持ちで、面持ちで、言葉を選び言う。

「……俺が人を、“人”として見ている部分と、“肉”として見ている部分が混同する限り、俺は人を愛することなんか出来ない。虎が餌に愛情なんて持つと思うか？ 肉食動物が餌である草食動物との異種族間愛に芽生えるなんて、俺は聞いたことが無い。それと同じ話だよ。……自分で言ってるんざりするけど、俺は未だに人が“餌”もしくは“肉”に見える時がある。

愛情が無いと、必要最低限“人”を“人”と見れるだけの倫理観が無いと、好意なんて感情は消滅する。だからこそ俺は不能だ。……いっちゃ悪いが、シルベの全裸を見ても興奮？ ハアハア？ ……いや、睨むなよそんなに。まあ、そんな感じのものなんて何も感じなかったしな」

「だから？」

ウェッドは冷静な面持ちで、続きを促した。

無表情は告げる。

人に喧嘩を売るような舐めた口調で、しかし酷く冷静な声で。

「良かったね。俺がシルベを襲わなくてさあ」

「貴様……」

ウェッドが、瞳を薄く、眉はフラットなままに、低い声を出す。
大人という言葉がしつくり来る、冷静な状態での怒りだった。
アルファは無表情を続けた。

心底どうでもよさそうな、そんな冷めた口調だった。

「だから、解^{トク}つてるのか？ と聞いてるんだよ、俺は。

俺がもしアンタの大事な大事なシルベ ・ イルタリネを襲^{ウラ}つて
たらどうしたよ？

シルベ ・ イルタリネが心に傷を負^{ウケ}ってたらどうしたよ？

もしも、もしも俺が親父のようにカニバリズムで、 シルベ ・
イルタリネを殺し食べたなんて言^イったらどうしたよ？」

ウェッドが何か言うのを遮^セり、アルファは更に続ける。

口調はやはり冷めている。

「俺は可能性なんて言葉は嫌いだ。だから、ハッキリ言^イうぜ。

俺が“不能”でなければ、また、俺が異性を異性としてしつかり
認識^{シン}できる人間^{人間}だったら、 俺は確^{タカ}実にシルベ ・ イルタリネ
を性欲^{性欲}の捌^ハけ口^口に使^スっていた。実際のところ、可愛^{可愛い}いのは事実^{事実}だし
な。

俺が人を“肉”として、“餌”として完全に見^ミていたら、 俺
は確^{タカ}実にシルベ ・ イルタリネを喰^クらっていた」

「……！」

ウェッドが僅かに、アルファを凝視^{コウシ}する。信じられないと、その
顔はものがたっていた。

それを見てもアルファは笑^ワわない。笑^ワわないし、自分の意見^{意見}が間
違^{まちが}っているとも思^{おも}わない。

可能性^{可能性}じゃない。それは、きっとそうだったという憶測^{憶測}。だけど

それも事実なんだと思ひ込んだ。

俺だつて男だぜ？ 父親。

目と心でそう呟き、言葉が続ける。

「ウェッド ・ イルタリネ。アンタ、本当に解つてるのか？

俺が不能だと解つていて、俺に依頼を出した。だとしたら俺の親父がカニバリズムだった事も知ってるはずだ。なら、俺が食人家の可能性だつて考えられる。そんな危険を犯すくらいなら、女の何でも屋に頼めばいい。だが、そうしなかった。

…… 解つてるんだよな？ アンタは、俺が決してあの娘を、様々な意味で襲わないと、そう確信したから俺に依頼を出したんだよな？ 言つておくけど、リスト化なんて話、あれは憶測だ。今までのアンタのやってきた事、その悪事の全て。それらと今回の依頼。また、アンタのシルベ ・ イルタリネへの異常な執着。…… そういった事実から導き出した、俺の憶測だ」

だけど。

その接続詞に、アルファの無表情は、眉を立て銃の狙う先を強く睨む、憤怒の表情になる。

「解つていなくて俺に依頼を出した、なんて言つたら、…… 俺は」

言つてから、ふいに表情を柔らかくする。

怒りを落とし、軽い睨みの眉のままに、一度目を閉じた。

一瞬で思考を確立させる。

勘違いするな。

殺していいのは悪人。そして世の中、悪人しかいない。
可能性は嫌いだ。だからハッキリさせなければいけない。
そしてその一瞬で瞼を開き、丸い瞳孔でウェッドに焦点を合わせ
る。紅色はルビーのように輝き、またも形を憤怒に変えた。
すう、と僅かに息を吸い、手を僅かに前に突き出し、銃口を更に
突きつけるようにし、

「俺は、アンタをこの場で殺す」

「本気だぜ、俺」

銃は確実に、銃口をウェッドの眉間に定めている。

さあ、どうする。

認めるか？ 認めないか？

自分にとってはどちらがが良いのだろう。

決まってる。

解っていない、だ。

だが、解っていたのなら。

それは善人という事になる。

認めない。

俺の善悪論の結果は、この世に善人など存在しない、だ。
それを覆されるなんて、俺は認めない。

強く睨み、不動の構えで狙う先、 ウエッドはアルファの睨みの瞳を見て、少し時間を流してから、言った。

「……一つ、聞いてもいいか、アルファ ・ アリイ」

「んだよ」

「何故、怒る？」

「俺の善悪論に於いて、今の質問にイエスと答えた場合、アンタがこの世で最も殺すべき悪になるから。それは当然、俺にとって憎しみや怒りの向かうべき者となるからだ」

即答。それは用意されている答え。

ウエッドもすぐさま答える。

「その、最も殺すべき悪とはなんだ？」

「この世に生きてはいけない悪人。悪人の中の悪人。つまり、」

一息、間を入れる。

そして、口を再度動かした。

「^{WORST} “最悪” を冠するモノ」

W o r s t。つまり、B a dの最上級。

アルファの善悪論の終着点。それは彼の言った“^{ワースト}最悪”が当てはまる。

最悪、ね。

それに自分は当てはまるだろうか。自分の中では、そんな訳が無い、という答えを持っている。

しかし、

傍から見たら最悪だろうな。

たぶん、十二歳辺りは“最悪”かもしれない。あの頃の自分は、ただただ人殺しを続けていた。

“^{ボリス壊し}百鬼夜行”。そう呼ばれるほどに都市国家を潰し続けていたのが十二歳。

あの頃は。

あの頃は、倫理観が少し崩壊気味だったんだよなあ、とアルファは感慨に小さな時間、耽った。

(……『善人なんて存在しない』)

彼は過去の自分が喋った言葉をなぞる。

過去に眩き、瞼の裏にあの時咲かし続けた紅色の、血の花の数々を思い返す。

(『悪人しかない』)

火は心を焦がし。

心は躍り続け。

見る視界では赤色が愉悦を伴った。

楽しいと、そう思っていたのも十二歳。

(『だったらさあ』)

人殺しに快樂を求めていた。

シルベの言うとおり、あの頃の俺は、快樂殺人鬼だった。

（『全員殺してもいいよねー？』）

倫理観、つまり善悪論が形成されたのは、十二歳の話だ。

十一歳で王冠を得た。旅立った。

あの頃はただ人間を憎み殺したいだけだった。

そうして十二歳に、出会った。

（……狐）

不老不死の狐に。

「……」

ウェッドは僅かに沈黙した。そして、視線を少し下げ、顎を手で小さく撫でる。

また沈黙が生まれ、少し後にその手を離してから顔を上げ、俺を見据え、堅い口調で言う。

「……正義を、振りかざしてるつもりか？」

瞳は揺らがない。銃を向けられても、その瞳はまったく恐怖なんて感じていない。

歪ではない。

そもそも、目の前の現実なんか見てすらいらない。確かに俺の言動を見ているが、思考はどこか空ろだ。それが、何となくだが、理想を視ているかのような気がする。

純粹に、愚直に、真っ直ぐすぎる。

わああ、俺そっくり。

そうアルファはウェッドを評価した。

そして内心苦く笑った。

こりゃあ。

これは、自分にとって認めたくない結果になりそうだと。

思い、しかし表情にはおくびも出さずに、同じ表情のまま、構えを解かずに頷く。

「イエス、とも言える」

短く肯定。するとウェッドは、

「そうか」

と呟き、すぐに、

「その正義とは、一体なんだ？」

「……話を逸らしてんの？」

訝しげに、睨みの眉を僅かに歪ませ尋ねるアルファに、ウェッドは小さな微笑を見せた。違うと言うように首を左右に小さく振る。それを、また訝しげな視線で見たアルファは、ほんの僅かに息を出し、呼吸を整えてから言う。

「……正義なんてそこまで大層なもんじゃないけど、まあ大まかに

言えば大体そうだ。悪は成敗されるべきなんだよ、オッサン。それを正義というなら、まあそうなるんじゃないのか？」

「じゃあ……君は、悪じゃないのか？」

「俺も悪さ。どう考えたってそうだろう？ 人を殺し、そして笑う人間のどこが善人だよ。馬鹿かアンタ」

こんな話、ちよつと前にしたなあ。
そう思う。シルベにもこんな話をしていた。

「では聞くが、君を成敗するのは誰だ？ ……“正義”という大義名分で正義の使者が悪を成敗するなら、いや、殺すなら、ならば正義の使者は誰が成敗すべきだ……？」

「……」

僅かにアルファが沈黙する。

このオッサン……。

例えの話で、俺をヒーローと言う。
頭沸いてんのか。俺はヒーローなんてものじゃない。ただの人殺しだ。

だが気付く。ウェッドが何故、そんな事を聞くのか。

いや……？ ……俺ではない？

もしかすると、

「オッサン。アンタ、自分が正義だと思ってるのか？」

ふ、と笑う声。

「どうだろうな。ただ、……たまに自分のやっている事を正当化しないと、精神を保てなくなるんだな」

「立派な悪だねえ、人間」

「神にでもなつたつもりか？」

「さあ？ 龍王かもしれないし人かもしれないし、捕食者かもしれないぜ？」

ただまあ。

アルファは既に睨みの表情を消して、銃を降ろしていた。

「俺は、……正義の使者が正義を全うしたら、その正義の使者を悪だと言って殺す正義の使者が現れるんだと、思う」

「そうか。……中々、面白い理論だな」

ウェッドは俺の考えを聞いて、愉快そうに小さく、歯を見せて笑った。やはりタバコは吸っていないのか、真つ白な歯が伺える。ハンドガンを、いつものストラップに戻したところで、

「解つてたさ」

そう、小さく言った。

アルファの動きが止まり、口は、あっそ、とだけ言う。

何だか釈然としない、とでも言うように、表情には小さな不満があった。

一番ハッキリしないな。

善人の部分も、認めたくなんか無いがある。やはり、善人である

という結論に終わった。それを認める気はゼロだが。

しかし“自己の行動の正当化”という、人の心がよく行う、実に悪らしい事をしていとなると、その部分は悪だ。

中途半端という結論が得られた時点で、もう殺す理由も無くなった。質問が否定されなかった時点で、今は殺すべきじゃない。

嫌な気分だ、ともやもやする心の形をそう決めつけ、話を切り替えることにする。

視線をウェッドから逸らし、その市長席に置いてある写真立てを見た。

「ウェッド。話を変えるけど、その写真立ての中の女、それってアンタの妻か？」

その中には、一人の女の顔が映っていた。笑顔を咲かせた、二十歳半ば当たりの美女。

ウェッドが視線を写真立てに写し、頷いた。

「ああ、そうだ」

「名は？」

確信を持つて聞く。

たぶん、イルタリネという姓のはずだ。

「フルウ。フルウ・イルタリネ。前市長アロルド・イルタリネの一人娘だよ」

やはり確信が得られて、だからふうん、と思った。

「……その口ぶりだと、死んでるのか？」

「ああ。つい数年前に、な。私が二十三の時、つまり十二年前に結婚したが、フルウは身体が病弱でな。……だから、あつという間に死んでしまった」

蕩蕩と、ウェッドは自身の妻について語った。

その目は慈愛と悲哀に溢れていて、紡がれる音色自体もどこか悲しげだ。

「そうかい。……となるとアンタ、結婚して、それで前市長のお墨付きで市長就任、って事か？ うへ、嫌われそうだな。“悪人”と名高い市長さん？」

「客観的に見たら、そうなるな。……知ってるのか？」

「噂程度だけだな」

頷く。

今までに聞いた、その悪名高い市長について、思い出す。

「……確か、賄賂で票を集めたとか。」

何年周期か知らないけど、市長選挙の際は有力な他候補者の汚職を、事実をでっち上げたり、本当にあつた汚職を突きつけたりして流刑にして蹴落とした、とか。

分散していた権限を市長一人に集中するようにし、街の中の全権限をアンタ一人が握れるような法律案を何個も通してる。だから市警は今じゃアンタの私軍みたいなもんなんだってな。

……他にも色々、嘘か真か知らないけど、結構あるぜ」

「よく知ってるな」

「セルク街自体が、その特殊な自治方法で有名だし。その流れでちよくちよくアンタの噂は聞くことはあったさ。……ま、俺がこの街に来たのもそんな理由だしな。そんな悪名轟く市長がいるなら、仕事がありそうだと思うてきたんだが……まあ、見事にあつたわけだ」

口元を薄く笑みにして、ソファーに一度背を預けた。

その柔らかさを味わうように目を閉じ、数回息を吐く。

そして、ソファーから背を離し、左肘を左膝に乗せて、僅かに前に倒れた姿勢になって、同じ表情で市長席の方を見た。

「市長。俺はアンタを善人だとは認めない。認めたくない。……だが、俺の質問にイエスと答えた分、俺はアンタの手伝いをしてやる。……元から、そのつもりでもあつたしな」

「……どういう事だ？」

ウェッドは珍しく目を瞬かせた。

薄い笑みは面白そうなものと対面したように、口端を上昇させる。

「解ってるだろ？ もう一回依頼しな。救ってやるよ、シルベ

・イルタリネを」

「本気が……？」

僅かに身を乗り出したウェッド。それを見てアルファは、クス、とおかしそうに笑い目尻を下げた。

これが十二歳と十七歳の違いだろうねえ。

今この時間の俺は、どうしようもなく理想とはかけ離れた行動をしている。

ウェッドを善人とは認めなくとも、心のどこかは肯定している。だからシルベを救うなどと言うし、そのために力を貸す。

善人は、俺が殺すべきじゃないし、殺されていい人間じゃない。

（たまには善人の行動を手伝っても、悪くは無い）

そついう思考があつて、だから肯定の言葉を選んだ。

「本気だ。^{マジ}つか、元々こつちの落ち度だしな。落とし前くらい付けるさ。成功したら全快の依頼の成功報酬。この条件が呑めるなら、いいぜ、やっても」

「……具体的には、どうするつもりだ」

言われ、僅かに思案し、またソファーに軽く背もたれる。

視界上端の髪の毛の先端を、指で摘んで軽く梳きながら、

「交渉する、んだろうな。^{クレイジー・チャーチ}狂会だつてむざむざ貴重な異物^{クラウンチップ}刻印保有者を殺したりはしない。最初は無傷で確保しようとするのが常套手段だから、会話の通じる相手だつたら基本は交渉だ」

「だが、わざわざ捕まるつもりなんか無いのだろう？」

「当然。俺は異物愛なんか持ち合わせちゃいないしな。……（リアとはあんま会いたくないしー）……だから、俺は出来れば交渉の内に済ませたいがどうせ無理だろうから、力づくでシルベを奪い返す」

言い切り、腕を組んで目を閉じる。

頑張らないとなー。

一人、気楽にそう考えた。

相手は自分の存在？　のようなものを消せる可能性のある相手だ。それはシルベの失踪の際にも理解している。

どうしようか、と考えていると、

「……………無傷」

ウェッドがポツリと言った。

目を開け、一瞬ばやけた視界を動かし市長席を見やる。

「んあ？」

間抜けな疑問の声に、ウェッドはいつも通りの冷静さに、喜色の感情を含ませ続ける。

「無傷が絶対条件だ。それに失敗したら、例えあの娘を救えたとしても、報酬は渡せない」

「……………激^{げき}敵しいな」

「当たり前だ。……………あの娘を傷つけるのは、誰だろっと許さない」

「ロリコン？」

「殺すぞ」

「……………コエー、この市長、マジコエー。からかっただけなのに、真剣に殺意の目で睨まれた。マジコエー」

「大人をからかうな。……アルファ・アライ、これにサインを書け」

戦々恐々とソファアのへりに捕まってガタガタ震えていたら、ウエッドが一枚の紙を差し出した。

見るからに厚紙で、だから高価な紙だと解る。

立ち上がり、市長席に近づき受け取った。触り心地は艶やかで、賞状とかと同じ材質だと思う。

その紙に書かれている文字群と、空欄　　たぶんサインを記入する場所　　を見て首を傾げた。

「何これ。……いや、あのさ」

「何だ。以前の依頼の際にも書いた依頼書だろう。非公式の依頼であれ、私はこういった書類上での証拠が無い場合は行動しない人間なんだよ」

さつさと書け馬鹿、と言葉裏に告げ、せかす市長。
俺は僅かに困り、空いている手で頬を掻きつつ言う。

「別に、あれは全部ひらがなのルビついてたからいいんだよ。

これ付いて無いじゃん。俺、前にも言ったけどひらがなとカタカナ以外読めないし。小難しい漢字ばっか並んでんなあ……」。

まさかとは思うけど、都市国家級借金^{ボリス}の連帯保証人とかじゃないよな？」

「当たり前だ」

ククク、と喉を鳴らすように笑ったウエッド。

何か悪巧みを考えていそうな口の動きと笑い声だ。

うつわ悪人！

とか思った。

その、どこを見ているかイマイチ解らない薄い瞳をジッと見る。

「……本当？」

「本当だ」

「本当に本当？」

「何度も言わせるな」

「……嘘だったら殺すからな」

「嘘ではないから殺されない」

「……。まあ、ここはオッサンの言を信じるとして」

ペンを借り、『アルファ・アリイ』と書く。

「……ほれ、書いたぞ」

そして渡す。するとウェッドは、

「どうも。……汚い字だな」

失笑つきで真剣に馬鹿にされた。

馬鹿にされても仕方が無いくらい字は汚い。が、読めればいいじゃない！ 読めればいいじゃない？

「うるせ。勉強なんて碌に習ってないんだよ」

思っ心を、出来るだけ冷静にして出した声。肩を竦めるというオプシオンも付いた。

ウェッドは、眼を上へ上げ、僅かに眉を上げた視線で俺を射る。

「金勘定だけは速いの、か？」

「それは自然と覚えていたんだ」

「そういう事をしてると、嬉しいか？」

「いや。……俺が嬉しいと思えるなんて、滅多に無いからな」

目線を下げて、十字架を見た。それを掴み、僅かに撫でる。

「……なら、例えば何があるんだ？」

「誕生日を祝ってもらう。他は知らん」

「まんま子供だな……」

「黙れ……そんなの解りきつてるんだよ……」

く、と悔しさで押し殺した声を出しながら言った。

でも事実だしなあ。

他に何かあるだろうか。

自分の心の半分は、荒廃街を出た十一歳になるまでに砕けている。正しい感情のほとんどが、失われているのだ。

残っているのは“嬉々”と、“悲しみ”が生む負の感情くらいで。

その“嬉々”ですら自分は次のステップを踏めないでいる。嬉しいからどうした、が無いのだ。

そんな状態で得られたのが、“誕生日プレゼント”で、だからこの十字架は、俺の至宝。

「ちなみに、誕生日はいつだ？」

「ああ？ 四月二十二。つか知ってるだろ？」

「……ん、ああ、いや、確認だ。にしても、奇遇だな。イルタリネと同じとは」

「オッサン、最後の発言は一步間違つとストーカーか何かだぞ。つかマジでそうなのか。へえ、そりやまたビックリ」

「五月蠅い。……ともかく、だ」

ふう、と長年の疲れを吐き出すように小さく、しかし重い息を出したウェッドは、俺の前では初めて、市長席に背もたれした。感慨深げに言葉は吐かれる。

「これで契約は成されたし、後はイルタリネを救うだけ、か」

言った直後、

「随分と面白い展開ですね」

本棚の前に、どこからともなく女が出現した。

“全部一体誰のせい”

さあ？（後書き）

冷静にならなくても考えると、女キャラが敬語使う奴らばっかだと気付きました。前回出てきた謎の女？ は敬語じゃない設定なので、それがストッパーになればと願うばかり。このまま敬語キャラだらけになったらもはや意味不明……。

しかし、自分の中では敬語の品格？ みたいなものは、

エルトⅡ テイファイ シルベ

ほんの僅かな僅差でエルトのほうが丁寧？

って感じです。……どうなんでしょうか。ワープ口開いて書くときと、ここに乗せたときでは幅やルビ等の違いがあり、多少は第三者の目で見れるのですが。しかしその場合、誤字脱字、ルビ振り失敗の多さに発狂しかけていて気が回りません。

まあともかく、今回も主人公ははっちゃけてぶっ飛んでいます。もっと直接的な表現にしようかと思ったけど、行き過ぎてもドン引きだと思うので、ここら辺かなあ、と思って決めました。つか十五禁の範疇なのか甚だ疑問。

一章の最後のあとがきには、主人公についての設定の云々を書こうかな、書けるといいな、と思っております。

不安なのは、ここまで来るとほとんどの秘密、バレちゃってるんじゃないのかなあ、といった部分でしょうか。自分、そういう伏線とかフラグっていうの、あんまり得意じゃないんですよね……。精進します。解っちゃった方がいた場合、教えてくれると幸いです。後学にもなりますし。

非常に長くだらしたあとがきで、申し訳ありません。

さあ、もうちょっとでバトルバトル。そして衝撃の展開（笑）が

……！？

あ、あるんですよ！ 主人公の覚醒（笑）やらタグ（チートの可能性大）の意味はこれだったのか的な感じのアレがあるんですよ！？

語情報を修正

2012/1/9

“ほんとーに嫌な夢でさー”

でも、結局は“最高だった”んでしょう？

アルファの行動は即座だった。

電光石火の速度で銃が右手に構えられる。

しかし、

「動くな。しかし会話は許可します」

女も即座だった。

いつの間にかウェッドのすぐ横に立っていて、その右手が握るナイフが、ウェッドの首筋に垂直に立っている。

ウェッドは、瞬きすら出来ず、ただ前方を見ている。表情も口も動かない。

アルファが舌打ち。そして、構えと狙いを動かさず、目すら前方を見続ける。

その、動かないという選択に、女は笑った。

「さすがですね。もし今ので銃を下げたり刀を鞘に納めたり、私や市長を見ていたら、私はこの市長の首にナイフを刺してしました」

言われた声は少し低く、知己に溢れている。硬質な、感情の無い声だとも思った。

そして、本棚の前に一瞬だけいた際の顔を明確に思い出す。

髪はセミロング程度。髪の色は明るい茶。その髪をポニーテールに結っている。顔は十代後半？ 化粧の類は無し。それでも映えるレベルで美女。目の色は水色。背は百六十六？ 腰に拳銃の納まるホルスターに大きめのナイフ。服装は普通。

よし、外見は覚えた。

しかし、とアルファは一瞬で思考を回す。

なにがあった？

この両目は音速ならば捉える。

なのに、だ。

ハンドガン銀銃を構えた瞬間には、いつの間にか視界から消えていた。

どういうことだ？

疑問は、声となって出た。

「……誰だお前」

「エルト・ダロルリード」

「知らない」

「でしょうね。……じゃあ、これなら解りますか？ 私は“エスケー完全犯罪”、と呼ばれたりしています」

「……ティファイの同僚か」

「そのThat's 通りright。……ティファイは、死にましたか」

「ああ。怒るか？」

「いいえ。ティファイは同僚でしたし、アルファの同人誌のホモネタをちよくちよく教えてくれたましたが、友人だと思ったことは無いですから。」

「……あそこまで狂えはしませんので」

“同人誌”もしくは“ホモネタ”という言葉にウェッドの目が動

き、アルファを絶対零度の目で見た。

アルファがその身体のままに、

「……いや、違うからな。俺は、決して、好きで、同人誌になんか出ちゃいけないからな。女に興奮しなくても、男ならオーケーとか、そんな訳、絶対に無いからな」

と否定の言を、酷く押し殺した声で言った。

それを見てエルトはクスクス笑う。

ひとしきり笑い、ふう、と息を出すと、笑みの目を元に戻した。

「さて、と。手短に済ましましょうか？」

「……入会手続き、か？」

「そのThat's 通りright」

アルファの疑問にエルトは即答。アルファが舌打ちし、ウェッドはやはり動かない。

「んで？ いつ頃だ？ まさか、今か？」

「まさか。 明日の正午。場所は……」

「 郊外だ。街の外でやってもらう」

迷うようにエルトが言葉をあぐねていたら、ウェッドが答えた。ナイフなど怖くないとでも言うようないつもの堅い音色に、エルトの眉が僅かに、おや、とでも言うように上がる。

ふむ、とエルトは呟く。少し思案するように顔を僅かに俯かせ、

「いいでしょう。まあ、市長という地位からすれば、街中でやられるのは困るでしょうし。……では、街の外の、森の中にしましょうか？ 北西に歩いて軽く十分ほどの場所にある森で」

了承する。

アルファは同じ姿勢のままに聞く。

「森のどこだ？ 入り口か？ 中か？ どこだ？ 森つってもどこか解らないぞ」

「質問ばかり。……では、そうですね」

「^{しよけいじょう}処刑場”。……そう呼ばれる、開けた場所で構わないか」

またもエルトが考え、その合間を縫うようにウェッドが提言した。アルファが音色だけで首を傾げる。

「“処刑場”？ なんだそれ」

「……この街で流刑にされた人々が、手錠を外され、消えていく場所だ」

「とは言つものの、私はその場所を知りませんが」

「ならば私が案内しよう。……どうせ、どこで寝泊りしているかなど、教えるつもりはないのだろう？」

「ええ、もちろん」

「ならば、門の前に正午。それでいいな？」

「了解しました」

短い言葉が流れ、必要な部分だけで会話をする。

エロト……は確実に名前として間違えて覚えている気がするが、
ともかく女とウェッドは、どちらも相当な速度で必要だと思える情
報を補っている。

テンポ速いなオイ！

アルファは心の中で思いながら、疑問を口にする。いい加減腕を
下ろしたいと、そう思いながら。

「お、おいおい。市長、アンタ、どうやって連れて行くんだ？ 俺
と……エロトだっけ？」「エロトです」

やはり間違っていた。

「うん、エロト。エロトと俺は敵、みたいなもんだぞ？ まさか行
くまでに同じグループで行動なんて考えてないよな？

……そこら辺はどうする？ 言っておくが、俺も地域固有の呼び
名[△]なんか知らないし」
ローカルネー

「ならば秘書を遣わす。……私が市長選に最初に立候補したときか
らの仲だ。今更隠し事をする事も無い。……アルファ側が秘書、エ
ロト側には私が同行する。構わないな？」

強引な決定。

それに、エロトが一瞬押し黙り、しかし声を出す。

「私に害なす存在が来ない、と言えますか？」

「もし、私が市警を引き連れてきたり、アルファがやってきたら、どうする?」

不動のままに、害なす存在を明確にして尋ねるウェッドに、エルトは誰も見ていないだろうに笑った。

作り笑顔。だが、傍目にはどう見ても楽しんでいるよう見える笑み。それほどに、その笑顔は“笑顔”として大成していた。

それを浮かべながら、答える。

「シルベ・イルタリネの生首でもお持ちしましょうか? それとも、生きたままに四肢を切断にしたほうが宜しいですか?」

「……その返答で充分。私一人で行く。アルファの方は三十分遅れて、市長宅。……これで問題ないな?」

ウェッドが、首すら回さず、殺意で言葉を響かせた。声は低く、静かで、アルファに茶化される時よりも恐ろしげだ。

エルトはしかし笑みのままで、

「ええ、構いません」

とだけ言う。

返答を無感動に聞き、次にウェッドは、意識をアルファに向けた。

「アルファ、その予定で構わないか」

「……ああ。別に、それでいいぜ」

アルファは、その二人の応答を聞きながら、場違いな感想を思っ

ていた。

思ったままに口にする。

「……なあ、ウェッド」

「なんだ」

「会いたいのか？ シルベに」

「当たり前だ」

即答。その不動のままの、伸ばされる背筋は、一体どんな思いでその言葉を言うのか。

父親だと、そう思った。

今目の前に居るのは“父親”だ。娘の事だけを考え、だからこそ必死になって生きれる父親。

人間味は無く、でも親ではあった。

アルファは様々な思いを心の中で動かし、それが付ける“味”の様々を、こう評した。

苦い、と。

この男には、きっと不幸バッドエンドの中の死しか未来に存在しない。

本当に、俺そっくりだ。

理想や願いなんてものだけで動き続ける奴は、ありふれた幸せをもぎ取られるか失ったかした人間のみだと、つくづく思う。

幸福を幸福たらしめるのは、主観だ。

主観で見た世界。それが人にはあるから、だから客観的な真実な

んか無視して幸福だと言える事象がある。

ああ。

俺にもそんなもの、あった。

幾ら人に化け物と呼ばれようと、それでもあった。

その重みを首にぶら下がる十字架で感じ、噛み締め、心を震わせて。

だから無機質に、そっか、とだけ呟いた。

そして言葉を続ける。

「……そういう事らしいから、えーつとお……」「エルト、です」

忘れていた。危うくエロトとまた言いそうになった。

「うん、エルトなエルト。二度と間違えないから。……だから、シルベも連れて来いよ。それが前提条件だ」

強く言つと、小さく笑う声がクスリと聞こえ、「わかりました」と言つた。

そして、

「さて……打ち合わせも済みまし、そろそろ失礼します」

言つた瞬間、エルトが室内から消えた。

エルト・ダロルリードという女は、いつの間にか市長室から消えていた。

忽然と、唐突に。

翌日。午前九時。

アルファの意識は、未だに夢の中だった。服装は昨日、ウェッドと対談していた時のものではなく、真っ裸だ。一応、布団を肩辺りまで被っている。

彼は旅をしているせいか、基本的に必要以外のものは持ち歩かない。寝巻きがそれに該当するほど、アルファは基本的に野宿だった。場所は前回の依頼の少し前から一人用の部屋を借りている宿。小さな置き机には刀が三本、鞘に納まり置いてある。机の上にはホルスター付きのベルトに新調したソードオフ・ショットガン。銃弾を詰め込んだポーチに鞘入りのナイフ。そして丁寧に調整された銀銃が一丁ある。その近くの床にはザックが転がり、その中には新しく買いたった寝袋や保存食、銃の修理に必要な工具類も突っ込まれている。

ベッドの周りの床には着ていた服が脱ぎ散らかり、ポイポイと捨てたようにほったらかしてある。

そういつた物騒な持ち物の主は、安価なその宿の、ふかふかとしたベッドでごろんごろんしている。布団の温もりを、その穏やかに爆睡した表情で見せていた。

ごろり、と一回寝返りを打つ。艶やかな髪は一本一本が流れに沿い、独立して動く。特に右のこめかみを流れるひと房は、その長さのせいか顔に掛かったり口の中に入っていたり、身体に絡み付いたり散々なことになっている。

「んああああ……しゅるるる……」

寝息なのかどうなのかイマイチわからない音を出し、アルファはまた寝返りを打った。同じ方向に。

当然ベッドの端に移動する。
そのまま、

「……すい！？」

奇声を発する。なぜか身体がビクン！と跳ねた。
今度は逆の方向に寝返りを打ち、

「あゝー……おゝー……」

更に奇声を発した。

アルファは追いかけていた。

何を？と問われると、とにかく何かを。

それはプリンになったり肉になったり魚になったり色々なものになっている。見るたびに姿が変わっている。

今は“走る木”を追いかけていた。

「――」

自分が何かを言った。

走る木がその何本足なのか不明な根つこの群れで地面を蹴りながらに、身体を、幹^{みき}を曲げた。

幹、というワードを思った瞬間それは神酒^{みき}になった。

なんかこう……。ともかく神酒が走っていた。

アルファの脳はそれを意味不明だと思いながらも、しかし何故か

納得。

そして、

『酒か！！』

とはつきり自分は喋った。

酒、いいよなあ。美味しいよなあ。ぐへへへ。

思いながらにやにや笑い、走る速度を上げる。

追いかけて、そしてあと一歩で捕まえられると確信した瞬間、

ウェツドみたいな何かになった。なぜか全裸だった。中年は驚愕の表情をした。

一気に方向転換。Ｕターンしダッシュ。

騙された！ と心の中で叫びつつ、走った。

後ろを、走りながらに恐る恐る振り返る。

今度は美少年が追いかけてきた。やっぱ全裸……じゃなくてふんどし一丁だった。

更に走る速度が上がった。

何故こんな夢を見ているのか、真剣に謎だ。

『全部ティファイとかエロ』『エルト』『エルトのせいだな……これ全部そうだろ！！』

そうだ。そうに違いない。というかそうじゃないと困る。俺は男
趣味なんかない。断じて言うが、絶対違う。

また振り返る。

振り返り見た先には、

人を切る親父がいた。

親父が言う。何かを言う。肉を切る。人を殺した。殺し脳漿をス
プーンで掬い取り人肉でダシを取った鍋に入れる。吐き気がした。
吐いた。気持ち悪いと思った。夢であれ。夢であれ。そう願った。
どうして親父は殺したんだろう。どうして親父は人の肉が好きな
だろう。どうして母さんはそんな親父が好きなんだろう。

頭がおかしいのは誰だ。

そう思った瞬間。

『化け物オ！！　ち、ち、近づくなよおッ！！』

叫ぶ誰かがいた。そして風景なんて存在しなかった世界が、一瞬
で鮮明な世界となった。

瓦礫、崩れヒビのある家々、乾いた風、唾を吐きながら俺にナイ
フを向けたアズナ。

『あ、あ……』

六歳の出来事だった。まだ、目が見えていた頃の話。

街を歩いていたら、出会ったんだ。

あの頃俺は、人喰いの目で見られ、避けられていた。だけど、皆が俺を避ける理由が解らなかった。俺にとつては、親のやっていることが常識だったのだ。それに、荒廃街では、殺人などよくあることだったから、だから俺にはそれがおかしいとは思えなかった。

そんな俺に、元気そうに笑って見せたアズナ。俺に手を伸ばし、一緒に遊んでくれた同年齢の子供。

初めてだと思った。初めて出来た友達だと思った。

初めて出来た友達だったのだ。

だけど次の日、そう言われた。

『くんなつつてんだよ！！ あっちいけよ！！ オレにちかよるな

！！ 化け物！！』

「違う。やめて……」

頭を抱え、脳に響く声を遮ろうと躍起になって、必死に身体を震わせた。恐怖も、絶望も、悲しみも、全部剥がれ落ちてくれと、お願いながら。

『ち、が……おれ、そんなじゃ……』

「俺は、違う、んだ」

過去の自分と、現在の自分との意見が統合する。
混ざる。

『どう違うんだよ化け物！！ お、お前の父さん、人の、人の肉を

食べてるんだろ！？ 化け物じゃん！ そうじゃん！！」

俺じゃないんだ！ 俺は化け物じゃないんだ！！ 俺は違うんだ
よお……！

『「おれ、の、せいじゃ……」』

俺は悪くないのだ。

『くんなきもち悪い！！ あつちいけよ！！』

俺は悪くないんだ！ 俺は気持ち悪くない！！ お父さんが、お
母さんが、 俺が、人を食べただけじゃないか！！

『「う、あ、ちが、わるく、な……」』

俺は悪くない。

悪くない。

悪くなんか無い。

悪いのは全部俺じゃなくて、俺の親だ。アリイという姓だ。
だけど、そうやって罵られた。

罵られ、呆然としていたら、アズナはどこかへ行っていた。

『う…… あああ！！』

泣き声が響いて、心のどこかがぶっ壊れた。

狂っていたのだと、初めて気付いた日は、友達だと思った少年に避けられた日だった。

怖かった。自分が、今まで何を食べてきたのか解らなくて、怖かった。

アズナの向けたナイフの、冷たい光が怖かった。刺されると思って、だから動けなかった。

友達なんかじゃなかった。

俺を避けた街の人と大差がなかった。

『ああああ！ ツ、あああー……あー……！』

嗚咽を零し、肩を強く震わせて、泣いた。

喉のしゃっくりは酷く、まるで心臓でも吐き出しそうだ。

目はとめどなく涙を出す。

ポロポロ、ボロボロ、その涙に色々な、大事なものを持って、全てを運び去っていく。

『どうつ、してえ……？ どうして、俺は「ばけもの」なの……？』

その頃からだろうか。

自分の心が、どこか遠い場所へ行ってしまうて、そうして残されたのは“悲しみ”だけ。

失ったのだ。自分が、どうやって世界を感じていたか。その方法を俺は忘れてしまった。

『嫌だよお……そんな風に、よばれたく、ないよお……！』

肉を頬張りそれを美味しいと笑う自分は死に。

『ばけもの、なんて……よぶなよ！！』

綺麗な花を見て喜べる心は崩壊し。

『俺、わるく、ないじゃんかあ！俺のせいじゃ、ないじゃんか！』

隣の家の少女を可愛いと思って感じた好意は、所詮思い込みだと気づき。

なのに、初めて人に裏切られ感じた“悲しい”だけは残っていて。

だから自分は“悲しい”が広げる様々な感情と、親から与えられた唯一の“嬉しい”だけで生きている。

『なんで呼ぶ……！！なんで、ばけものってよぶ……！！』

PTSD
半欠けの心。その成れの果て。

己の心すら忘れ人を殺す、ただの人形。
ナイトメア
“笑う蹂躪人形”。

『俺のせいじゃないのに！俺の、せいじゃ、ないんだよ……！！』

自分を化け物呼ばわりした人間を、その総称たる『人類』を、殺したいと殺意を抱いた、その結果。

そうして、他にも色々な事があって。

『憎い……！！！！』

アズナとどうにか仲直りできて。

『みんな、憎い!』

リアと出会って。瞳が開き、睡蓮が花びらを咲かせて、殺されかけて。

『俺がなにをした……!』

人は俺を恐怖の目で見て。『化け物』だと呼んで。

『ぜったい、許さない!!』

世界は敵だらけで。

「……だから嫌いなんだ」

俺を化け物を見るような目で見た、
人が。

「……」

身体が重い。

嫌な夢。

意識は覚醒していて、鮮烈に覚えている夢を、脳内で再生させていた。

身体は仰向け。口の中に、数本の髪のような感触があつて、涎が付着し舌に張り付いて、気持ち悪い。

気だるく右腕を動かし。唇に触れる。やはり髪が何本か入り込んでいた。それを摘み、引つ張る。

目を開く。ぼやけた視界は、一瞬で焦点を天井に合わせ、ピントをズラさない。

指を動かし、鈍い動きで、右目を触る。右目は自動的に瞼を閉じ、瞼の感覚を指先に伝えた。

閉じる右目と、しっかり開く左目。その視界には細い指がある。

決つてしまおうか。

一度は自分で決つた箇所だ。そうして空になつた場所に、突っ込んだ瞳だ。

ぼんやりとそう考え、口端を動かさず、指で強引に瞼を開いた。人差し指と中指が上瞼と下瞼を押さえ、目を大きく開かせる。

「紅色の目」

無感情に呟かれる声。平淡で、嫌に冷たくて、自分のいつものチヤラけてふざけた声でも無かつた。

俺、死んでるのかな。

何度も致命傷を負い、それでも何度も立ち上がった。人が嫌いで、殺すために。

「善悪論も関係ない、自分の本心」

人が嫌いだ。

嫌いで嫌いで嫌いで嫌い。

どうしようもなく嫌い。

嫌悪の感情。

悲しみが速攻で第二のステップを踏み、憎悪にも変わり……、そ

ていた。

憎悪で滾り、怒りで震え、だから己が見る視界は紅色に染まっていた。

世界は赤く。

自分は黒く。

血は濃厚に、肉は圧倒的に。

理想という綺麗な言葉を手繰って願うのは、抹殺の二文字。

そうして得たこの目。

それを、決ってしまおうか。

「……」

もう一つの手で、見開かれ乾燥し、痛みを発している目の表面に触れかける。指先数ミリの世界。そこに指先があつた。

白い指。己の十七として成長した結果の肉体なのか、それとも龍王の瞳だから得られた肉体なのか。判別が付かない。いくら臂力が化け物じみても、外見ではそれも判断できない。自分が、八百キロ超の握力を持っているなんて、それを自由にコントロールしているなんて、そんなの理解も出来ない。

髪は地毛で白金だ。

俺は先天性白皮症アルビノという、メラニンとかいう色素の欠乏した特異固体だつた。

日の光は苦手だつた。体は元々筋肉の付が悪く、そして食も細いために身体は細かつた。目の色は色素が欠乏しているため青色だつた。背だつて元々高かつた。

「全部過去形、か……」

今の俺は光を苦手だと思わない。細かろうとありえないレベルの身体能力がある。目の色は紅色。背だつて高い。

たぶん俺の身体は、偽者だ。^{フェイク}

例え十七歳の肉体を持っていたとしても、この肉体とは違う。この肉体は龍王が与えた一つの奇跡。

奇跡の代価に俺は、本物を失ったのだろうか。ならば。

俺は、この目を抉れば、本物を得られるだろうか。

本物の心を。

^{ハッピー} “嬉しい” の次を得て、最果ての “幸せ” を噛み締め、死ぬ際は^{エンド} 幸福の笑みで消えていけるだけの正しい心を。

俺は、欲しいのか？

ティファイは幸せの中で死んだ。親父もそうだ。母さんだってそう。シルベだって、幸せの中に居たのだ。

わかんねえよ、そんなの。

解らない。望んだのは唯一つ、全人類の抹殺。それだけで、だから、俺は解らない。

解りたくない。解ったら、俺は自分が何物か解らなくなる。

指をどけた。ひりつく目は、いつのまにか涙で瞳を潤わせていた。顔を寝たままに数度左右に振り、身体を起こす。

起こした体で、呟いた。

「……怪物で、化け物で、俺はそれでいいんだよ……」

化け物と呼ばれ、そうして嘆き、悲しみ、殺意を憎悪を覚えた自分は、たぶん、青の目を抉った時点で死んだ。

残ったのは、冷めて凍えた殺意に駆られ動く、^{リビングデッド} 生きた死者だけだ。

“ほんとーに嫌な夢でさー”

でも、結局は“最高だった”んでしょ？（後

ぜんらの ウェッド が あらわれた！

逃げる（一倍速）

逃げる（二倍速）

逃げる（五十倍速）

逃げる（一億二千万倍速）

……すんません調子乗りました。いい加減ギャグが下ネタ以外無いのどうにかしよう。

“過去は虹色。でも、消えてしまう” 思い出って何色だろう？

「ありがとうございますー」

定型の声に軽く顎を引いて、トレイに乗る食べ物 包装紙に包まれたハンバーガーとコーラ（Lサイズ）を持ち、座る場所を探す。

店の外は大きな道を中心に添えた主街道が広がり、妙に鬱屈する気分を日に当てて燃やせないかな、とか思ったため、外にも設置してあるテーブルに、それに付属する椅子に座った。シヨットガン入りのホルスターが椅子に入らなさそうなので、ホルスターをベルトから外してテーブルに置く。

座って、ぼーっとする。

あー、だり。

気分が悪い。

あんな夢を見たせいだった。

そして、俺を見た人間が、武装の数々を見てか、それとも俺の目が髪か顔を見てか、驚きの目を向ける。女も男も、関係無しに俺を見ては目を剥いた。

（……あー、ウゼー）

いつもは気にならない視線も、今は心にささくれ立って刺激となる。

確かに、俺の目も髪も、普通じゃない。髪は地毛でこんな色だが、それもアルビノという特異個体だからだろう。目の色だって珍しい事この上ない。

だが、突き刺さる視線がウザい事に変わりはない。なんかチャラそうな男は、隣の彼女だろう女が俺を見た途端、視線に驚嘆と興味の色が混ざったのを目の敵のようにして睨む。中年のババアの群れは俺を見た途端嫌そうな顔をしてひそひそと小声で何かを喋りだす。警察だろう男は隣の同じ警察風の男に俺を指差し何かを話す。

他にも、俺の顔をジロジロ見る輩は多い。そこには嫌悪や忌避や好奇などの、相手のことなど考えもしない無遠慮さがにじみ出ていて、反吐が出そうだった。

笑みを生む気にもなれない。

「殺すぞ……」

ぼそつと呟くと、近くを通り過ぎた十歳半ばの少年がぎょっとした顔でこちらを凝視し、そして駆けていった。

殺意を感じながら、ハンバーガーの包装紙を破く。

食欲など元から無かったし、外に出たのは失敗だったと心底思いながら、口を開いた。

頬張る。

口の中に、パンと焼いた肉とレタスとマヨネーズの味が入り、それをばけつとした表情のままに咀嚼した。

噛んだ。肉が肉汁を広げ、レタスがシャキシャキとした触感でリズムを作り、マヨネーズが味覚を独占する。

しかし、その中に小さく見え隠れするのが、焼かれた牛肉の味。少しだけ牛乳っぽい味は熱い肉汁を舌に与え、その味を以って舌を様々な味覚に染め上げる。

……。

牛肉と人肉はやはり違うだなんて考えるのはよそう。

嚥下する。なんだか今日の夢のせいで、まるで人の肉でも食っている気分だ。

もう何年も食べていない人肉の味が舌の上に、幻の味覚となって

覆い、胃に胸焼けのような焦げの感覚と、気持ちの悪い重みを感じた。

嫌な気分になって、自然と苛立つ。

「チツ」

一緒に買ったジュースで口の中を切り替える。炭酸のコーラは口の中で弾け、刺激を伴い舌をひりつかせる。

うげえ、と思わずその感触に舌を出した。肉の味もマヨネーズの味もレタスの感触も全部吹き飛ぶ。

買っただけじゃなかった。

俺は炭酸ジュースの類が苦手だ。特にコーラのように、炭酸のキツイのは大の苦手。理由は単純。食べたものの味が消えるから。それに舌がひりひりして嫌だ。

はあ、とため息を吐いて、座っているテーブルの、出来るだけ自分の遠くにコーラの入った紙製のサイズコップを遠ざける。

右手に持ったハンバーガーをトレイに置き、金属製の椅子の、冷たい背もたれに背中を預ける。腕をだらりと垂らし、足も適当に伸ばす。

少し上を向く視界のままに首を曲げ、空を見上げた。

空はサファイアのように青く、澄んで。

雲はまばらに浮き、ただただ白く。

光は透明の熱となって世界を輝かせ、己を覆う。

蒼穹、そう呼べる世界が広がっていた。

「……きれー」

無感情に呟く。そんな事、思ってもいない。

綺麗、ね。

そんな風に思える心は、自分にあるだろうか。

「無いのかねえ……」

と、そう判断した自分は心が無いのか、それとも在るのか。人を可愛いとか綺麗だとか美しいとか、そんな風に判断する事は出来る。自分の中の価値観に合わせ、それを評価すればいい。だが、風景を見ても、心はそれを“風景”としか伝えない。景色は景色でしかないのだ。絶景を見ようと、俺はそれを“風景”としか見れない。

「あー……あー……」

怖いよ、悲しいよ。

思ってみて、感じるのはリアリティの溢れる感情。

「は」

面白い、楽しい。

笑ってみても、感じるのは虚無感。面白い？ 楽しい？ そんな感情、俺はもう理解できない。

十二歳の俺が感じたのは、所詮憎悪の先の、開放感だ。

あれは違う。

確かに楽しかった。四肢を切断されても必死に懇願する人の顔は、最高に面白かった。だが、それは憎悪が生み出した、復讐の一部を遂げたがための愉悦であって、本物の“楽しい”じゃない。

理想論だとは知っている。それでも、俺が思い描く“本物”は、もつと綺麗なんだ。

純に幸福な笑み。それが羨ましい。だから親父も母さんもタイプも、死ねたはずのシルベも羨ましい。

羨望。醜い嫉妬の代替わり。

でも、それを得たいかと問われると。

解らない。

その感情がどれだけ美味であるか、俺はそれが解らないから、解らない。

俺の心は十一歳までに踏みにじられて、壊されている。絶望したのだ、世界に、人に。

絶望はとうに色あせ、風化している。なのに、俺の心はいつまで経っても壊れたままだ。

しかし笑みは完璧。目尻は綺麗に下がり、口元は綺麗に上がり、眉は綺麗に緩いカーブを描く。

母さんの笑み、か。

あの人は、いつも笑みが綺麗だった。上品、とても呼べばいいのだろう。そんな笑みで、だから俺も、そんな笑みが浮かぶ。

条件なんか無い。無条件に浮かぶ、空白の笑み。

身体を戻し、目の前にある食事を片付けることにする。

気分は悪い。だけど、いつもの事だ。

心は食べる事で活気付く。

栄養を、腹に確かな感触を得ることで、自分の心は活発化し、人を殺すために笑えるようになる。

食べる事はテンションの向上に繋がっていると、俺はそう思う。

朝は嫌いだ。

朝になれば、俺は毎回のように死にたいと思う。

だけど朝飯を食べ、そして昼になると、心はそんな事を忘れ、蹂躪をしはじめる。

なんだか空しくて、やる気が無くなるから朝は嫌いだ。

噛み、指に付いた肉汁を舐め、包装紙で指を拭いて、コーラを一口飲み、そしてまた食べる。

（朝飯は命だ）

食べる。

(命は蔓延ってる)

飲み込む。

(蔓延ってるのは悪でもある)

また食べ、飲み込む。

(悪を成敗すべきは正義ヒーローの使者)

食べる。

(正義ヒーローの使者なんかになるつもりは無い)

食らう。

(ただ俺は人を殺す)

コーラを飲む。

(そこには他者を蹂躪したくて堪らない十二歳の俺がいる)

飲む。

(だけど善悪論で行動する十二歳以降の自分も存在する)

また食べる

（更に十七の俺は人を救うなどと言う）

食べる。食らう。

（狂っている、そして馬鹿げている）

飲む。

（狂っているのは精神）

噛む。

（己^{おの}が精神は狂い）

飲み込む。

（自らが心は崩壊し）

飲む。

（それでも尚謳い続けるは理想）

吸う。

（叫ぶべきは血飛沫を呼ぶための哄笑）

喉を鳴らし飲む。

（謡^{うた}った言葉の数々は人を殺すための蹂躞^{じゅうりん}賛歌^{さんか}。もとい殺人賛歌）

口に突っ込み嚙下。

（語ることで他者の心は弾劾され破滅に導かれた）

飲み干す。

（誇っているのは憎いと、殺したいと、そう堂々と言える己そのものの）

食べ終わる。

（謳って誉れ、理想を）

息を吐く。テーブルに肘を突いて頬杖をしながら、目を閉じる。暗闇の世界の中、周囲の音を聞いた。

（そうやって龍に成ろう）

足の歩く音。その群れが織り成すざわめき。

（成って、吼え）

人々の行き交う声。活気に溢れ、そして笑う声。

（爆笑し、蹂躪して）

車がクラクションを鳴らしたり、アクセルを踏んでタイヤが回る音が繰り返し鳴る中、呟いた。ギターの弦を、小さく、指先で弾くみたいに。

「人を殺しにいくじゃないか」

目を開き、彩りを視界に納め、音と共に世界を視る。
依頼。

シルベを救う。それは依頼だから。
そう、依頼だ。

依頼をやって金を貰って人を殺そう。
幾らでも、幾らでも。

沈んでいる心を、引っ張りあげる。
自己の意識を明確にする。

人が憎い。

『ならば殺せ、少年』

人は嫌いだ。

『オレにちかよるな!! 化け物!!』

悪人は殺すべきだ。

『だからってエ……!!』

善人は殺しては駄目だ。

『正義を振りかざしているつもりか?』

理想を得た。憎悪の代弁が理想だ。

『絶対にアルファに先を越されないよ』

潰えない。理想は絶対に死守する。それが俺の生きる理由だから。

『謳えよ少年』

違^{たが}えない。

『己^{おの}が理想を、誉れだと、誇りだと』

どんな事があるうと、必ず立ち上がる。

『そう、賛美しろ』

心に浮かぶ言葉に、誰かが反応してくれた。

（ああ、謳うとも。誰かのためじゃなく、俺が描いた理想の世界を見るために）

思考をシフトする。

暗く沈んだ心は、過去を思い出すことで、自分を見出す事で、ほとんど元に戻っている。

だけど、これだけじゃ駄目だ。

俺は、これから人を殺す。

さて、問題だ。

（人を殺す場合、どうしたらいい？）

正解は実演する。

だから笑った。

口端は滑らかに緩やかに生々しく動き、円弧を描く。薄く開く口は、その奥の白い歯を見せつけた。

目を愉悦で細め、眉を嬉々で上げる。

見た人に好感触を与える、強気の、堂々とした笑顔。

そんな笑みを浮かべ、そして心のギアを切り替えたアルファは、

トレイを持って立ち上がった。ホルスターを元の場所に戻す。

蹂躪を始めようじゃなか。

店内のゴミ箱に包装紙と紙コップを入れ、トレイ置き場にトレイを置いた。

ちらと時計を見れば、まだ時間は十時半。

あと二時間で市長宅。

一人、アルファは笑い、店を出た。

同日十二時。門前にて。

もそもそと、自分の服装を　これで五回目だが　顔を下げて見る。

何日も着てる服一式だが、大丈夫だろうか？　一応洗濯もしてあるから綺麗。皺もアイロンで伸ばしてある。髪は梳いたし、いつもの髪型だが縛った。化粧はした事が無いし、いきなりやったら確実に失敗するだろうからしていない。唇の血色は大丈夫。肌の調子も問題ない。えっとー、他にはー……、ちゃんと身体も洗ってある。髪も同じ。魔の化学製品は使っていないけど。それを言ったらエルトさんに驚かれた。

問題………、無いか？

「気になりますか？」

隣のエルトさんがくすくす笑って、笑みの細目でこちらを見た。今いるのは門のすぐ隣の塀。その巨大な塀に、エルトさんは背を

預け、私はその場に立っている。

「どう、なんでしょうか……」

「解りませんか」

頷く。

父親と再会。

その言葉が、自分にとってどれほど衝撃的なのだろうか。
よく、解らない。

「ウェッド市長は、貴女に会いたがってましたよ」

「……でも、私は」

「どんな顔かも解らないから、父親だと、思えない？」

また頷く。

事実だ。

だが心臓の鼓動は不思議と速まっていて、もうすぐ訪れる父親という人物に、思考は夢中だ。

「あの村に居た頃は自分の親なんて、一度も考えも、しなかった……。皆、私のお父さんで、お母さんだったから……」

ぼつぼつと語る口調。自然、顔は少し下を向いた。目線も、石造りの地面を見る。

過去形だという事実はやはり重く、でも、今はそれ以上に、すぐ後に見る顔が少し怖い。

だって。

化け物さんに依頼を出したのは、その市長だ。

ウェッド・アルケオ。イルタリネの姓を消し、市長となるために想像すら出来ない女性と結婚し、前市長のお墨付きで市長となり、自分の何もかもを壊した張本人。

憎い。

それが本心だ。

だが、そこに自分の父親であるという事実が混ざり、自分でも理解不能な心境になる。

「……優しい方々でしたか？」

「はい。皆、優しくかったです」

おずおずと聞くエルトさんに、言葉で肯定する。

「……そうですか」

エルトさんは、さっきとは違い、笑みを消して目を細めた。何かを思案するように、遠くを見つめて。
すると、

「来ましたね」

そういう声が聞こえて、だから周りを見た。

左は門と、その奥には街の外の、荒野や森などの大地が広がっている。

だから右を向く。

その視界の、二十メートルほど先、ラフな格好をした三十代後半差し掛かりと言った風情の男性がいる。その片手には、細長いアタッシュケースが握られていた。

あれだろうか、そう思いながらその姿を見ると、私と目が合った。

薄く鋭い、切れ長の瞳は私を見ると、僅かだが目を見開き、しかしすぐに無表情面になった。そして歩いてくる。

「……あれ、ですか？」

「ええ、あれが、ウェッド ・ アルケオ現市長。 シルベさんの、父親ですよ」

あれが。

改めて理解すると、背筋に緊張が走り、心臓の鼓動は更に一段強くなった。

そのまま、私もエルトさんも無言でいると、市長は近づいてくる。予想とか、そんなことも出来なかった顔の父親が、間近にあった。背はアルファさんと同じくらいで、肩幅はアルファさんよりも大きい。手はごつごつして足も大きい。にじみ出る雰囲気は、その無表情が厳格な風にしていて、近寄りがたいといったイメージが湧いた。

市長は私を見て、言う。

「私のことは、別に父親だなんて思わなくてもいい。どうせ、姓も違う」

とだけ言い、エルトさんの方を見る。

初めて聞く父親の声音は低く、怖いものだった。

その強引な言い切りに、私の口は開き、しかし閉じる。

父親と思わなくていい、か。

なるほど、有難い。そう思うのは失礼だろうか。

別にそれでいい、と言うなら。

この男は、アルファさんと同じ、憎むべき相手だ。
相手の気遣いに感謝しつつ、だから、市長、と思うことにした。
シルベは、ウェッドの右拳が強く握られた事に、気付かない。

「……約束通り来たぞ」

私の視界の中、二人の会話は続く。一方は無表情、もう片方は作り笑顔で。

「ええ。どうやら、」

頬を愉快そうに緩めたエルトさんは、塀に預けた背中を離し、市長のその奥を見るように、体を横に曲げた。

そして、更に笑みを深くし、

「本当に守ってくれたみたいですねえ？」

その身体を曲げた先、そこには。

え。

そこには、ラフな格好をした男性が 全員が全員、巨大なボストンバッグやゴルフケースを持って 三十五人も居た。

しかし、その三十五人全員が団体となっているわけではない。バラバラに二、三人のグループで会話をし、談笑していて、しかし誰も笑っていない。しかも、時折こちらを、首を回したり、話題に方角でも上がったのか指差すような形で見たりしている。全員目が鋭く、睨むような眼光があった。

極限まで削げ落とした冷静、とでも言えればいいか。そんな、冷静すぎていつそ刃物と呼んで差し支えない眼光が、タイミングをずらし、しかし、約三十秒に一度こちらを、その三十五人の誰かが見る。シルベが意味も解らず首をかしげていると、市長の僅かなため息

交じりの声が聞こえた。

「……全員、家族や親戚は居ない。そういう、死んでも困らない輩で編成された部隊だ」

同日一時。“処刑場”。

秘書の女　前日街に入ったとき来た奴　に言われたとおりに森に入って少し行くと、開けた場所があった。

そこは円形の広間のようで、木が無い部分が森の中にぽっかりとある。半径十メートルほどだろうか。

奥の木に、前日と同じように髪を結ったエルトが寄りかかり、その隣に同じ服装のシルベ、そしてシルベの逆隣りにはウェッドだ。ウェッドの手には、大きなアタッシューケースがあった。

(……?)

その、三人が同じ場所にいることの軽い疑問を覚えながら、開けた場所、“処刑場”に入った。

二十メートル先のエルトが笑みで手を振る。
言葉で返す。

「来たぞ。……んで、入会手続きは？ どうすんのさ。交渉する？
どうせ結果は見え見えだけど」

「ああ、入会手続き、ですか」

エルトが笑みを浮かべて、顔を俯かせた。さもおかしそうに笑い
声を静かに出す。

くくつ、あは……。クスクス、くすくす。はは、はは……。

静かにゆったり、本当に面白がっているみたいで、気味が悪い。
首を傾げると、エルトが顔を上げて言った。
瑠璃色の瞳は俺を、感情つけの無い無機質なガラス玉と劣化させ
て射た。

「ねえ、アルファ」

「何？」

返答に、即答が帰ってきた。
信じがたい言葉だった。

「どうして私が、クレイジー・チャーチ狂会に入っていると、そう思っんですか？」

「……、は？」

一拍、瞬きの時間が生まれ、そして二度目の瞬きをしてから、意味不明、と言うような声が出た。自分でも間抜けな声だ、と思う。

「解りませんか？」

ニヤ、と揚げ足を取ったとしても言わんばかりの顔、つまりウゼエと思える顔で冷笑するエルト。

その一言が成す意味を、言葉にした。

「お前、クレイジー・チャーチ狂会の会員じゃないの？」

「ええ」

あっさり肯定した。更に、

「つい一日前、脱会したところです」

「……はあ。アイツ等カルト宗教並みにしつこいから、入会すると脱会は難しいとか聞いたんだけど」

「気にしなくてもいいですよ。こちらが一方的に脱会の旨を伝えただけです」

「ほーん。……えー、じゃあ、ええとー？」

言われた言葉を理解し、そして腕を組んで何を言うべきか、考える。約五秒、たっぷり考察して出た声は、

「……いや、じゃああの、聞いていいか？」

「何をですか？」

停滞のムード流れる中、視界の中央に、ウェッドを見た。

否。正確には、その奥。半円状の視界全体に潜んでいる何十人か。

「オッサン、アンタ、何で一人じゃないんだ？」

銃器類を所持した人間たちが、突然出現した。

視界一杯に出現した防護服に防弾加工されたベスト。そして黒光りするヘルメットにバイザー。そしてアサルトライフルの群れ、群れ、群れ。

その銃口の数にして約三十五。全員が半円状に、ウェッドが射線に入らないようにして弧を描き俺を半包囲していた。

レーザーポインターの群れが赤く光り、俺の体の急所を照準にする。両膝、額、心臓、肩、的確な狙いにきっちり分配された銃口の数々。

出現の速さと、そこから銃を構えそして狙いを付けた時間からして、結構な腕前の部隊なんだろう。

へえ。

自然口端は釣りあがる。

銃器をこれだけの数向けられるのは、いつ頃ぶりか。

心が高鳴りを発し、右手の指先がピク、と動く。

笑みは齒を薄く見せたものに変わり、目尻は愉快そうに細まって下がる。

三十五人も殺せるなんて、今日は割りとラッキーじゃん。

ともかく。

そう、昂り笑みが段々と濃くなっていき、落ち着きを失いそうになる自分に規制を掛ける。

笑みを一度消して、すう、はぁ、と深呼吸。吸って吐いた冷たい、森特有の湿気の混じる空気を全身に取り入れ、未だ鳴り止まない心音の重さを胸骨の中心辺りに感じながら、内心言葉を呟く。

騙された、と言うべきか。

エルトが狂会クレイジー・チャーチの人間でない以上、俺を狙う理由がない。

そして、その交渉の脅しに使われるのがシルベ、　　だったけどそうじゃない、と言うことになる。

なら、ウェッドが俺に加担する理由がない。エルトが俺に何をするかは不明だが、それでも俺に加担するよりかはいいだろう。

もしくは、そうしないとシルベを殺すと、そう脅されたか。肩を竦めた。はは、と笑いながら、ウェッドを見る。

「んで？　これは何？　市長さんや」

言葉に刺々しさも苛立ちも怒りもない。予定調和というより、慣れたための呆れが混じっている。

よくある事だしなあ。俺もよく裏切るし。

異物討伐の依頼で、同業者を討伐後にさっくり殺すとか、そういう事は自分もよくやる。

だから、罰ばちが当たったといった気分。

殺して生きる人間たちの世界なんか、裏切られたとかそんなのは日常茶飯事でもある。

「……悪いな。私は、元からこのつもりだった」

ウェッドは、いつも通りの冷静さで、俺を見た。

銃器の群れが発砲しないとなると、ウェッドが部隊の殺害許可イニシアチブを持つてるのか。

ふうん、とそう思いながら、視線を方々に向けつつ尋ねる。

「あつ、そ。……なあ、ウェッド」

「なんだ」

「この場合、俺は負けるべきか？ それとも、勝つべきか？」

俺が負ければ たぶん死なないから屈服？ ウェッドは、シルベを返してもらえらるだろう。

シルベを見る。いつになく不安げな表情で、足はほんの小さく、震えていた。目はキョロキョロと、エルトを見たりしていた。

怖いのだろう、銃が。

感動の親子の再会……ってのは無さそうだなあ。

ウェッドはともかく、シルベがそんな感じじゃない。

どうせウェッドが『父親だと思わなくていい』とかなんとか言っただろう。それでシルベは、憎む事にした、と。

ウェッドはやはり、救われない。

「……お前はどうしたい」

聞くの？ と首をかしげる。銃口の群れが動く。その軋む音に肩を小さく震わし、目を僅かに見開くシルベ。

全てが連なつて動き、一種の命に見える。

その傾げた首の角度のままに、笑みが 爆発した。

笑い声は上げない。

それでも、大きく口を開け、口で三日月を作るその笑みは、狂気と殺意と憎悪と愉悦入り混じる、おぞましいもので、その形のままに出る声は必死に笑い声を抑えていて、だから爆笑していた。

「殺したい」

そして、タガが外れたかのように、

「三十五人。あは、なんだよ、全然足りない。もつと来いよ人間ども。俺が殺してやるんだから、大義名分掲げてもつと来いよ。なあ、おい。人を撃つたことあるのかお前ら。撃つた事ある？ ねえ、あのの？ どうなんだよそこら辺。もしかして撃つた事ない？ ……無視か、まあそれならそれでいいけどさ。まあ、これは前夜祭だよねえ。遊びだ遊び。鉛の弾がどうしたよ？ そのくらい、弾くか溶かすか砕くぜ俺は。いやあ、ちよつとアルファさん、少し興奮気味だよお？ 今日は嫌な夢見て強引にテンション上げてるから、それも一押しだぜ？ あー、ヤバイヨヤバイよー、人が三十五人も、しかも殺してもいいだけの大義名分持つてきてくれちゃった。あはは、これ、一日前のプレゼント？ いやあ、ヤバイっしょ。三十五人かあ……少ないなあ。全然少ない。どうせなら五百人くらい連れてきてくれても結構だったのに。それも手榴弾とかが無いのは森を燃やさないため？ 馬鹿？ たかが銃三十五丁で俺が屈服すると思ってるの？ ……うわ、また無視だよこの人達。つれないねえ。まあいいや。ごめん、俺ちよつとスイッチ入っちゃった。久しぶりだよこれだけ銃を向けられるの。アズナの国の戦争に加担したのとはまた趣が違って最高だ。俺は主役でお前ら脇役。わかりやすくていいねえ。主役は脇役バツバツと殺していいんだし。いんやあ、“百鬼夜行”とまでは行かないけど、それでもちよつとは楽しめそうだし

ね。前夜祭だよこれはさあ……。ククツ、アハ。前夜祭だと、そう思っているんだよなあ？ エルト」

言葉が前後を無茶苦茶に、思ったことをぶちまける様にして吐き出される。

首は傾げの角度のまま、笑みの口は大きく開いたまま。獰猛な猛禽類の笑みがそこにある。

「……まあ、そうですね。出来れば、ここで死ぬか致命傷を負ってくれると助かるんですが」

「オーケー、ウェッドに騙されたとかはどうでもいい。今はうずうずしてんだ。人を殺したくてさあ」

笑みのままに首を戻し、クツクツと喉奥で笑いながら背筋を丸めた。腕はだらりと垂れ、膝は軽く曲がる。

首だけが真っ直ぐで、瞳は紅色を動かし森には無い色彩で浮き足立つ。刀は鞘から出ず、銀銃も手^{ハンドガン}に握られない。

脱力、そう呼んで差し支えない体勢に、三十五人が構えを整える。

「残念。一時間後に生きていられるなんて思うなよ、人間共」

言った瞬間、

「発砲を許可する」

ウェッドの一声で、銃撃が炸裂した。

黒と白金、そして紅色、最後に白。それらが一瞬で消える。
銃弾の群れは、消える一問後に届き、そして虚空を通り過ぎた。
アルファが、いつの間にか、最も右端の兵士の首骨を真横に折っていた。

筋肉の爆発。

アルファはそう理解している。緩急の付いた動き、というよりは静から動への急激な動きで、初速に最大の力を使う動きだ。だから、もともとの膂力が怪物じみている自分だと、点から点の移動のようになる。

持ち上げられる兵士はあっさり絶命。

「まず一人」

言った瞬間その隣の兵士が発砲。淀みなく、行動を鈍らせるための膝撃ち。しかし細い体からは想像だに出来ない、人体の放り投げによって狙いを崩され、射線は上を向く。しかしその銃弾の全ては放り投げられた死体が盾となり、アルファは傷一つ負わない。
慌ててその兵士が足を後ろに出して、身体を支えた瞬間、

「おら二人」

その頭をいつの間にか目の前にいたアルファが、左手でバイザー上部を驚^{わしつか}?みにし、

ベキ。

易々と、ヘルメットごと前頭部を砕いた。当然死亡。

一秒の百分の一。その時間で兵士達の動きが、余りの異常さに止まる。握力が八百キロ超のアルファの前では、鉄製だろうとプラスチック製だろうと炭素繊維製カーボンだろうと関係なく砕く。それを事前情報として仕入れているはずの兵士達でも、その光景は異常の一言だった。

それをアルファは見逃さない。

「更に五人」

その兵士が手に持っていたアサルトライフルを兵士達に向け、死体の指を押しフルバースト。

動きに停滞のあった、呆けの三人が何発か貰い死亡。

左端の方にいる兵士達が構え、発砲する。狙いは正確に、アルファ一直線。
が、

「それは六人目」

一歩で爆ぜるように動いたアルファが、元居た場所からすぐ近くの兵士の肩を握る。メリメリメリ、と嫌な音がして、そのまま後ろ手に放り投げられた。

丁度、銃口が火を噴き、銃弾が殺到。千鳥足で踊った兵士は血飛沫と野太い悲鳴を上げて野垂れ死んだ。

アルファはそのままの動きで右手で刀を引き抜く。薄い黄色の刃だった。

足が二歩目を動き、その余りの速度に遠くの兵士が狙いを合わせられず、そして迫られる兵士が軽いパニックで銃を乱射する。

その狙いを見るだけでサイドステップ。更に銃弾が迫るのを見ずとも銃口の動きで理解したアルファは、更に斜めのカーブで移動。

足は駿足^{しゅんそく}で駆け、銃弾がすれすれを霞め通り、アルファが面白そうに口端を上げる。

銃弾がかいくぐられる。兵士のパニックによる狙いのブレ、そしてアルファの桁違いの性能^{スペック}。それらが銃弾を回避させていた。

そして兵士の真横にきた瞬間、右手が手首を回して水平になり、その動きのまま、止まることなく兵士の首と胴体を分離。血が爆発するように噴出し、シャワーを有む。

「これで七人」

言ったタイミングで生首がヘルメット付きで、バイザーに表情を隠し、ぼとりと落ちた。シルベの、うづ、という音が酷く鮮烈でリアルティがあった。

悲鳴も無かった。ただ、視界の端でうずくまるシルベを見ながら、アルファは晒^{わら}う。

残る銃口の全てが突き刺さり、両者とも、出方を待っていて、一時的に動きが無くなる。

解ってるのだ、兵士たちも。俺が異常で、そして普通の銃なんか通用しないと。自分達は、せいぜい軽傷を負わされればいいだけの、使いパシリだと。

解っててもくるんだもん。

馬鹿だよねえ。いや、死んでもいいような境遇なのだろう。死んでも幾らでもかき消せるだけの人員という事なんだろう。

閉じた口の口内だけで呟き、視界を動かす。

今で残りは二十八人。

右手には喰龍。

視界右中央辺りには十人の兵士。自分の右真横十五メートル当たりに十人。残りは五メートル左隣に八人。隊列を組み、三方から銃弾の雨、なのだろう。だが右が撃つと左が射線に入るだろうから、右（or左）と前の二方を気をつければいい。

停滞はどれだけ保つか解らない。
なら。

「動くまで！」

弦き、真つ直ぐに動いた。

その瞳は、龍には成らない。

ただ笑っていた。

彼の心臓は、興奮状態で激しく音を鳴らしている。

酷い。

「ほいつ！ 八人目ッ！」

シルベは口を手で押さえ、耳から入ってくる音の惨さで込み上げる嘔吐感を堪えるのに、必死だった。

今自分は、膝を曲げて腰を落とし、木の方を向いて必死に、

(め)
め吐いちゃだめ吐いちゃだめ吐いちゃだめ吐いちゃだ
め吐いちゃだめ吐いちゃだめ吐いちゃだめ吐いちゃだ

そう呟くだけだ。

エルトさんはそれを見ているはずだが、しかし何も言わない。市

長もだ。掛ける言葉など無いのか、それとも掛ける気が無いくらい
どうでもいいのか、どっちなのだろうか。
どうでもいい。

「ほらほら九人だ！」

ただ、吐き気が酷かった。

銃撃が鳴るたびに鮮血の噴き出す音、そして化け物さんの嬉々し
かない声。

こんなの、おかしい。

間違っている。人が人を殺すなんて、絶対に何か吐き違えている。
そこに嬉々を感じるなんて、腐ってる。

皆、幸せそうに死ぬはずなんだ。

そうなのに、何で聞こえる死の一步手前の声は、絶望や怒り、苦
しみで満ち溢れているのだろう。

酷い血の臭い。

臭いと思う自分は間違っているのか？

「十人いったぞー！」

間違っている筈が無い、そう思いたい。人の死臭は臭いし、人の
切断面はグロテスクだし、血は赤黒いか真っ赤なだけだ。見たくも
無いし、どうして死体を見る人生を歩まなければいけないのか、真
剣に謎だった。

肩は震えっぱなしで、銃声のせいで不規則にピクツ、と揺れ跳ね
る。

怖かった。自分が今どんな世界にいるのか理解が出来なくて、そ
して視界が揺れ、脳も揺れる。
揺れる揺れる。

「十一十二イ!!」

回る回る。何もかも、音も色も木も土も自分も。

「十三だぜオイ!」

廻って廻って。

そうして、

「十四、そして」

唐突に意識が、ぷつつりと切れた。
最後に聞いたのは、元気そうな声。

「十五オツツツ!!」

世界は、狂っている。

視界の端でシルベが気絶し、慌ててその華奢な両肩を支えた。すぐ後ろの木に寄りかからせ、動かない事を確認してから、身体を戻した。

エルトは何もしない。ただすぐ近くで起きる惨劇を見るだけだ。その表情は、笑みが無い。笑顔を生む気になれないのか、それとも、苛立っているのか。
私も見る。

「これが十八！」

アルファが丁度、右手の刀で喉笛を突き刺し、一瞬で刀の柄から手を離し銀銃を構えたところだった。
ハンドガン

銃声が六つ。その他にも銃声が鳴るが、全て尋常じゃない速度のダッシュで避けられている。そしてアルファの出した銃声だけが、的確にバイザーを撃ち碎き、その奥の頭蓋に数ミリの穴を開けていた。

銃の腕前、身体能力、戦闘センス、どれを取っても普通から著しくかけ離れていた。

あり得ないような速度で動き、無茶苦茶な制動で動きを止め、バランスを崩し、明らかに挫いた形をする足首すら動きに取り入れる。無茶苦茶で、だが素早い。人体の酷使を平気で行えるアルファだから可能な行動だった。

揺れるように動いたと思ったら、一瞬で近くの兵士の額と銃口をほぼゼロ距離にして引き金を引いている。

ダン、ダン！！

響く銃声で、バイザーが割れ、そしてどさりと倒れた。

「加勢しないのか。……保護色、インビシブルだったな。それを使えば、不意打ちなど楽だろう」

横目にエルトを見る。エルトは薄い笑みを見せると、

「いいえ？ アルファが言ったように、これは所詮前夜祭ですから」

「十九！」

「……人が三十五人死ぬ事になっても、笑えるのか」

「私の笑みなんて、大抵嘘か空虚ですよ。ハッターセンスレスそれに、死人なんて、十三歳の頃に腐るほど見ていますから。それも似たような状態のものを」

更に口を動かすエルト。

「感情機能の一部が不全もしくは麻痺してしまっているアルファのように、私はちよつと厄介な心の病氣持ちですので」

「二十！」

というか、とエルトが私の顔を下から伺い見る。やはり、笑いのまま。

「そういう貴方も、まったく動じていませんが」

「ここに参加している三十五人は、生還できたらセルク街で第二の人生を与えられ、そしてその代償に死も賭^とせる者達だ。……銃犯罪を犯し、流刑になるところを拾い上げ、そして汚職の手伝いをしてもらっている。彼らにはもう、普通に生活できる場所など存在しないのだよ。あの化け物から生還する以外には、な」

自分で言っていて、昔はあれほど嫌った汚職も、今だとすんなり受け入れられる。成長というよりかは、風化だろう。

褪せ、そして偽善なんかでは娘を救^{シルベ}えないと気付いた時点で、私はどんな事でもするつもりだ。

だから人の三十五人、死んだところで眉一つ動かない。

「二十一――！」

エルトがそれを見て、クスクスと、歯を見せ笑った。

「悪人ですね、市長は」

「それで結構。……約束は、^{たが}違えるなよ」

「ええ。市長も、違えないでくださいよ？」

「解ってる。全員死んだら、使えばいいのだろう。
魔蜂弾^{まほうたん}とやらを」

言つて、手に握る長大なアタツシケースを地面にそつと置き、
自分も腰を下ろして片膝を突き、開く。

中には、丁寧^{ていねい}に収められた黒塗りのショットガンがある。その隙
間には、丁寧に配置された十二発の弾丸と、片手で扱えるサブマシ
ンガン。

別にどこにも不思議な点など無い。市販、というのは語弊がある
だろうが、まあ銃販売店ではよくある、セミオートマチック式のシ
ョットガンとサブマシンガンだ。

ポツリ、と呟く。

「……異物^{クラウンチップ}刻印を施すのに、人体である理由など存在しない、か」

避けられる銃弾は避け、不可能なものは右手の握る喰龍の腹で受け止め溶かす。

「遅い遅い！！ 銃弾撃つ技術がなまくらすぎんだよバーカ！！
ほらよつ、二十二イ！」

右手が袈裟掛けを風を生みながら発生し、一瞬で目の前の兵士を斜めに切断した。

刹那には銃撃が発生するが、それも予測済みの行動だ。一気に足を、バネのように弾く動きで前方へ奔る。切断された肉が衝撃でズレ動き、銃弾は低く落とされた腰と、それを伝う体を狙うが、急遽跳ねる動きを見せたことで狙いが外れる。

前方へ直進するに近い跳躍。走るよりも速度は速く、腕の動き一つで狙いが揺れる銃では上手く当たらない。当たっても問題ない。跳躍で宙を舞いながら喰龍を投げ、そしてホルスターに納まるソードオフ・ショットガンで通り過ぎかけた兵士を撃つ。二度撃ったことで兵士二人の腰部は吹き飛ぶ。血は爆ぜ、土は移動した場所を主にして真っ赤になっている。そして喰龍も外れはしたが牽制になった。突き刺さる地面は一部が、というか刃部分の四分の三を溶かされ、そうして喰龍は七メートルほど先で埋まって停止した。

自然、テンションが上がる。

最ツツツ高！！

余りの爽快感に感慨も浮かばない。

気分がいい。だから蹂躪はやめられない。

これだよなこれエ！

これが十二歳の自分だ。

大量虐殺に愉悦が響いていた頃の感情の高ぶりだ。

心臓の鼓動の爆発が止まらない。もっと切りたい、殺したい、そう言っているようで、だから笑みが生まれる。

楽しい。

醜く腐った“楽しい”でも。

真っ黒な“楽しい”でも。

それでも。

やはり、
楽しい！！

認めてしまえば世界は景色を変えた。

鬱屈していた朝が嘘のように、心がタノシイの一言で暴れるようになる。

最高にテンションが上がり、体からは汗が飛ぶ。頬に張り付いていた汗は跳躍で外気に飛びつき、光の球となる。体に感じる森の冷たい空気が、汗に染み込んで心地よかった。

銃撃は前方から来るが、ほとんど気にしていない。そもそも跳躍といっても、そんな大跳躍じゃない。地面すれすれを底面飛行するような移動だ。

そして、空いている左手で地面を掴む。

ズガガガガ！！ と地面が音を立てながら小さくほんの僅かな距離抉れ、そして左の掌も皮膚がはがれる感触がある。だが気にしない気にしない！

何しろ気分がいい。殺人癖というわけじゃないが、それでも蹂躪するのは楽しい。

だからこそ“笑う蹂躪人形”^{ナイトメア}だ。

スピードはゆるやかに落ち、身体を左方向へ流れさせる。カーブを描きながら足が地面に付き、同じ体勢のままに駆ける。

二歩目で喰龍が突き刺さる地面の斜め後ろに到達。
そして右手は喰龍を掴む。

掴んだ瞬間投げた。

横投げのスナップ付きの一撃は、モーション無しの唐突な行動で、だから五メートルほど奥の三人をスパスパ切断する。腹部で人が横に断裂。その他は避けた。喰龍は森の奥に消える。まあ、後で拾えばいい。切断されたものが目印になってくれる。

銃撃の数はもうほとんど無い。リロードをする者と撃つ者がバラバラで、だから飛んでくる弾丸は少ない。

前方から十二発。それもほとんど密集している。

その奥の視界では構える兵士が一人。移動先に狙いを合わせようとしているらしい。銃口は右を向いていた。山を張る、とかそんな感じが。

他の兵士はリロード中。

なら。

当然左に移動。右足で地面を踏み、蹴る。

土くれを後方に飛ばしながら左方向へ移動し、

「ヒヤッホォ！」

銃弾がスカスカ避けていく状況に快感を見出しながら、曲げている身体を戻し爆走。

七メートル奥には残りの九人。

二歩、銃弾が来たのでスライディングで滑り避ける。残り四メートル。

スライディング中、リロード。

スライディング終了。銃弾が十発、右と左の空間を満たしながら来る。前方からも来ていた。

なら、

「ハハッ！！」

右手で律龍を引き抜いた。

身体に触れると予測できる銃弾は全て刀を使う。桜色の光が鋭い一閃を幾重にも生み、前方から来ていた五発のうち三発を砕いた。こちらが回避運動をしないと理解すると、銃弾は俺めがけて一気に来た。

それも砕く。

砕く砕く砕く砕く砕く。

砕いて砕いて砕いて砕いて。

「ハハッ！　ハハハ！！」

歡喜の声で縦横無尽に刀を動かし、全部砕く。

銃弾は一発も当たらない。

「う、嘘だろ！？」

兵士の声に笑みは濃くなる。

七歩目が踏み込まれ、残りは既に一メートル。兵士達が身体を前面に向けたままにバックダッシュ。

逃がすわけが無い。

八歩目、律龍の間合いには言った瞬間、腕が振り上がり、

「ハハ……！！」

降ろされた刀の切っ先は、最も前の男に触れる。
人体が爆発。

「ハハ、はっ！」

そのまま貫く挙動で二人目も砕く。

「ひ、ハハッ！」

三人目、銃口がこちらを向いたので、刀を軽く揺らして砕く。
銃が爆裂。

「ハハハハハッ！！」

憎悪と爽快感で滾る声は荒く、そしてその銃の持ち主も、

「ヒ」

と言に残し死滅。

左足で踏み込みながら、腰を低く落としながらの回転運動。

「ハッ」

当然刀は回り、

「ハハ」

男の足に触れ、

「アハハ！！」

爆破。

瞬間身体を戻し、回転し終り身体は前を向く。

軸とした左足で前方へ駆ける。

残りは五人。

銃器を持ちながら、逃走していた。

走る事で荒くなる息と、そして今までに起きた異常極まりない殺害現場に、心臓が爆発しそうになる。

「なん、だよ……なんだよアレエ！　どこの世界に、軽武装で銃器の群れに勝てる人間がいるんだよおッ！！」

叫ぶ声。誰かに告げるつもりも、聞いてもらうつもりも無い。あんな化け物を相手にしたのを後悔した、いや、もっと言えばセルク街で銃犯罪を犯した事を悔やんでいた。

他にも逃げる輩は四人。全員、必死に前だけを見ている。すると、

「さあって人間。　どう死にたい？」

声がすぐ背後から聞こえた。

ひ、と誰かが声を漏らした。いや、自分だった。

誰もが、走るのを止めた。

無駄だと悟ったものが一人。その男は地面に崩れ落ち、両膝を付いて脱力したようにへたり込んだ。

自分も、走る足が止まっている。他の二名もそうだ。

自分は動かない。すぐ後ろに死そのものが、それも地獄のような死に方を持つてくるものがいて、だから恐怖で何も思いつかなかっ

た。

しかし、立ち止まり動けない二人の、一人が振り向き　つまりこちらを向いて　アサルトライフルの引き金を押した。銃撃が起こるはずだった。しかしそれは、

「あーあ」

黒と白金の線のような残像が生む、残念そうな言葉で遮られる。いつの間にか、その青年は発砲しようとしていた男の前腕部を、その手で握っていた。

止まったためか、髪は優しく慣性に従って揺れ、サラサラと白金の筋を異質な色として生んだ。

瞬間、

ゴキリ。

男の腕は、嫌に生々しい音と共にぶらぶらと、重力に従い揺れた。純粹な握力で、片腕前腕部は、半ば当たりで握り潰されていた。肉も、神経も、筋肉も、何もかも。皮膚だけが完全には千切れず、かろうじて腕をくつつけていた。

「お。お、お、おおおおおおおアアアアアああああああああああああああああああ！！！！　腕！　腕！　お、俺の腕がア！！」

野太い絶叫が木霊する。

もはや、動くものはいなかった。

誰もいつそこに居たのか、少し後ろに居たはずなのにどうやって移動したのか、理解はしていた。
走って移動した。だが、その速度が、一応軍人並みの訓練を受けている彼等でさえ追えなかった。
化け物だ。そう、誰もが思う。

「うーん……」

しかしそんな評価など気づいていないという風で、片腕を緩く広げ、首を傾げる青年。

動き音を発するだけだった口が、表情を作るために動く。

「俺としては、そうだなあ」

楽しそうに、面白そうに。

血色良い赤色の唇は柔らかく弧を描き、目尻はスッと細まり、眉は緩いカーブを描いて。

美顔は、ところどころを血で染め、その赤い目を殺意と愉悦でぎらつかせながらも、

「 “人間のたたき” がいいなあ」

圧倒的に美しく、笑っていた。

そして、誰かの絶叫と爆笑が森の中、響いた。

上機嫌に刀一本を回収し、ショットガンと銀銃ハンドガンのリロードを終らしたアルファは、上機嫌を保って“処刑場”に入った。

エルトがいて、ウェッドがいて、気絶しているか眠っているシルベがいる。

辺りは散々だ。切断された死肉が群れ、そして酷い臭いを出している。

しかし顔も顰めない。
気分が良いせいだった。

「終わったぜ」

鼻歌交じりに言った。笑みが顔に張り付き、純に楽しそうに。

「楽しそうですねえ」

「ああ。まあな。やっぱ蹂躪すんのはたままないわ」

「真っ黒」

エルトの笑い顔での評価に、頷く。

「真っ黒でも面白かったし楽しかったさ。俺はどうせ“本物”なんか得られない。正の感情の九割九分九厘が死滅してるからな。だったら、真っ黒でもそれを感じるだけだ。擬似でもいい、“偽者”でもいい。“本物”が羨ましくとも、それを得てどうなるかが解

らないんじゃない、俺には“偽者”で満足するしかないしな」

長演説をし終え、ふう、と息を出して腰に片手を突く。

「……んで？ 前夜祭は終わったけど、今度はエルトか？」

「いいえ。次は、ウェッド・アルケオ市長ですよ」

さつくり否定。顔を横に振るついでに揺れるポニーテールを見て
いると、疑問にぶち当たった。

は？

「アルケオ？ 誰それ」

「私だ、アルファ」

出てきたのはウェッド。見ると、黒塗りのショットガンを持ち、
腰には片手で扱えそうな、サブマシンガンがある。そのままのラフ
な格好で防具類は無し。

見ようによつては俺と似たような軽武装だが、しかし相手は異物
クラーウ
刻印ンチップもしていないただの三十五歳だ。

はあ？ と首を傾げた。

意味が解らない。

「なんでオッサン？ つか、その手に持ってるの、ただの銃だろ？」

ウェッドは薄く笑った。おかしい、と言つよりは不敵な笑みだ。

「片方は、な」

言つて、シヨットガンを構える。

直後に発射。^{シヨット}

音速辺りの速度で散らばっていく弾丸を捉えつつ、ほんの僅かに首を傾げながら右に走る。

ただのシヨットガンだ。撃った弾丸は、何故かゴム弾だが、しかし普通のゴム弾だ。十二発の小さな弾丸群が放射状に飛び散っただけで。だから走り、範囲外に逃げたところで足を止めた。
なのに、

あ？

視界の端で、何かが動いた？

「ッ、ん、え」

左脇腹に、何かがぶつかった衝撃が走った。

そう、衝撃。

痛みよりも先に、左腰を中心に、左半身全体に衝撃が来る。

ベキリ、という音が響き、なんだか左腰骨が折れたような音がして、

は？

そのまま、意味が解らないまま、右方向へ吹っ飛ばされた。

二メートルほど浮き、地面に直撃。既にアルファの両目は龍眼となつて紅色に発光している。

痛みが腰を中心に広がり、舌打ち。

立ち上がるために、右腕を立てて身体を押し上げようとする。
が、止めた。というか出来ない。

骨盤にまで亀裂が入っている。正直立てるかどうか不明だ。

五秒待つべきか。

思い、伏せたままに心の中で無意識に五秒を数える。

一、何もこない。

二、何もこない。

三、何もこない。

四、何もこない。

五、何も、こない。

完治し、痛みだけを引き摺る中で立ち上がる。

視界内では、構えを外したウェッドと、未だに木に寄りかかるエルト。そして気絶中か居眠り中のシルベだけだ。シルベはあの発砲音でも気付かないとなると、気絶かもしれない。

どういうことだ？

妙な感覚だ。

油と水が混ざらないのに掻き混ぜて、その微妙すぎる水面を見るような、そんな心境。

異常と平常。それが織り交ざり、知識を脳が引っ張り出そうと躍起になる。

ウェッドはショットガンを構えない。サブマシンガンも。

さっきの笑みは消え、ただこちらを鋭い目つきで見ただけだ。

「……わかんねえな」色々。

アンタが俺に、何故姓を偽っていたのかとか、色々。

「何を、だ？」

答えは返さず、一応、喰龍と律龍を抜き放つ。

下げた腕のまま、目を閉じる。

黒い視界の中、思考開始。

範囲外だった。

確実にそうだった。

それが唐突に、左からの衝撃。

そして、当たった感触。

銃弾。

その感触があつた。

一発の鉛弾。それが左腰に直撃し、肉体を貫通する事も埋まる事も無く、ただ衝撃が生む痛みだけで、吹き飛ばしてくれた。

範囲外だったものが直撃するという事実。

それは、視界の端に捉えられていた。

銃弾の一発。その軌道が捻じ曲がる。

過去の回想が終了。

ああ、なるほどね。

大体解った。

目を開く。

「……クラウンアームズ
異物外装、だっけ？」

見た視界では、ウェッドの周りを、小さな弾丸が飛び交っていた。
その数、十一発。

確か、聞いたことがある。そう口を動かしつつ、目で弾丸達を追った。

「……異物^{クラウンチップ}刻印を人体以外にやってみた結果、だっけか」

さつき直撃した弾丸は、左に目をやればただの銃弾として地面に落ちていた。

残りの十一発は、まるで蜂のようにウェッドの周りを浮かんでいく。

エルトが微笑み、

「That's right. ……私が持ち運んだ、魔蜂^{まほうたん}弾^{通り}と言
う弾丸ですよ。魔法の魔に蜂、弾丸の弾で、魔蜂^{まほうたん}弾」

「効果は、追尾^{ホーミング}能力、って所か？」

伺い見る視線の先、頷く首は女の顔。

「大体そんなところでしょうか。まあ、追加するなら、異物の力で速度をかなり上昇していますが」

「……でも、変だな」

「何がですか？」

「異物^{クラウンアームズ}外装は、まだまだ実験段階の兵器だと聞いてるぜ。人間に危害を加えない異物であれば、共存も可能な“西”の王都や“傀儡巨国”の首都でも、試行錯誤の繰り返しだったはず。……それを、ただの元狂会の会員が持つてるのは、想像が出来ない、って事さ」

「別に貰っただけですから」

微笑みのままの言葉に、ゾクリ、と寒いものを感じた。
さっきまでの、爽快感極まる汗とは違い、粘り気を帯びた嫌な汗が、首筋を伝う。

「……誰に？」

嫌な予感がする中、エルトは晒わらった。

「知っているでしょう？」

おもしろおかしように、口元を綻ばせ、何かを言おうと口を開いた瞬間、

「雑談はそこら辺で構わないか」

ウェッドが介入した。

「いい加減こちらの事情にも向き合ってもらいたい」

言って、目線を向けるのは気絶中のシルベ。すぐに視線を俺に向け、ため息一つでショットガンを構えた。狙いは地面と水平、大体俺を狙っている。

エルトは、開いた口を笑みのままに閉じ、また静観しだした。
ウェッドの指が引き金に掛かったところで、

「なあ、オッサン。アンタ……騙してたのか？」

ウェッドの目は俺を見続けるままに、一度瞬き。
そして、

「ああ、そうだ。悪いな。エルトとは、お前が勾留所にいる間に出会って、そして手を組んでいた」

「じゃあ、シルベの父親って言うのも嘘か？」
「違う。それは事実だ」

言った直後に発砲。銃撃音と共に排出される十二発。

そこに、ウェッドの周囲を浮遊していた十一発が加わり、総数二十三発の弾丸が一斉にこちらへ向かってくる。

右へとステップ。そのまま体の向きを切り替え、右方向へ猛然と駆ける。

背後から、きゅ、というような空気を裂く音が聞こえた瞬間、

「
」

反転する。

右に回る視界の中、徐々に視界の端に写りだす物体群。

横に伸びる景色では、右手が横薙ぎの一閃を、回転運動の速度乗算で駆け、その先にはこちらに突っ込んでくる銃弾の有象無象。

いける。

このままいけば数弾は切断できる。左手も握りなおし、そのまま

次の一手を与えられるように整える。

一秒以下の時間で行われた作業工程の中、既に身体は九十度ほど回転している。

そして、喰龍の軌道に入った弾丸の八発ほどが、

刀を滑らかな挙動で避けた。

嘘、だろ……！？

慌てて、という言葉が浮かぶ前に体は、反転の際に軸にした足で、後方へと地面を蹴る。

高速のバックステップも迅速の銃弾は余裕で喰らいついてきて、

「ぎ、」

まず、二発が胸骨に直撃。心臓の真上に尋常じゃない衝撃が走り、痛みが胸骨にヒビの入った音を響かせる。

身体のバランスが崩れ、そのまま後ろへ倒れこもつところを、無意識に逆の足で支えた瞬間、

「おッ」

五発が右腕全体を直撃。またも割れる音が連続。

身体が、ぐるん！ とその衝撃で回転する。もつれた足はバランスを崩し、今度こそ後ろに倒れそうになるが、

「一つ、昔話をしてやろう」

背中に四発直撃し、身体が強引に前へと押される。

浮いた右足が地面を踏む。

「昔、十余年ほど昔」

ウェッドの言葉が響く中、「ごほッ!?」更に腹部に二発、肩甲骨と肩甲骨の間に一発直撃。身体はくの字で折れ曲がり、口から唾と少量の血が吐き出た。

下を向く視界の中、右と左から金切り音がする。位置予測なんてする暇も必要も無く、その音ははっきりと聞こえた。

くそッ、たれ!!

全身を痛みが支配する中、両腕を、その姿勢のままに広く大きく横へ。

右腕の各部が痛みを発し、生理的な涙が目を滲ませるが、

「ッ、ア!」

強引に動かした。

しかし、

「若い男と若い女がいてな」

刀、そして握る両手は、何も手応えも運ばずに、ただ腕を広げただけだった。

直後、

「毎日遊んでいた」

視界の左右から、銃弾が滑らかに曲がる挙動で入ってくる。

腹に、アッパーのように掬い上げる軌道の銃弾が殺到。その数九。ま、

広げた腕を戻そうと、体が本能で動き、
ず。

九発が全て同時に並んで動き、

ズン……！

一瞬後、

コキッ。

腹をガードするためにクロスされた両腕。その前腕部に七発もの弾丸が直撃し、二発が腕の防御をすり抜け肋骨付近に当たった。右腕はあっさり折れ、左腕も肘辺りで、歪な方向に捻じれた。

「昼も夜も関係無く、な」

「っ！」

弾丸の全方向からの襲撃が終了し、膝を地に付いて五秒間を待ち
そうになるが、銃を構える音が聞こえた。

チッ！

顔を上げ状況を把握。ウェットがショットガンを片手で握り、左
手で小型のサブマシンガンを構えていた。

見た瞬間には引き金が押される。

連続した銃声が響く。小さな小さな鉛玉はバラバラな位置ながら、
俺の周囲を包囲するように直進。

「オ……！」

バクバクと強い鼓動が頭の血管の収縮と似たリズムで流れる中、両腕をだらりと下げながら、地面を右方向に蹴る。

初動からの最大加速。右のひと房が流れに沿って蠢き、少し長く視界の上端にある前髪は風に押され揺れた。

銃弾の一発が背中を掠め、服と皮膚を裂きぬるつとした血を地肌に滑らせた。

痛みが一閃入るが気にせず足を動かし、駆け、銃声の終了と共に足を止める。

「……」

ウェッドはこちらを見て、見るだけだ。

怪我から五秒が経った。ウェッドも俺も、その間、動きは無かった。

治癒の完了した腕の先の指を、一本一本生物いっぽんいっぽん的な動きで開きまた閉じる。

全身を冷えた脂汗と激痛が襲うが、オーケーオーケー。痛い。うん、痛い。けどほらアレだアレ。真冬の風を『涼しい』と思い込むのと一緒に。それが表皮の感覚を意識的に無視するかだ。

息を吸い、吐き、吸って。

痛いからと、辛いからと、苦しむ必要なんか無い。

「
思い込め
ワッっ、
」

笑うことは最強の精神コントロール法。そして俺は笑えるんだ。

「
暗示しろ
ツー！
」

笑おう？ 笑って、笑顔のままに往こう？

「
馬鹿になれ
スリーっ！！
」

「
そうして笑った。
」

ウェッドが俺の笑い声を怪訝そうに見るが、笑みだけを返す。

俺は今どんな風に笑ってるのかなあ？

綺麗だろうか？ 醜いだろうか？ 馬鹿にしている風だろうか？
どれかなんて解るはずが無い。俺はいつも笑う際は『笑う』こと
を一瞬脳裏にイメージする。それだけで顔は動き、笑顔を生む。そ
の時々で見せる笑顔も見方も変わるだろうけど、それでもそんなの
は見る側の感情とモノの見方で左右される。だから自分はいつも笑
うときは『笑う』ことしか考えない。

だがそれは、意識しないと笑顔一つも浮かべられないほど心が死
んでいる証拠でもある。が、壊れてしまっている時間が長すぎるア

ルファは、そんな事には気付きもしない。

ウェッドがため息一つと首振り運動四回をしたあと、いつもの無表情面で言った。

「そうして、気がいたら一人、子が腹の中に出ていた。……作る予定など無い子が」

「……、男はその女を捨てたってか？」

「話は最後まで聞け。……男はまだ若く、そして子を育てるだけの“力”が無かった。だから、子を産むと言った女が怖かった」

「へえ。女は何で産もうと思ったんだ？ 遊び人だったんだろ？」

「さあな。一応男と女は、遊んではかりだったが気が合うために、付き合っていた。そして、たまに愛の言葉を言い合ったりしたそうさ。……だから、好きな男の子供だから、産みたいと思ったのかもしれない。真実は定かではない。ただ、女は子を産むと、そう男に言ったそうさ」

ふうん、と相槌を返し、続きを促す。

戦闘は一時中断していた。だが、一応警戒はしている。

喋っている間にも腰にあるナイフを投擲する事は考えていたが、やめた。

興味があつた。ウェッドの過去の話に。

ぶっちゃけ、『昔話』なんて古臭い入りをするなんて、どう考えたって自分の話だ。

シルベが気絶しているのが残念なところだろうか。いや、シルベが起きていたら話さなかったかもしれない。

「怖くて、逃げ出した。逃げ出し、そうして恐怖し、これからどうやって女に会えばいいのか、解らなかった」

そうして。

「それから少しの時間が経って、その男は決意する。力を得ようと子を養えるだけの“大人”になろうと」

「おいおい。幾らなんでも急展開ってレベルじゃねえぞ」

鼻で笑って言うと、「だろうな」とウェッドは頷いた。どうやら自分でもそう思っているらしい。

「私もそう思う。……だが、その男は遊び人でもあったが、生来生真面目な人間でもあったらしい。遊び人になってしまったのは、苦難が嫌いだっただからだそうだ。そうやって楽を得ていたら、いつの間にか遊び人になっていた」

「んで？ 突然父親になって責任取るためになにしたんだよ」

大体解っているお話の続きを促すために、せかすような言葉を出した。

ウェッドの調子は崩れない。

「必死だったのさ、その男は。周りを出し抜き、必死になって様々な事を学び、そうして市長になろうとした。市長になれば、経済的な問題はクリアできる。だから、必死に市長選で演説して演説して演説して演説して……、どうでもいいと内心想いながら、理想の街を言葉で描いた」

「……女はどうしてたんだ？」

「男は女に誓ってたのだ。“いつか、いいや、近いうちに迎えに来る。俺でいいなら、迎えに来たとき、結婚してくれ”とな」

再度、ふうん、と呟いた。割と真摯っすね、と思った。

生真面目、ねえ。

うん、やはり俺とそっくりだ。

「女は待ち、男は必死になり、そうして時間が流れた。……ここで話はお終いだ。男と女は、今頃どうしているか、私は知らん」

「……そうかい……ああ、そうなるのか……」

一人、その先に待ち受けていたであろう不幸や、その他様々を理解する。

そして、再戦希望とでも言うように、右の刀を構える。

「なあ、ウェッド」

「なんだ」

ウェッドは言いながらにショットガンを構えた。

俺ってあれだな。

自嘲気味に思う。

俺は、一度敗北して、その後勝つような人間だ。

打ちのめされても立ち上がり、だから二度目には勝てるだけの算段を得ている。

今回もそうだ。

そう思い、

悪い。

謝罪のような感覚の言葉を内心言いながら、尋ねた。

「アンタは何故、俺に姓を偽っていたんだ？」

「何でだ？ 俺は、それだけが理解できない」

目下数メートル先のアルファが、自然な動きで首を傾げ、笑みを消して聞いてきた。

何故、か。

口元は、小さな笑みが浮かぶ。

私の笑みは、いつも自嘲の際に出ることが多い。それは、シルベを救うと決めた今の時間が、非人道的でもあるから、その嘲りだと解っていた。

そのまま、身体も表情も動かさずに言った。

「そうした方が、お前は私に協力しやすくなるだろう？ 別の女性と結婚していたなんて聞いたら、お前は幻滅していただろうしな」

私が笑みを消すと同時、アルファが笑った。薄い、歯を見せた緩

い円弧。

やはり構えを解かず、言う。

「でも、結局は騙すつもりだったんだろ？　だったら、どっちでもいいじゃんか」

「そういうわけでもない。お前が『シルベを救えなかった。依頼は失敗だ。だから俺はここで失礼する』とでも言って、そのまま消えてしまっただけだよ、隣の女がな」

視線を動かし、木に寄りかかる女を見る。エルトは笑みの目をこちらに向けた。

すぐに視線を戻す。

「……だから、俺に姓を偽る必要があった？　俺が、子供を純に愛せる親は善人だと、そう言うからか？」

「ああ、そうだ」

全部お見通しかよ。そう苦笑うアルファは、唐突に構えを解く。疑問に思う私の前で、アルファは腰にある鞘に、両刀を戻した。しゃあああ、と擦れる音がして、刀が完全に鞘に納まった。そのまま自然体で立っている。

銃も構えないし、腰にあるナイフも手に取らない。行動に疑問しか覚えない。

「……何が狙いなんだ？」

「別に？　対抗策を思いついたけど、強攻策と同じようなもんだよな、と思ってるだけだよ」

微妙にズレた答え。そして笑みは苦いものから初めて見る、目を伏せた笑みになる。

瞼が、その長い睫毛を震わせながら、ゆっくりと上がる。

完全に開いた瞳は、柔らかに笑みを刻む。

その右手が、拳を握って前に突き出された。緩く、でも確かな意志を持って。

言葉は優しく柔らかく響いた。

「いつまでもどこまでも
うように語るように……」

己の夢を気高く誇り

歌

そのまま、長い眉を僅かだけ上げる。

子供のような強気の笑みが、そこにあった。

すう、と息を吸い、音色はその笑顔と同質に変わる。

「理想を誉れと、謳おう……ッ！」

一步を、歩く歩幅でこちらに踏み込んだ。

直後、私の右の人差し指も動く。
まほうだん
魔蜂弾が発射された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3307z/>

Worst HERO .

2012年1月14日20時56分発行